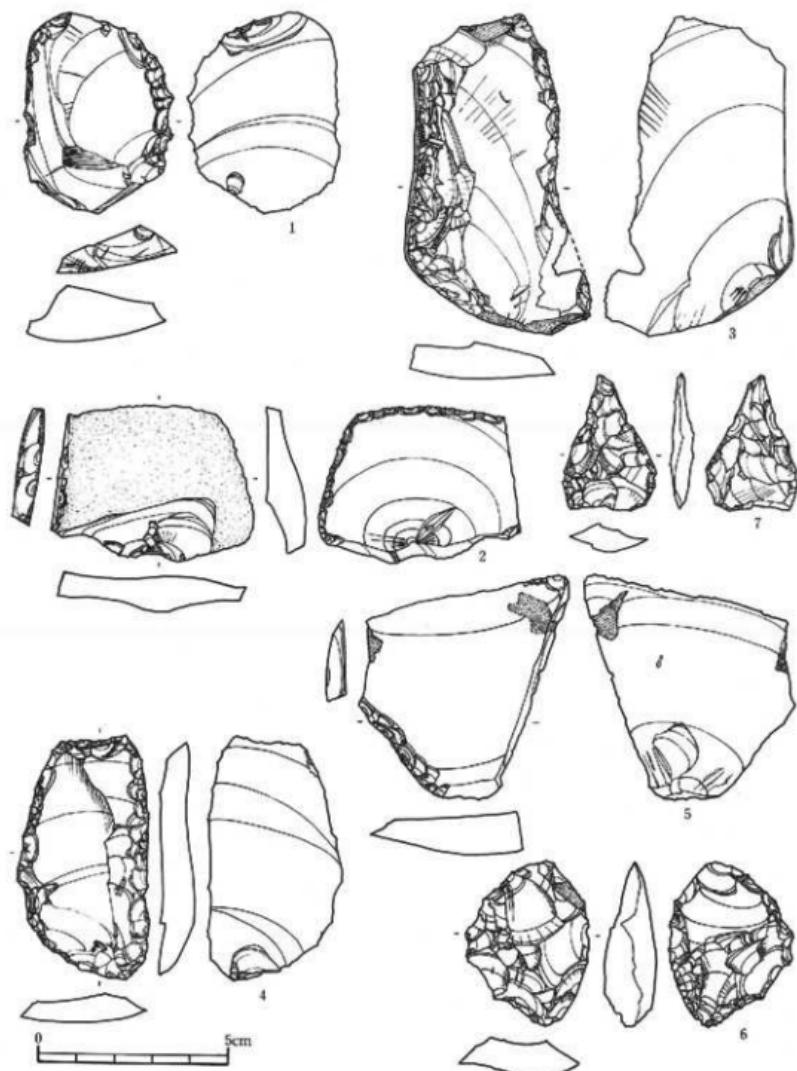


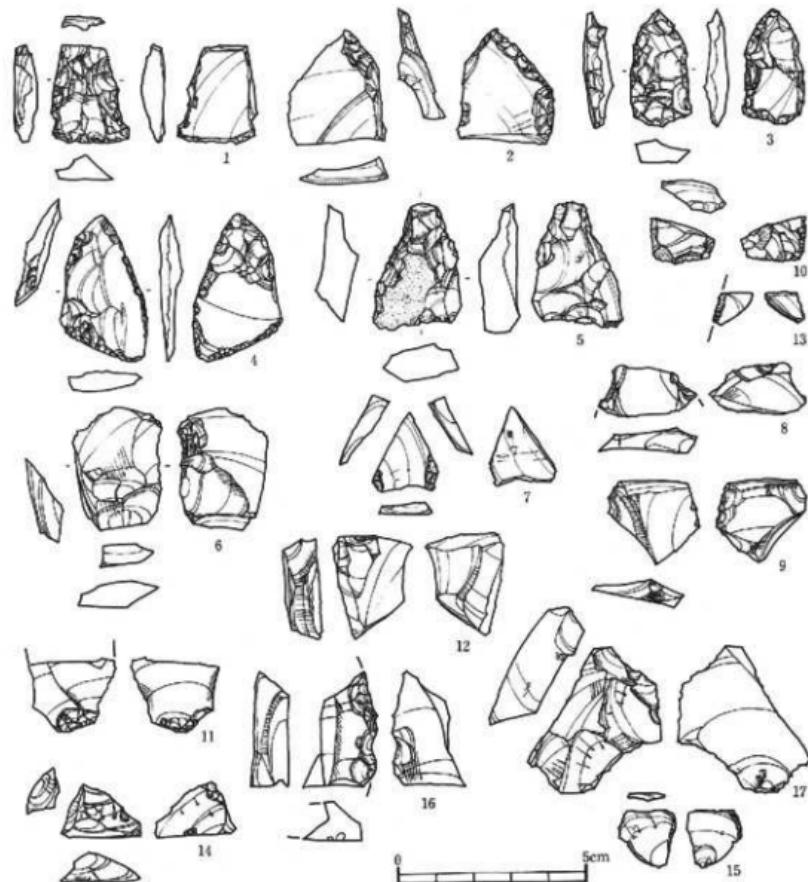
番号	地 区	層 位	分 類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考	管 種
1	Ⅲ D14	19b	尖頭器	116	22	7.5	20.2	種質質地	Ka2569	107-35
2	Ⅳ D31	基盤	刮削	50	27	15	14.8	種質質地	Ka2505	107-34
3	Ⅳ B32	19a	円形刮削	59	27	14	14.6	種質質地	Ka1558	107-27
4	Ⅲ D22	19a	圓形刮削	41	33	6	6.8	種質質地	Ka2506	107-28
5	Ⅲ E 7	19b	圓形刮削	44	37	13	37.4	玉 鹿	Ka2505	107-29
6	Ⅳ	19b	圓形刮削	21	30	7	8.5	種質質地	Ka2575	107-30
7	Ⅳ D35	20b	圓形刮削	33	38	18	20.7	種質質地	Ka2569	107-31

第360図 早期包含層剥片石器 (2)



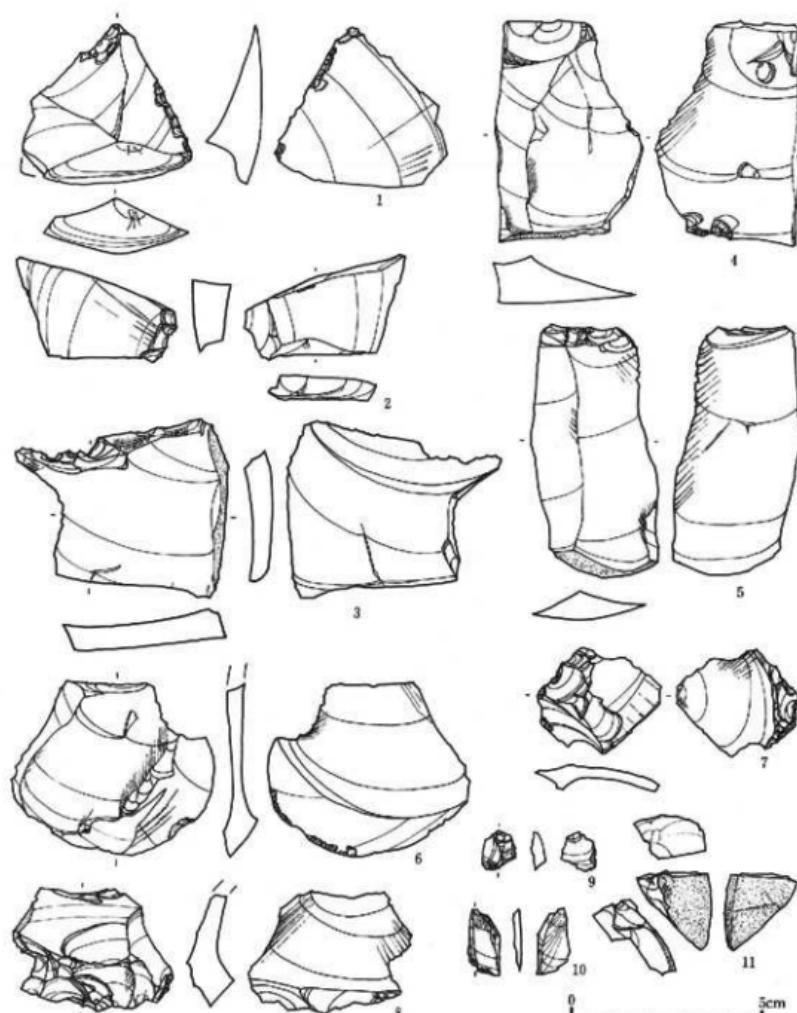
番号	地 区	层 位	分 類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	直立 (mm)	石 刀	備 考	生 保	可 能
1	IV-C	28	薄形石器	53	41	16	31.4	社哲薄凸		Kai2565	104-5
2	IV-B	34	薄形石器	49	54	11	24.0	社哲薄凸		Kai2592	108-1
3	III-A	21	薄形石器	72	75	10	54.4	浅削薄凸		Kai2562	108-2
4	III-B	15	薄形石器	64	35	8	20.7	浅削凸刃		Kai2560	108-6
5	IV-V	29	薄形石器	59	63	11	40.5	铁江美		Kai2584	108-5
6	III-D	18	薄形石器及石片	43	33	10		社哲薄凸		Kai2507	
7	IV	19b	薄形石器	36	24	6	41	社哲薄凸		Kai2577	108-5

第361図 早期包含層剥片石器 (3)



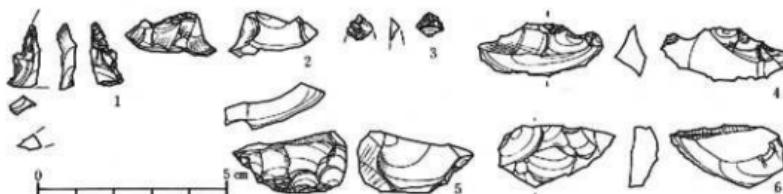
番号	地 区	層 位	分 類	長 S (mm)	幅 S (mm)	厚 S (mm)	重さ (g)	石 材	備 考	文 号	写 真
1	II C10	18	細面磨擦ある刮削器	26	20	6	3.0	砂岩質		Ka2551	106-10
2	IV A33	20 b	?	30	24	8	5.8	砂質頁岩		Ka2583	
3	II B10	18	?	35	15.5	6.4	3.0	泥質頁岩		Ka2553	106-8
4	IV A33-38	22	?	26	23	6	4.0	泥質頁岩		Ka2578	106-9
5	IV B34	20 b	?	34	22	9	6.7	泥質頁岩		Ka2570	106-12
6	IV B31	?	?	35	24	8	3.0	泥質頁岩		Ka2600	
7	IV	20 b	?	33	17	5	1.6	泥質頁岩		Ka2587	106-13
8	III D19	19 b	?	13	26	7		泥質頁岩		Ka2601	
9	IV C27	20 b	?	23	21.6	7		泥質頁岩		Ka2602	
10	IV H34	20 b	?	22	17	7	1.1	黑曜石		Ka2568	106-15
11	II E10	?	?	18	23	3	1.5	砂岩質		Ka2553	
12	III D20	19 b	?	26	26	9		砂質頁岩		Ka2603	
13	IV B30	20 b	?	9	8	3		泥質頁岩		Ka2604	
14	IV B33	20 b	?	14	21	8		黑曜石		Ka2606	
15	IV B34	20 b	?	16	14	2		黑曜石		Ka2607	
16	IV A33	20 b	?	30	22	8		泥質頁岩		Ka2608	
17	II C31	20 b	?	39	35	12	11.3	西銹山		Ka2581	106-16

第362図 早期包含層制片石器 (4)



番号	地 区	形 状	分 類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	高さ (mm)	石 材	備 考	筆 者	年 代
1	IV	19 b	新唯西壁あるく片	44	45	14	17.1	地質頁岩		Ka2574	308-11
2	HAA1	18	?	26	45	11		地質頁岩		Ka2609	
3	IVC29	20 b	?	48	57	9	28.8	地質頁岩		Ka2585	
4	IVC26	21	剥 片	58	49	17.5	25.2	地質頁岩		Ka2579	308-14
5	IVD29	四 角	剥 片	67	36	8	15.1	地質頁岩		Ka2569	308-17
6	IVD25	19 a	剥 片	46	54	8	12.7	地質頁岩		Ka2595	308-18
7	EII-10	19 a	剥 片	32	38	8		地質頁岩	ポイントブレーク	Ka2610	
8	MEC14	19 b	剥 片	32	41	11		地質頁岩	ポイントブレーク	Ka2611	
9	IVC34	20 b	剥 片	19	9	3		地質頁岩	ポイントブレーク	Ka2612	
10	IVC34	20 b	剥 片	17	8	25		地質頁岩	バイオーラーブレイクの可能性あり	Ka2613	
11	IVC34	20 b	右側(分離用)	21	17	11		地質頁岩	バイオーラーブレイク?	Ka2614	

第363図 早期包含層剥片石器 (5)



番号	地 区	層 位	分 類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石 材	標 本	參 考	筆 者
1	D36	20b	刮 刀	16.7	7	3.6	0.3		石器の断面形	Ka2640
2	C34	P133	刮 刀	11	24	6			種質片	Ka2645
3	IV R22	20b	刮 刀	6	6	2	0.1		石器片	Ka2658
4	C32	20b	刮 刀	13	33	8			種質片	Ka2661
5	C48	20	二次加工の側片	29	15	7			石器片	Ka2667
6	C22	19b	刮 刀	17	31	8			石器片	Ka2668

第364図 早期包含層剥片石器 (6)

層	土器	打削石器	剥片石器	刀	磨石	凹石	石核	ハンマー	石核	計
18	1	0	0	4	1	1	0	0	0	6
19	37	17	1	125	64	6	2	0	1	251
20	68	26	0	194	44	5	0	1	0	1
S411	33	7	0	157	16	0	0	0	0	211
S412	15	2	0	73	8	0	0	0	0	98
22	7	1	0	19	0	0	0	0	0	27
23	0	0	0	9	0	0	0	0	0	9
その他の	17	10	0	73	8	0	0	0	0	106
(実物)	173	54	1	645	150	12	2	1	1	1065
計	(6)	(23)	(0)	(369)						

第12表 層別組成表

層	石器	尖頭器	基盤	円錐形器	兩面打削器	縫合部器	ある鋸片	計
18	9	0	0	0	0	6	1	1
19	6	1	0	1	5	4	7	
20	9	0	0	0	4	13	26	
S411	4	0	0	0	0	3	7	
S412	2	0	0	0	1	0	3	
SK18	0	0	0	0	0	1	1	
P112	8	0	0	0	0	0	0	8
22	1	0	0	0	0	0	0	1
23	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の	0	0	1	0	0	0	1	2
不明	0	0	0	0	0	0	6	6
計	22	1	1	1	10	29	64	

第13表 層別打削石器組成表

實物	黒曜岩	三鈷	無石英	純鉄石英	不明	計(実物)	
右側	41	13	1	1	2	0	58 (23)
剥片	570	57	0	8	9	9	645 (369)
右核	0	1	0	0	0	0	1 (1)
計	611	71	1	1	11	9	704

第14表 石材石器クロス集計表

ECN	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
359-4	22	13	5
359-16	21 (26)	19	5
359-1	19	14	4
359-3	13	16	4
359-2	16 (21)	17	4
平均値	19.2	15.8	4.6
標準偏差	4.53	2.14	.49
最大値	26	19	6
最小値	13	14	4

() 指定値

第15表 黒曜石製石器の属性表

ECN	BW	E	凹度(4/BW)	L	分類
359-9	21	5	.238	31	四
359-4*	11	2	.182	22	門
359-16*	20	9	0	(26)	平
359-12	(15)	2	.133	(25)	四
359-7	17	1	.059	32	四
359-13	(20)	2	.1	42	四
359-1*	14	8	0	19	平
359-3*	15	6	0	13	平
359-7	19	2	.105	(34)	四
353-6	20	5	.25	(35)	四
359-2*	16	2.5	.156	(21)	四
359-14	20	5	.25	(36)	四
359-5	13	5	.385	(34)	四
359-8	17	2.5	.147	24	四
359-11	20	3	.15	(35)	四
359-16	20	3	.15	(39)	四
359-6	11	2.5	.227	(46)	四

* 黒曜岩 () 指定値
L: 長さ まぐら深度
BW: 基部幅 平均値

第16表 石器の凹度と長さの相関

打削	C	U	D	Pr	E
D(武城)	4(1)	22	12	7(1)	45
CD(内野)	3(1)	59(2)	17(1)	51(4)	139
LI(弓削)	1	23	8(1)	46(3)	72
CO+LI	4	82	25	91	273
計	8	194	32	91	247

サンプル数 合計 平均値(cm)

L(長さ)	370	5553.5	15.91
W(幅)	370	5317.5	14.37
T(厚さ)	370	1639.6	2.79
PA(打削)	36	4055	112.64
FW(付削面)	247	1750.0	7.09
PT(切削面)	247	609.1	2.47

打削C: 自然面, U: 平板打削
D: 2面調査打削, Pr: 多面調査打削
() 黒曜岩

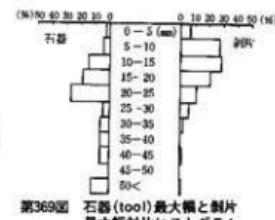
第18表 刨片打削集計

第15表2 貝岩製石器の属性表

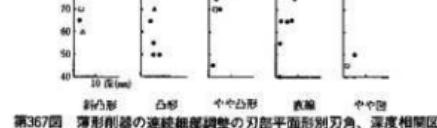
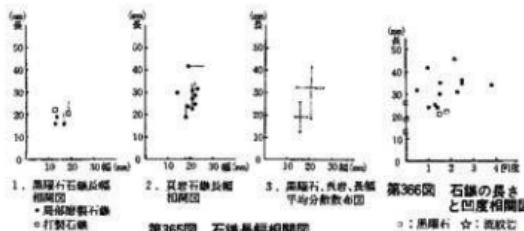
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	計
(mm)	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	
石器	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
$b < L \cdot T$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b \leq 5.5 \cdot T$	13	25	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52
$b < 1.5 \cdot T$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b \leq 1.5 \cdot T$	25	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b \leq 1.5 \cdot T$	11	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
$b < L \cdot T$	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b \leq 5.5 \cdot T$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < L \cdot T$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 20 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 25 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 30 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 35 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 40 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 45 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 50 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 55 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 60 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 65 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 70 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 75 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 80 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 85 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 90 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 95 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
$b < 100 \cdot F$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
T	0	2	7	9	12	2	3	3	3	3	6	48	
F	24	99	101	73	46	20	5	8	1	8	1	369	

T:石器 F:剥片

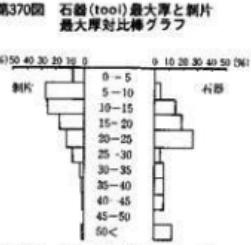
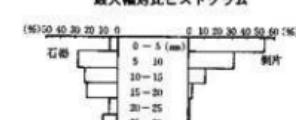
第17表 石器・剥片・長幅度数分布相関



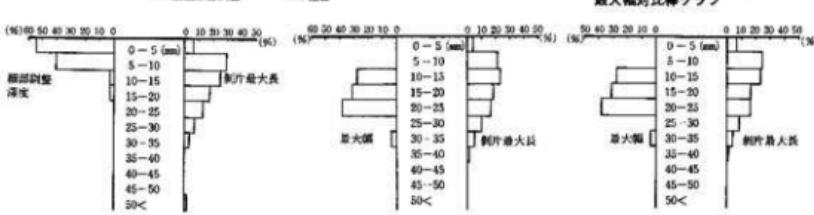
第19表 石器・剥片・厚さ度数分布



第367図 薄形削面の連続調整の刃部平面形別刀角、深度相関図



第371図 剥片最大長と石器(tool)
最大幅対比棒グラフ



第373図 同面加工石器最大幅と多面調整
打面剥片最大長対比棒グラフ

第374図 両面加工石器最大幅と内側打面
または口唇状打面をもつ剥片
最大長の対比棒グラフ

たる石核、剥片がほとんど含まれていないので、それらを用いた具体的な剥片剥離技術の分析はできない。

(ii) 資料

下ノ内浦遺跡19-22層から出土した石器遺物を分析対象とする。発掘所見によれば、これらの資料は、一生活面を想定しうることから、時間的に限定される一括資料として扱う。

(iv) 石器遺物

石器型式名及び定義は山中（1978、82）の用いる大型式名をほぼ踏襲する。本稿では資料体が存在する型式名のみ定義する。

〈打製石器〉

石鏃：尖端作り出しが明確で、基部整形がなされており、かつ両縁が完全に整形されている剥片石器で、最大長が5cm以下のもの（注1）。

尖頭器：細部調整により素材面をほぼ残さないほど加工され、尖頭部の作出がみられるもの。

搔器：剥片の端部に円弧状の連続した細部調整のあるもの。

円形搔器：全円周の2/3以上にわたって円弧状の連続した細部調整のあるもの。

薄形削器：剥片の周辺に、凸刃、直刃、凹刃の連続した細部調整のあるもの。

細部調整痕のある剥片：上述の型式定義にはいらない細部調整痕ある剥片、あるいは破損して認定不能のものを一括してこの型式に含む。

〈剥片〉

最終剥離面がポジティブな面を残すもの。

〈石核〉

最終剥離面がネガティブな面でその大きさが石器群に認められる細部調整痕よりも大きいもの。

〈礫石器〉

円錐または角錐を素材とするもの。

凹石：円錐の一面以上に径1cm内外のくぼみをもつもの。

磨石：円錐の一面以上に平坦な研磨面をもつもの。

石皿：平板な礫の一面ないし相対する二面が摩耗によりすり減っているもの。

〈磨製石器〉

磨製石器：研磨によって器体整形をおこなわれているもの。

(iv) 組成

18-23層から出土した資料（第12表）は1055点、うち石器遺物は877点である。その中で石器として分離できたものは82点である。打製石器は64点である。打製石器の組成は石鏃22点（34.4

%)、尖頭器、搔器、円形搔器各1点(1.6%)、薄型削器10点(15.6%)、細部調整痕ある剝片29点(45.3%)である(第13表)。遺物出土量の多い19、20層、あるいはSI11に集中する傾向にある。

(v) 石材

石器、剝片、石核に用いられる石材(第14表)は、頁岩(86.79%点数比)と圧倒的に多く、黒曜石(10.08%)がそれに続く。流紋岩(1.27%)、玉髓、鉄石英が僅かに用いられている。ただし、玉髓、鉄石英は石器のみの出土であり、頁岩、黒曜石、流紋岩と異なったあり方を示している。石核が一点だけ認められる点は、他の資料と比べる際、注意されるべきである。頁岩の石器に対する剝片の比率は、1点に対し13.9点、黒曜石は4.38点、流紋岩は4.5点となっている。

(vi) 打製石器

a) 石鏃(第353図1~4、6、7、第359図)

石鏃は22点出土している。完形品は6点(27.3%)と少ない。石材別にみると、頁岩12点、黒曜石9点、流紋岩1点で頁岩と黒曜石製石器の全体比8.61(=頁岩/黒曜石)に比べると1.33と黒曜石の占める割合が高くなっている。9点の黒曜石製品石鏃のうち7点(353図1~4、359図1~3)までが、局部磨製技術により、体部の高まりを除去している。黒曜石製石鏃以外にはこの技術は認められない。この局部磨製の工程は剝離による整形後に行われているが、359図3だけは研磨後に剝離が加えられている。局部磨製のあり方は両面を研磨するもの(353図1、2、4、359図1、2)、片面だけのもの(353図3、359図3)がある。研磨方向にはそれぞれ齊一性はみられない。

黒曜石製と頁岩製石鏃の両者は、前者にのみ局部磨製の技術がみられるだけでなく、大きさにおいても、差がある(第15表1、2)。完形品が少ないとから、図上復元した推定値を用いて属性(長、幅、厚)を比較してみた。黒曜石製石鏃の長、幅、厚の平均値は19.2mm、15.8mm、4.4mm、頁岩製石鏃の平均値は32.2mm、20.7mm、4.61mmで、それぞれの平均値の差は13mm、4.9mm、0.21mmで頁岩製が黒曜石製に比べ大きいといえる(365図1、2)。石材により大きさに作り分けが存在したことを指摘できる(同図3)。

基部の残存するものをみると、平基(359図1、3、16)、凹基(353図6、7、359図2、4~14)があり、前者は3点とも、黒曜石製である。ただし、この平基、凹基も連続的変化のようにもみえる。基部幅(BW)とえぐり深度(ℓ)を用い、凹度(ℓ/BW)をもとめ、長さとの相関をみた(第16表、366図)。これを読み取ると平基、凹基は本資料体においては連続的変化とみられる。ただし、359図5のみ凹度が0.385と離れているのが注目される。

b) 尖頭器(360図1) 1点

長さ110mm、幅22mm、厚さ7.5mm、頁岩製の両面加工である。基部は僅かにくびれているが、細部調整によって作出されたものではない。先端に折り痕のようなものが認められるが、それを切った細部調整が施されている。器体の整形には錯交剥離が用いられている。

c) 摂器 (360図2) 1点

残存長50mm、幅57mm、厚さ15mm、頁岩製、剝片素材。筋理面から派生した亀裂は、表から裏の方向に力が加わっている。刃部は弧状を呈し、連続的に刃角60度、深度6mmの細部調整が施されている。部位8-11にステップフレーリングの痕跡がある。部位11-13の細部調整は刃部とは異なり不連続で45度、深度3mmの加工である。

d) 円形摂器 (360図3) 1点

長さ59mm、幅57mm、厚さ15mm、頁岩製、剝片素材。部位17-1にかけて約55度の素材を断ち切るような調整を加え、それを打面として裏面に不連続な80度の調整を行っている。この一連の加工は素材腹面のバルブの高まりの除去、及び厚さを減じる加工といえる。腹面に部位7-17まで斜凸形に連続した60度、深度4mmの細部調整を行い、刃部を形成している。

e) 薄形削器 (353図10、360図4~7、361図1~5) 10点

10点中完形は8点である。単刃は4点(360図5、7、361図3、5)で、他は二つ以上の刃部を形成している。刃部を単位とすると斜凸形4、やや凸形4、直線形5、やや凹形3となり、刃部形にかたよりはない(367図)。刃部は刃部平面形の違いに対応して変化している訳ではない。全体に40度-80度の間にあるとみてよい(367図)。刃部調整も同様2-8mmの間にあり、かたよりは読み取れない。367図には参考のために摂器、円形摂器の刃部属性を加えてみたが、個々の刃部のみ見れば大差ないといえる。360図4、361図2のように腹面調整によって刃部を作り出す例もある。360図6に見られる腹面調整は背面の打面として用いられている。素材先端の厚さを減じる調整といえるものは361図3の部位19-7に認められる。360図7の腹面調整は不連続で刃部の再刃付けに伴う打面作出の痕跡と考えられる。361図1、2には素材を折り取ることで整形を行った痕跡が認められる。

f) 細部調整痕のある剝片 (361図6、7、362図、363図1~3) 29点

この型式には種々多様な加工痕ある剝片が集められている。この内、加工中、加工後の破損によって、その姿を十分にとどめていない資料は19点ある。これらの資料に対して型式学を厳密に適用するなら型式認定不能資料とすべきものである。だが、今回は細部調整のあり方を技術的に分析したいという目的からこれらの資料もこの型式に含むことにした。

(vi) 磨石器

a) 凹石 3点 3点とも二面にくぼみが2個づつ認められる。

b) 磨石 12点 この内特殊磨石と呼ばれる断面三角形の自然石の稜線に磨痕のあるものが2

点ある。

- c) 石皿 1点 平坦な面を持ち、一面は僅かに凹形をしている。風化が著しく磨痕はあきらかでない。
- d) ハンマーストーン(写真108-19) 1点 水晶製で長さ60mm、幅21mm、厚さ20mmで、一端にのみダメージが認められる。

姆 剥片 645点

全体の内369点が完形である。これについては属性分析結果を提示する。剥片の石材組成(第14表)は頁岩が88.37%を占めている。黒曜岩8.84%、流紋岩1.09%と続く。石器の石材組成比にほぼ対応する出度数を示している。

完形剥片の打面形状(第18表)はハジケ116点(31.44%)で最も多い。しかし、ハジケは加撃時の事故をしめしはするが打面形状やバルブの形状は残さない。よって、ハジケを除いた247点を観察すると、平坦打面(U)と多面調整打面(Pr)の両者で80%を越えている。一方、バルブ形状は内傾(Co)と口唇状(Li)で80%を越えている。ただし、両者間には特定の打面とバルブ形状が対応するという結果は見られない。ちなみに、打面平坦、多面調整とバルブ内傾、口唇状の χ^2 値は0に近く、独立であることが知られる。

完形剥片369点の大きさについて検討してみたい(第17~19表)、長さ(L)、幅(W)、厚さ(T)の平均値はそれぞれ15.01mm、14.37mm、2.79mmである。一般に小さいことがわかる。実際、第17表をみれば分かる通り、長さ3cm以上の剥片は僅か14点(3.79%)にすぎない。打面形状、バルブの性質、そして大きさをみると、剥片の大多数がいわゆる“ポイントフレイク”と呼ばれる一群であることがわかる。ちなみに、素材としての剥片という観点から、長さと幅、厚さについて石器と比較してみたい。第17表、第19表は実数値でそれを示している。それを基に比較棒グラフにしたものが368~370図である。比較棒グラフは百分率表示にしてある。長さ、幅、厚さの最頻値をもつレンジが異なっている。それは全ての属性についていえる。これらから石器の素材たりうる剥片がごく僅かしか存在しないことが明らかであろう。

大きさの検討から残された剥片の多くは石器の素材足りうるものではないということが明らかとなつた。

次に、剥片を細部調整の際に出現した剥片と考えた場合を想定して資料操作を行いたい。石器の最大幅と剥片長の対応をみたい(371図)。剥片長の最頻度は5~10mmにある。石器最大幅のピークは20~25mmにある。これは、両者が対応しているとはいえない。では、資料をもう少し操作的に扱ってみたい。片面加工石器の細部調整深度の度数分析をもとめる。また一方で、打面が平坦な剥片のみを抽出し、深度と長さの比較棒グラフを作成した(372図)。

細部調整深度の最頻値は0~5mmにあり、剥片の長さの最頻値は5~10mmにある。両者の分

布形にはややずれがある。まず、細部調整深度は現存している最終段階の形態であり、細部調整過程を含めて考えられるならば、握野がゆるやかに広がり、一方で、小剥離痕がもっとたくさん観察できよう。剥片長のピークが5-10mmにくる最大の理由はサンプリングエラーであろう。その点では水洗選別した資料と対比することで、どれだけの差があるのかが明らかとなろう(山中1982など)。そのような研究例を参考にすれば0-5mmにピークが来ることは容易に推測がつよう。372図をそのようにして補正することで、剥片の大多数が細部調整と関連しているものであることが明らかとなる。

次に両面加工石器(石鏃、尖頭器など)と調整打面のある剥片、そしてバルブ形状が内傾か口唇状を呈する剥片を比べてみたい。それらの剥片は一般にポイントフレイクと呼ばれるものに属するものが多い。両面加工石器の細部調整深度を知るのは難しい。よって、それに代わる値として、石器の最大幅を用いた。最大幅をとることでそれ以下の深度をもつ細部調整の出現頻度のおおよその限界を示すことになる。多面調整打面の剥片、内傾(Co)、口唇状(Li)バルブのある剥片の分布は最頻度数が10-15mm、5-10mmにずれるだけで、ほぼ類似したものである。サンプリングエラーの問題はここでも指摘できる。373、374図では両者とも明らかな対応はみられない。しかし、両面加工石器の最大幅は細部調整痕が出現しうる限界点を示すものである。つまり、25-30mm付近が両面加工石器深度の何らかの分布上の境界となることが想定される。

これらの分析を通じて石器の素材としての剥片、片面加工石器の細部調整剥片、両面加工石器の細部調整剥片の三者が、剥片というカテゴリーの中に潜在的に含まれていることを指摘できる。現状では特定の属性のみに注目して、三者を区分することは誤分類の危険が伴う。

明らかな型式学的分類を施した上で、その背後にある潜在構造が、属性分析を操作的に行うことでのある程度明らかにできる事を指摘しておきたい。また、今回は資料の制約から実施できなかったが、母岩別分類を行うことで型式学的処理のみでは明らかにできない潜在化する技術要素を明らかにする事はより可能なものとなる。

4 遺物について

(1) 縄文時代の遺物

①縄文土器

第I群土器

前期前葉の埋型文土器に特徴づけられる土器群で、19a～22層から出土している。押型文の他は沈線文(押型文の可能性もある)、無文であり、縄文の施文されているものはない。類似資料は本遺跡3次調査XII・XIII層出土土器I・IV類(渡部:1988)、白石市松田遺跡(丹羽:1973、土岐山:1982)、小梁川遺跡(佐藤他:1988)などがある。本遺跡3次調査でのI類は重層山形縦割文の押型文、IV類は無文で、今次調査と同様に明瞭な縄文施文はみられない。また、小梁川遺跡では今次調査同様黒曜岩製局部磨製石錐が出土している。これらの資料は日計式に比定されるものである。日計式については相原淳一氏による一連の論考があり、本遺跡資料はその後半期に位置づけられている(相原:1982、1988)。

第II群土器

前期後葉の土器である。15層より同一個体分の深針体部数片が出土している。粘土紐貼付けで連続山形文と横走文を施文している。類似資料は迫町糠塚貝塚、南方町長者原貝塚(宮城県:1981)、仙台市北原街道B遺跡(工藤:1995)などにみられ、大木5式に比定されている。

第III群土器

後期前葉の土器である。9～13層の遺構、遺物包含層から出土している。

器形 器形には深鉢、鉢、浅鉢、皿、壺、注口土器、台付土器、蓋、小型土器がある。計測可能な土器の器高と口径のグラフを第383図に示した。深鉢・鉢・浅鉢については、次の器高口径比を分類の大まかな基準とした。深鉢は2～4/5、鉢4/5～3/5、浅鉢1/2中心である。あくまで目安的なもので境界付近はどちらに近いか個別に判断している。

深鉢には三つのまとまりがみられる。器高9～19cm・口径10～17cm、器高20～36cm・口径16～27cm、器高39cm以上・口径23cm以上の三者で、小型品、中型品、大型品として捉えられる。浅鉢にも口径22cm前後を境に大小がみられる。器高口径比2を中心とするのは壺であり、口径器高が8cm以下は所謂ミニチュア土器や袖珍土器を含む小型土器である。

分類 深鉢 以下の7つに分類した。

A類(1～30) 体部が緩やかに膨らみながら口縁部まで屈曲なく立ち上がる。口縁部はやや内湾するもの、直立するもの、外傾するものなどがあるが細分はしていない。口縁の形状は背の低い突起が付き波状口縁となるものと平口縁がある。口縁と体部とに区画される。区画は、沈線、隆線、隆沈線、鎖状隆線でなされるが沈線が主体である。口縁部文様帶は幅狭く、

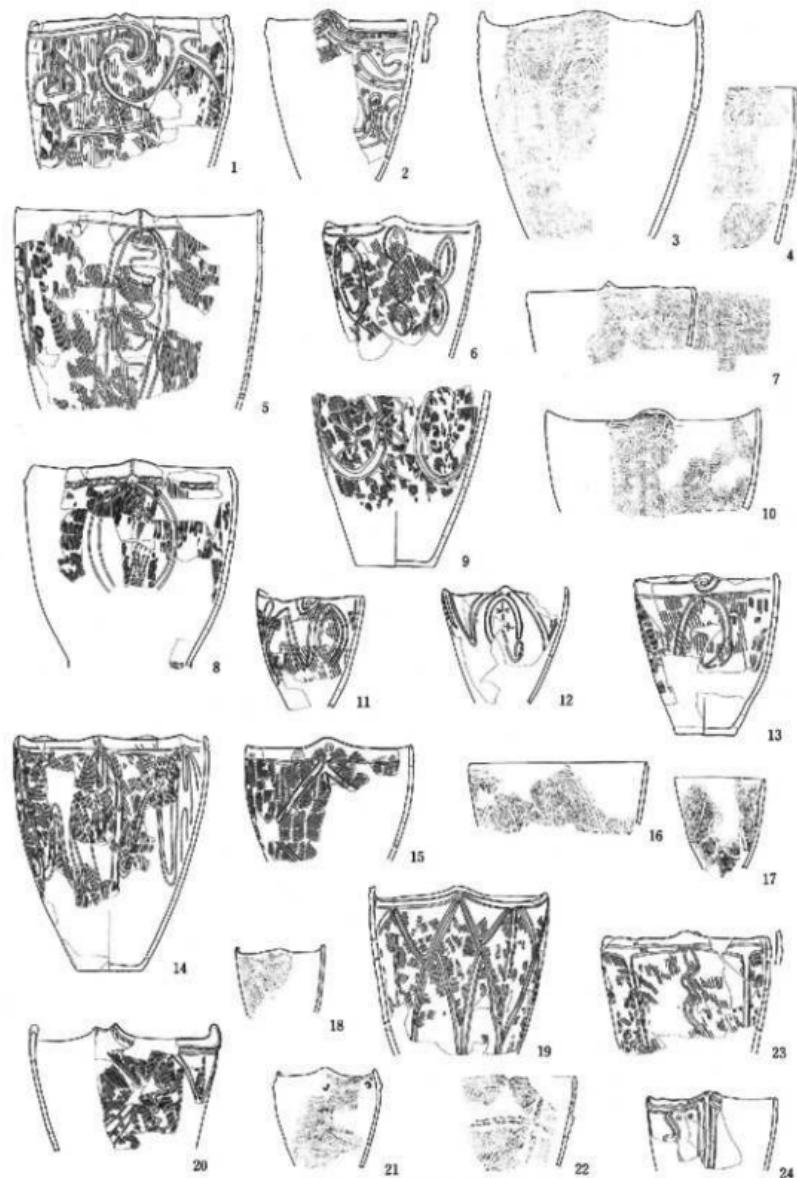
その存在が不明瞭なものもある。口縁の文様は、突起の下に盲孔・貫通孔、それを囲む孤状沈線や下垂沈線・破線状文が施文される他は無文部となる。体部文様は、1～2条の沈線によるもの、3条以上の多条沈線によるもの、地文中心のものに三大別される。

1～2条の沈線によるものは1～25である。1・2は曲線文で1はJ字状文がみられ、2は鎖状隆線により口縁が区画される。3・4は蕨手文、5は蕨手文に類似したもの（蕨手状文）である。6～10は梢円文、連続梢円文、連続S字状文、下垂沈線・破線・鎖状隆線文などが組合せで下垂する縦位展開文様である。11～14は梢円状の縦位文様の間に山形文やV字状文が施文されている。15～20は下垂沈線・破線文と組み合う山形文である。21～25は方形区画文である。多条沈線文は26～30である。26は下垂入組文入孤状文と下垂入組文の縦位単位文様が横沈線で連結したものである。27・28は下垂沈線の間に斜行・蛇行沈線が施文される。29は方形区画文で、30は下位の文様区画文があり体部文様帶が上半になっている。地文には櫛齒状文、繩文、撫糸文、無文がある。櫛齒状文は他の地文上に施文され流水文状、連弧状になるものがある（31～33）。内面のほぼ全体に1～数条の沈線による格子状沈線文や櫛齒状文による縦位沈線を施するもの（33）がある。なお地文中心のものには口縁部が区画されないもの、無文帶のみで口縁部を表すものなどがある。

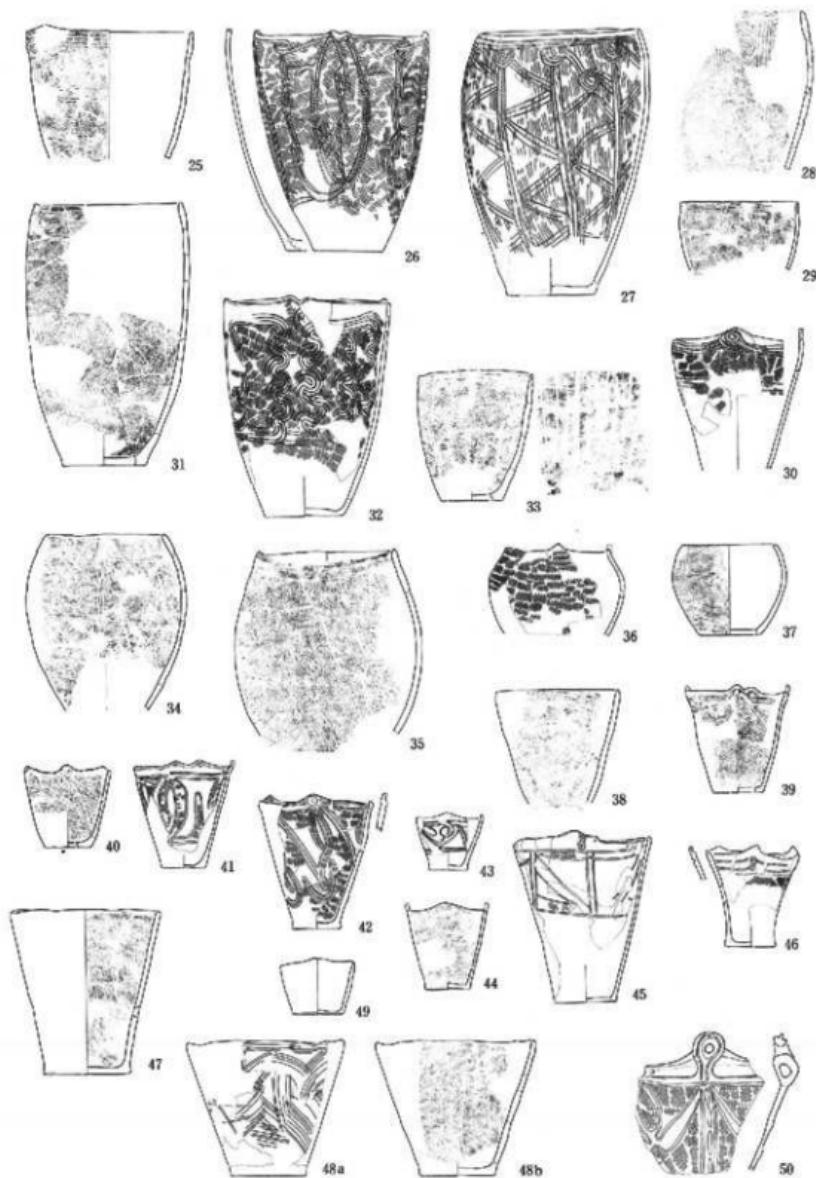
B類（34～37） 体部から口縁部にかけて強く内湾するもの。口縁の形状は平口縁と小突起がつくものである。口縁部が区画されるもの（34・35）、されないもの（36・37）がある。34は方形区画文、35は同心円文と連続S字状文の下垂文である。36・37は地文のみである。

C類（40～49） 体部から口縁部にかけて直接的に外傾するもの。口縁の形状は背の低い突起が付き波状口縁となるものと平口縁とがある。口縁部と体部に区画される場合が多いが地文中心のものは区画されない場合がある。区画は、沈線、刺突、隆線でなされるが沈線が主体である。口縁部文様は、突起の下に盲孔や8字状貼付文が施文される他は無文部となる。体部文様は、1～2条の沈線によるもの、3条以上の多条沈線によるもの、地文中心のものがある。1～2条の沈線によるものは38～46である。38は3字状文、39・40は下垂文と山形文の組合せ、42は入組文、44は1条沈線の波頭文である。43・45・46は文様帶が体部上半に区画されるものである。46は体部から口縁部にかけて外反するものであるが一応C類に含めた。42は多条沈線で縦位単位文様が斜行沈線により連結するものである。地文には櫛齒状文（48）、繩文、撫糸文、無文（47、49）がある。内面のほぼ全体に1～数条の沈線による格子状沈線文や櫛齒状文による縦位沈線を施するもの（47・48）がある。

D類（50） 体部が直接的に立ち上がり、頸部で屈曲し口縁部が内傾ないし内反するもの。口縁には大きな突起付の橋状把手が付く。口縁部と体部が屈曲部で区画される。体部文様は梢円付き棒文と破線入下垂沈線である。



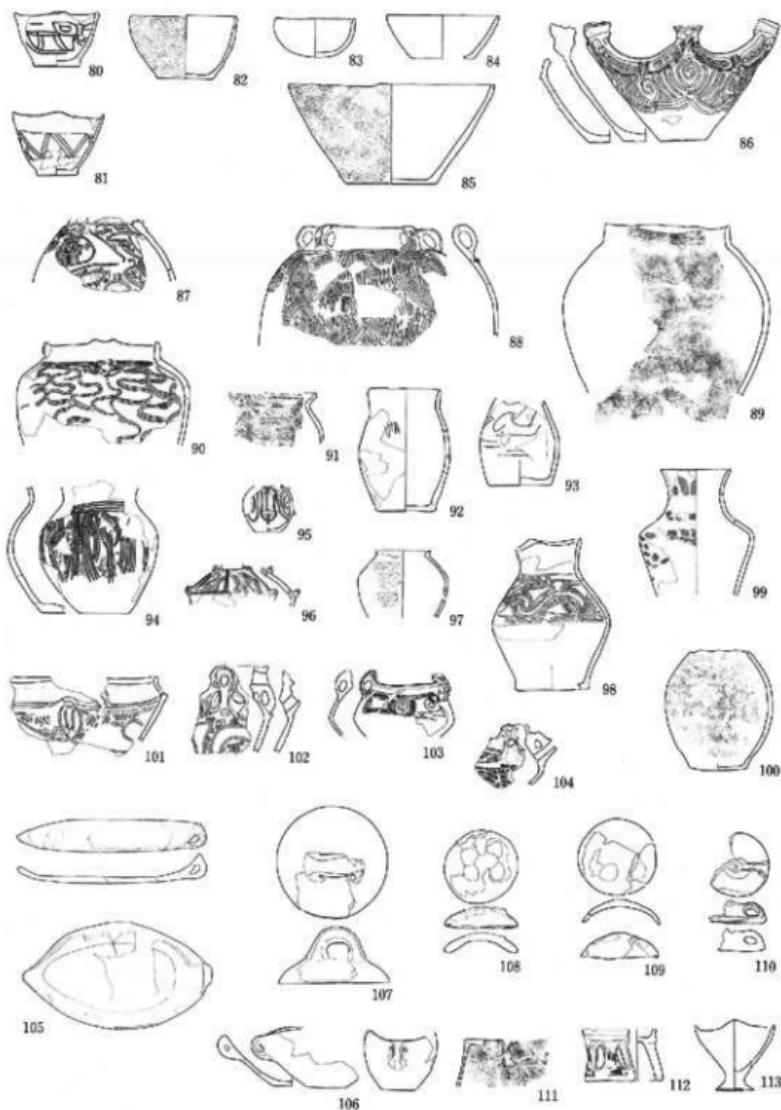
第375図 土器集成図(1)



第376図 土器集成図(2)



第377図 土器集成図（3）



第378図 土器集成図(4)

E類 (51～63) 体部上半が内湾し、頸部がくの字状にくびれて口縁部が外反ないし外傾するもの。口縁の形状は大小の突起が付くものと平口縁がある。大突起は貫通孔・盲孔を伴い橋状把手となる。小突起にも貫通孔が付く。口縁部と体部に区画される。区画は、プロファイルではなくくびれ部でなされ、文様では沈線、長梢円沈線文、隆線、隆沈線、鎖状隆線でなされる。口縁部は、直立か内傾する幅の狭い上端部と幅の広い無文部からなる。前者には盲孔や沈線、渦文、縦位短沈線が施文され、後者では突起の下に下垂する隆線・沈線が施文される。体部文様は、1～2条の沈線によるものと3条以上の多条沈線によるものがある。前者は51～55である。入組文、三角文、波頭文、渦文などの組合せとなっているが、文様単位が横に連結するもの（53・55）としないものの（51・52・54）がある。54は渦付三角文が崩れた状態、55は入組文が波頭状化したものと考えられる。多条沈線は56～63である。56～58は渦文、下垂沈線・弧状文からなる縦位展開文様、59～61は縦位展開文様が斜行文や蛇行文で連結されるもの、62・63は渦文が連結し横位展開文様になるものである。

F類 (64～69) 体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部が緩く外反・外傾するもの。E類に比べ頸部のくびれの度合が弱くなる。口縁の形状は大小の突起が付くものと平口縁がある。口縁部と体部に区画される。区画は沈線あるいは無文帶でなされ、地文中心のものは後者が多い。体部文様は、1～2条の沈線によるものと3条以上の多条沈線によるものがある。前者が64～66・68、後者が67である。64は連続S字状文入梢円状文である。65は無文帶で口縁部が区画され、上端部が隆帶になり沈線と貫通孔・盲孔付小突起が付く。体部文様は入組文である。66は3単位の突起で、その下位に刺突入りのC字状と下垂する隆線がある。体部文様は渦文である。68は文様帶が体部上半に区画されるもので破線入山形文である。67は渦文が横に連結するものと考えられる。口縁部上半部にも沈線文と充填繩文が施文されている。69は口縁部全体に4～5条の並行沈線文が施文されている。地文中心のものには繩文、撚糸文などがある。

G類 (70・71) 体部がやや膨らみながら立ち上がり、口縁部が内湾するもの。口縁の形状は平口縁である。口縁部と体部はくびれ部で区画される。口縁部の文様は体部と同じか無文帶となる。体部文様は地文中心で、撚糸文（70）、櫛齒状文（71）などである。

H類 (72～79) 体部中央ないし上半がくびれて外反し、口縁部が短く内傾ないし直立するもの。口縁の形状は、2～3個の貫通孔のある大突起の付くものと平口縁がある。口縁部と体部に屈曲部で区画される。短い口縁部には太い沈線、縦の短沈線、渦文、刻目入長梢円文が施文される。体部文様は多条沈線のもの、地文中心のものがある。多条沈線は縦位展開文様が基本となり、蛇行文や斜行文で連結されている。72～75は多条沈線内が充填繩文となるもの、76～79は多条沈線外が繩文（充填もある）となるものである。79は矢羽根状刺突入の細かい多条沈線が縦位展開するものであるが、くびれ部にある横走する多条沈線を口縁部下端の区画文様と捉

えるべきかもしれない。地文中心のものには撚糸文と縄文がある。

鉢 (80~82) 口縁部から体部にかけてわずかに膨らみながら立ち上がるもの。いずれも小型品である。口縁の形状は小突起が付き波状口縁になるものと平口縁がある。口縁部と体部は区画されるもの (80・81) とされないもの (82) がある。81は文様帶下端の区画があるので山形文が施文される。80は崩れているが横位展開文様風である。地文中心のものでは撚糸文と縄文がある。

浅鉢 以下の3つに分類した。A類 (86) 体部が直接的に立ち上がり、口縁部が内傾するもの。口縁には大きな筒状の突起が付く。口縁部と体部は屈曲部で区画される。口縁部文様は長梢円状の太い沈線内に刺突が施され、さらに沈線の外側に縄文が充填されている。体部文様帶は2本の連続する弧状文により上半に区画され、太い沈線により渦文とその間を充填する弧状文が施文されている。内外面に黒色付着物があり、漆状物質が塗布されていた可能性がある。

B類 (84・85) 体部から口縁部にかけて直線的かわずかに膨らみながら立ち上がるもの。口縁の形状は平口縁である。口縁部と体部の区画はない。体部文様は無文 (84)、縄文 (85) である。C類 (83) 丸底で丸みをもって立ち上がる椀状のもの。無文である。

壺 口縁部の有無や体部の形状、大きさにより以下の4つに分類した。A類 (87~91) 体部が大きく膨らみ、短い口縁部が直立しないし外反するもので大型品となる。口縁の形状は小突起が付くものと平口縁がある。口縁部文様は無文で、橋状把手が付くものもある (87・88)。87は口縁部下端の区画が刺突文である。体部文様は渦文のある沈線文で磨消縄文である。88は多条沈線文、89・90は流水文状の櫛齒状文である。91は刺突文入りの細かい多条沈線である。B類 (92・93) 体部が長胸形で口縁部が外傾、外反するもの。92は撚糸文、93は沈線文で健利形に近い。C類 (94・95) 体部が丸みをもつもの。94は多条沈線、95は渦文があり上下対の把手がある。D類 (96~99) 体部の中央ないし上半が張り出し、口縁部が外傾、外反するもの。96は入組文で上下対の把手が付く。97は短い口縁部で菱形文、98は入組文と三角文の磨消縄文、99は地文のみである。E類 (100) 無頸で体部が丸みをもつものの地文のみである。

注口土器 以下の2つに分類した。A類 (101・102) 体部が直接的に立ち上がり、口縁部が内傾するもの。口縁には突起付の橋状把手が付き、その脇に注口部がある。体部文様は101が梢円形、102が入組文となる。B組 (103、104) 体部が算盤玉状になるもの。橋状把手と一緒にとなった注口部になる。体部文様帶が上半に区画される。

片口土器 (105・106) 105は舟形をした把手付の片口皿である。106は把手が付き、器形が舟形に近いものが考えられ、片口土器が想定される。

蓋 以下の2つに分類した。A類 (107~109) 体部が丸みをもつもの。把手が1つのもの (107) と2つのもの (108・109) がある。B類 (110) 体部が直線的なもの。

台付土器（111～113）以下の2つに分類した。A類（111・112）高さのある台部のもの。112には透かしがある。B類（113）低い台のもの。上部は波状口縁の無文の鉢である。

本群は以上のように分類された。器形では深鉢A・E・Cが主要なものとなる。地文以外の文様では1・2条沈線文と多条沈線文に2大別された。前者には厥手文や連続S字状文などの縦位展開文様と入組文・三角文が組み合う横位展開文様あり、後者には渦文、同心円文と下垂沈線・孤状文とからなる縦位展開文様と入組渦文からなる横位展開文様がある。器形と文様では、深鉢Aでは1・2条沈線文が目立ち、深鉢Eでは多条沈線文が目立ち、深鉢Hではほとんどが多条沈線文となり、深鉢Eは多様な文様となるという特徴がみられる。地文には櫛齒状文、撚糸文、繩文、無文があるが、撚糸文と繩文の割合はほぼ半々（図示資料集計）で、撚糸文ではRが、繩文ではLが圧倒的多数である。また地文中心の深鉢には、内面全体に格子状の沈線や縦位方向の櫛齒状文を内面全体に施す深鉢が存在することも注目される。

遺物集中地点（ブロック）について 遺物包含層11～13層には遺物集地点（以下ブロックと呼称）が数カ所存在する（第172図）。そのうち図示可能な土器が比較的多いブロック5カ所の土器群の内容を検討してみたい。ブロックと抽出グリッドは以下の通りで、土器群は第379～第382図に示した。地文（特に繩文、撚糸文）のみの土器は省いた。

ブロック位置	抽出グリッド
Aブロック：11層 A18・19 B18～20中心	A18・19 B18～20
Bブロック：11層 C21～24中心	C D21～24
Cブロック：12層 A14～16中心	A B14・15
Dブロック：12層 B19～21 C20・21 D20中心	A20 B C20・21 D20
Eブロック：13層 B20中心	A20 B19～22 C20・21 D21

器形では各ブロックとも主要な器形深鉢A・C・Eの他に深鉢F・H壺A・Cなどが共通して存在し、D Eブロックには蓋と片口土器が含まれている。文様ではその特徴から次の2つのグループにまとめられる。1・2条沈線文をやや主体としながら一定量の多条沈線文を含むD Eブロックのグループ（第1グループ）と多条沈線文を主体とするA～Cブロックのグループ（第2グループ）である。ただし、グループ内のブロック間には多少の相違が認められる。第1グループ内では、Dブロックには連続S字状文が目立ち、Eブロックでは1・2条沈線文が多種多様であることと多条沈線文がやや少なく深鉢C・Hに限定されている点である。第2グループ内では、Bブロックは刺突入りの細かい多条沈線文の深鉢Hや壺之内2式に比定される深鉢Cなどの新しい要素を含み、Cブロックは連続S字状文入り楕円文の深鉢Aや体部上半に文様帯がくる深鉢A・Fなどを含むという点である。また各ブロックに格子状などの内面沈線のある地文中心の深鉢が含まれることも注目される。

以上のことと層序関係、沈線文の多条化という傾向を踏まえてブロックの変遷を考えてみると、{第1グループ(Eブロック土器群→Dブロック土器群)}→{第2グループ(Cブロック土器群→Bブロック土器群→Aブロック土器群)}と捉えられよう。

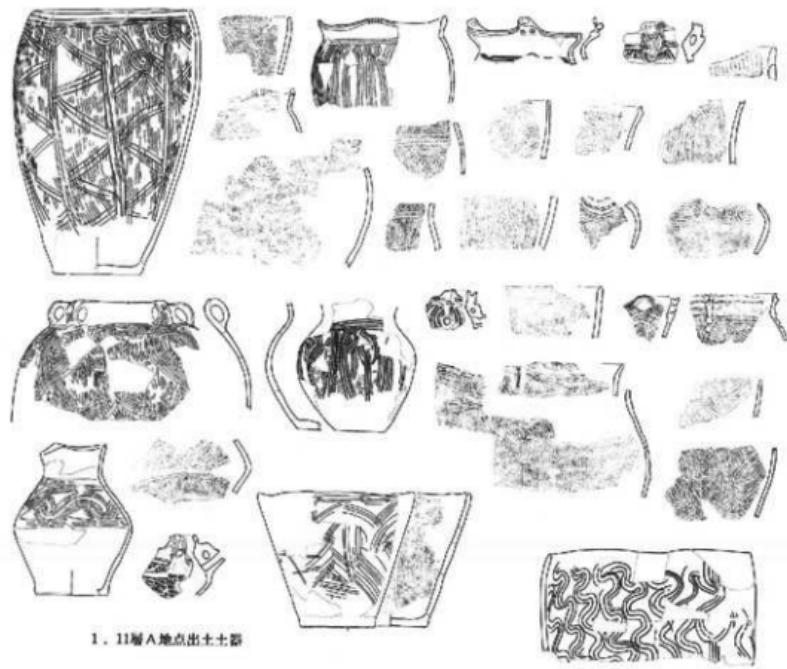
第III土器の位置づけ 本群の類例は、仙台市六反田遺跡(田中：1981、佐藤：1987、渡部：1995)、同市山口遺跡8・10層出土土器(佐藤：1981)、同市山田上ノ台遺跡VII群土器(主浜：1987)、白石市二屋敷遺跡II群第2・3グループ、III群土器(加藤他：1984)、大和町金取遺跡第二群土器(小野寺：1980)、河北町南境貝塚B群土器(後藤：1974)などにある。

六反田遺跡は下ノ内浦遺跡の隣接遺跡で、方形区画文を代表とするI群土器から、蕨手文などを含む沈線文土器、磨消繩文土器を主体とするII群土器への変遷が明らかにされ、後期初頭から前葉、南境式前半に位置づけられる(佐藤：1987)。本群とは多条沈線文の欠落という相違点があり、本群の前段階と考えられる。

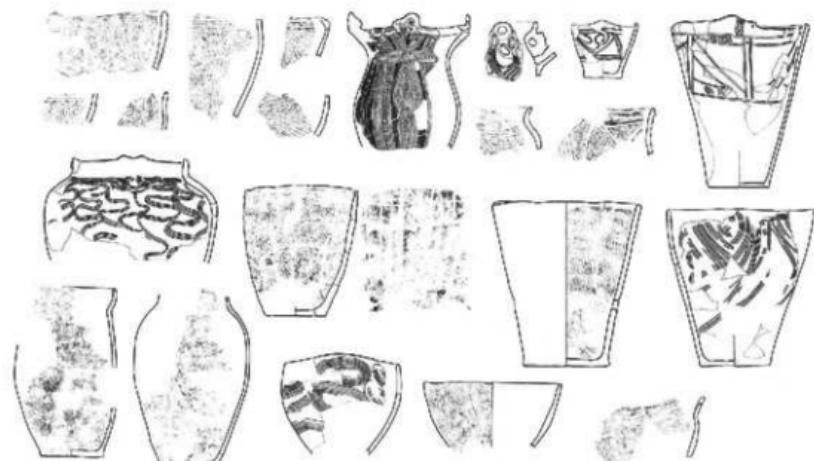
山口遺跡1次調査区は本遺跡の西方100mに位置する。8・10層出土土器は多条沈線文を主体とし、十腰内I式の新しい部分に類似する土器と堀之内2式、加曾利B1式に類似する土器が出土しており、伊古田遺跡での検討(渡部：1995)において後期前葉の新しい段階(南境式後半)に位置づけられている。異系統の混在は本群の第2グループにも認められるが、その割合は山口遺跡より小さく、加曾利B1式はほぼ欠落している。よって本群は山口遺跡の前段階に位置づけられる。

二屋敷遺跡では後期前葉の土器群を南境式とする立場で3群に分類し、向畠(菅生田)遺跡段階(二屋敷I群)→二屋敷遺跡II群土器段階→二屋敷遺跡III群土器段階という変遷を示している。二屋敷II群第1グループは古い要素をもつことからII群は細分され、二屋敷II群第2・3グループ、二屋敷III群は南境式の後半に位置づけられよう。本群と二屋敷II群第2・3グループは、基本的な器形・文様構成はほぼ同様であるが、各類型の量的割合などには相違が認められる。それは本群側での渦付三角文の僅少、蕨手文の少なさ、連続S字状文や山形文(二屋敷での「八」字状文)の多用、連続横円文の存在、燃糸文と繩文の割合半々などである。蕨手文の少なさや地文の燃糸文の多さなどは、二屋敷遺跡の報告で指摘されている県北地域と二屋敷遺跡との相違点に共通し、本群は県南、県北両方の要素をもっている土器群といえよう。

二屋敷III群は細かい多条沈線文系、三十稻場式系(これらはIII群から外れる可能性がある)、十腰内I式の新しい段階のもの、堀之内2式系からなる。それらは本群のA～Cブロック内にも共存しており、「南境式の新しい段階には南境式の土器組成のなかに東北北半や関東の土器群が少量ずつ混じり始め、次の伊古田包含層(編者注：後期中葉宝峯式の初頭)のような組成へと移行するのではないか」(渡部：1995)という見解が当地域では妥当なようである。二屋敷III群についてはまだ資料不足であり、今後の課題となろう。二屋敷II群土器については本間宏氏

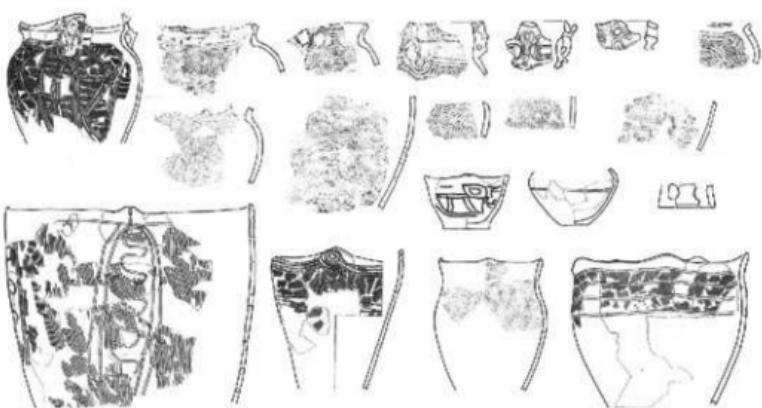


1. 11番A地点出土土器

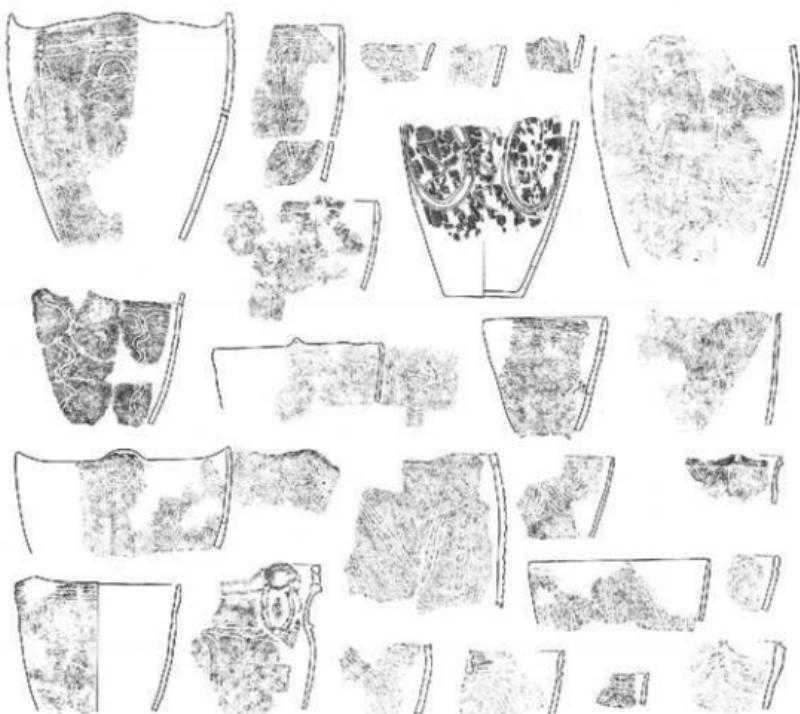


2. 11番B地点出土土器

第379図 A・B ブロック出土土器

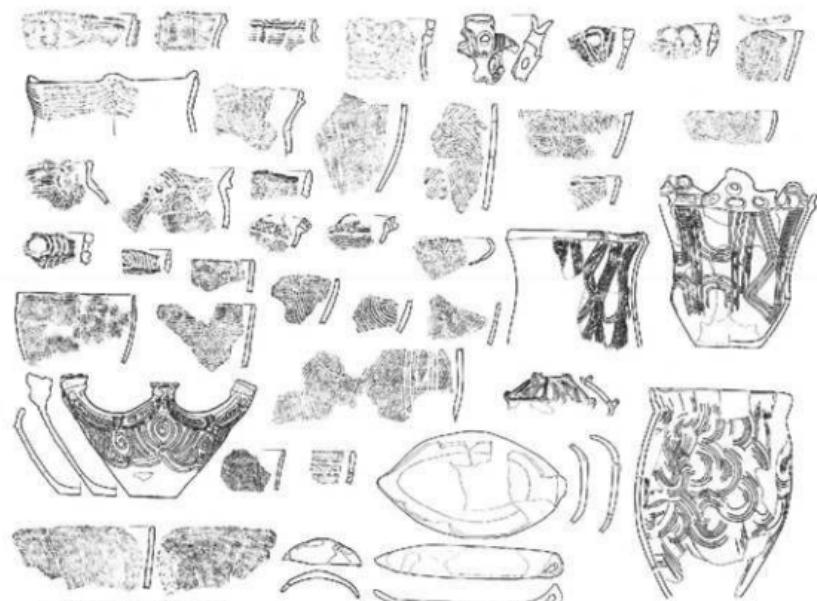


3. 12層C地点出土土器



4. 12層D地点出土土器(1)

第380図 C・D ブロック出土土器

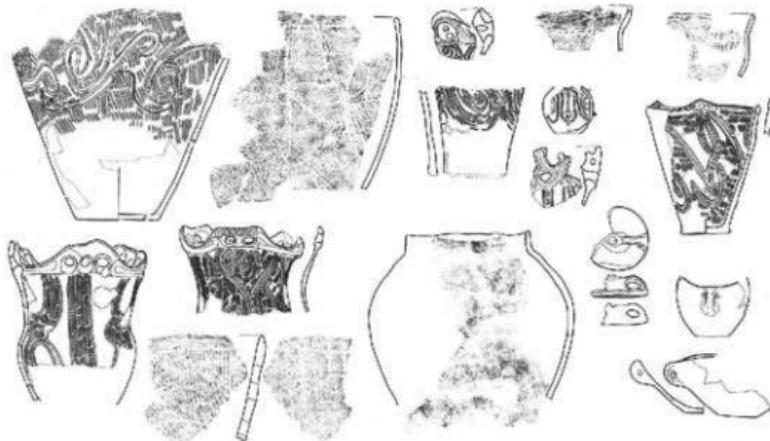


5. 12層D地点出土土器（2）



6. 13層E地点出土土器（1）

第381図 D・E ブロック出土土器



7. 13場E地点出土土器（2）

第382図 E ブロック出土土器

が綱取II式古段階から新段階に至る土器群の変遷を示している（本間：1990）。本群は綱取II式の古から新にかけてに該当し、特に第2グループは綱取II式新段階に相当する。

以上より、本群は概ね後期前葉の南境式の後半を中心とした時期に位置づけられた。また、1・2条沈線文と多条沈線文が共伴する時期から、多条沈線文主体となり東北北半や関東の土器群が混在する土器群への変遷がブロックから捉えられ、土器変遷の実態がある程度把握できたといえよう。

②土製品

土製円盤 土器片の縁辺を打ち欠きほぼ円盤に整形したもの。約700点出土している。うち260点を図示した。大きさは径1.6～8cmであるが特に径2～5.5cmに集中する。重量分布を第291図に示した。分布範囲は3～68gであるが、10～13gをピークに5～30gに集中する。縁辺を研磨したもの（288図46）、孔をあけようとしたもの（291図29）などがある。出土状況は遺物集中箇所に集中している。

③剝片石器

剝片石器類（石核を含む）は、なんらかの加工のある剝片（二次加工のある剝片や微細剝離痕ある剝片などを含み、剝片・チップは除く）約2200点を登録し、330点を図化し、269点を図示した。剝片・チップを加算すると全点数はかなりの数に及ぶものと想定される。登録石器の内訳は、石鏃などの定形石器177点（8%）、スクレイパーなどの不定形的な石器427点（20%）、両極剝離痕のある石器79点（4%）、二次加工のある剝片877点（40%）、微細剝離痕のある剝片

412点(19%)、石核216点(10%)である。以下に石器類の分析と特徴について簡単に触れる。

石鏃 尖頭部が明瞭に作り出され、全体が丁寧に整形された、小型で扁平な二等辺三角形を基調とするもの。石鏃は105点出土し、86点図示している。基部の形状により5分類される。I類は円基(293図1など)、II類は平基(160図10など)、III類は円基(293図17など)、IV類は凹基で有茎のもの(293図14など)、V類は基部不明のものである。I類が57点(66%)、II類が4点(5%)、III類が3点(3%)、IV類が19点(22%)、V類3点(3%)である。長幅分布を第384図に示した。長さ15~27mm、幅11~19mmに集中している。I類は全域に分布するが特に長さ14~22mm、幅10~15mmに集中する。IV類は長さ17mm以上とやや大きくなる傾向がみられ、II・III類は幅15mm以上と幅広の傾向がみられる。石材は、珪質頁岩が最多で54点(63%)、玉髓が14点、鉄石英5点、珪化凝灰岩5点、碧玉3点、黒曜岩3点、流紋岩2点、珪化石英安山岩2点である。

尖頭器 石鏃と同様に整形され厚みのあるもの(301図15)とほぼ全面加工の大型のもの(301図16)などがある。9点出土し、9点図示した。

石錐 棒状の尖頭部が作出されたもの。石錐は40点出土し、35点図示した。尖頭部と基部の境が明瞭なもの(I類、294図6など)と不明瞭なもの(II類、同図11)がある。

石匙 両側辺からノッチを入れることによりつまみ部を作出したもの。石匙は23点出土し、22点図示した。つまみ部を上にした場合縦形になるもの(I類)、横長になるもの(II類)、中間のもの(III類)がある。つまみ部は打面部、末端部、側辺部に作出されるが前二者が多く、その量はほぼ同数である。

不定形石器I類 スクレイバーエッジ(バルブの発達しない平坦で奥まで入る幅の狭い剝離が縁邊に重なって連続するもの)を有する石器。形態や加工される部位により以下のように分類される。

I A類 尖端部をもつもの(296図2など)。

I B類 1~3側辺を加工するもの。長軸に平行するスクレイバーエッジを有するもの(296図5など)、長軸に直交するスクレイバーエッジを有するもの(298図1など)などがある。

I C類 A・B類以外でスクレイバーエッジを有するもの(298図4、299図2)。

不定形石器II類 二次加工により抉り部を形成したものの(299図3)。「ノッチ」である。

不定形石器III類 鋸歯状の刃部を有するもの(307図4など)。「デンティクレイト」である。

不定形石器IV類 素材の剥片を折断により四角形や三角形などに整形し、かつ折断面からの二次加工や折断面への二次加工が施されているもの(308図4など)。

不定形石器V類 素材の一端に尖頭部のあるもの(307図3など)。

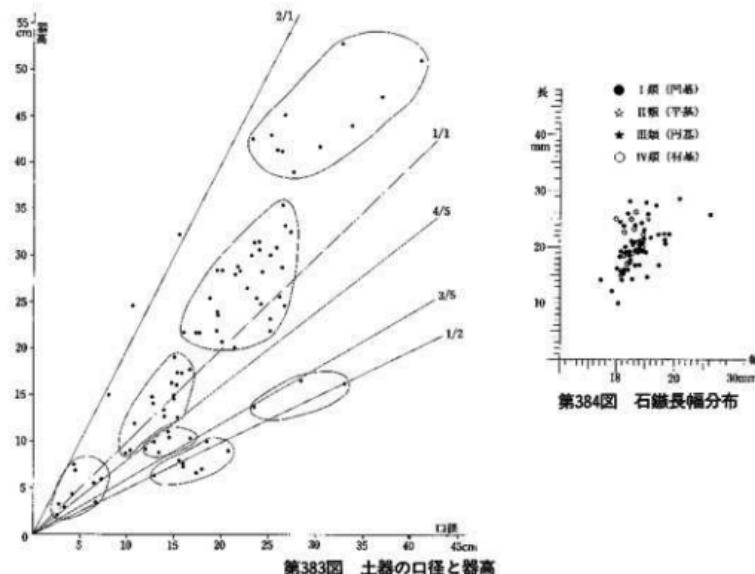
不定形石器VI類 両面加工のもの。尖頭器I類と大きさや形状が類似する小型のもの(294図1)

など)がある。

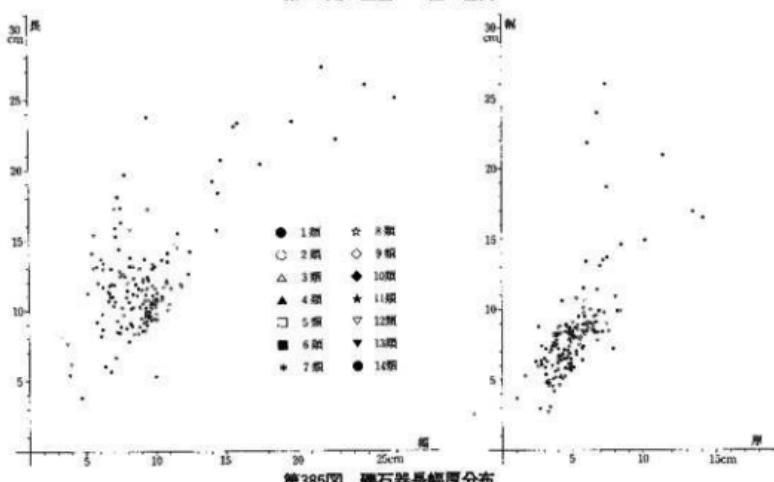
不定形石器VII類 粗い二次加工が行われたもの(164図1)。

不定形石器VIII類 急角度の二次加工が施されたもの(309図2)。

両極削離痕のある石器 細分はしないが、所謂「ピエスエスキュー」やその碎片、両極打法に



第384図 石錐長幅分布



より剥離された剥片などが含まれている。79点あるが図示していない。

石核 12点図示している。剥片素材のもの（308図3など）や小型のもの（310図1・4、311図1）がある。後者は硬質の珪質頁岩で、この石材の石核には大きいものが少ないのである。

④ 碓石器・石製品

礫石器 砕石器は640点で113点を図示した。この種の石器は凹痕、敲打痕、磨痕などの使用痕が複合して残存する場合が多い。よって使用痕の組み合わせにより以下のように分類した。

- 1類 凹痕、2類 凹痕+磨痕、3類 凹痕+磨痕+敲打痕、4類 凹痕+磨痕+ザラ、
5類 凹痕+磨痕+敲打痕+ザラ、6類 凹痕+敲打痕+ザラ、7類 凹痕+敲打痕
8類 凹痕+ザラ、9類 腹痕、10類 腹痕+敲打痕、11類 磨痕+ザラ、
12類 敲打痕、13類 敲打痕+ザラ、14類 ザラ

凹痕には、深いもの（317図6）、やや深いもの（317図3）、浅いもの（317図1）がある。ザラは敲打等により形成されたと考えられる、側面に多い平坦面である（佐藤広：1988）。

素材の礫の長幅・幅厚分布を第385図に示した。長さ4～30cm、幅3～26cm、厚1～14cmの範囲にあり、特に長さ8～18cm、幅4～11.5cm、厚2～9cmに集中している。1種類の使用痕のみをもつ1・9・12類をみた場合、凹痕の1類は点数が多く全体に分布し、長さ20cm以上、あるいは幅15cm以上の大型品はほとんど1類となる。9類は長幅が10cm前後、厚さが5～8cmに集中し、腹痕のものは幅と厚みが増す傾向が看取される。12類は幅が5cm前後、厚さが5cm以下に多く分布し、敲打痕のものは長さは大小あるが幅狭で薄くなるという傾向がある。以上はそれぞれに他の使用痕が複合するものを加味しても同様な傾向がみられるようである。重量は400g前後をピークに100～1100gに集中している。石材は安山岩が最も多く、他に石英安山岩、花崗閃綠岩、石英安山岩質凝灰岩、石英安山岩質角礫凝灰岩、細粒石英安山岩質凝灰岩、礫岩、凝灰岩、砂岩、頁岩、などがある。

（2）弥生時代の遺物

① 弥生土器

遺構や遺物包含層から出土した弥生土器は中期後葉から後期にかけてのものである。平行施文具による細沈線文が施文される一群をI群土器、肥厚した口縁部の交互刺突文などに特徴づけられる一群をII群土器、その他をIII群とした。

第I群土器

平行施文具により2～4本の細かい沈線が同時に施文されるものである。文様以外の特徴として、器面調整が丁寧でミガキかそれに近いナデになること、胎土が比較的緻密で焼成が良好なことが挙げられる。器形全体が判るものはほとんどないが、部分的復元資料や破片資料から

壺、広口壺、甕、高坏、蓋などが認められる。

壺 口縁部資料には、頸部に突帯のつく細頸壺（78図1、79図2、82図1～6、108図1・6）と突帯のないやや広口になるもの（79図1）がある。いずれも口縁部が外傾するが、前者の頸部にはややくびれて内傾するもの（78図1）と直線的に内傾するもの（108図1）がある。頸部文様には縦位区画文+区画内充填細沈線文（以下縦位区画文）、連弧文、重山形文があり、2本同時がほとんどである。79図3・4は器形の判る体部で、3は体部が直線的に立ち上がり中央で強く張るもので、上半が2本同時の重山形文、下半がR撫糸文となる。4は緩やかにくびれながら頸部へ立ち上がるもので、2本同時による同心円文が施文される。

広口壺 口縁部資料は82図8～19、83図1～17で、器形は82図10・17、83図4・6などからある程度推定される。体部上半が短く内湾したのち長い頸部となり、内傾、直立、外傾して短い口縁部になる。口縁部は強くくびれるもの（10）、わずかにくびれるもの（17）、内湾気味に直立するもの（6）などがある。文様は頸部が中心となり、文様帶として上下が区画されるもの（17など）とされないもの（4）がある。文様は連弧文、重山形文、縦位区画文、横走文、波状文、重菱形文などがある。連弧文には4本同時（4など）が多用されている。他は2本同時施文である。体部文様には羽状のR撫糸文や斜行するL R繩文、二本同時の横走文、連弧文（83図6）が施文されている。なお6は頸部に二本同時の重菱形文があるが、II群に共通する要素—口縁部の繩文と連弧文、体部上端のブリッジ付連弧文を有している。

壺あるいは広口壺 83図11～13、84図、85図、86図1～20は壺あるいは広口壺の頸部から体部上半の資料である。84・85図は2本同時のもの、86図1～19は3本同時、20は4本同時である。重山形文、重菱形文、連弧文、波状文、同心円文、縦位区画文、2種類の文様のあるものなどがある。

甕 83図7～10は体部上半が内湾し、口縁部が外傾するものと考えられる。7・10は蓋の可能性もある。連弧文と波状文がある。

高坏 80図1～4は高坏とした。隆帯のあるもの、連弧文のものがある。

蓋 80図12・15・17・19・24、86図21～25は蓋としたが高坏の可能性もある。隆帯のあるもの、重菱形文（15、4本同時）、連弧文などがある。

文様と線間 文様の判る2本同時144点のうち、線間1mm前後は77点（53.5%）、2mm前後49点（34%）、3mm前後15点（10.4%）、4mm前後3点（2.1%）である（線間内側計測）。1mm前後が最多となるが、連弧文は2mm前後が32点中22点あり幅広い傾向にある。

同時施文の本数 文様のわかるもの207点中、2本同時144点（70%）、3本同時58点（28%）4本同時5点（2%）で、2本同時が主体となる。

第II群土器

肥厚した口縁部下端の交互刺突文ないしそれに類似した文様により特徴づけられるものである。体部文様は連続山形文や連弧文などの1本描きの沈線文となる。文様以外の特徴として器面調整が粗く内面にナデが明瞭に残る場合が多いこと、胎土には砂粒が多く含まれ焼成がやや不良気味であることが挙げられる。器形全体が判るものはほとんどなく、復元・破片資料により壺、広口壺などの存在は認められたが、高壺や蓋は判別不可能であった。口縁部資料を中心にして3類に大別した。分類に際しては本遺跡第4次調査(佐藤甲:1993)を参考にしている。

A類 肥厚部下端に隆帯を作出し、そこに刺突・押圧を行うもの(79図7・8、87~89図)。隆帯部の作山は沈線による分離がほとんどである。刺突を上下に行う交互刺突文(79図7、87図6など)、上に刺突、下に押圧を行う交互刺突類似文(87図5、88図5など)、下に押圧だけを行う波状文(89図1・3など)がある。刺突には二個一対のもの(87図5など)が少量存在する。口縁部上半の文様はスリット文(棒状の工具を縦位に押圧したもの)、沈線文、刺突文、繩文、無文などである。口唇には沈線を引き外側から押圧を加えたもの(88図18)や繩文のものなどがある。内面には繩文や綾絡文が施文されるものがある。SK3出土壺(75図)が器形全体の判る例である。

B類 隆帯部を作出せず、肥厚部下端に刺突・押圧を行うもの(79図6、90図~91図6)。刺突を上下に行う交互刺突文(90図1など)、刺突のみ(90図1など)、刺突のみ(90図16など)、押圧のみ(90図11)などがある。口縁上半の文様はスリット文、沈線文、繩文、無文などがある。口唇には沈線を引き外側から刺突を行うもの、繩文、刻目などがある。内面には繩文が施されるものがある。頸部文様に5本同時の横走文が施されるものがあり(90図9)、I群土器の要素を併せもっていると理解される。

C類 口縁は肥厚するが下端に施文されないもの。下端部の段が明瞭なもの(1類、91図7~92図)と不明瞭なもの(2類、93図1~12)がある。口縁部文様は沈線文、繩文、撲糸圧痕文、無文、刺突文がある。口唇には繩文、内面には繩文、撲糸圧痕文がある。SK2の壺(72図1)は頸部に2本同時の重山形文が施文されるが、口縁部がやや肥厚する受け口状であり、体部上

分類	下端文様	スリット	沈 線	繩 文	無 文	刺突文	その他	不明	計
A	交互刺突文	8	3	9	5				25
	支矢刺突類似文	4		6	2	1			12
	波状文	1	6	17	7				31
	その他の	3		2	1				6
	不明	1							1
	計	17	9	33	15	1			75 (49%)
B	交互刺突文	1	4	1			1		7
	押 圧		2	3	4			1	10
	刺突	1	4	2	1				8
	その他の			1					1
	不明		1						1
	計	2	11	7	5		1	1	27 (18%)
C		1	16	22	12				51 (33%)
	計	29	26	62	32	1	1	1	153 (100%)

第20表 II群土器口縁部文様相関

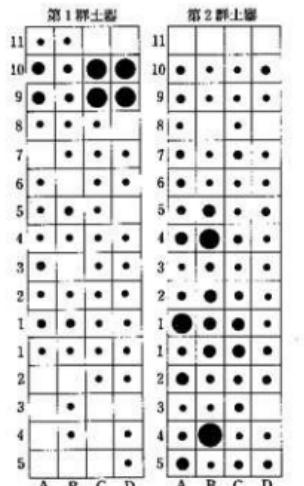
端と口縁部に連続山形文があること、胎土と調整が本群のものであることながらI群の要素をもつII群土器と据えた。

各種型と肥厚部下端と口縁上半文様の関係を第20表に示した。A～C類ではA類が半数近くを占め、次いでC類、B類となる(注)。A類内では波状文が最多で、次いで交互刺突文、交互刺突類似文となる。交互刺突類似文にも押正が行われることから、刺突もさることながら押正が多用されているといえる。口縁上半との関係では各類とも地文のみや無文が多くなる。それら以外では、スリット文がA類に集中し、A B類では沈線文が多い傾向が認められる。

頸部・体部資料(93図13～94図) 文様には、1～2条の沈線文、円形貼付文、刺突文がある。沈線文には横走沈線、弧状文、工字状文、連続山形文、連弧文などがあり、工字状文には磨消繩文がある。体部上半には連弧文や連続山形文が施文される。

第三群土器

I・II群の特徴をもたない一群である(79図5・6・10、80図一部、81・95・96図)。口縁部、体部、底部資料がある。器形は主に壺、広口壺、甕、蓋、高坏などが含まれている。口縁部資料には、ほぼ直線的に外傾する(95図12)、緩くくびれる(95図10)、強くくびれる(95図16)ものがある。文様は沈線文、繩文、燃糸压痕、無文などがある。口唇や内面にも施文される。79図10は内外面に繩文や2本同時の平行沈線があるがI群土器とは異質である。頸部資料(96図4～6)は、広口壺の可能性のあるものである。底部では、端部が外へ張り出すものとそうでないものがある。底面には布目痕、木葉痕、無文がある。また、底面が指ナデにより円形



にくぼむものがある(91図8～10)。高坏の脚(あるいは蓋のつまみ部)や、繩文のある蓋の端部などがある。土器の出土状況

I・II群土器の出土状況を第386図に示した。両群は重複して分布するが集中地点に違いがみられる。I群土器はI区9～10グリッド付近に集中し、II群土器はI区5グリッド以南に多く分布しI・II区の境界付近がやや集中するようである。この違いは今までの編年研究を踏まえればI群からII群へという時期差と捉えられる。さらにI・II群の共通した要素をもつ土器(72図1、83図6、90図9)が存在することから両群の時間差は近接したものと考えられる。

土器の編年的位置づけ

I群土器の類例は、塙釜市崎山田洞窟(伊東・伊藤：

●10点以上 ●15～20点 ●10～15点 ●6～10点 ●1～5点

第386図 弥生土器分布状況

1964)、色麻町色麻古墳群215号墳周辺(古川:1983)、同古墳群123号墳周辺(佐々木他:1985)、仙台市山口遺跡7層土器(田中他:1984)などがあり、十三塚式に比定されており、本群もその時期に位置づけられる。前述の遺跡いすれからも2本・3本同時施文が出土している。色麻古墳群123号墳周辺では3本が主体となる。本群は先述したように2本が主体である。この違いが十三塚式の時間差か地域差かは今後の検討に委ねたい。

II群土器とほぼ同じ内容の土器群としては本遺跡昭和62年調査第V層土器(兼田:1988)、本遺跡第4次調査8層土器(佐藤甲1993)、同市山口遺跡7層土器(田中他1984)などがある。佐藤信行氏は天王山式のメルクマールである交互刺突文の祖形を岩手県江刺市鬼II遺跡の土器群に求め、昭和62年調査資料をその発展段階に位置づけている(佐藤信:1990)。また、太田昭夫氏は宮城県内の天王山式を3段階にとらえ、「天王山式以前か、天王山式でも古い土器内容を示す」段階を1段階とし、本遺跡昭和62年調査資料をそこに位置づけている(太田:1990)。本群は昭和62年調査資料とほぼ同じ内容であることから同様の位置づけがなされる。他の類例としては、名取市清水遺跡神明町地区(恵美:1982)、色麻町色麻古墳群124号墳周辺(古川:1985)などがある。両遺跡とも十三塚式土器が共存するか近くから出土するという本遺跡と同様な現象が認められ、本群とI群土器とが近接した時期であることを示すものと捉えられている(佐藤信、太田前掲)。

注) 図示資料は形態・文様が判別しやすいものをランダムサンプリングに近い状態で抽出しているので、この量的割合は本来のものとある程度反映していると考える。

②打製石器

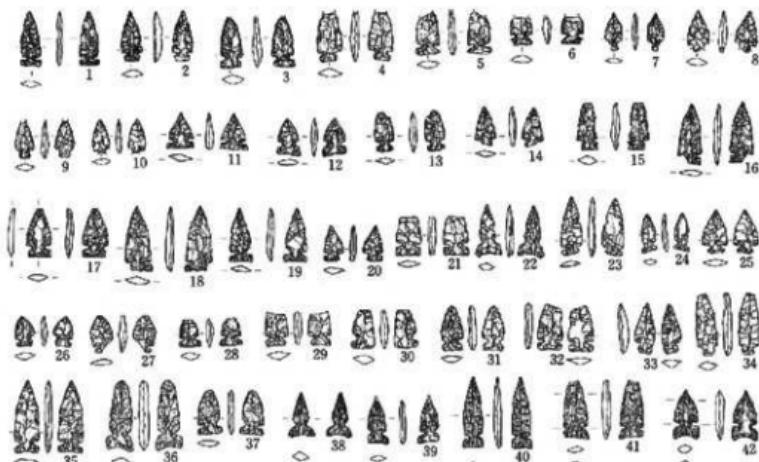
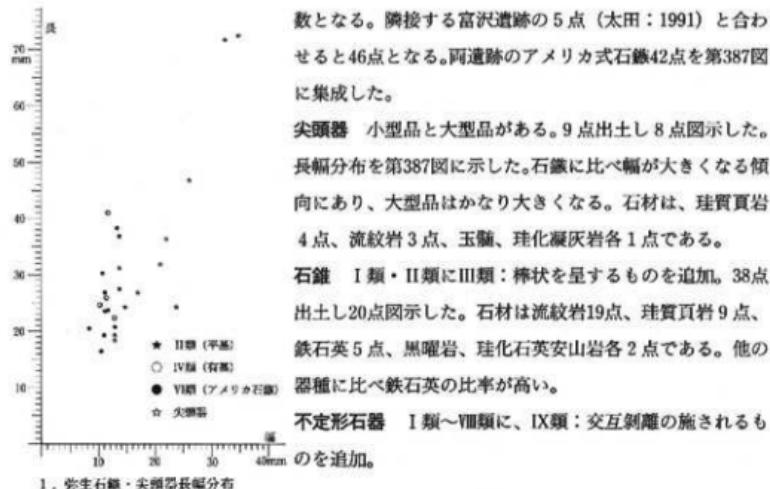
打製石器には、石錐、尖頭器、石錐、不定形石器、両極削離痕ある石器、二次加工ある剝片、微細削離痕ある剝片、剝片、石核、石錐、大型板状安山岩製石器などがある。

剝片・チップを除くある程度以上の加工のあるもの341点を登録し、104点を図示した。登録石器の内訳は、石錐などの定形石器117点(34%)、スクレイパーなどの不定形的な石器89点(26%)、両極削離痕のある石器11点(3%)、二次加工のある剝片89点(26%)、微細削離痕のある剝片12点(4%)、石核15点(4%)、石錐4点(1%)、大型板状安山岩製石器4点(1%)である。分類は剝片・石器は繩文後期の分類に準拠し、不足分を追加した。

石錐 II~V類にVI類:アメリカ式石錐を追加。石錐は71点出土し40点図示した。I類(凹基)はない。II類(平基)が20点(28%)、III類(円基)が2点(3%)、IV類(有茎、凸基)が20点(28%)、V類(基部不明)8点(11%)、VI類(アメリカ式石錐)が21点(30%、18点図示)である。II~IV・VI類は同比率であるが、長幅のデータが判る完形品はVI類が多くなっている。ただし、有茎としたIV類にはVI類の一部が紛れ込んでいる可能性がある。またII類は98図5・8などをみるとVI類あるいはIV類の未成品の可能性がある。長幅分布を387図に示した。長さ

16~41mm、幅8~15mmの範囲に分布する。VI類は全体に分布するが、IV類はやや長めになり、II類はやや幅広になるようである。後者は前述したようにII類が未成品であることを示しているのかもしれない。石材は、流紋岩が最多で38点(54%)。珪質頁岩が12点、黒曜岩6点、玉髓5点、鉄石英3点、珪化凝灰岩3点、碧玉2点、石英安山岩1点である。

本遺跡のアメリカ式石鏃は、昭和62年度調査(兼田:1988)で10点、第4次(佐藤甲:1993)で10点出土している。今回の分を合計すると41点となり、1遺跡としては天王山遺跡を凌ぐ点



第387図2 下ノ内浦・富沢遺跡出土アメリカ式石鏃 1~37下ノ内浦(1~10昭和62年調査、11~19第4次、20~37本調査) 38~42富沢(38第24次、39~40第30次、41~42第35次)

両極刻離痕ある石器、石核は同様である。

石鉗 4点出土し3点図示した。バチ形が2点、稜線が摩耗しているものが2点ある。石英安山岩である。

大型板状安山岩製石器 この石器は仙台市富沢遺跡第15次調査において命名された石器である(斎野: 1987)。小片を含むと4点出土しているが形状の判る1点を図示した。石英安山岩である。

以上の石器のうち215点について石材を鑑定した。内訳は流紋岩51%、珪質頁岩24%、黒曜岩9%、鉄石英4%、玉髓3%、碧玉、珪化凝灰岩、石英安山岩、安山岩が各2%、珪化石英安山岩1%である。流紋岩が多用されているが定形的な石器の石材は多種になるようである。

③ 岩製石器・石製品

石庖丁、太形蛤刃石斧、管玉がある。石庖丁については本遺跡昭和58年度の概報III「下ノ内浦遺跡SK2土廣出土の石庖丁」(須藤・阿子島: 1984)に石器の特徴と使用痕分析を報告している。本来再掲すべき所だが紙面の制約上断念した。概報を参照されたい。

太形蛤刃石斧は2点とともに安山岩製である。管玉は3点すべて鉄石英製である。

5 遺構について

(1) 縄文時代早期の住居跡

早期の住居跡はSI11・12の2軒検出されている。いずれも平面形が不整形で、規模が長軸2.5~3m程度と比較的小さく、焼土や炉、明瞭な柱穴などが認められないものである。その時期は堆積土中より押型文土器が出土していることから、早期前葉の日計式期に属すると考えられる。宮城県内での同時期での類例としては白石市松田遺跡(丹羽: 1973、1982、土岐山: 1982)があり、竪穴住居跡3軒と竪穴状遺構3基が検出されている。两者と本例との間には、平面形、規模、壁の立ち上がり方、柱穴の有無、焼土・炉の有無などで共通点相違点が存在するが、詳しい検討は資料の蓄積を待つての課題としたい。

(2) 縄文時代後期の配石遺構と土壙群

所属時期 配石遺構と土壙群の時期は、遺構内出土土器が第III群土器と大きく異なるものではないことから後期前葉南境式後半を中心とした時期と捉えられる。特に多くの遺構の検出面である13層の遺物や前項で述べたブロックの変遷をふまると第1グループ(D・Eブロック: 1・2条沈線文をやや主体としながら一定量の多条沈線を含む)を中心とした時期が考えられよう。

配石について 配石遺構としたのは1~9号配石、2・3号集石である。これらは配石の形態から大きく以下の三つに分類される。

A類 踞を楕円形に配し、長軸方向を立石とし、内部に小蹠を詰め込むもの。1・4・6・7・8号配石である。いずれも下部に土壙を伴う。小蹠は配石の基盤であり、上面ではマウンド状であったことが1・8号配石から窺える。

B類 踞を円・楕円形に配し、両端の一方を背高の立石、他方を横長の立石としたもの。2・3・5号配石である。いずれも下部に土壙を伴う。

C類 A・B類以外のもので規則性がないもの。9号配石、2・3号集石である。下部に土壙を伴う場合とない場合がある。9号配石は2～3基の配石が崩れたものと考えられるが、小蹠の集中部分なども明瞭でなく本来の形態は不明である。蹠を伴う土壙の一部はこの類に含めるべきかもしれない。

宮城県内の同時期の配石遺構は、白石市二世敷遺跡（加藤他：1984）、仙台市六反田遺跡（佐藤：1987、渡部：1995）、同市大野田遺跡（主浜：1995）などで検出されている。しかし、本遺跡で特徴的なA・B類の類例はA類が大野田遺跡に数基確認されるだけでB類は確認されない。他県においても同様である。資料の増加を待ちたい。

(3) 弥生時代の遺構

竪穴遺構 竪穴遺構はSI15・16である。SI15は壁の立ち上がりが緩いこと、炉の痕跡や柱穴が不明であることなどから竪穴遺構とした。堆積土出土遺物が第II群土器が主体であることから時期は弥生時代後期の天王山式期と考えられる。住居跡の可能性もあるが、近接して土器棺墓と土壙墓があることから墓域内に存在するとすれば葬制に関連する遺構の可能性も考えられよう。

土壙墓 SK2で、底面付近に赤色顔料の散布、石庖丁と太形蛤刃石斧の副葬品がみられることがから土壙墓と考えられる。時期は確認面の一括土器が第I群土器の要素をもつ第II群土器と捉えられることから天王山式期でも古い段階と考えられる。石庖丁を副葬する類例は福岡県に3例—田川郡赤村合田遺跡（赤村教委：1985）、嘉德郡穂波町日上遺跡（福岡県教委：1971）、甘木市栗山遺跡（甘木市：1984）知られるに過ぎない（斎野：1990）。

土器棺墓 SK1・3、6号埋設土器である。SK3の土器は交互刺突文から、他二者の壺は器面調整と胎土の特徴から第II群土器と捉えられることから、その時期は天王山式期と考えられる。

IV 山口遺跡

1. 調査の方法と経過

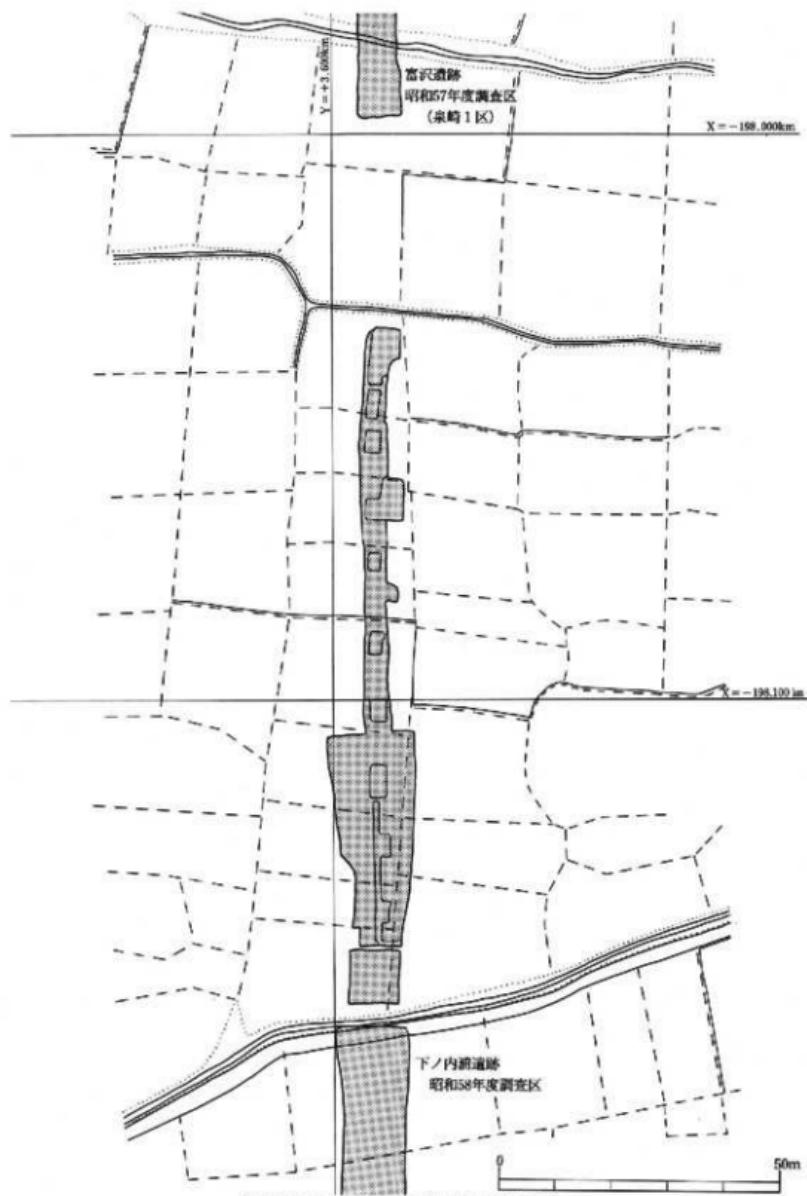
山口遺跡を調査するにあたっては、工事起点より13.405km～13.525kmの約120m間の工区部分を調査対象とした。調査用グリットの設定は工区起点とは逆に、南の下ノ内浦遺跡内に位置する工事起点より13.560km地点をグリットの基点とした。南北グリット軸は真北に対して東に0°45'35"偏している。グリットは3m単位とし、北に向かうに従いグリット番号を増すように設定した。本調査区において設定したグリット番号は13～52までとなっている。また東西グリットについては西側より3m単位のA～Eグリットを設定し、工区中軸線をB・Cグリットの境界としている。当地区は地下鉄が地下路線から地上高架路線に変わる地点にあたることから、工事対象になる東西幅は一定のものではない。このため、調査対象区の幅員についても地下路線部分の29～52グリットについては4m程度と狭いのに対し、28グリット以南については最大で15mを越える箇所もある。

調査はまず調査対象区内に幅約4mを基本とした南北に長い範囲を設定し、重機により表土の除去作業を行っていった。掘削は表土とした現代の耕作土と、その下層に確認した類似の土層も同時に除去している。しかしながら後の試掘区壁面、調査区壁面での断面観察の結果、除去した土層は弥生時代の遺物包含層とみられる3層やそれ以前の水田耕作土の可能性の強い4層まで及んでいたことが判明した。

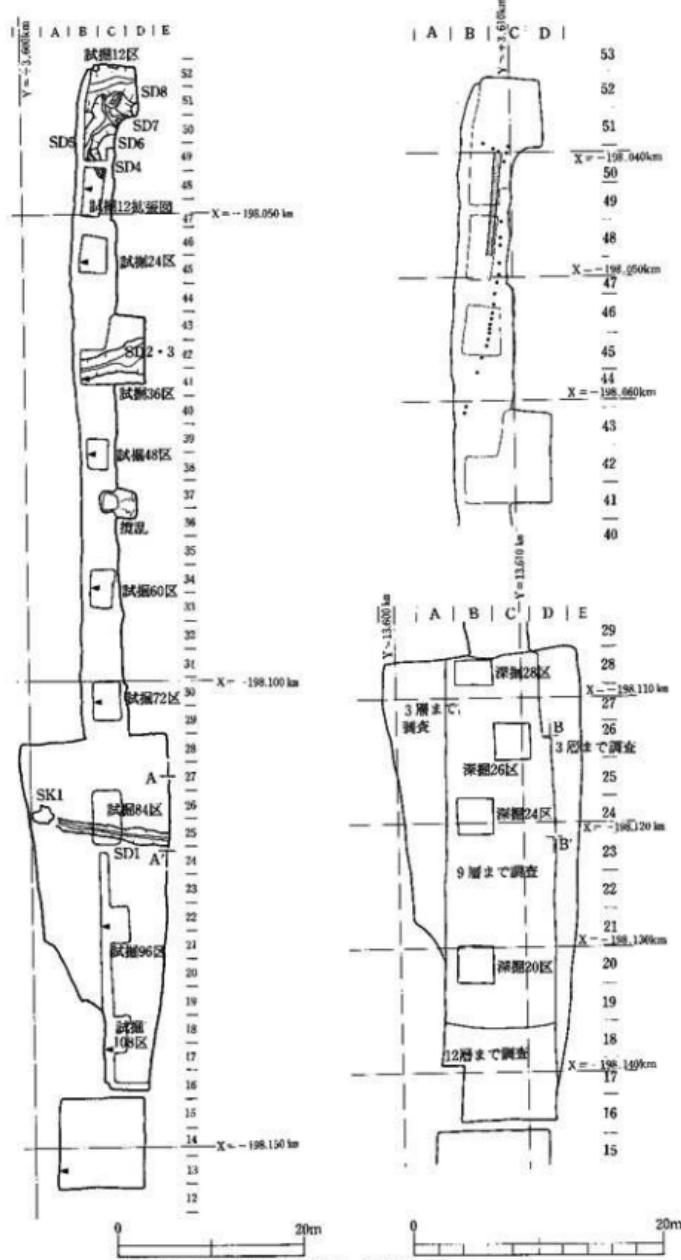
表土除去後の精査において、48～50グリットの4b層面で下層の5層によるプラン確認がなされ、またその東側に平行して計25本の杭跡などが検出された。これらは4層による水田畦畔とその付属施設の可能性があるものと考えられるが、調査時点での認識はなされなかった。

次に遺構、遺物の分布状況や基本層位を確認するため、調査区内に試掘調査区を9か所設定した。試掘区調査は南側の84・96・108区から開始し、北に向かって進んでいった。この結果、84区で1号溝跡、36区で2・3号溝跡、12区で4～8号溝跡が検出された。また12区において4号溝跡が南側に延びることから、12区と24区の間に12区拡張区を新たに設定したほか、12・36区らついても東側に拡張している。各試掘区の掘下げは土壤のグライ化が始まる13層もしくは17層を掘下げた時点で終了し、壁面断面図を作成した。遺物は試掘84・96・108区を中心に弥生土器や縄文土器のほか、石器も数点出土し、特に10層中からの出土が多くみられた。

1号溝跡の検出や遺物の出土に伴い、各試掘区調査と平行して28グリットより南側の工事対象となっている全域に調査区を拡大した。これは中軸線を中心に東西幅4m程度であった調査



第388図 調査区位置図（土地区画整理前）



第389図 試験区・深掘区・透構配置図

区を東西双方向に3~6m拡張するものとなっている。拡張の結果、A B21~25グリットを中心にしてこれまでの調査成果から弥生時代の遺物包含層とみられる3層を検出し、これを掘込んだ後、1号溝跡を再検出し、また新たに1号土坑を検出した。次に調査区東壁において1~3層までの基本層断面図を作成したのち、さらに16~28グリットについて、中軸線を中心に6~9m幅で重機により4層以下を約40cm掘下げ、4~10層までの基本層断面図を作成した。そして最後に同地区内に3×3mを基本とした深掘区を4か所設定し、縄文時代の遺物包含層とみられる10層やそれ以下の17層までの調査を行ったが、深掘り区調査での遺構の検出は無く、壁面断面図を作成し、これより下層の掘込みは行わなかった。

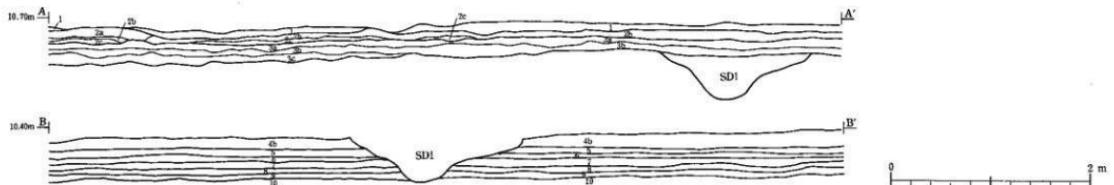
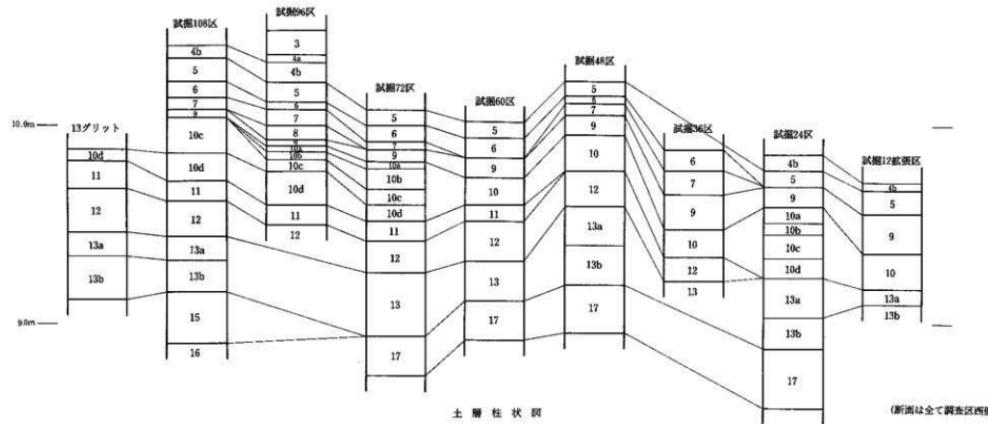
2. 基本層序

本遺跡は基本的に南側に位置する荒川の北側自然堤防上に位置しており、今回の南北に長い調査区域においては各層とも北側に緩やかに傾斜し、富沢遺跡へと続いている傾向がみられる。また調査区内には埋没した小河川跡がいくつか存在するとみられ、それらの上層においては部分的な層の落ち込みがみられる箇所も認められる。

確認した基本層は大別で17層で、これらは細別26層に分層される。1層は全区とも共通して認められる現代の耕作土であるが、その下層においては、周辺での調査成果からみて、ほぼ全域にわたり後世のなんらかの削平などによる層位の欠落があるものとみられる。また29グリットより北側については、調査を開始する際に予め3層までを除去している。1~3層の層の観察は主として16~28グリットの調査区東壁面で行い、4層より下層については9カ所の試掘区西断面、12~15グリットの調査区西断面、16~28グリットの調査区東断面、そして4か所の深掘区断面により行っている。

- 1 層：黄灰色（2.5Y4/1）砂質シルト。旧耕作土。
- 2 a層：オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質シルト。層厚は厚いところで10cmで、27グリット付近の狭い範囲にのみ分布している。層中に10YR8/1灰白色火山灰をブロック状に含む。
- 2 b層：にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質シルト。2 a層に比べて黄色が強い。層厚は厚い所で15cmで、21グリットより北側に分布している。ほぼ連続して続いているが、場所によって層厚が著しく異なる。
- 2 c層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト質粘土。層厚は厚いところでも5cm足らずで、26グリットより北側に分布している。2 b層と下層の3 a層との間の漸移層的なものと見られる。
- 3 a層：黒褐色（10YR3/1）粘質土。層厚は厚いところで10cmで、24グリットより北側に分布している。

- 3 b層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。層厚は4～20cmと幅があるが、3 a・3 c層に比べると層厚は厚く、調査区南端部までほぼ全域に分布している。
- 3 c層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。層厚は厚いところで12cmで、26～28グリットのやや窪地となっている狭い範囲に分布している。
- 4 a層：褐色（10YR4/4）砂質シルト。明黄褐色（10YR7/6）砂質土を含む。層厚は5cm前後である。28グリット以南で確認されたが、それより北側での分布状況は不明である。
- 4 b層：褐灰色（10YR4/1）シルト。層厚は厚いところで8cmで、試掘12～24区の範囲と96・108区での部分的な確認であったが、ほぼ全域に分布しているものと考えられる。
- 5 層：黒色（10YR2/1）粘質土。層厚は6～17cmで、4 b層が厚さを増す27・28グリットでみられない他は全域に分布している。
- 6 層：黒褐色（10YR3/1）粘質土。層厚は2～15cmで、北側の試掘12・12拡張区・24区では認められないが、それより南側には全域に分布している。
- 7 層：黒色（10YR2/1）粘質土。層厚は4～10cmで、試掘区12・12拡張区・24・60のレベルの低い地区に認められない他は全域に分布しているが、試掘区ごとの層厚にはばらつきがみられる。
- 8 層：黒褐色（10YR3/1）粘質土。層厚は3～7cmで、28グリットより南側に分布し、特に調査区東半部分に認められる。部分的な分布状況をみせる。
- 9 層：暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土と黒色（10YR1.7/1）粘質土の互層。層厚は厚いところで30cmの厚さがあり、全域に分布している。特にレベルの低い地区に厚く堆積する傾向がみられ、また全体としては北側に低くなるに従い厚さを増していく。層厚の厚いところでは白色粘質土と黒色泥炭質粘質土との互層の状況が明瞭に認められるが、南半部のレベルが高く、層厚の薄いところでは不明瞭となっていく。
- 10 a層：黒色（7.5YR2/1）粘質土。
- 10 b層：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土。
- 10 c層：黒色（10YR2/1）粘質土。
- 10 d層：黒褐色（10YR3/1）粘質土。
- 10層については4層に細分されるが、場所によっては細分不可能であった。層厚は10～35cmで、地形にかかわらず、各地区での層厚にはばらつきがあり、全域に分布している。
- 11 層：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土。層厚は5～18cmで、試掘区60より南側に分布している。レベル差による層厚に違いはみられない。
- 12 層：黒褐色（10YR3/1）粘質土。層厚は10～30cmで、試掘区36より南側に分布している。



順序	土色	土質	層厚(cm)	鉛入物・備考	鉛入物・備考
1	黄灰土 2.5Y4/1	砂質シルト	~27		(日本耕土)
2a	赤褐色 7.5YR2/2	砂質土	~15	酸性土、白色土と山形ブロックを含む	
2b	赤褐色 7.5YR2/3	砂質土	~15	酸性土、マンゴン石を含む	
3c	黄褐色 10YR4/2	砂質粘土	~8	酸性土、マンゴン石を含む。2bと3aとの接觸面	
3a	黄褐色 10YR4/1	粘土	~10	酸性土、マンゴン石を含む	
3b	黄褐色 7.5YR2/3	粘土	4~20	酸性土、マンゴン石を含む	
3c	黄褐色 10YR4/1	粘化粘土	~12	酸性土、マンゴン石を含む	
4a	赤褐色 10YR4/4	砂質シルト	4~5	明瞭な褐色鉄質を含む	
4b	赤褐色 10YR4/2	砂質土	~15	酸性土、明瞭な褐色鉄質を含む	(水田耕土?)
5	赤褐色 10YR5/1	粘土	6~17	酸性土、明瞭な褐色鉄質を含む	
6	赤褐色 10YR3/2	粘土	~15	酸性土、酸化鉄、炭化鉄を含む	
7	赤褐色 10YR2/1	粘土	4~10	酸性土体、酸化鉄、炭化鉄を含む	
8	赤褐色 10YR2/1	粘土	3~7	酸性土体多量、酸化鉄を含む	
順序	土色	土質	層厚(cm)	鉛入物・備考	鉛入物・備考
9	褐色黄土 2.5Y5/2	粘土質土	~30	互層	植物遺体、礫化物を含む
10a	褐色土 7.5YR2/1	粘土	~10	~16	植物遺体多量、礫化物、瓦灰物を含む
10b	褐色土 7.5YR2/3	粘土	~16	植物遺体多量、瓦灰物、瓦灰物を含む	
10c	褐色土 10YR2/1	粘土	~23	植物遺体多量、酸化鉄、瓦灰物を含む	
10d	褐色土 10YR2/1	粘土	5~25	植物遺体多量、酸化鉄、瓦灰物を含む	
11	褐黃土 7.5YR4/1	粘土	5~18	植物遺体多量、酸化鉄を含む	
12	黑褐色 10YR4/2	粘土	10~20	植物遺体多量、酸化鉄を含む	
13	褐色土 7.5YR2/1	粘土	~20	植物遺体多量、酸化鉄を含む	
14	褐色黄土 7.5YR4/1	粘土	~30	植物遺体多量、酸化鉄を含む	
15	褐色土 10Y4/1	砂質土(細砂)	14~28	植物遺体多量含む	
16	褐色土 10Y5/1	砂質土(細砂)	5~20	植物遺体多量含む	
17	褐色土 9G5/1	シルト質粘土	15~31	植物遺体多量含む	

第390図 基本層型

レベル差による層厚に違いはみられない。

13a層：オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘質土。

13b層：暗緑灰色（7.5GY4/1）粘質土。

13層からはグライ化した土壤となり、2層に細分されるが、場所によっては細分不可能な箇所があった。層厚は20~40cmで、全域に分布しており、上層に比べて層傾斜が若干緩やかになっている。

14 層：暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土質シルト。層厚は15cm前後とみられる。各試掘区では確認されなかったが、24~28グリットに設定した3か所の深掘区において確認された部分的な堆積層とみられる。

15 層：灰色（10Y4/1）砂質土（細砂）。層厚は14~28cmで、深掘区24と試掘区108で確認されているのみで、ここより北側には分布しないものとみられる。

16 層：緑灰色（10GY5/1）砂質土（細砂）。層厚は5~20cmで、15層同様、深掘区24から南側に分布しているものとみられる。

17 層：緑灰色（7.5GY5/1）シルト質粘土。層厚は15~31cmで、北側は試掘区24、南側は深掘区24で確認されていることから、調査区全体を通して分布しているものとみられる。上層に比べて層傾斜がより緩やかになり、北側に下っている。

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 4層検出遺構と出土遺物

1号溝跡（第391図、写真114~116）

試掘84区において4層面で検出した。後に調査区を拡張し、25グリット内で調査区を東西に横断する溝を約12mにわたり再検出した。1号溝跡は1号土坑により切られている。方向は真北から西に約80°偏している。上端幅は85~185cm、下端幅は20~35cmで、深さは約50cm前後である。壁面は中位の稜線を境に上半は緩やかで、下半はやや急になり立上がる規格性をもった溝跡といえるが、溝跡底面の傾斜は不明である。また溝跡を境として北及び南側に4層面でのレベル差は認められない。堆積土は10層に分層されたが、3層が砂質土である以外はシルト質土で、全て自然堆積層とみられる。

4層水田跡の作土が4b層の可能性が高く、また1号溝跡は畦畔状プランの方向とほぼ直交する方向性を示すことから考えると、1号溝跡は4層水田跡に関わる施設であった可能性も考えられる。

[出土遺物] 堆積土2層から石鐵が1点のみ出土した（第398図2）。有茎の石鐵で完形である。

1側辺にアスファルト状物質が付着している。

4 層水田跡（第392図、写真119～129）

48～50グリットの4 b層中において南北方向の細長いプランを検出した。当初このプランは溝状のものとの認識で調査が進められたが、後にこれが水田跡における4層水田跡による擬似畦畔であったことがわかった。プラン幅は30～60cmで、約8mにわたり検出された。方向は真北から東へ約6°偏している。これを境に段差などによる東西でのレベルの違いは特にみられない。

また擬似畦畔の東側にこれと平行して延びる南北方向の杭列を検出した。杭列はプランから30～50cm離れており、43～50グリットの約22mにわたり計22本が打込まれていた。またこれとは別にプラン上や西側の4 b層中に杭材や板材が3点検出された。杭間隔は一部を除けば30～142cmとばらつきはあるが、わりと規則的な配列状況を示し、特に45～48グリットにおいてはその傾向は強い。杭は全て擬似畦畔側の西方向に傾斜している。傾斜角度は計測した14本では52～85°で、平均は64°であった。打込み面は残存状況から4 b層面と考えられ、杭先端は5・9層を突抜け、殆どのものが10層に及んでいる。形状は直径が3～7cmの丸太材が主で、一部分割材もみられる。残存長は20～45cm程度であるが、詳細な計測値や先端部の加工、樹種などについては不明である。

この水田跡については下層の5層が自然堆積層の可能性が大きく、したがって検出された擬似畦畔は4層水田の畦畔直下に形成された5層によるものであったと考えられる。杭列が擬似畦畔からやや離れて位置するのは、本来の4層畦畔がより幅があったことを示しているものといえる。また杭列は畦畔に沿って打込まれていたものと考えられることから、4層畦畔は杭列の南端まで存在していたものと考えられる。4層の残存状況が極めて悪いことから、これと直交する畦畔の検出はできなかったが、北側は8号溝跡が埋りきらずに当時も凹地となっていたと考えられることから、あるいはこの南側に沿って東西方向の直交する畦畔が存在していた可能性も考えられる。またこの凹地には4層自体は確認されず、基本層9層の上層に幾つかの木材が検出されており、これらは擬似畦畔上にみられた木材同様、水田跡に関わるものであった可能性が強い。

水田跡の広がりについては試掘96区で4 a・4 b層、108区で4 b層がみされることから、本来は調査区全域に存在していた可能性がある。試掘108区と12拡張区間の約90mでの4 b層上面のレベル差は約70cmである。

1号土坑（第391図、写真117・118）

検出は調査区拡張後の4層面で、1号溝跡上に重複関係をもって検出されたが、土坑の掘込み面は上層の3層あるいは2層面であったものとみられる。規模は最大幅で東西230cm、南北180cmを測る不整形の土坑である。深さは10～25cmで、底面は平坦で壁面は急に立上がりっている。

堆積土は2層に分層され、これらは自然堆積層とみられる。堆積土2層中及び底面に幾つかの木材が検出されたが、全て自然木であった。

(2) 10層検出遺構

2号溝跡（第393図、写真130・131）

試掘36区において42グリットを中心に検出され、後に調査区を東側に拡張している。方向は東西方向に近いもので、真北から東へ約60°偏している。2号溝跡はほぼ同じ場所に所在する12層上面掘込みの3号溝跡と同一のものとして調査したことから、本来の規模は不明であるが、試掘36区西壁断面からみると、上端幅は250cm以上で、深さは30cm程度の溝跡があったとみられる。壁面は緩やかに立ち上がり、溝底面の傾斜は不明である。堆積土は6層に分層され、その状況からみると、2号溝跡は方向や深さを変化させた自然の流路であったものと考えられる。

(3) 12層検出遺構

3号溝跡（第393図、写真130・131）

41・42グリットを中心に2号溝跡の下位に検出された。方向は2号溝跡とはほぼ同様である。2号溝跡と同時に掘込んだことから本来の規模は不明であるが、試掘36区西壁断面からみると、上端幅は150cm以上、下端幅60cmで、東側が幅広となっており、底面には部分的に深さ10cm程度の窪みがみられる。深さは40cm内である。壁面は緩やかに立上がりっている。堆積土は4層に分層されるが、2号溝跡同様に自然の流路であったものと考えられる。

(4) 13層検出遺構

4～8号溝跡（第394図、写真132～135）

試掘12区において4・5号溝跡を検出したことから調査区を北及び東側に拡張したところ、さらに6～8号溝跡を検出した。また南側の試掘24区との間に調査区を設けたところ、4号溝跡の延長部分が検出された。これらの中で最も規模が大きく、深いものは東西方向の8号溝跡で、次に幅のある5・6号溝跡が合流しながら8号溝跡と合流している。各々の規模等には違いがみられるが、これらは全て13層上面に形成された溝跡と考えられる。

4号溝跡は長さが3m程度で、上端幅は5号溝跡と合流する部分で130cm、下端幅は20cm前後を測る。溝跡は48グリット内で止まっている。

5号溝跡は上端幅は200cm前後、下端幅は30cm前後を測る。北端の51グリット内で8号溝跡と合流している。堆積土は調査区西壁で11層に分層され、その中には基本層9・10層が入り込んでいる状況がみられる。

6号溝跡はごく一部の検出であったため、詳細は不明であるが、上端幅150~180cmなのに下端幅はかなり狭く、西端で5号溝跡と合流している。

7号溝跡は6号溝跡の北側に位置し、東側から5号溝跡に合流する流れと、北側で8号溝跡に合流する流れがみられる。溝幅についてはプラン自体が本来1条の溝であるのか判然とせず、不明である。

8号溝跡は東西約5mの検出で、上端幅450cm程度とみられる。下端幅は30cm前後を測る。堆積土は調査区東壁面で22層に分層され、5号溝跡同様、中には基本層9・10層が入り込んでいる。1~20層は黒色の強いシルトが中心の植物遺体を含む層で、最下層の21・22層はグライ化したシルト質粘土層となっている。また砂質土層などの堆積層は特にみられない。10層中に含まれる木片については、4層水田跡に關係するものである可能性が強い。

これら5つの溝跡としたものは、規格性に乏しく、堆積土や掘込まれている面からみると、自然流路と考えられるものである。また全ての溝が同時期に存在していたかは不明であるが、5・8号溝跡の堆積土状況をみると、これらはさほど大差ない時期に機能していたものが後に長い年月をかけて徐々に埋っていたものと考えられる。

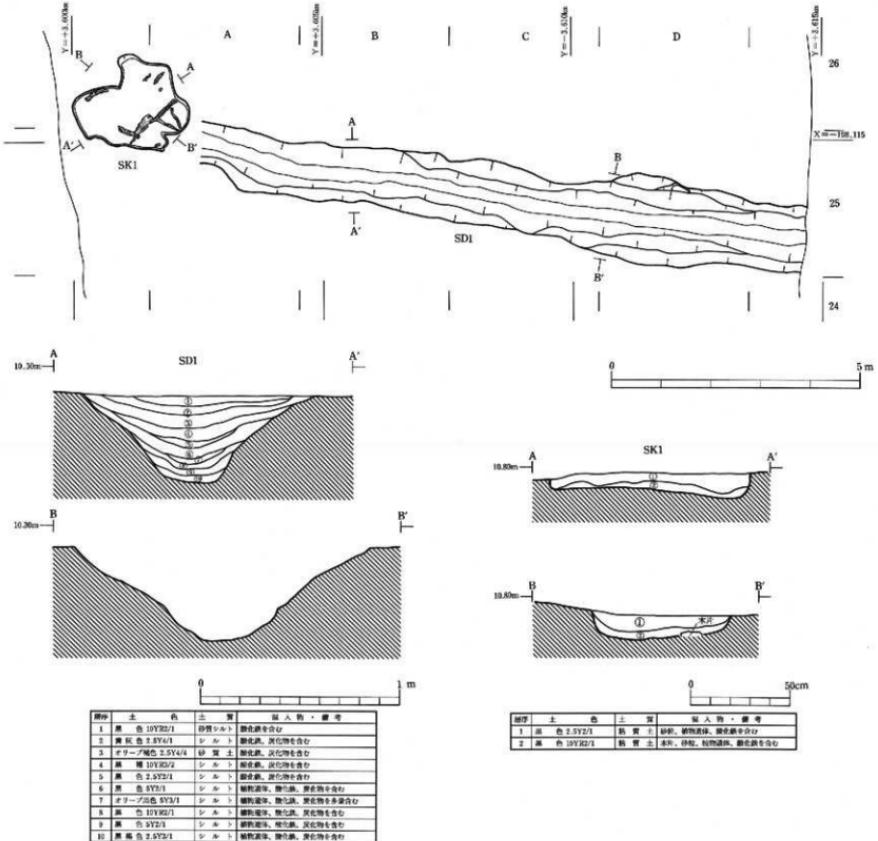
(5) その他の出土遺物

遺構以外では2、8、10、11、12層から遺物の出土があった。396図1~3、397図1~14は縄文上器である。396図3、397図1は後期前葉である。396図1、397図13は頭部に撫糸、縞条体圧痕のある深鉢で後期前半である。397図2~8は同一個体の後期末葉の深鉢で、口縁に突起、口・頸部・体部に入組帶状文が施文される。同図9~11は同一個体の晩期初頭の大型の深鉢である。口縁部に玉抱き三叉文と帯縄文が施文され体部は無文となる。396図2は後期後半から晩期前半の深鉢と考えられる。同図2、397図15・16は弥生土器で、2は同時施文の平行沈線文、15は口縁部がやや肥厚し内外面に縄文が施文される。16は布目痕の底部である。396図4・6は土製円盤である。398図1は石鉗の欠損品である。3は石錐で、4は不定形石器である。

4. まとめ

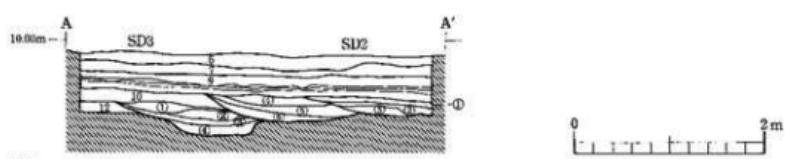
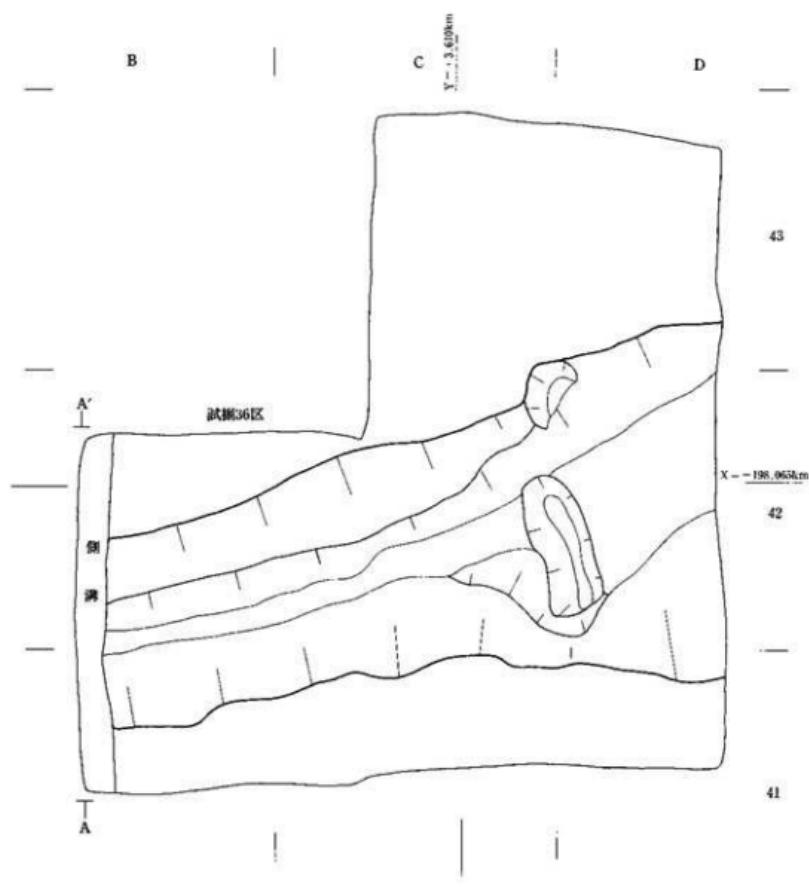
(1) 周辺調査区との層の対応

山口遺跡は北側に富沢遺跡、東側に下ノ内浦遺跡、そして旧荒川をはさんで南側に下ノ内浦遺跡が隣接している。今回の調査区は北側の昭和57年調査の富沢遺跡泉崎I区と南側の昭和58年調査の下ノ内浦遺跡I・II区との間に位置している。特に下ノ内浦遺跡I区北端は今回の調査区南端と約5mの距離であることから、山口遺跡の3層以下について、下ノ内浦遺跡の基本層位との対応が可能であった。



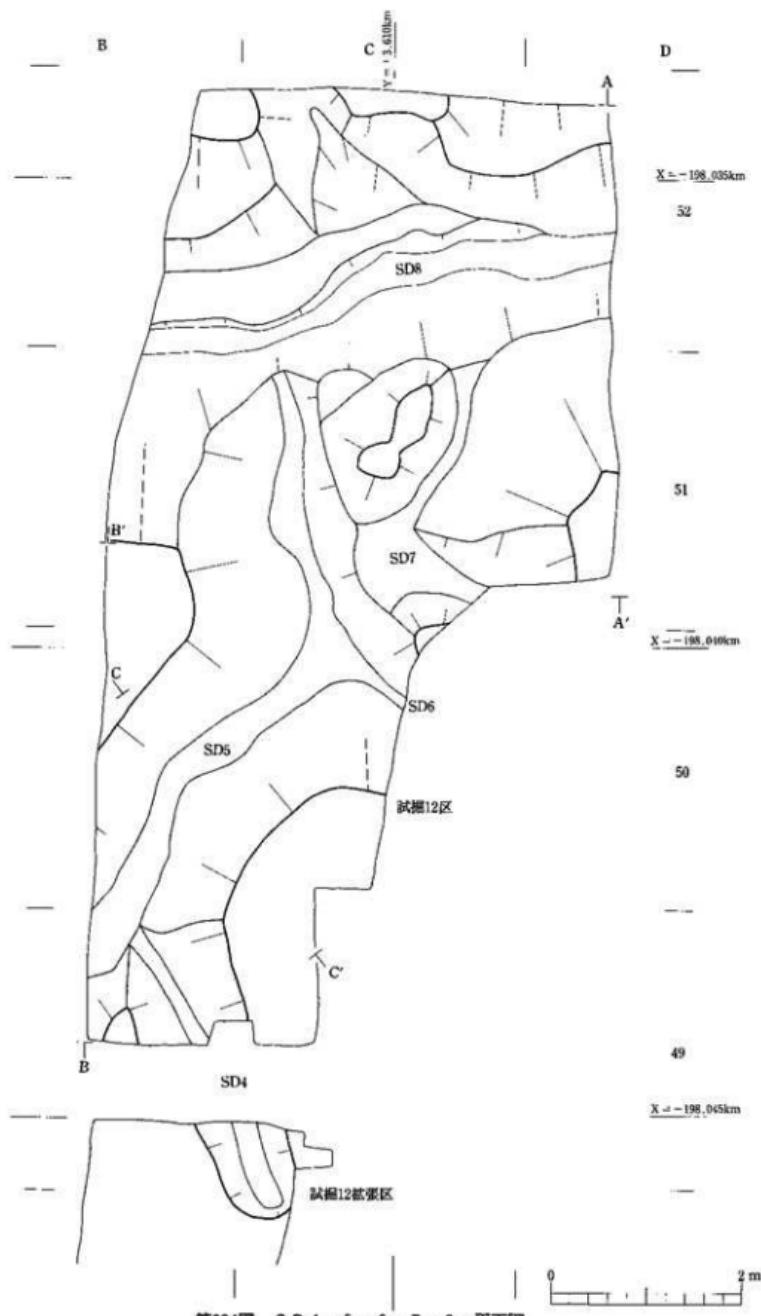
第391図 SK1-SD1 平面・断面図



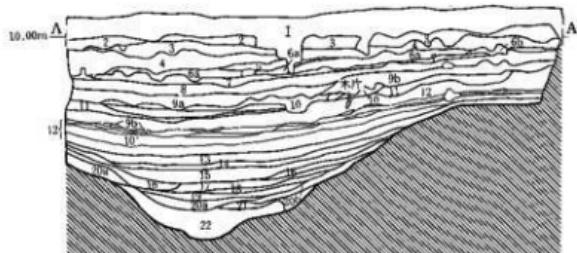


順序	色	土質	固有物・備考	順序	色	土質	固有物・備考
1	黒 色 7.5VR2/1	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む	1	黒 色 7.5VR3/1	粘質土	植物遺体を多量含む
2	黒褐色 10YR2/2	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む	2	黒褐色 2.5Y3/1	粘質土	植物遺体を多量含む
3	黒 色 7.5VR2/1	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む	3	黒 色 10YR2/1	粘質土	植物遺体を多量含む
4	黒褐色 10YR2/1	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む	4	黒褐色 10YR3/1	粘質土	植物遺体を多量含む
5	黒褐色 10YR2/1	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む				
6	黒 色 10YR2/1	粘質土	植物遺体を多量、炭化物を含む				

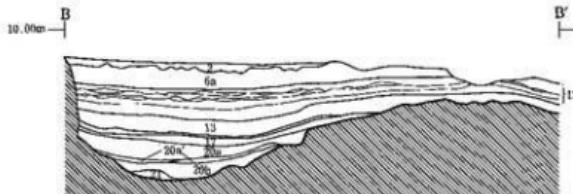
第393図 SD2・3平面・断面図



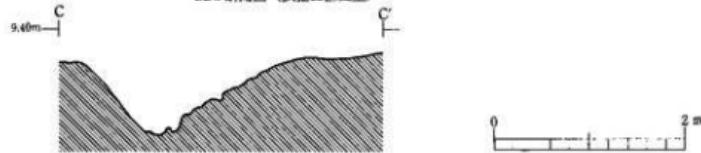
第394図 SD4・5・6・7・8・平面図



SD8 断面図 (試掘12区東壁)



SD5 断面図 (試掘12区西壁)



SD5 エレベーション図

層序	土 色	土 実	厚さ(cm)	私 入 物・備 考
1	黒褐色 10YR3/1	砂質シルト	20~30	酸化鉄を含む
2	黒 色 7.5YR2/3	シ ル ト	~14	植物遺体を若干、酸化鉄、灰青色砂質シルトを含む
3	暗灰褐色 2.5Y5/2	砂質シルト	3~20	植物遺体を若干、砂粒、酸化鉄を多量含む
4	黒褐色 2.5YR2/1	シ ル ト	4~30	植物遺体を若干、酸化鉄を多量、灰青色シルトを若干含む
5	黒 色 2.5Y6/1	シルト質粘土	~18	植物遺体、酸化鉄を含む
6a	黒 色 SY2/1	シ ル ト	~25	植物遺体、酸化鉄、黄褐色土を含む
6b	黒 色 SY2/1	シ ル ト	~10	植物遺体、酸化鉄、黄褐色土を含む
7	黄褐色 2.5Y3/1	シ ル ト	~11	互層、酸化鉄、炭化物を含む
8	赤褐褐色 10YR1/2	シ ル ト	5~17	植物遺体、鐵化鉄を若干、黄褐色シルトブロックをまばらに含む
9a	黑褐色 7.5YR3/1	シ ル ト	~18	植物遺体、酸化鉄を若干含む
9b	黒 色 7.5YR2/1	シ ル ト	~21	植物遺体、酸化鉄を若干含む
10	黒 色 10YR2/1	シ ル ト	~18	植物遺体、酸化鉄を若干含む
10'	記 記 な し		~9	
11	黒 色 2.5Y2/1	シ ル ト	~10	植物遺体、炭化物を含む
12	黒褐色 10YR1/2	シ ル ト	18~30	互層 植物遺体を含む (基本層9層)
13	黒 色 2.5Y4/1	シ ル ト	5~18	植物遺体を多量含む (基本層10層)
13'	黒褐色 10YR4/1	シ ル ト	~7	植物遺体、酸化鉄を含む
14	黒 色 2.5Y2/1	シ ル ト	~5	植物遺体を多量含む
15	黒褐色 7.5YR1/1	シ ル ト	3~14	植物遺体を多量含む
16	黒褐色 7.5YR2/1	シ ル ト	~11	植物遺体を多量含む
17	赤 黑褐色 2.5YR1/1	シ ル ト	~10	植物遺体を多量、灰白色土を含む
18	黒 色 7.5YR2/1	シ ル ト	~6	植物遺体を多量含む
19	黒 色 7.5YR2/1	シ ル ト	~9	植物遺体を多量含む
20a	黑褐色 10YR3/1	シ ル ト	~22	植物遺体、青灰色土を含む
20b	黑褐色 10YR2/1	シ ル ト	~6	植物遺体、黑褐色土を含む
21	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	~5	植物遺体、青灰色土を多量含む
22	黒 色 2.5Y6/1	シルト質粘土	~30	植物遺体、青灰色、黑色土を含む

第395図 SD 8・5断面図

本調査区3層は下ノ内浦遺跡の7層とみられる。下ノ内浦遺跡では細分された7a～7c層から十三塚式と天王山式の弥生土器が混在して出土しているが、本調査区3層から遺物の出土はみられなかった。しかしながら2層より同様の遺物が出土しており、おそらく本来は3層の帰属するものが何らかの要因で2層中に含まれたものとみられる。この2層については2a～2c層の3層に分層され、2a層中には平安時代の灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。下ノ内浦遺跡では水田跡とされた3層中に同様の火山灰がみられ、また4・5層面で竪穴住居跡のほか多くの遺構が検出され、これらはいずれも平安時代のものである。2層については観察できたのは断面のみであったことから詳細は不明であるが、下ノ内浦遺跡の状況からみて3～6層のいずれかに対応するものと考えられる。また下ノ内浦遺跡I・II区では7c・8層上面で弥生時代後期の竪穴造構1基と土墳墓1基、斎棺墓と考えられるものが3基検出されている。本調査区における4層上面検出の1号溝跡の在り方は下ノ内浦遺跡7・8層の在り方を示しているものと考えられ、下ノ内浦遺跡との遺構の性格や遺物量の違いは本調査区が微高地部から後背湿地部へと移る地区という地形条件に起因するものであろうと考えられる。これはまた4b層が水田作土とみられるものであるのに対して、下ノ内浦遺跡で対応するとみられる8層で水田跡が検出されなかったことからも理解できる。

10～12層は縄文時代後・晩期の遺物合層で、特に10層下部からは後期末葉から晩期初頭にかけての土器の出土が多くみられた。下ノ内浦遺跡では11・12層が後期前葉の主たる遺物包含層で、両調査区端部での層の特徴からみると、本調査区11・12層が下ノ内浦遺跡の11・12層に対応するものと考えられる。さらに南側の下ノ内浦遺跡III区では13層上面でやはり後期前葉とみられる配石造構や埋設土器のほか多くの土坑が検出されている。しかしI・II区で検出された遺構としては11～13層にかけてピット群や落込み状のものがあるが、いずれも人為的なものではなく、本調査区と同様の状況をみせている。

また本調査区の南東約100m地点での下ノ内浦遺跡第4次調査において8層から天王山式期の遺物包含層が検出された(佐藤甲:1993)。なかには十三塚式期のものもいくつかみられたが、これらは二次堆積によるものとされている。また下層の12～14層からは縄文時代後期の土器片が出土しており、本調査区との直接的な層の対応関係は不明ながらも、同様の層順を示しているものとみられる。さらにここから西に約170m離れた同じ山口遺跡内において調査された第2次調査では7層の蛙状盛上がりが検出され、7層中や8層上面からは十三塚式や天王山式の弥生土器が共存関係をもってみられるとしている(田中他1984)。水田跡は弥生時代後期の可能性があるとされ、同時期の遺物包含層下に検出された本調査区とは状況を異にしている。

富沢遺跡泉崎1区との層の対応については、地形的差異に加え、距離が離れていることから不明瞭であった。ここでは3時期の水田跡が検出され、11層が弥生時代樹形彌生式期、5・4層

が灰白色火山灰降下前と後の平安時代とされており、層位の対応をするにあたっては鍵層となるべき弥生時代の遺物包含層は確認されなかった。11層水田跡は調査区南半のみが耕作域となり、水田跡の広がりはさらに南側に及んでいるものとみられる。しかしながら本調査区4層水田跡は楔形壠式期まで遡る可能性はあるものの、11層水田跡に比べて土質、土色の違いに加えて畦畔の方向性も異なることから、これらが同時期のものであると確認するには至らなかった。

今回の調査区は下ノ内浦遺跡にみられる微高地部での弥生から平安時代にかけての生活域や小溝状遺構群にみられる畑作域に対しての富沢遺跡にみられる低湿地部での同期水田域との境界域にあたることから、双方の区域の性格を特徴づける遺構の存在は少ないのであったと考えられる。そのような中で検出された4層水田跡はその耕作域が限定された水田跡であったとみられ、この事は周辺地形やそれに絡む水利などの諸条件に制約されやすかった当該水田跡の分布の在り方を示しているものと考えられる。また下ノ内浦遺跡III区での縄文時代後期前葉の遺構の分布は同遺跡内のI・IIにまでは及ばず、それは遺物包含層の広がりとして認められるにすぎない。本調査区から出土した縄文土器がやや時代の下った後期末葉から晩期初頭であることから考えると、ここに縄文時代後・晩期の生活圏拡大の様子の一端をみることができるものといえる。

(2) 検出遺構の時期について

1号溝跡は4層面で検出されたが、それが4a、4bのいずれの層で検出されたかは不明である。下ノ内浦遺跡との層の対応からみて3層が弥生時代中期後葉から後期の遺物包含層とみられることに加え、溝内堆積土中の遺物からみて、1号溝跡は弥生時代中期後葉以前、あるいはこれに近接した時期のものと考えられる。

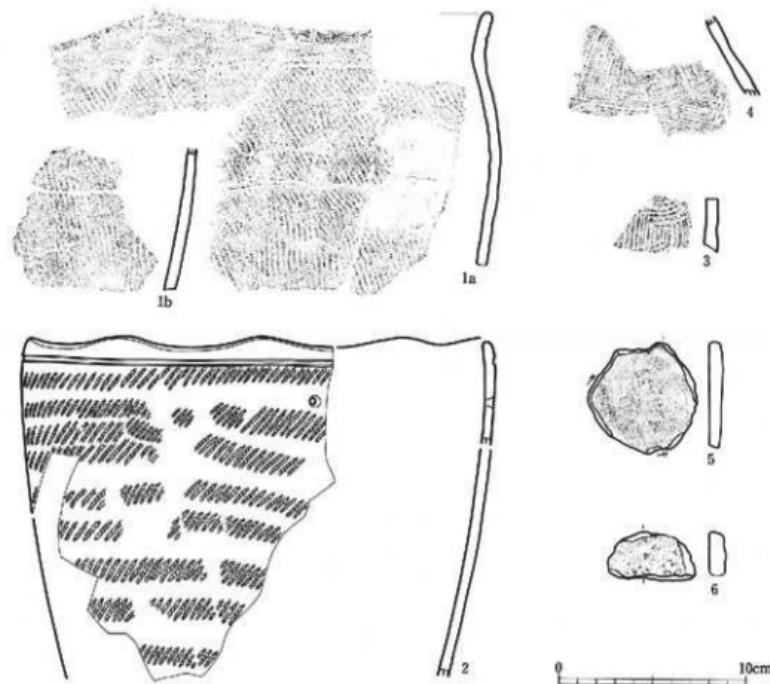
4層水田跡は4b層中で5層の盛上がる畦畔状プランとして検出された。5層は自然堆積層とみられることから、検出されたプランは4層による5層の擬似畦畔と考えられる。また4層は4a・4bの2層に分層されるが、検出された擬似畦畔は各層の土質などや出土した杭の残存状況からみると4b層によるものである可能性が強いものと考えられる。時期としては1号溝跡同様、弥生時代中期後葉以前、あるいはこれに近接した時期のものと考えられる。

2号溝跡は縄文時代後・晩期の遺物を包含する10層を切っている。また上層の8層から縄文時代の土製円盤、6層から縄文土器片とみられるものが出土していることから、縄文時代後・晩期以降に形成された自然の流路とみられる。

3号溝跡はやはり縄文時代後期の遺物を包含する12層を切っているが、埋没した後に10層が堆積することから、縄文時代後期の中で形成された自然の流路とみられる。

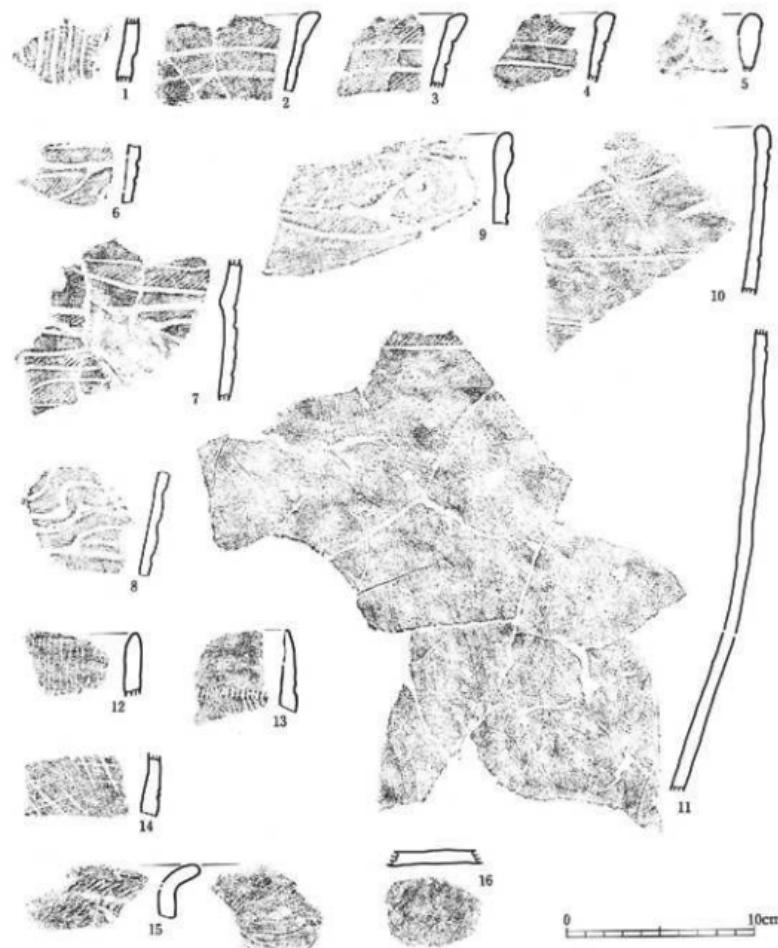
4～8号遺跡は13層面からの落込みとして検出された。周辺で確認された基本層は層相を変

えながら溝跡内に堆積しているものとみられ、中でも基本層10層が溝跡堆積土中位に堆積している。同様に縄文時代の遺物を包含する11・12層も溝跡底面近くに堆積しているとみられるところを考えると、4～8号溝跡は縄文時代後期の時期かそれ以前に形成された自然の流路とみられる。



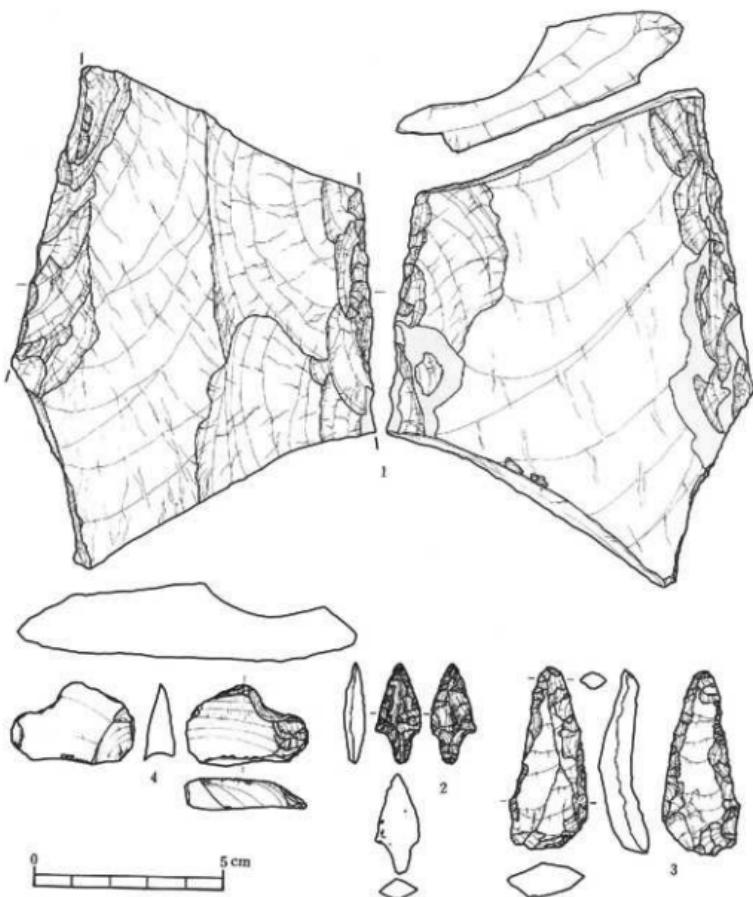
番号	地区	層位	分 類	特 質	層位	番號	写真
1		縄文土器・深鉢		口縁：突出、腹部：撻糸圧痕、体部：R.L縄文		31-4	
2		縄文土器・深鉢		口縁：小波状、腹部：沈線、体部：L.R縄文、補修孔		31-2	
3		縄文土器		多糸沈線（網）			
4		壳生土器・壺		重山形文、2本同時		31-6	
5		土製円盤					
6		土製円盤					

第396図 出土遺物 (1)



番号	地区	期位	分類	特徴	登録	写真
1			縄文土器片	多条沈線、摩洁鷺文 L.R		
2~8			縄文土器・深鉢	口縁：斜口入小突起、頸・体部：入組串状文。L.R 縄文	31-1	
9~11			縄文土器・深鉢	口縁：小突起、玉抱き三叉文、帯鷺文、L.R 縄文、体部：ミガキ	31-3	
12			縄文土器	口縁部片、燃糸文		
13			縄文土器	口縁部片、頸部：格条体压线、R燃糸文		
14			縄文土器	体底片、斜口状燃糸文		
15			弥生土器	口縁部片、口縁部やや肥厚、内外面 L.R 縄文	31-5	
16			弥生土器	底部片、布目痕		

第397図 出土遺物 (2)



番号	地区	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	登録	写真
1			石 核	(13.4)	(9.8)	2.3		安山岩			31-7
2	25列	8.2	石 核	2.9	1.2	0.6			アスファルト軟性型	K21	31-8
3			石 核	4.85	2.1	0.9		矽質頁岩			31-9
4			不定形石器	3.25	2.2	0.8		珪質頁岩			

第398図 出土遺物 (3)

V まとめ

1. 下ノ内浦遺跡・山口遺跡は、名取川とその北岸の支流である笊川とによって形成された自然堤防とその後背湿地とに立地し、互いに隣接している。

2. 下ノ内浦遺跡

○縄文時代早期前葉の住居跡2軒、土坑9基、小豎穴状遺構1基を検出した。土坑の内6基は「落し穴」と考えられる。遺物には、日計式の押型文土器、黒曜岩製局部磨製石器がある。

○縄文時代後期前葉の墓域を発見した。墓域は、配石9基、集石2基、土壙約130基、埋設土器遺構5基で構成されている。これらの遺構を覆う状態で遺物包含層が検出され、南境式期の遺物が多量に出土した。それにはいくつかのブロック（遺物集中地点）があり、ブロック内の土器群の内容変化から、南境式後半の土器変遷がある程度把握できた。

○弥生時代後期の豎穴遺構1基、土壙墓1基、土器棺墓3基が検出された。土壙墓には石窓2点、大型蛤刀石斧1点が副葬されていた。これらの遺構は集中してはいないが、墓域を形成していたと考えられる。遺物包含層からは十三塚式から天王山式期の遺物が出土している。

○古代の住居跡が12軒、掘立柱建物跡4棟検出された。住居跡は7世紀末から8世紀初め頃1軒、奈良時代3軒、奈良～平安時代1軒、平安時代4軒、不明3軒である。

○弥生時代後期から古墳時代前半の時期と考えられる水田跡が検出された。溝跡4条、畦畔3条で構成されている。また、古墳時代から平安時代初め頃と考えられる、畠跡に関連する小溝状遺構群が検出されている。

3. 山口遺跡

○縄文時代後期から晩期にかけての自然流路が7条検出された。

○弥生時代後期以前かそれに近接した時期の溝跡1条、水田跡が検出された。水田跡は擬似畦畔と杭列で構成されている。

引用参考文献

- 相原淳一：1982 「概説 日計式土器群の成立と解体」『赤い本』創刊号 1～15
相原淳一：1988 「東北地方の押型文文化をめぐって」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題』帝塚山考古学研究所 1～151
赤沢威他：1980 『日本の旧石器』立風書房
赤村教育委員会：1985 『合田遺跡』赤村文化財調査報告書第1集
秋元信夫：1986 『大瀬理状列石周辺発掘調査報告書（2）』鹿角市文化財調査資料31

- 阿部義平：1983 「配石」「繩文文化の研究」9 雄山閣 32～45
- 阿部博志他：1990 「羽林遺跡」宮城県文化財報告書第132集
- 甘木 市：1984 「6 平冢栗山遺跡」「甘木 市史資料考古編」
- 伊東信雄：1954 「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」「古代学」3－2
- 伊東信雄：1957 「古代史 第1章 繩文式文化時代 第2章 弥生式文化時代」「宮城県史」1
- 伊東信雄・伊藤玄三：1965 「崎山圓洞窟遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第8集
- 伊東信雄編：1981 「宮城県史」34 資料集V 考古資料
- 氏家和典：1957 「東北土器の型式分類とその編年」「歴史」14
- 恵美昌之：1982 「昭和56年度遺跡発掘調査報告 清水遺跡神明闇地区」名古屋市文化財調査報告第11集
- 大越道正他：1990 「能登遺跡」福島県文化財調査報告書第242集
- 太田昭夫：1990 「宮城県における天王山式期の現状と課題」「天王山式期をめぐっての検討会記録集」弥生時代研究会
- 太田昭夫他：1991 「宮沢遺跡－第30次調査報告書I－」仙台市文化財調査報告書第149集
- 小野寺祥一郎：1980 「金取遺跡」宮城県文化財調査報告書第70集
- 小山正忠・竹原秀雄：1967 「新版標準土色軸」日本色研事業株式会社
- 加藤道男：1989 「宮城県における上師器研究の現状」「考古学論叢II」芹沢良介先生還暦記念会 277～329
- 加藤道男他：1984 「東北自動車道遺跡調査報告書IX」（二戸遺跡）宮城県文化財調査報告書第99集
- 兼田芳宏：1988 「青森県仙台市下ノ内浦遺跡」埋蔵文化財発掘調査研究所第10集 下ノ内浦遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
- 神成浩志：1995 「下ノ内浦遺跡－第5次調査－」仙台市文化財調査報告書第202集
- 工藤信一郎：1994 「北原街道B遺跡」仙台市文化財調査報告書第181集
- 小井川尚夫：1980 「宮戸鳥台開貝塚出土の縄文後期・晩期初頭の土器」「宮城史学」7 9～21
- 後藤勝彦：1974 「繩文後期宮戸I b式周辺の吟味」「東北の考古・歴史論集」平重道先生還暦記念会 79～329
- 後藤勝彦：1981 「繩文後期の土器 東北地方」「繩文土器大成」3後期 講談社 139～143
- 駒井和愛：1959 「音江」
- 斎藤忠他：1953 「大湯町櫛状列石」文化財保護委員会
- 斎野裕彦：1990 「石包丁を副葬する墓跡」「天王山式期をめぐっての検討会 記録集」弥生時代研究会 92～93
- 佐々木和博他：1985 「II. 色麻古墳群」「色麻町香ノ木遺跡 色麻古墳群－昭和59年宮城県宮園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書－」宮城県文化財調査報告書第103集
- 佐藤甲二：1993 「下ノ内浦遺跡－第4次調査－」仙台市文化財調査報告書第173集
- 佐藤信行：1990 「天王山式土器の成立と展開－いわゆる交互判突文の系譜を中心に－」「天王山式期をめぐっての検討会記録集」弥生時代研究会
- 佐藤廣史：1988 「小柴川遺跡縄文時代遺構編II－石器編－」「大柴川・小柴川遺跡」宮城県文化財調査報告書第126集
- 佐藤洋：1981 「山口遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第33集
- 佐藤洋：1987 「六反田遺跡III」仙台市文化財報告書第102集
- 森原信彦他：1982 「仙台市高連鉄道関係調査概報I」仙台市文化財報告書第40集

- 篠原信彦他：1983 「仙台市高速鉄道関係調査概報II」仙台市文化財報告書第56集
- 篠原信彦他：1984 「仙台市高速鉄道関係調査概報III」仙台市文化財報告書第69集
- 篠原信彦他：1985 「仙台市高速鉄道関係調査概報IV」仙台市文化財報告書第82集
- 篠原信彦他：1986 「仙台市高速鉄道関係調査概報V」仙台市文化財報告書第89集
- 篠原信彦他：1987 「仙台市高速鉄道関係調査概報VI」仙台市文化財報告書第101集
- 篠原信彦・古岡恭平：1990 「下ノ内遺跡 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書II」仙台市文化財報告書第136集
- 主浜光朗：1995 「大野田遺跡」「仙台市史特別編2 考古資料」仙台市 134~137
- 庄子貞雄・山田一郎：1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」「宮城県多賀城遺跡調査研究所年報1979」
- 白鳥良一：1980 「多賀城跡出土土器の変遷」「紀要VII」宮城県多賀城跡調査研究所
- 須藤隆・阿子島香：1984 「5. 下ノ内浦遺跡 S K 2 土壙出土の石包丁」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」仙台市文化財調査報告書第69集 59~66
- 芹沢長介編：1979 『塩山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
- 竹島国基編：『桜井』竹島コレクション考古図録第3集
- 田中耕作：1985 「所謂『三十船場式土器』の成立について」「信濃」37~4
- 田中耕作：1989 「三十船場式土器様式」「縄文土器大観」4 小学館
- 田中則和：1981 「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第34集
- 田中則和他：1984 「山口遺跡II」仙台市文化財調査報告書第61集
- 土岐山武：1982 「松田遺跡」「仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書II」宮城県文化財調査報告書第88集
- 仲田茂司：1986 「福島県における配石遺構について」「北奥古代文化」17 北奥古代文化研究会
- 仲田茂司：1989 「西方前遺跡III 縄文時代中期末葉から後期前葉の集落跡 図版篇」三春町文化財調査報告書第16集三春ダム関連遺跡発掘調査報告書V
- 仲田茂司：1992 「西方前遺跡III 縄文時代中期末葉から後期前葉の集落跡 本文篇」三春町文化財調査報告書第16集三春ダム関連遺跡発掘調査報告書V
- 中村良幸：1979 「立石遺跡」大迫町埋蔵文化財報告第3集
- 中村良幸：1986 「岩手県の配石遺構」「北奥古代文化」17 北奥古代文化研究会
- 成田滋彦：1989 「入江・十腰内式上器様式」「縄文土器大観」4 小学館
- 丹羽茂：1972 「松田遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第25集
- 平林彰他：1993 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11-明和町内-北林遺跡」(財)長野県埋蔵文化財発掘調査報告書14
- 福岡県教育委員会：1971 「日上遺跡」福岡県文化財調査報告書第48集
- 福島雅儀他：1989 「柴原A遺跡(第1次)」「三春ダム関連遺跡発掘調査報告書2」福島県文化財調査報告書第217集
- 藤巻正信他：1991 「関越自動車道関係発掘調査報告書 城之原遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集
- 古川一明：1983 「(1)色麻古墳群」「宮城県宮城県墳墓整備等関連遺跡群分布調査報告書(昭和57年度)」宮城

県文化財調査報告書第95集

- 古川知明・石原正敏：1986 「付編3 アメリカ式石器に関する一考察」『六地山遺跡』新潟市文化財調査報告書
- 本間宏：1985 「東北地方北部における縄文時代後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』1 よねしろ考古研究会 9～24
- 本間宏：1990 「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会 215～270
- 馬目順一：1968 「網貝塚第四地点発見の場之内I式期土器の考察」「小名浜」いわき市教育委員会
- 馬目順一：1970 「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文土器について」「考古」16 舟城高校史学研究部
- 馬目順一：1975 「いわゆる「網貝塚C地区」の土器について」「考古」19 舟城高校史学研究部
- 島田順一：1982 「南東北」『シンポジウム場之内土器資料集』市川考古博物館
- 馬目順一他：1975 「大畠貝塚調査報告書」いわき市教育委員会
- 山内幹夫他：1985 「荒小路遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告書19』福島県文化財調査報告書第148集
- 山梨県考古学協会シンポジウム実行委員会：1990 「シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその西期—」」1990年山梨県考古学協会秋季大会資料集
- 山中一郎：1978 「森の宮遺跡出土の石器について」「森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書」難波宮址顕彰会
- 山中一郎：1982 「石器遺物！」～4）』『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書II』
- 山内清男：1937 縄紋土器型式の細別と大別」「先史考古学」1～1
- 山内清男：1940 「日本先史土器図鑑」第VI編
- 山内清男：1964 「日本原始美術1 純文式土器」講談社
- 吉岡恭平：1986 「宮城県の配石遺跡」『北奥古代文化』17 北奥古代文化研究会
- 吉岡恭平・篠原信彦：1989 「宮城県の配石遺跡」『宮城県の配石遺跡』『北奥古代文化』17 北奥古代文化研究会
- 渡部紀：1988 「下ノ内浦遺跡—みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書—」仙台市文化財報告書第115集
- 渡部紀：1995 「伊古山遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書III』仙台市文化財報告書第193集
- 渡部紀：1995 「六反田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書IV』仙台市文化財報告書第199集

写 真 図 版



写真1 遺跡周辺の空中写真 (1983年5月撮影)

写真2 遠野周辺の空中写真（1965年撮影）



下ノ内浦遺跡

写真3 調査区遠景
(南から)



写真4 I区東壁断面
(E 4～6付近)

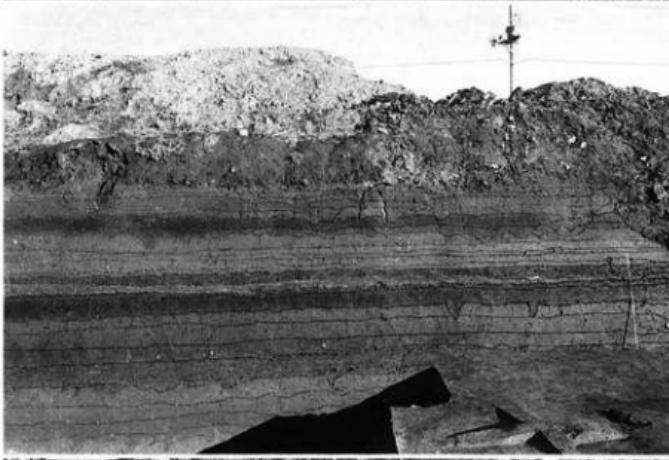


写真5 III区東壁断面
(E21、22付近)



写真 6 II区西壁断面
(A 6・7付近)

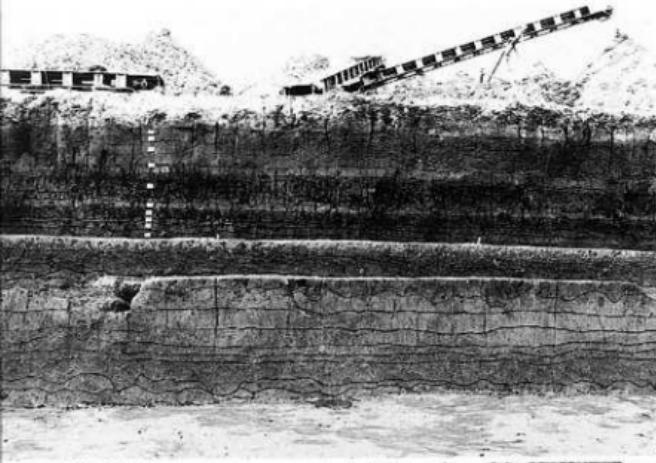


写真 7 III区西壁断面
(A16・17付近)

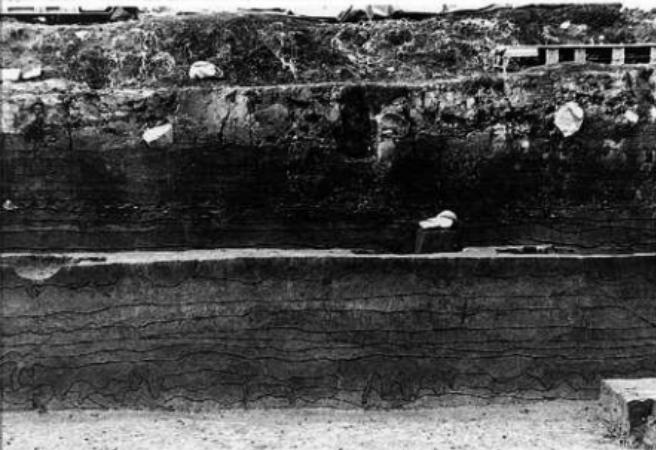


写真 8 IV区南東壁断面

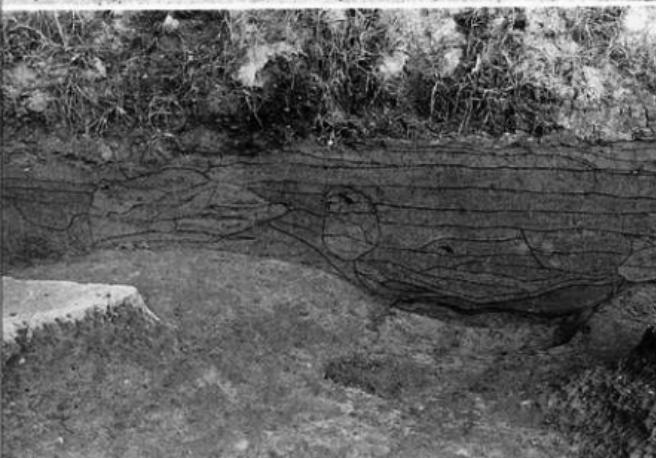


写真9 II区 B、C10、11
深掘南壁

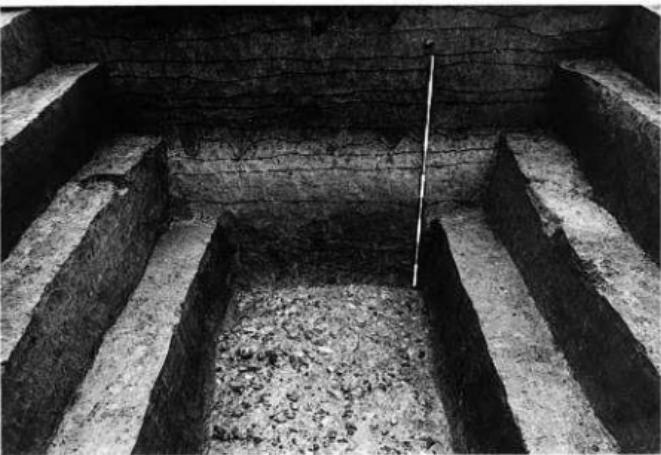


写真10 III区 C26
深掘北壁

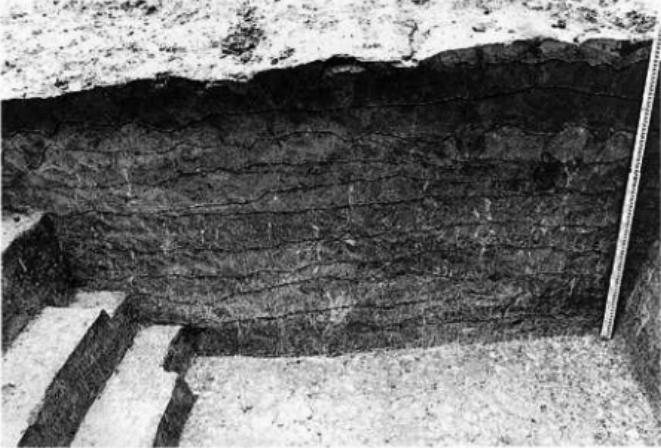


写真11 II区 3層水田跡と
SD 1(南から)



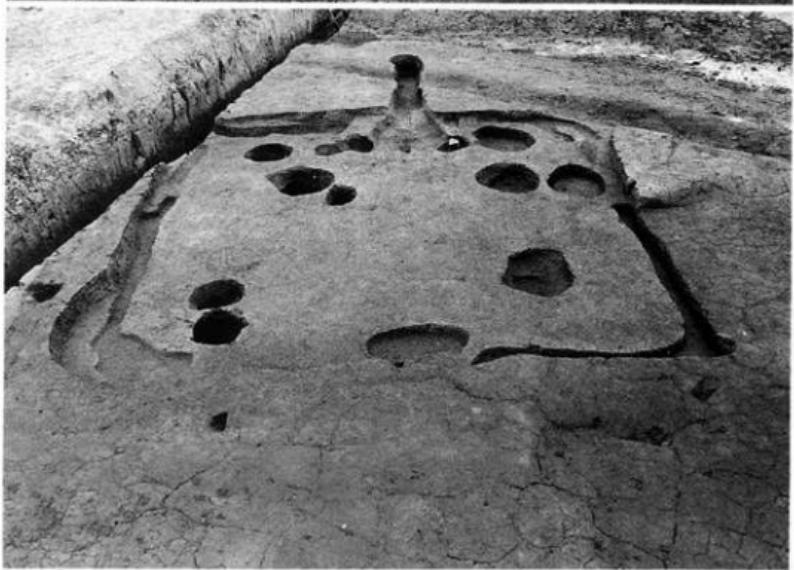


写真12 III・IV区5層上面遺構確認状況(北から)

写真13 SI 1 完掘状況(南から)



写真14 SI 1・2

1. SI 1カマド確認状況(北から)
2. SI 1カマド(南から)
3. SI 1P 3断面(西から)
4. SI 1土器出土状況
5. SI 2完掘状況(南から)

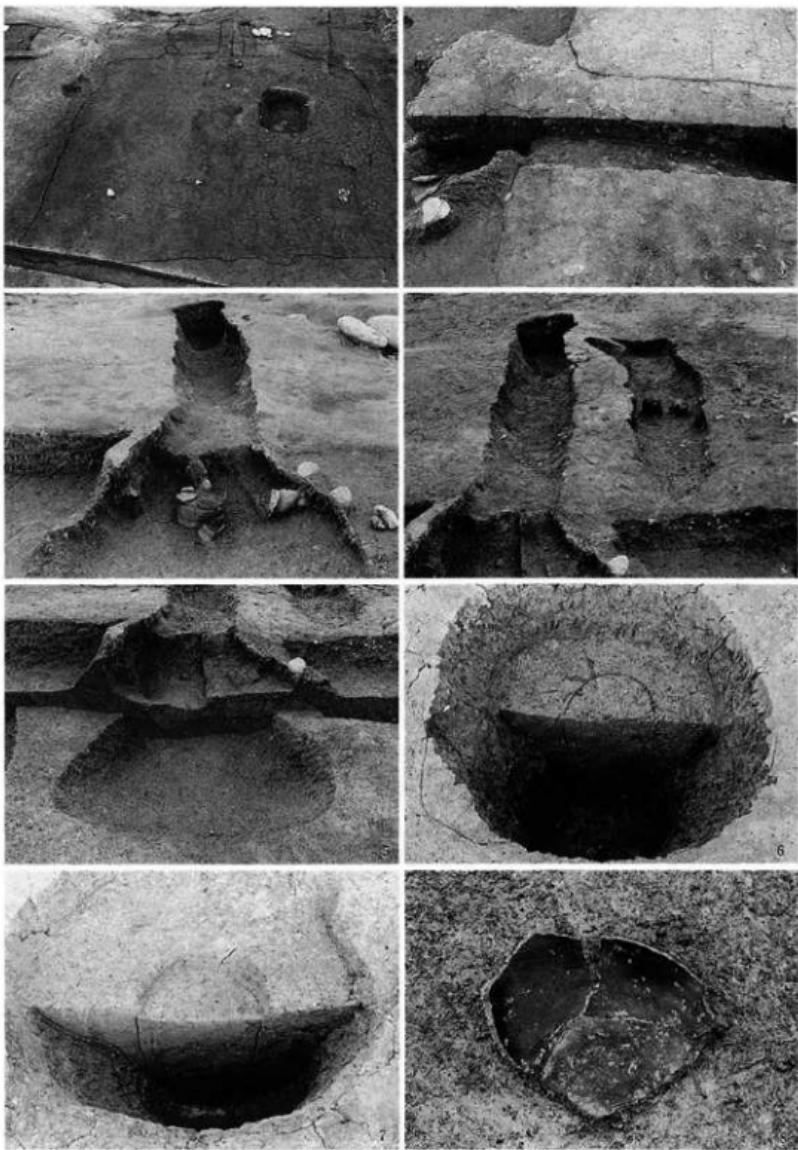


写真15 SI 2

1. SI 2確認状況(南から)
2. SI 2煙道断面(東から)
3. SI 2カマド(南から)
4. SI 2カマド(南から)
5. SI 2カマド掘り方(南から)
6. SI 2 P 2断面(東から)
7. SI 2 P 3断面(東から)
8. SI 2出土状況

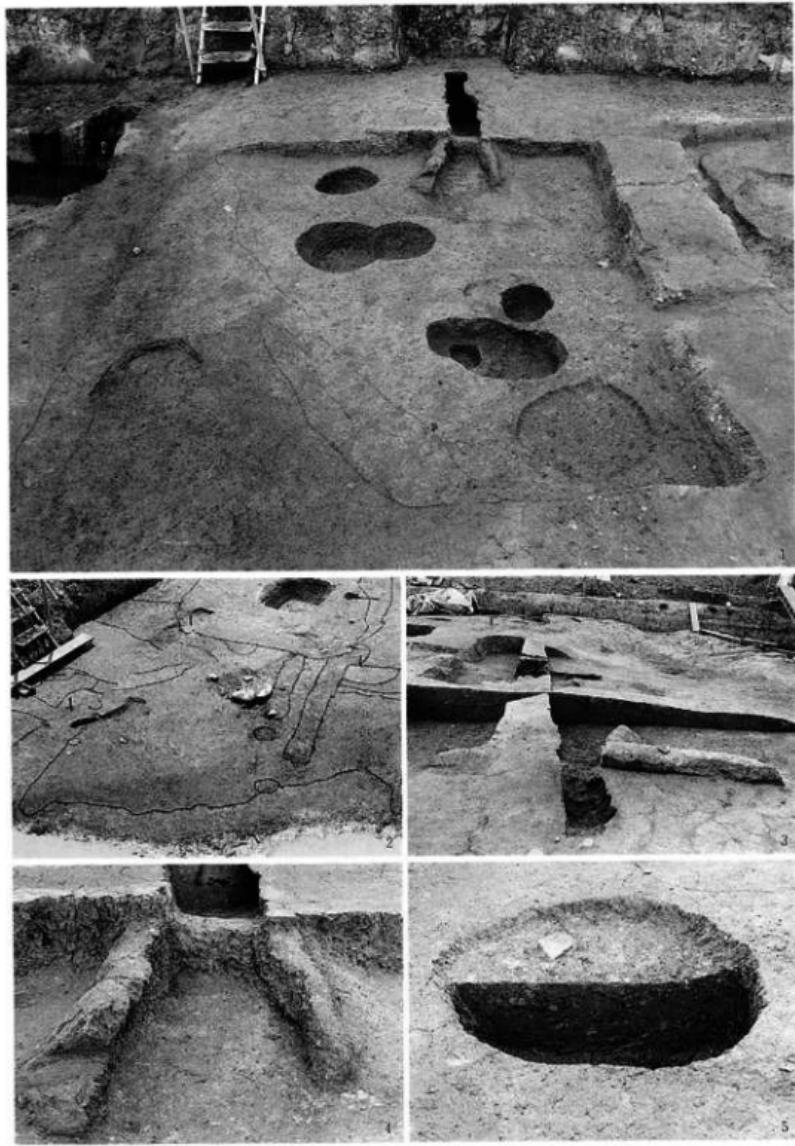


写真16 SI 3

1. SI 3 ①状況(西から)

2. SI 3 ②状況(北から)

4. SI 3 ④(西から)

3. SI 3 ③断面(東から)

5. SI 3 P 1断面(北から)

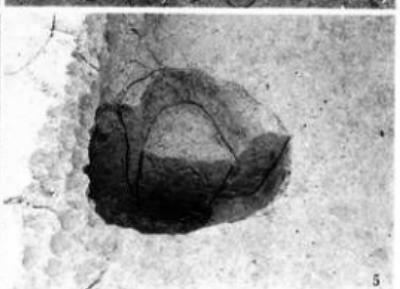


写真17 SI 4

1. SI 4 完掘状況(南から)

2. SI 4 断面(東から)

4. SI 4 遺物出土状況から(南から)

3. SI 4 カマド(南から)

5. SI 4 P 2 断面(内から)

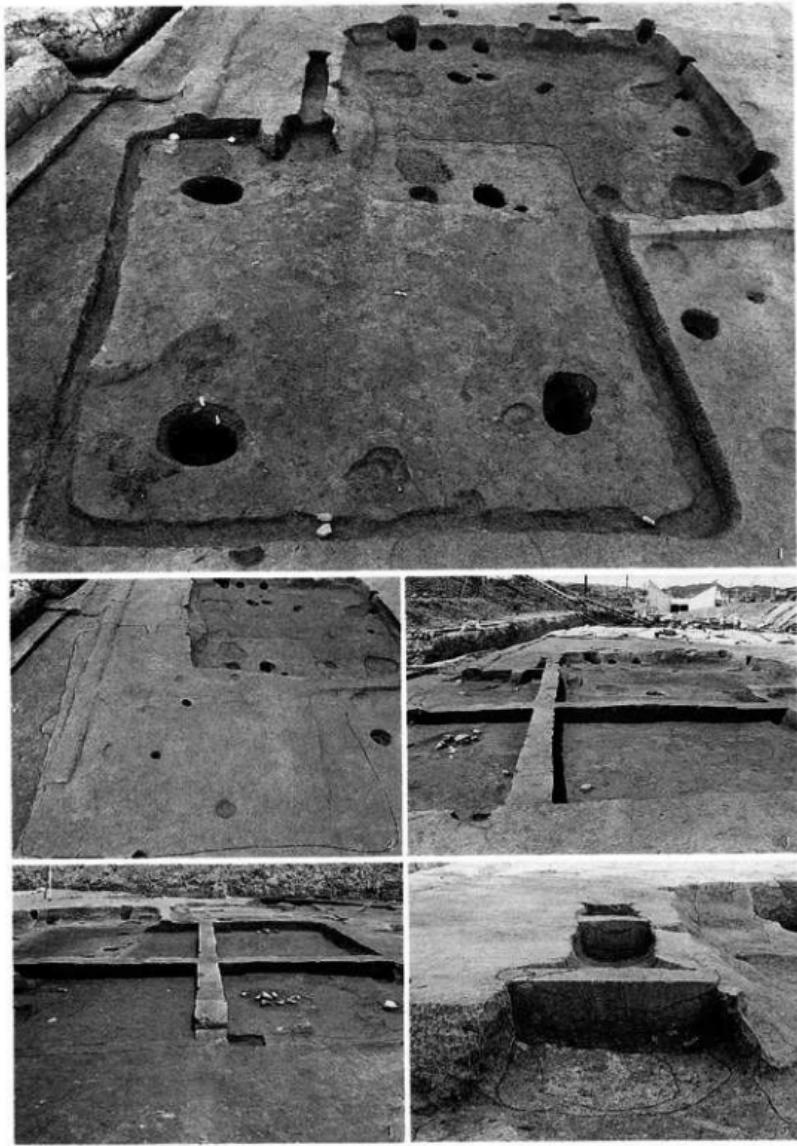


写真18 SI 5

1. SI 5 完整状況(南から)
2. SI 5 確認状況(南から)
3. SI 5 断面(南から)
4. SI 5 断面(西から)
5. SI カマド断面(南から)

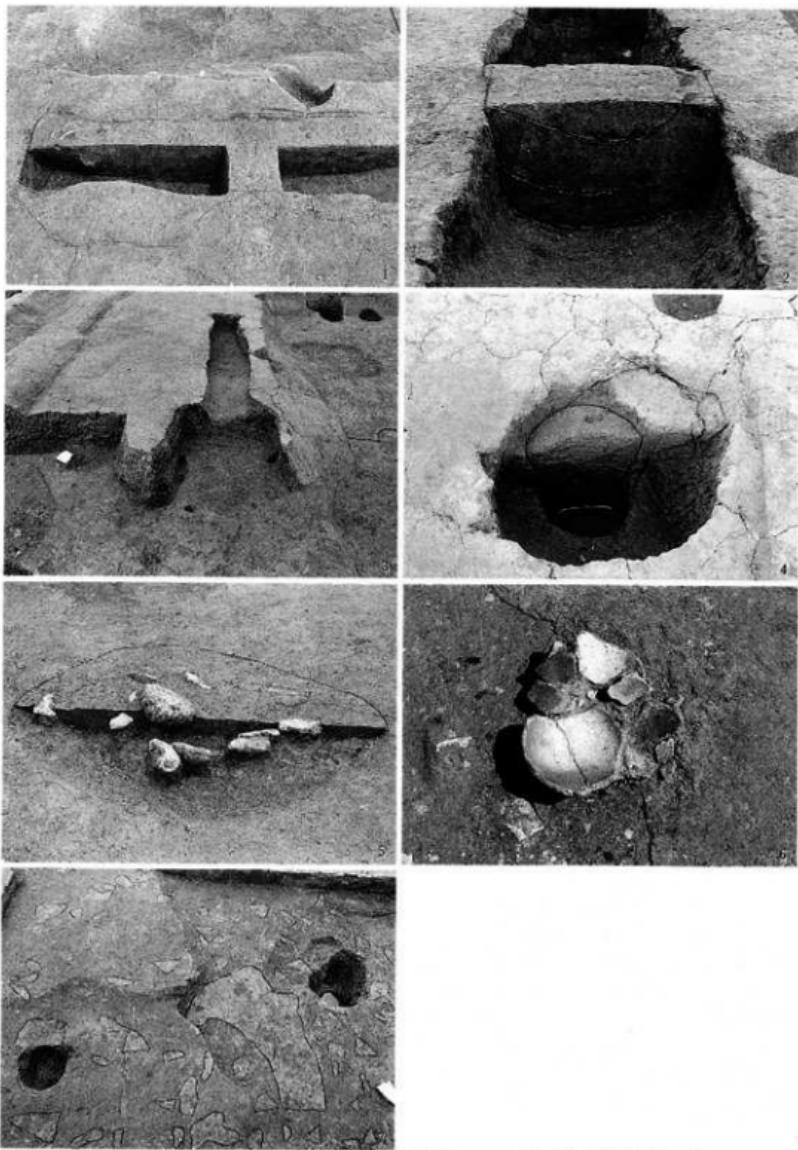


写真19 SI 5

1. SI 5 横道断面(西から)

3. SI 5 カマド(南から)

5. SI 5 P 6断面(西から)

7. SI 5 挖り方底面状況(南から)

2. SI 5 横道断面(南から)

4. SI 5 P 1断面(西から)

6. SI 5 土器出土状況

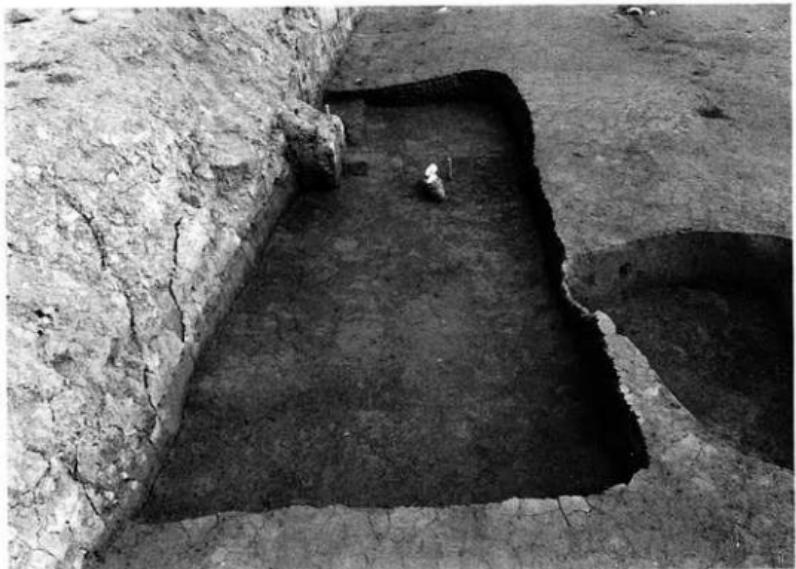


写真20 SI 6、調査風景

1. SI 6 完掘状況(北から)

2. SI 6 断面(西から)

4. SI 6 完掘状況(南から)

3. SI 6 断面(北から)

5. 調査風景



写真21 SI 7

1. SI 7 完整状況(南から)

2. SI 7 破壊状況(北から)

4. SI 7 P1断面(西から)

3. SI 7 断面(北から)

5. SI 7 P15断面(西から)

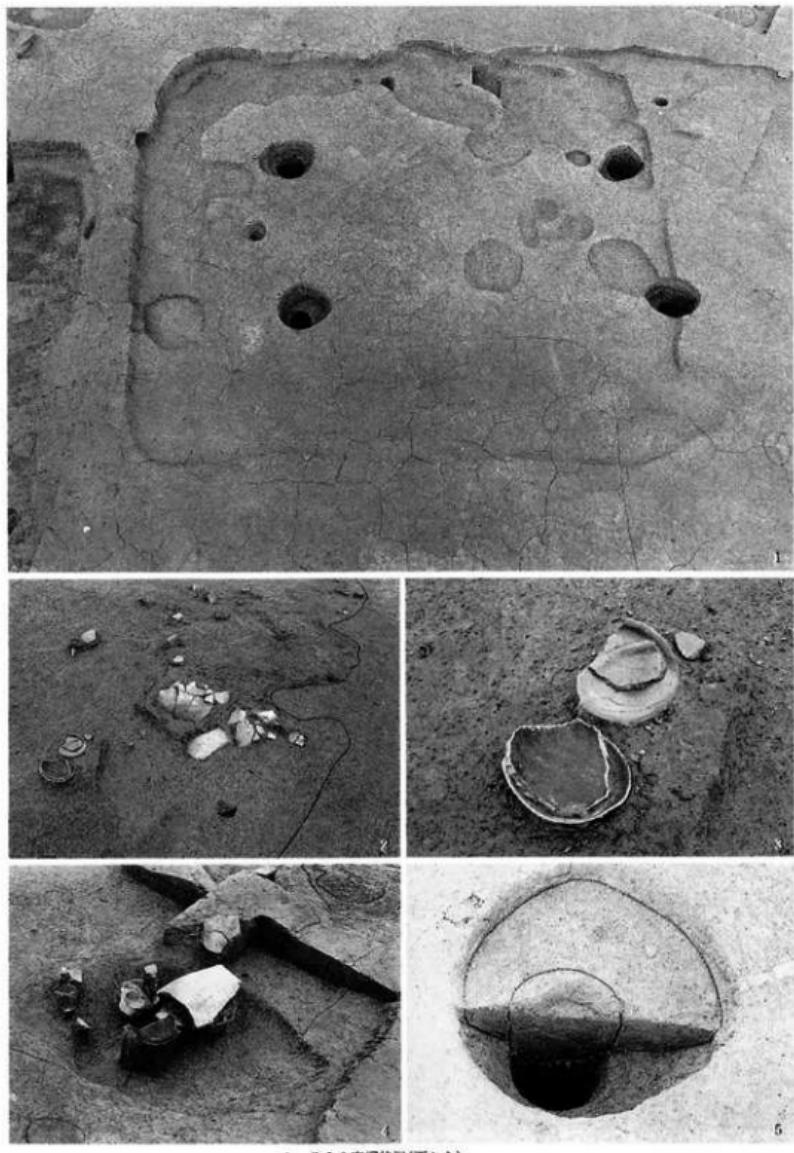


写真22 SI 8

1. SI 8 完掘状況(西から)
2. SI 8 土器出土状況
3. SI 8 土器出土状況
4. SI 8 2号土坑(南から)
5. SI 8 P1断面(西から)



写真23 SI 9 + 10

1. SI 9 完整状況(北西から)
2. SI 10 東面確認状況(南から)



写真24 S I 10、遺構発掘状況

- 1. S I 10確認状況(南から)
- 2. S I 10断面(南西から)
- 3. S I 10カマド断面(南西から)
- 4. S I 10振り方底面状況(南から)
- 5. III、IV区5層上面遺構発掘状況(北から)

5

写真25 SI13・14

1. SI13 完掘状況(南から)
2. SI13 カマド完掘状況
(南から)
3. SI13 柱痕(東から)
4. SI13 遺物出土状況(西から)
5. SI14 完掘状況(南から)



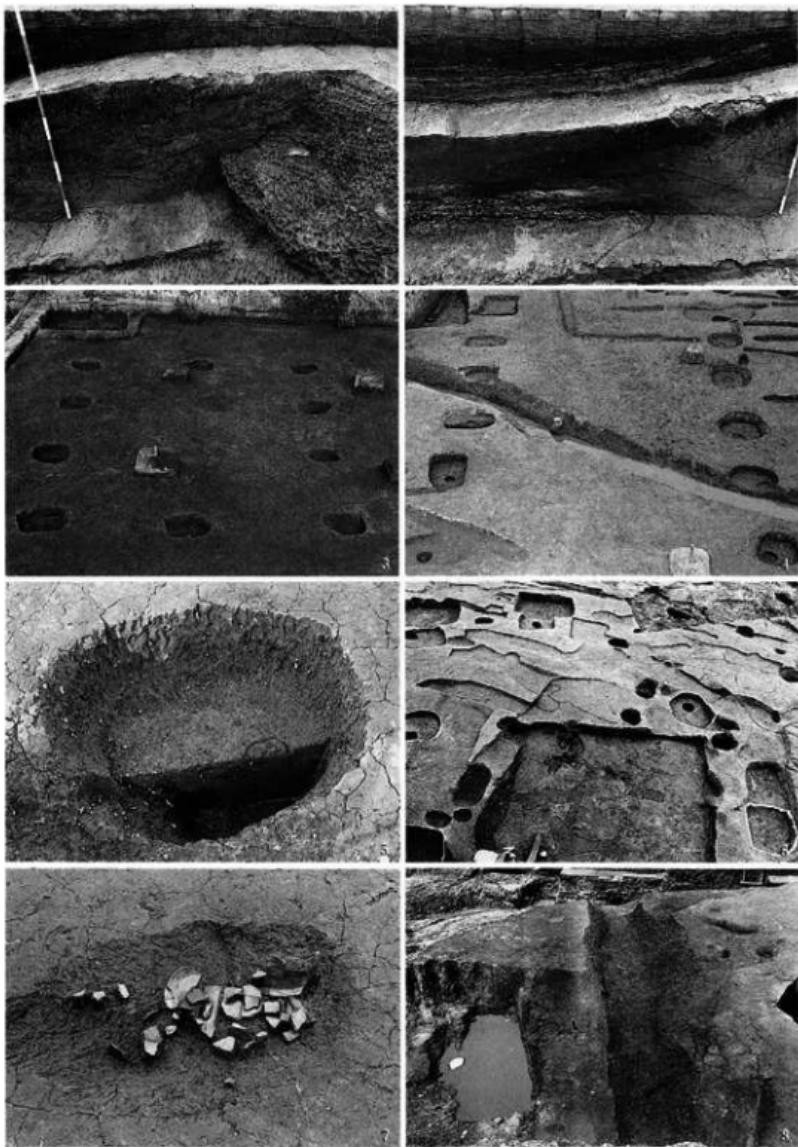


写真26 河川跡・建物跡
土坑・溝跡

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. SR1 | 2. SR1 |
| 3. SB1(西から) | 4. SB2(南から) |
| 5. SB2柱穴断面(北から) | 6. SB4 |
| 7. SK4(内から) | 8. SD6(東から) |

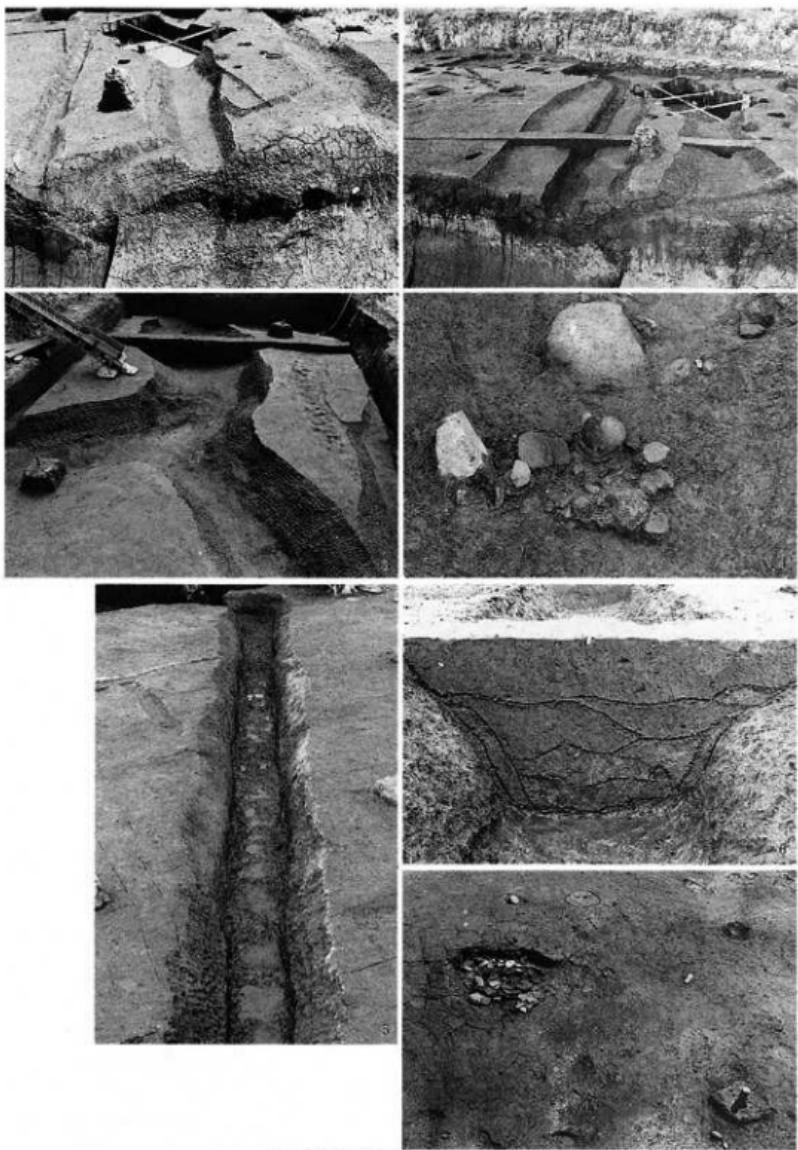


写真27 溝跡

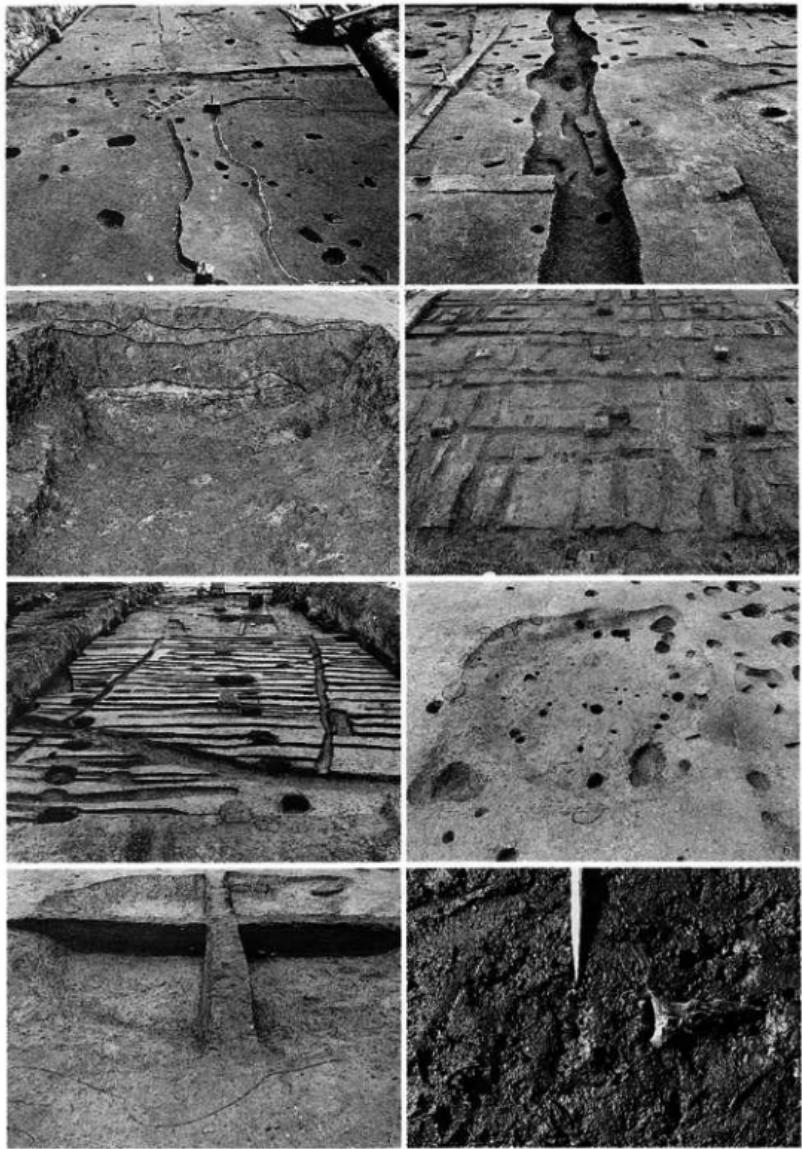


写真28 水田跡・小溝状遺構群
S I 16

1. III区7a-2層水田跡(北から)
2. S D11(西から)
3. S D11断面
4. I区6層小溝群(西から)
5. II区小溝状遺構群(南から)
6. S I 15光掘状況(東から)
7. S I 15断面(東から)
8. S I 15アメリカ式石塼と炭化米

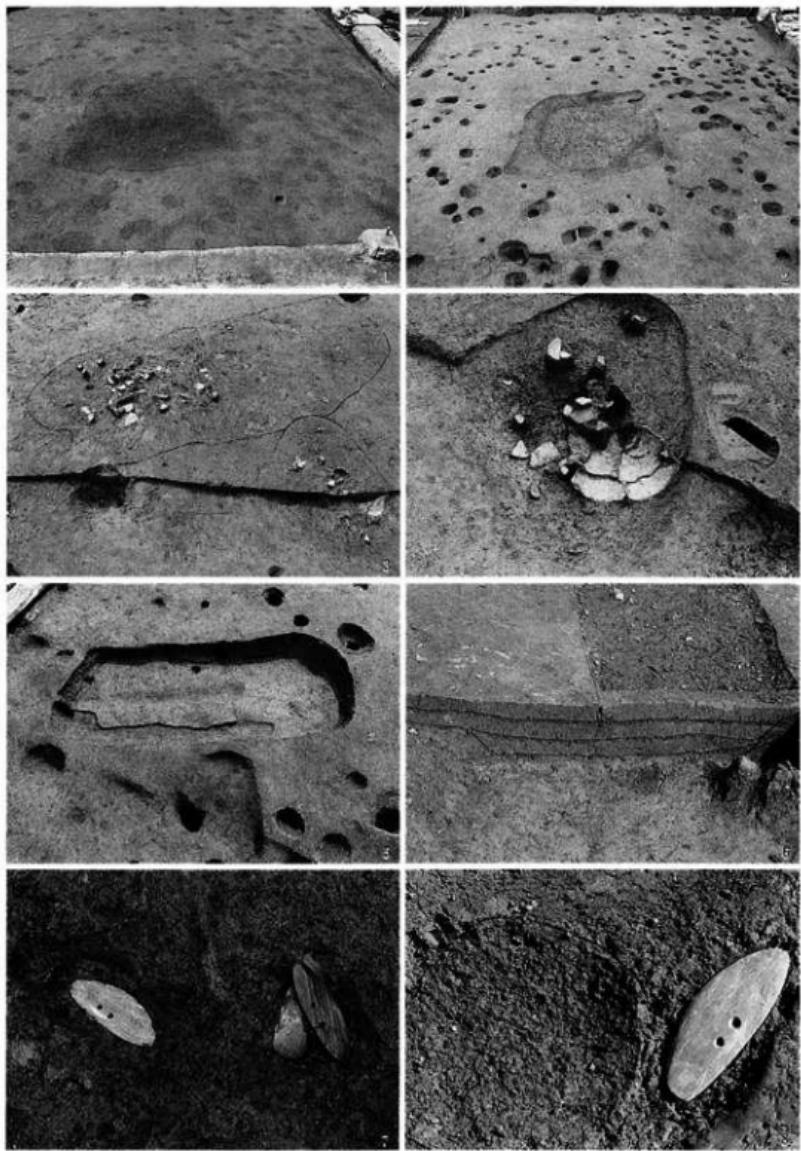


写真29 土壙

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. I区8層上面遺構確認状況(東から) | 2. I区8層上面遺構確認状況(東から) |
| 3. SK 1・2 碓礎状況(北から) | 4. SK 1 遺物出土状況 |
| 5. SK 2 完振状況(北から) | 6. SK 2 遺物状況(西から) |
| 7. SK 2 遺物出土状況(南から) | 8. SK 2 ペンガラと石廻軸 |

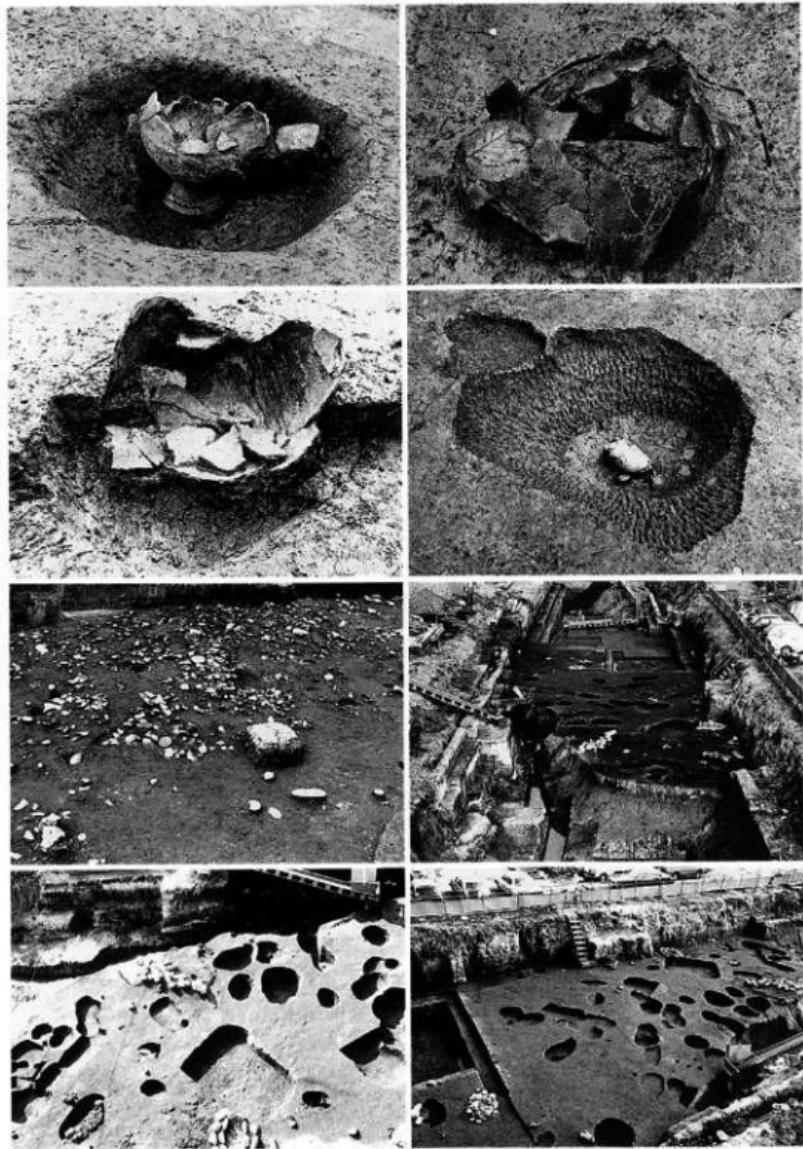


写真30 土壌・埋設土器
配石遺構

1. SK 3 (北から)
2. III区 6号埋設土器
3. III区 6号埋設(東から)
4. SK 8
5. III区11解遺物出土状況(東から)
6. III区配石と土塁群(南から)
7. III区配石と土壤群(東から)
8. III区配石と土壤群(北西から)

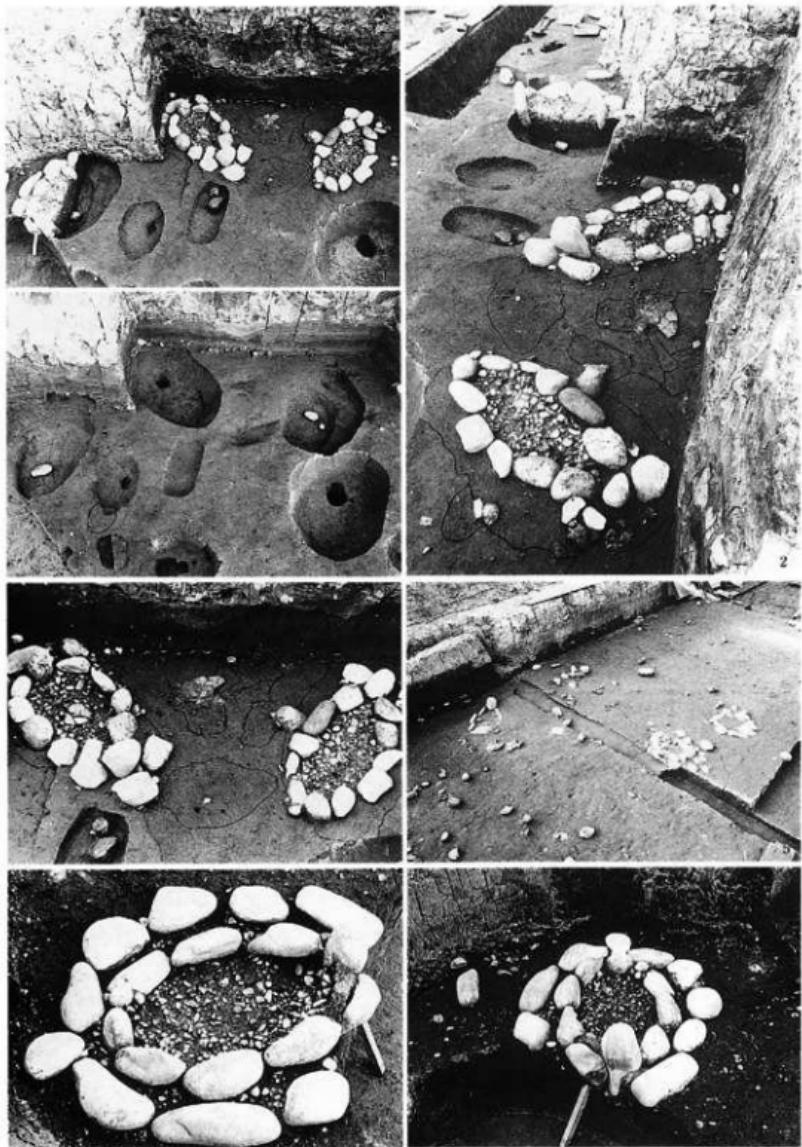


写真31 配石遺構（1）

1. 1・6・8号配石(西から) 2. 6・8号配石(南から)

3. 1・6・7・8号配石完掘状況(西から)

4. 6・8号配石(西から) 5. 2～5号配石(南東から)

6. 1号配石(北から) 7. 1号配石(西から)

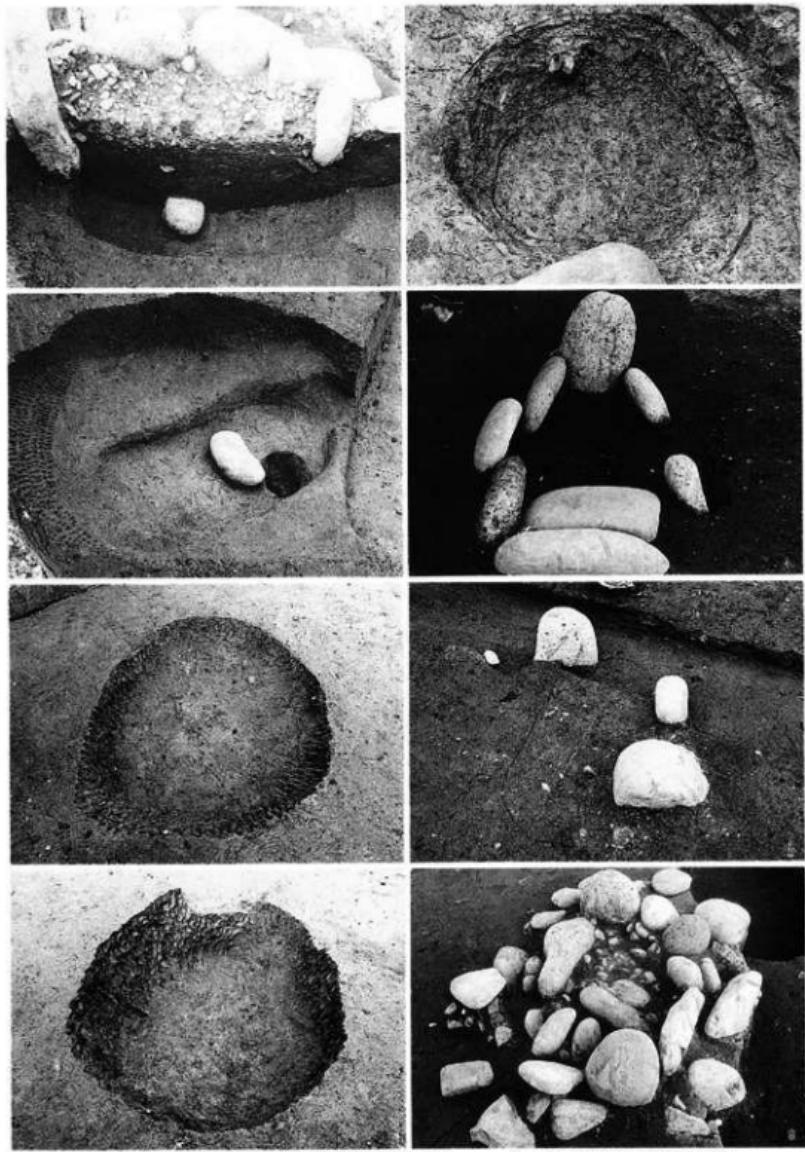


写真32 配石遺構（2）

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 1号配石断面(南から) | 2. 1号配石遺物出土状況(東から) |
| 3. 1号配石光面状況(北から) | 4. 2号配石(東から) |
| 5. 2号配石光面状況(南から) | 6. 3号配石(南から) |
| 7. 3号配石光面状況(南から) | 8. 4号配石(西から) |

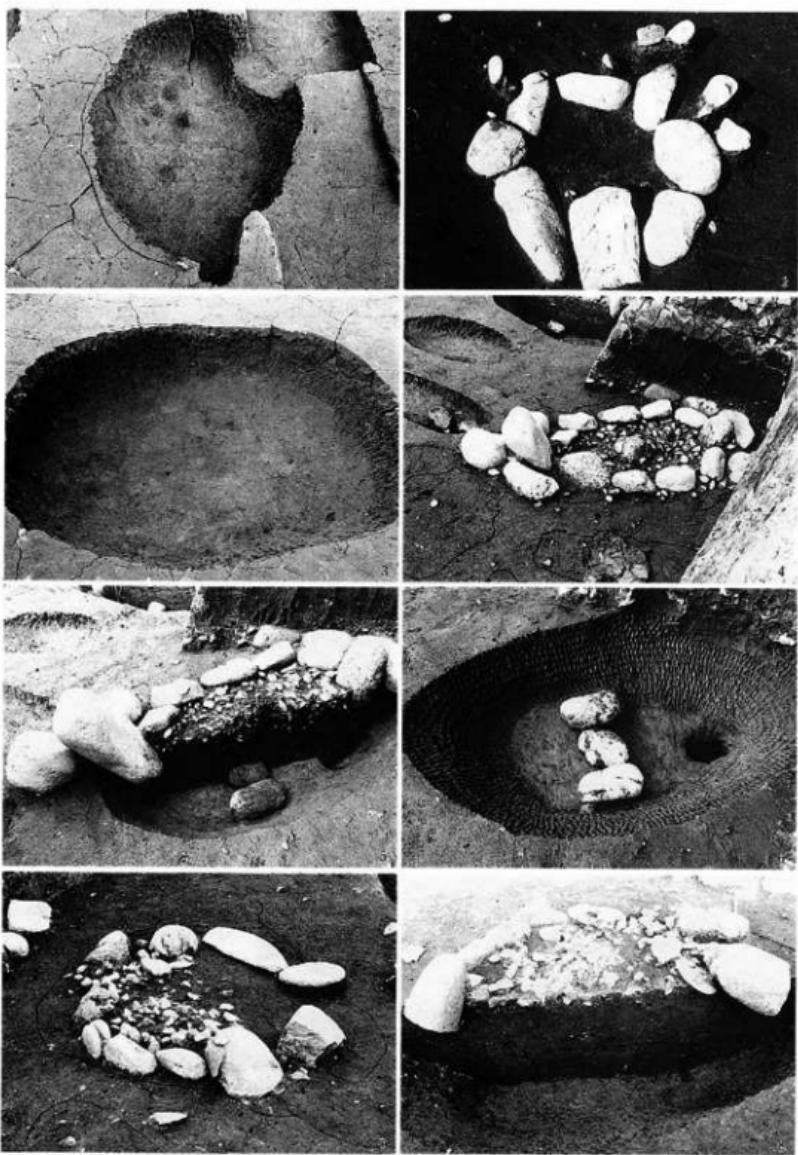


写真33 配石遺構（3）

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 4号配石完掘状況(西から) | 2. 5号配石(東から) |
| 3. 3号配石完掘状況(南から) | 4. 6号配石(南から) |
| 5. 6号配石断面(南から) | 6. 6号配石完掘状況(南東から) |
| 7. 7号配石(北西から) | 8. 7号配石断面(南から) |

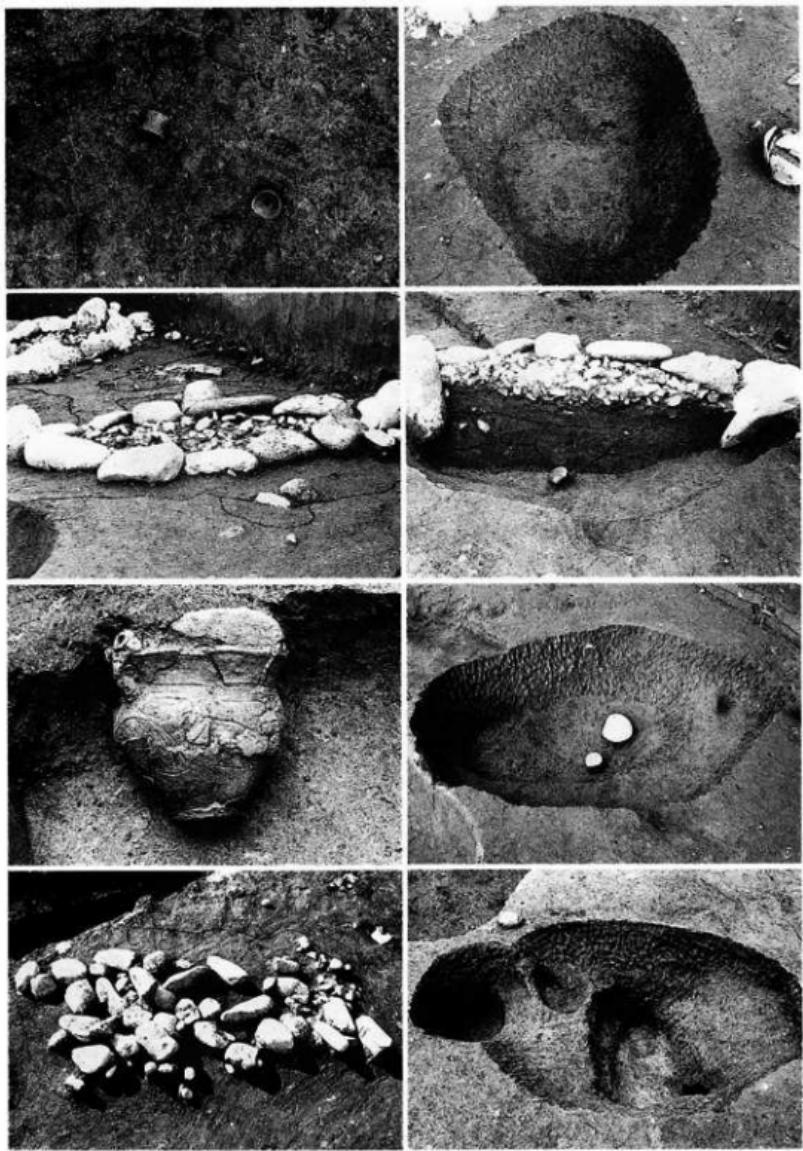


写真34 配石遺構（4）

1. 7号配石遺物出土状況

3. 8号配石(南西から)

5. 8号配石遺物出土状況(北から)

7. 9号配石(東から)

2. 7号配石完掘状況

4. 8号配石所面(南から)

6. 8号配石完掘状況(南から)

8. SK88・89完掘状況(南から)

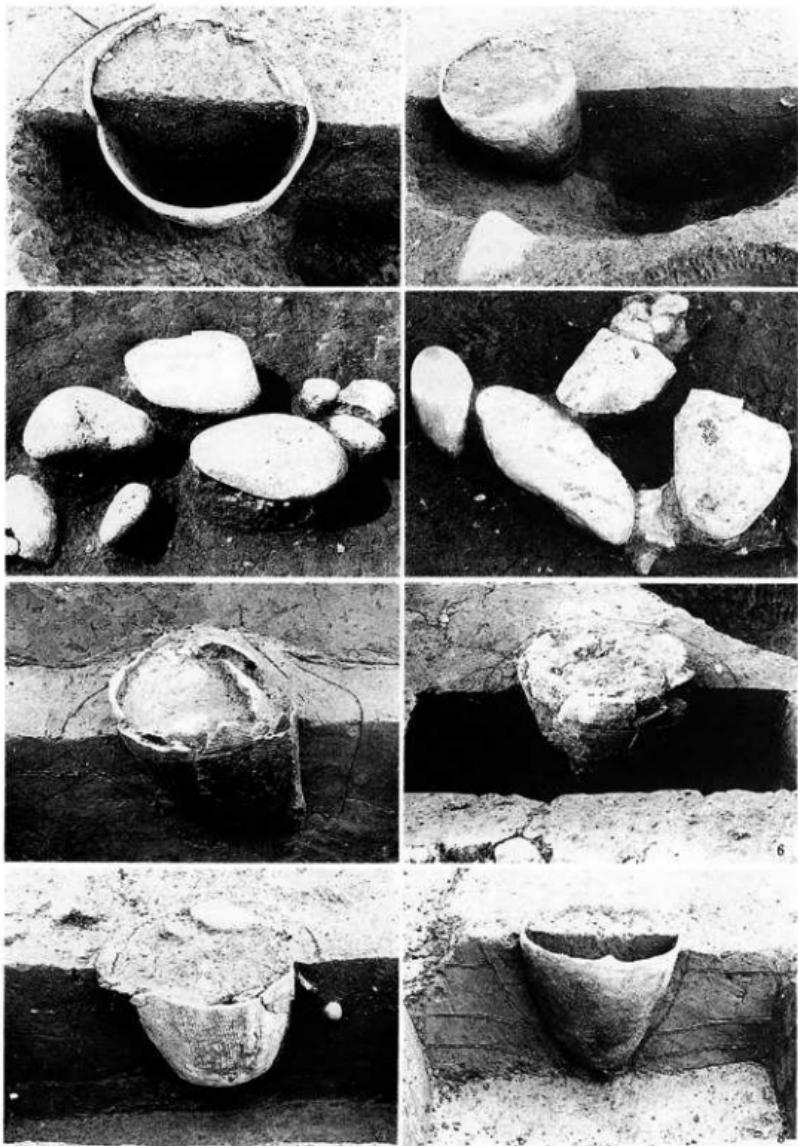


写真35 土壌・埋設土器

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1. SK87埋設土器断面(南から) | 2. SK87断面(南から) |
| 3. 2号集石 | 4. 3号集石 |
| 5. II区1号埋設土器(西から) | 6. 2号埋設土器(南から) |
| 7. 3号埋設土器(南から) | 8. 4号埋設土器(北から) |

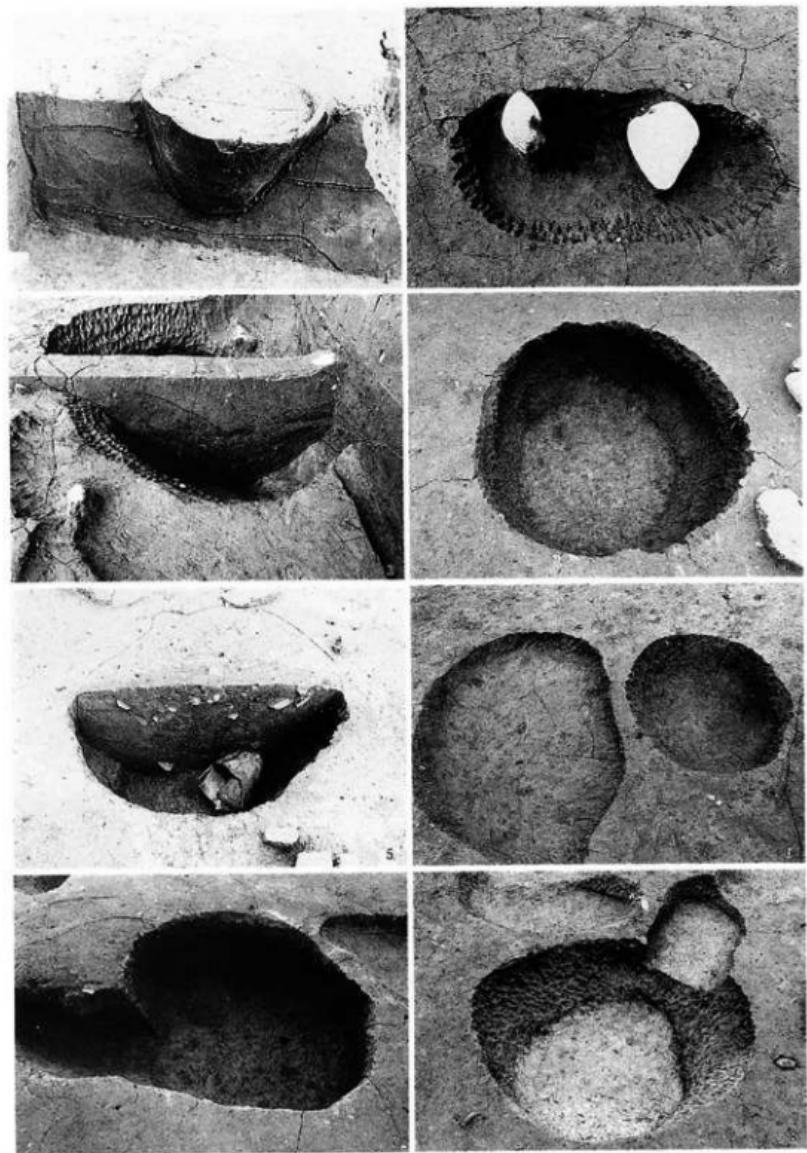


写真36 土壙 (1)

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. 5号埋設土壙(西から) | 2. SK16(東から) |
| 3. SK18(南から) | 4. SK24(東から) |
| 5. SK24断面 | 6. SK25・26(北西から) |
| 7. SK27(北から) | 8. SK31(東から) |

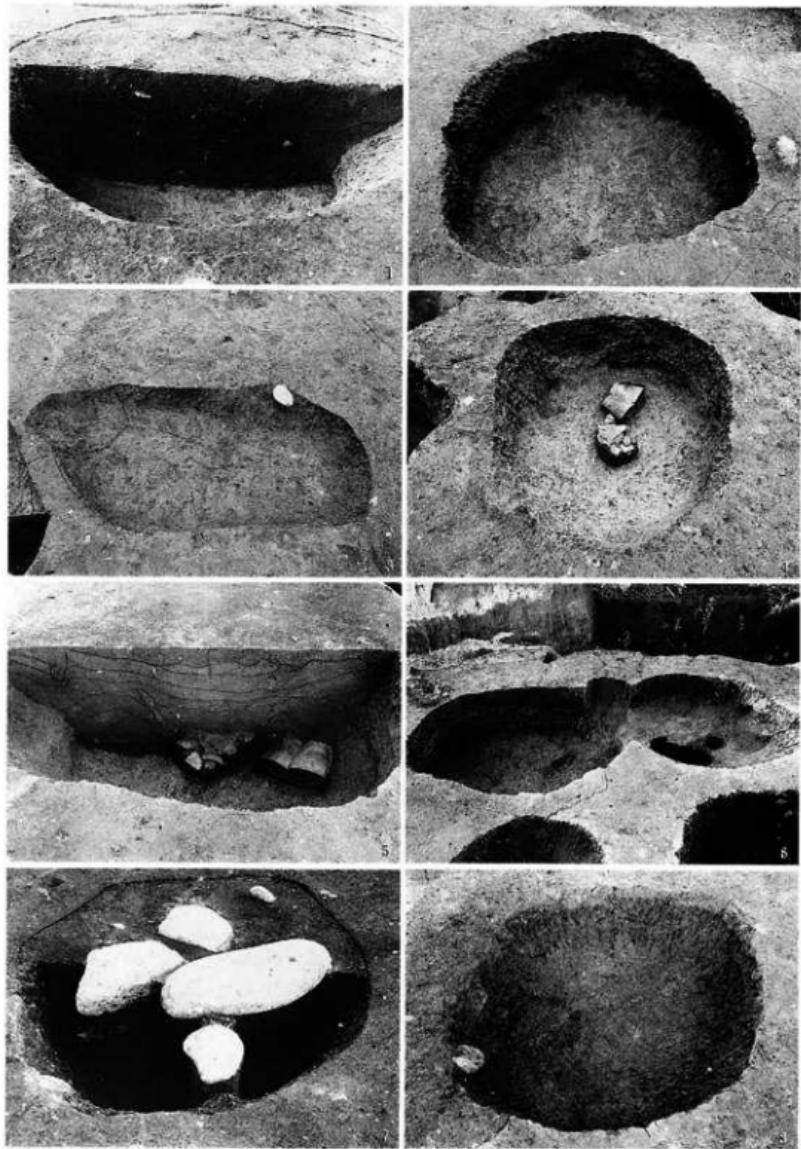


写真37 土壌 (2)

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. SK31断面 | 2. SK35(北から) |
| 3. SK36(北西から) | 4. SK38(東から) |
| 5. SK39, 41, 42(東から) | 6. SK39, 41, 42(東から) |
| 7. SK40 | 8. SK40 |

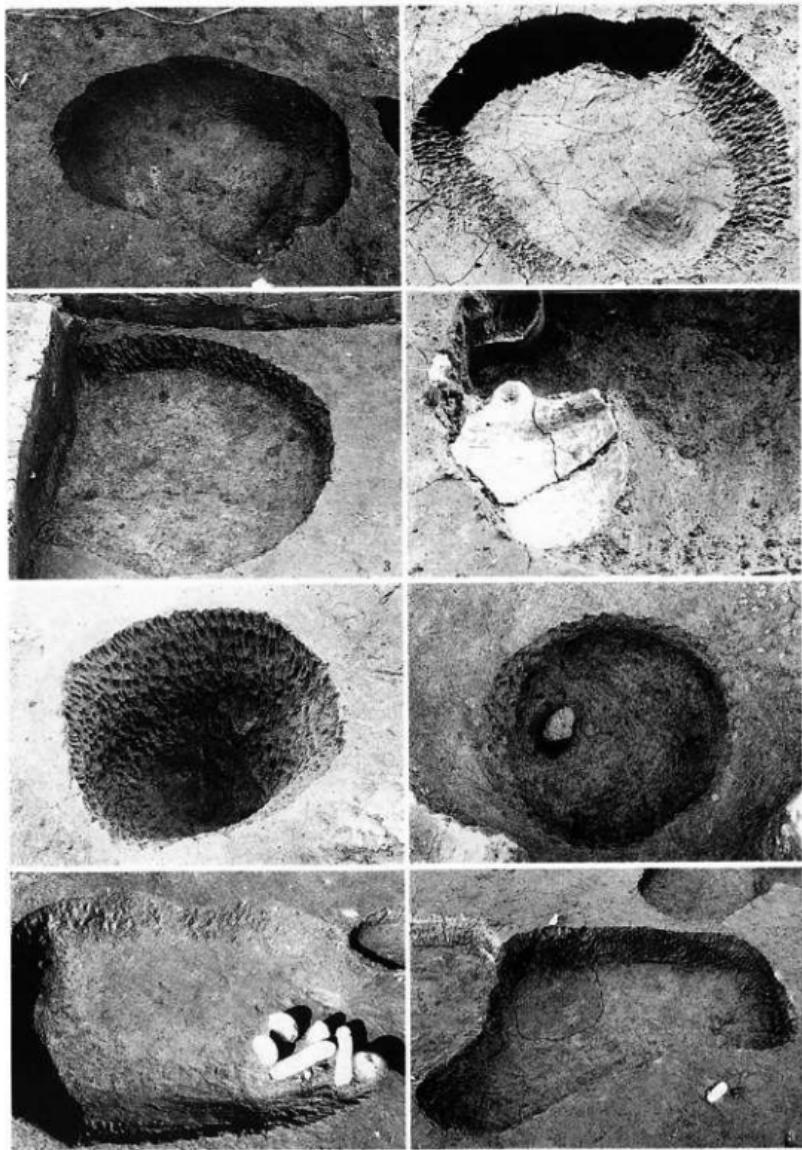


写真38 土壌 (3)

1. SK43(北から)
2. SK47(北東から)
3. SK50(東から)
4. SK53(西から)
5. SK54内ピット光面状況(南西から)
6. SK56内ピット光面状況(南から)
7. SK58
8. SK61(南から)

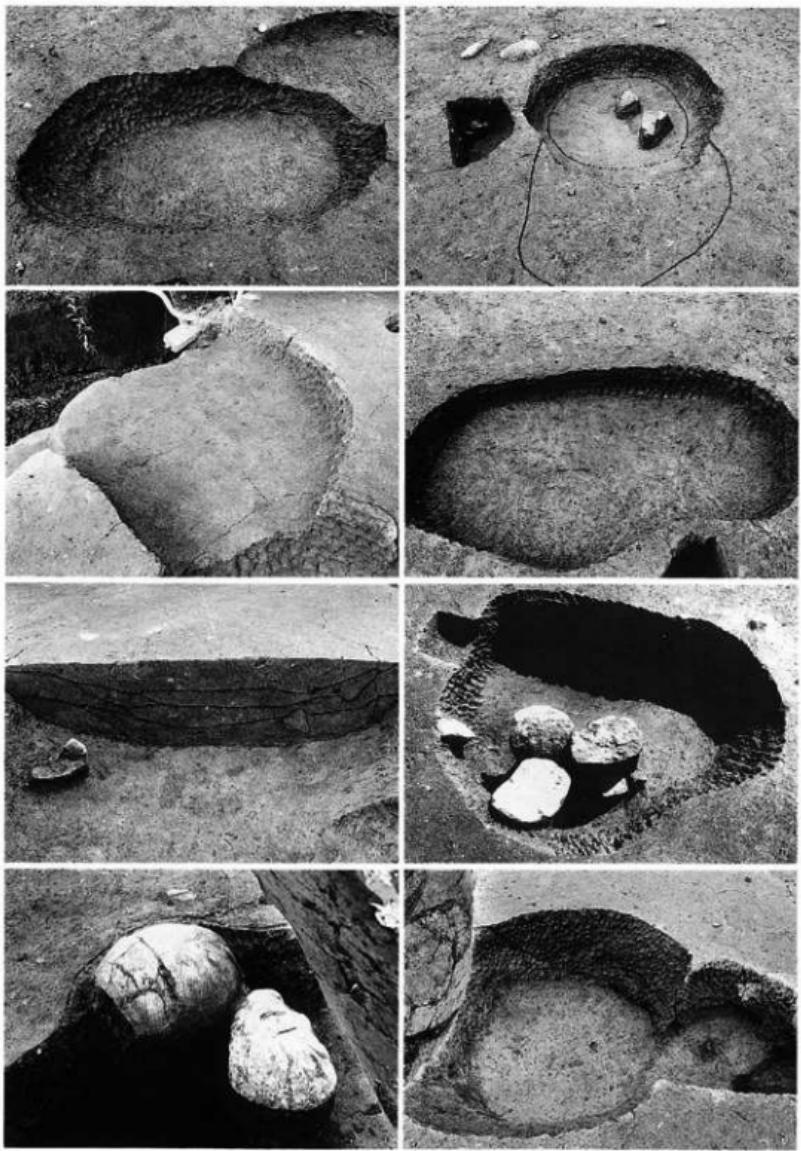


写真39 土壌 (4)

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1. SK62(北から) | 2. SK65(南から) |
| 3. SK67(東から) | 4. SK68(東から) |
| 5. SK70断面(北東から) | 6. SK71 |
| 7. SK73遺物出土状況(北から) | 8. SK73(南から) |

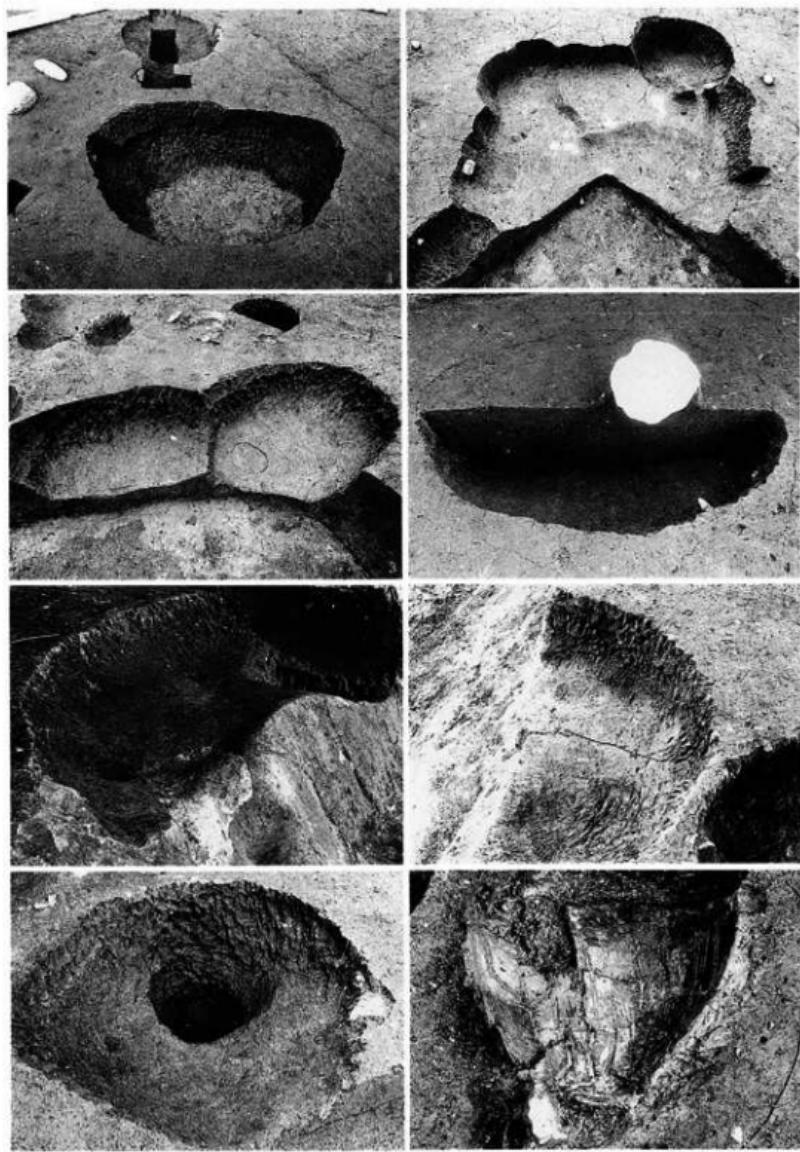


写真40 土壌(5)

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. SK75 | 2. SK76(北から) |
| 3. SK77、78(北東から) | 4. SK79 |
| 5. SK81(西から) | 6. SK82(東から) |
| 7. SK90(東から) | 8. SK92遺物出土状況(西から) |

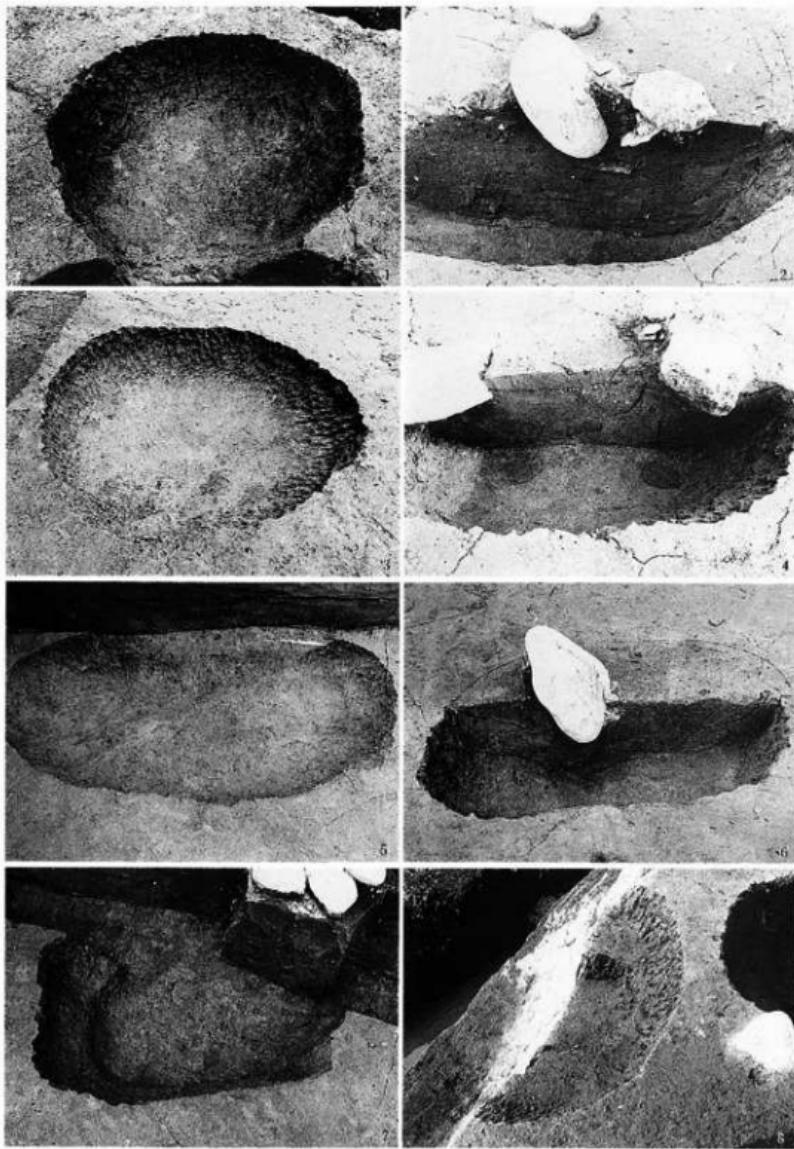


写真41 土壌 (6)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. SK92(北から) | 2. SK93 |
| 3. SK95(南から) | 4. SK96 |
| 5. SK101(東から) | 6. SK102 |
| 7. SK103(東から) | 8. SK112(南から) |

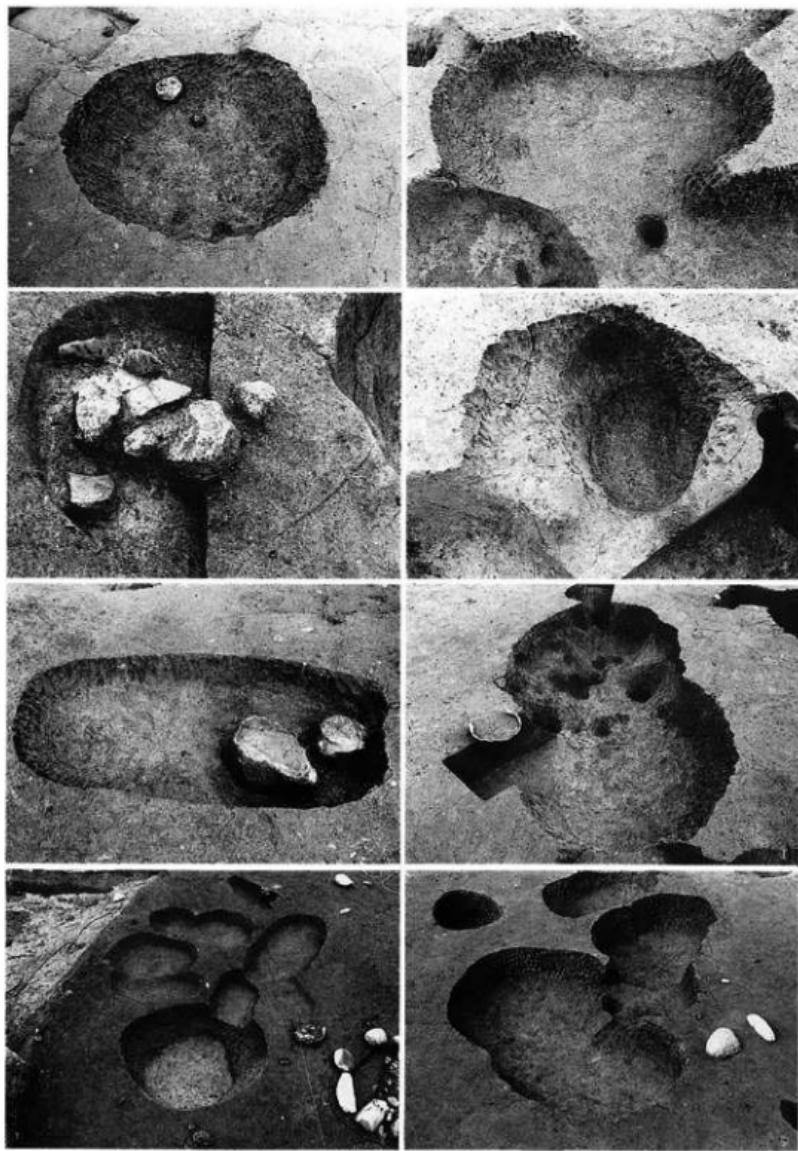


写真42 土壌 (7)

1. SK115(南から)

3. SK120

5. SK126(南から)

7. SK31~34・54~56・71(東から)

2. SK117

4. SK124(南から)

6. SK113、SK114と5号埋設(北から)

8. SK35・51・64・65・70(東から)

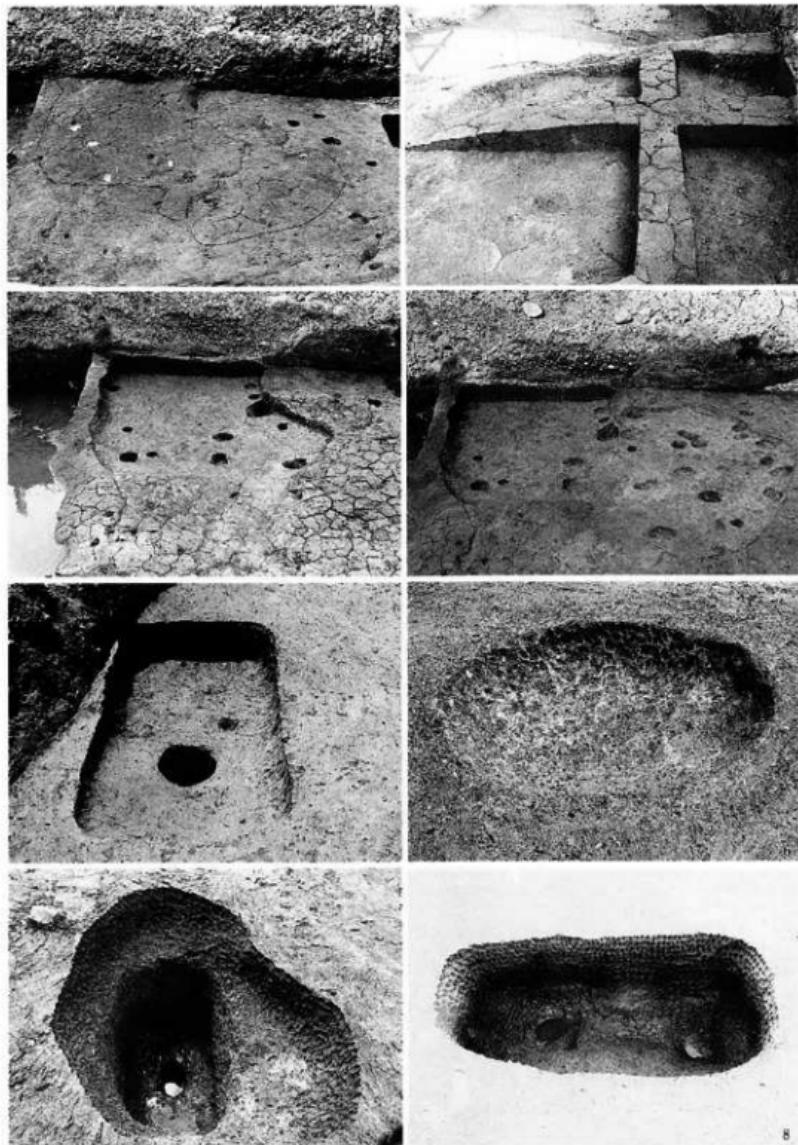


写真43 早期遺構（1）

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. S 111・12確認状況(東から) | 2. S 111断面(北から) |
| 3. S 111完掘状況(東から) | 4. S 111・12完掘状況(東から) |
| 5. SK10(北から) | 6. SK14(西から) |
| 7. SK9(北から) | 8. SK60(東から) |

8

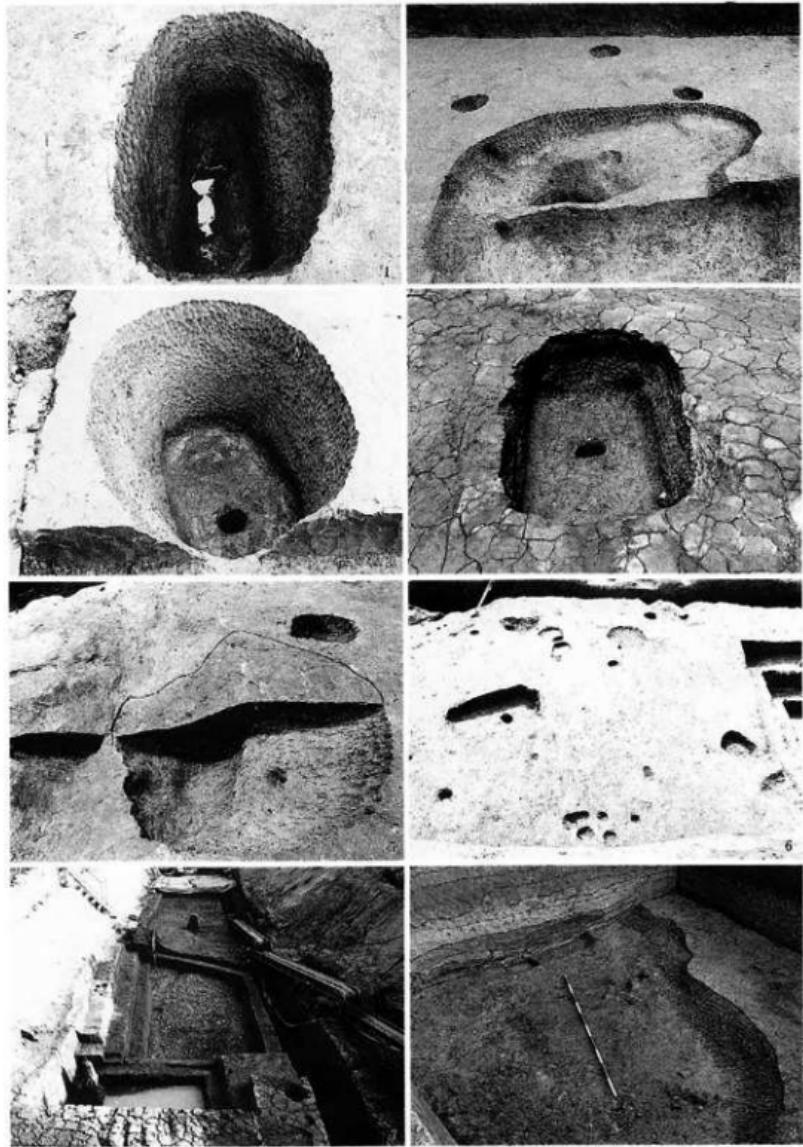


写真44 早期遺構 (2)

1. SK72(西から)
3. SK140(西から)
5. SK7断面(西から)
7. IV区完掘全景(北から)
2. SK80(東から)
4. SK6(南東から)
6. SK6・7
8. SR3

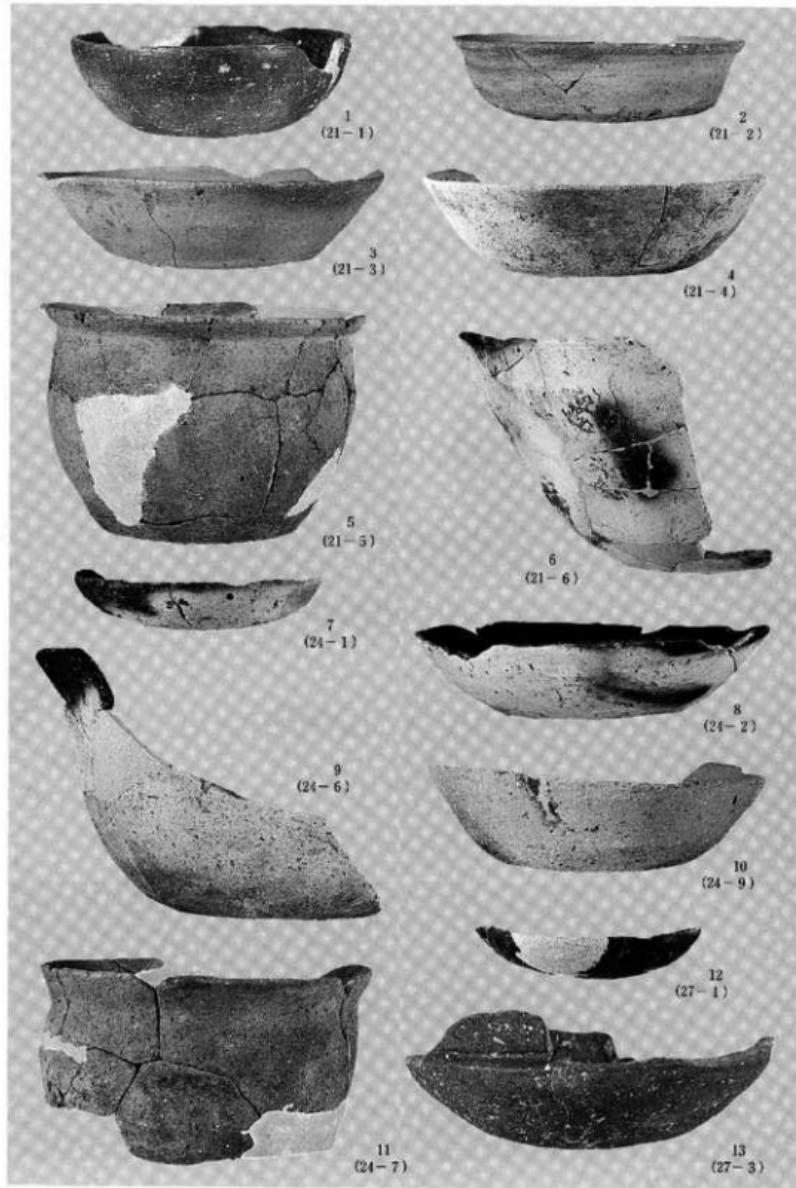


写真45 SI 1・2・3出土遺物

()は図番号

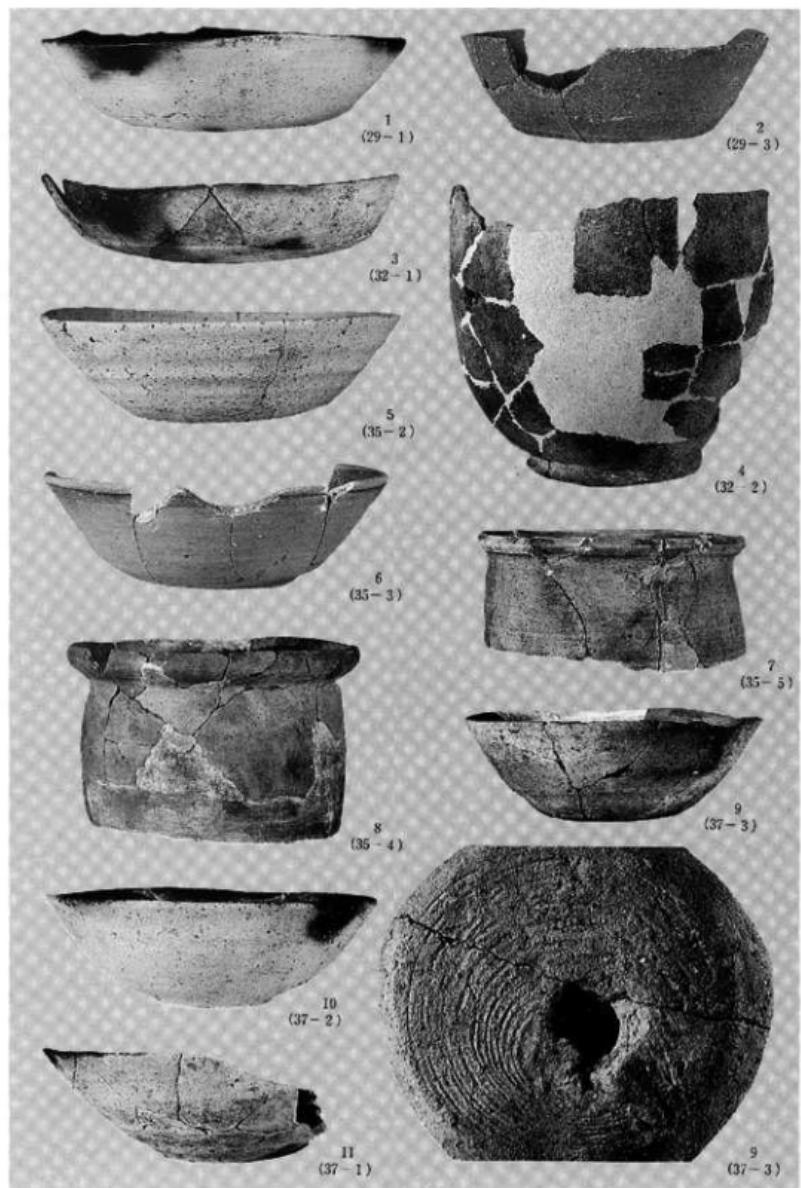


写真46 SI 4・5・7・8 出土遺物

() は回番号

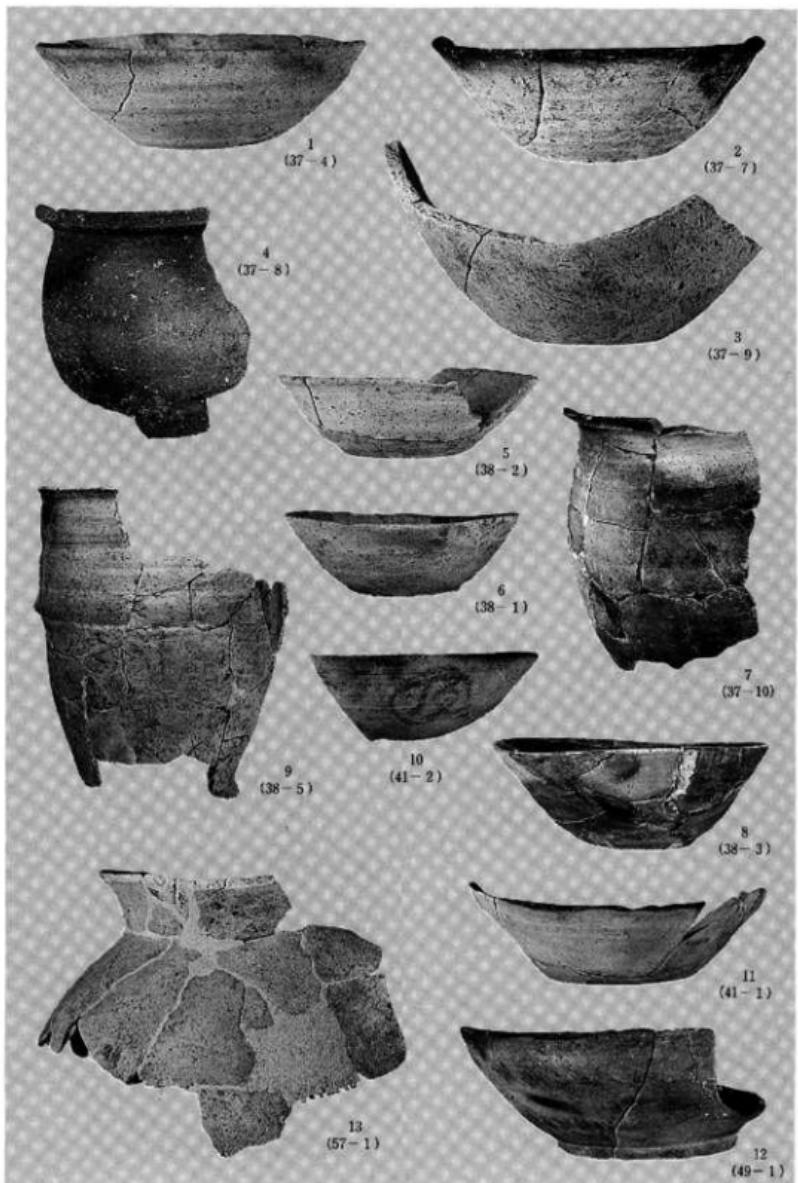


写真47 SI 8・SB 4・SD 9 出土遺物

() は図番号

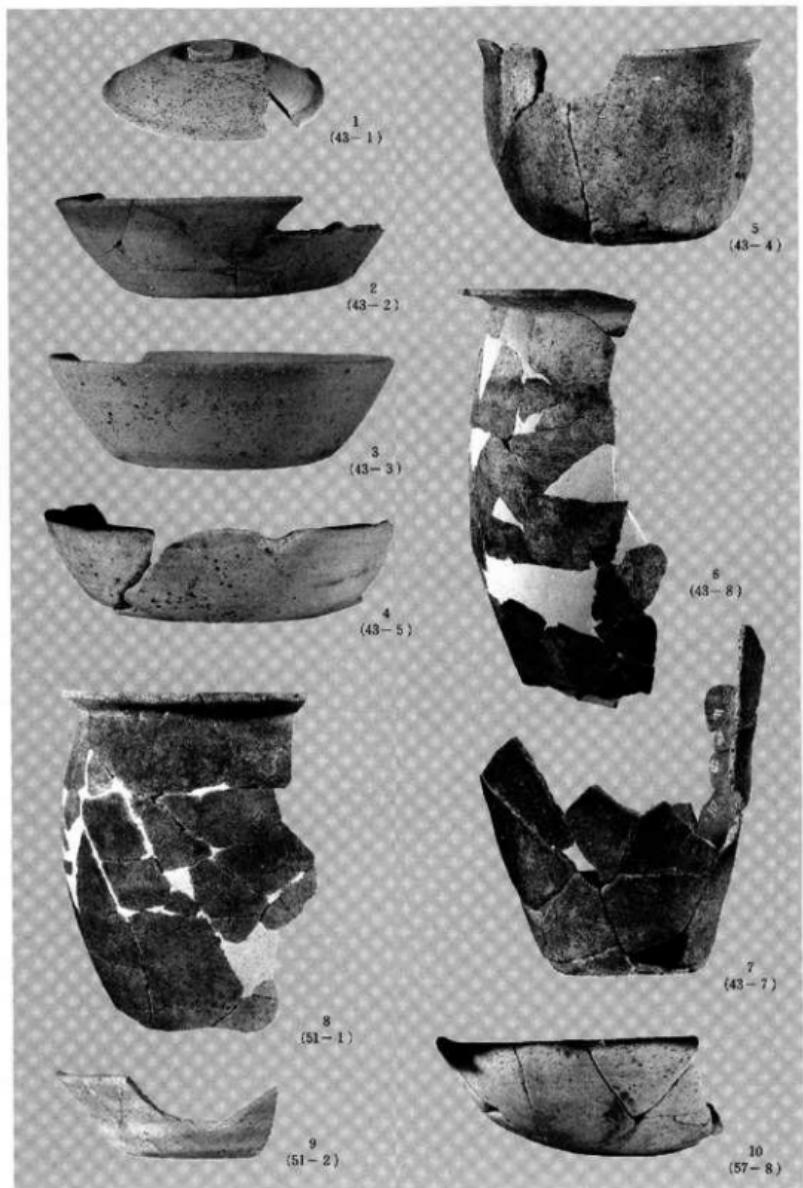


写真48 SI13・SD24・SK 4 出土遺物

は図番号

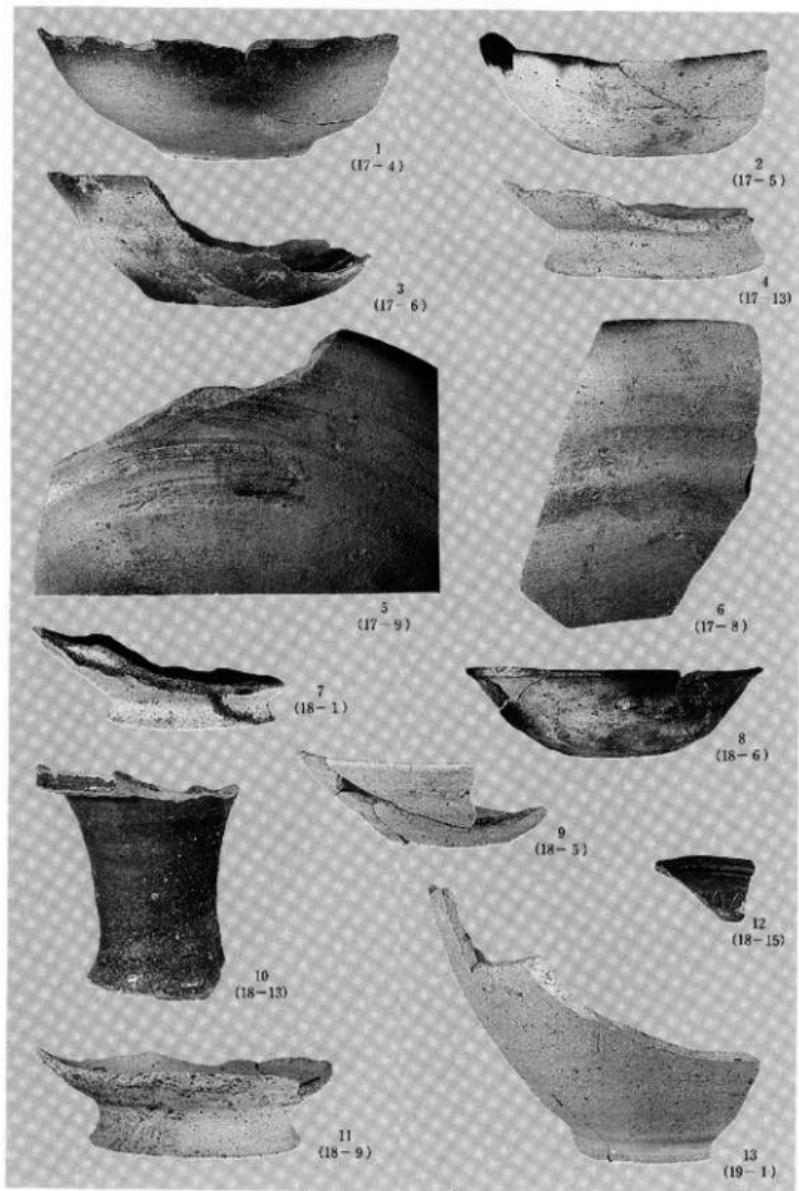


写真49 SR 1出土遺物

() は図番号

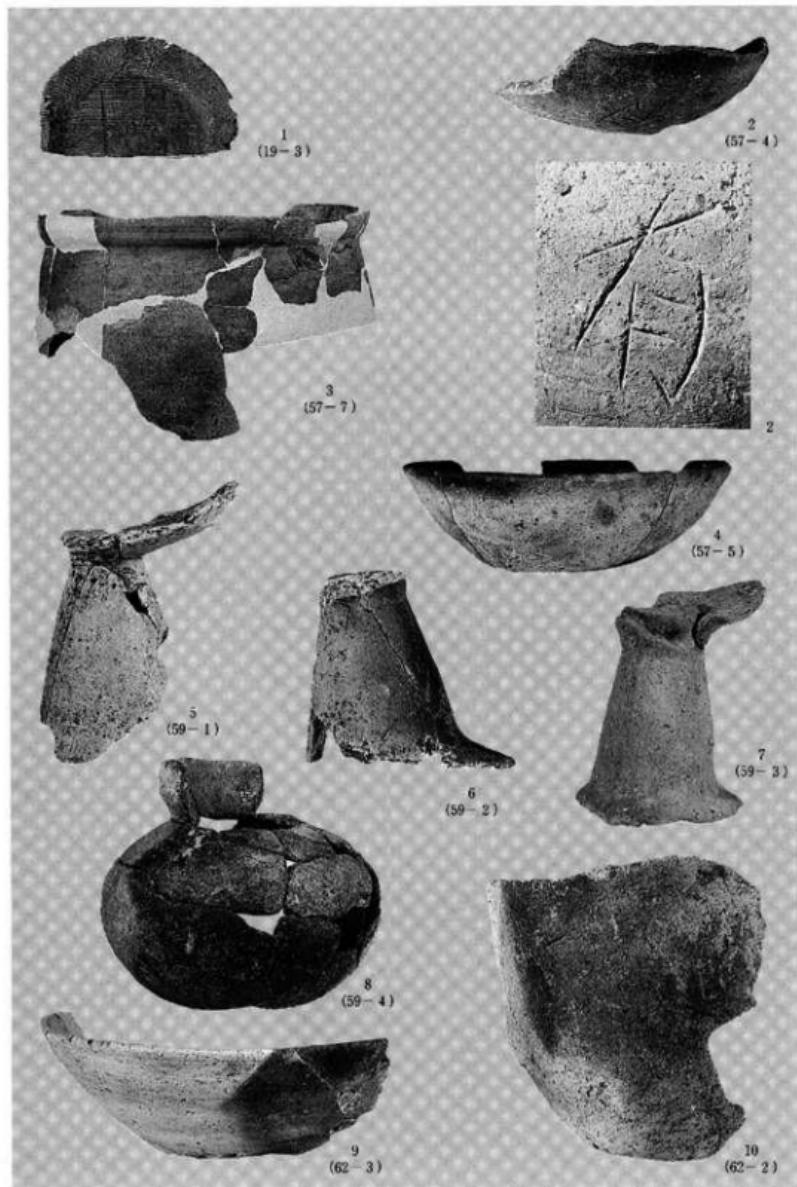


写真50 SR 1 • SD20 出土遺物・I区 D10—括土器・基本層出土 () は図告号



写真51 SI15・SK 1 出土遺物

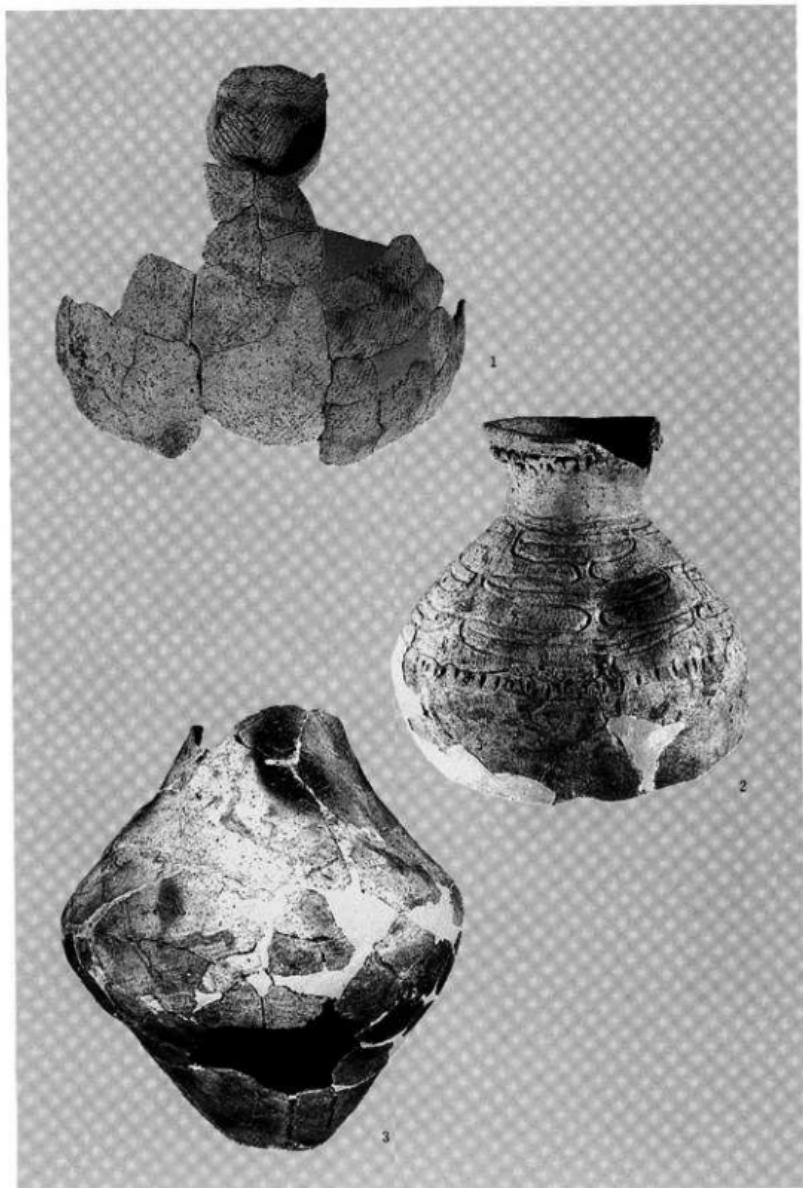


写真52 SK 2・3・6号埋設土器

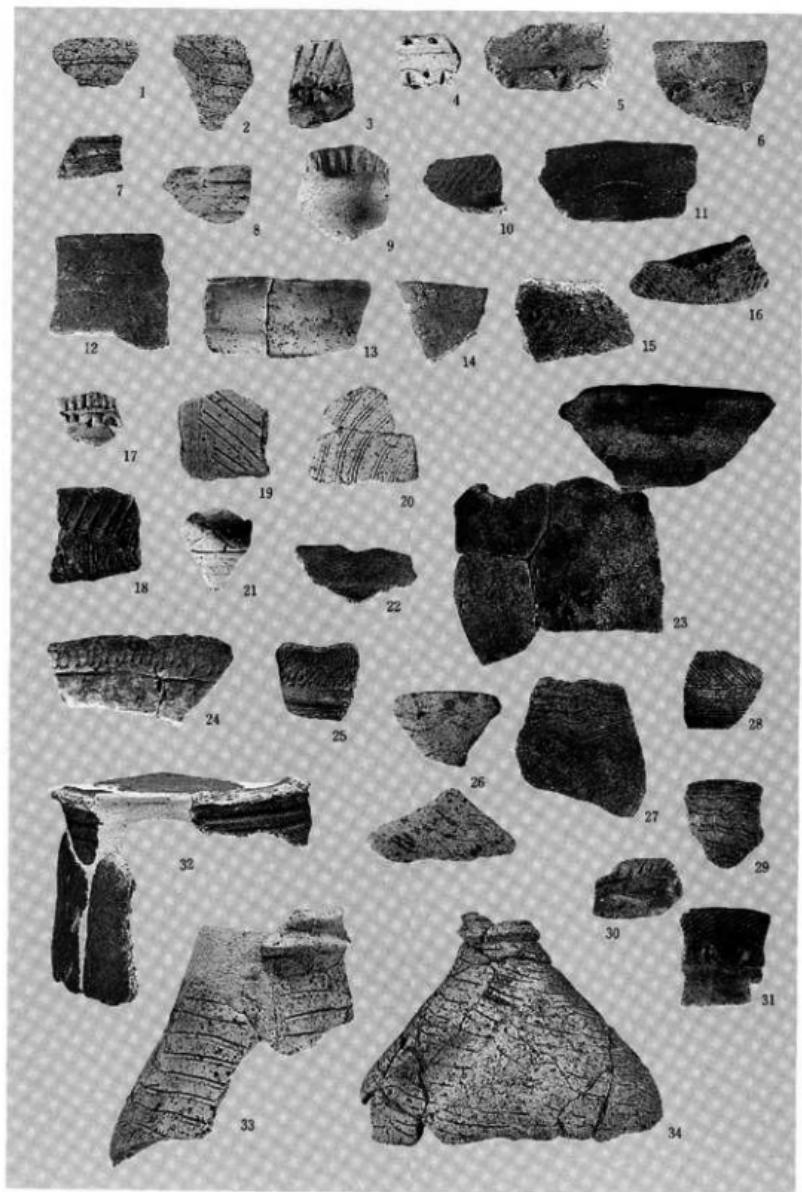


写真53 SI15・SK 2・ピット群出土土器

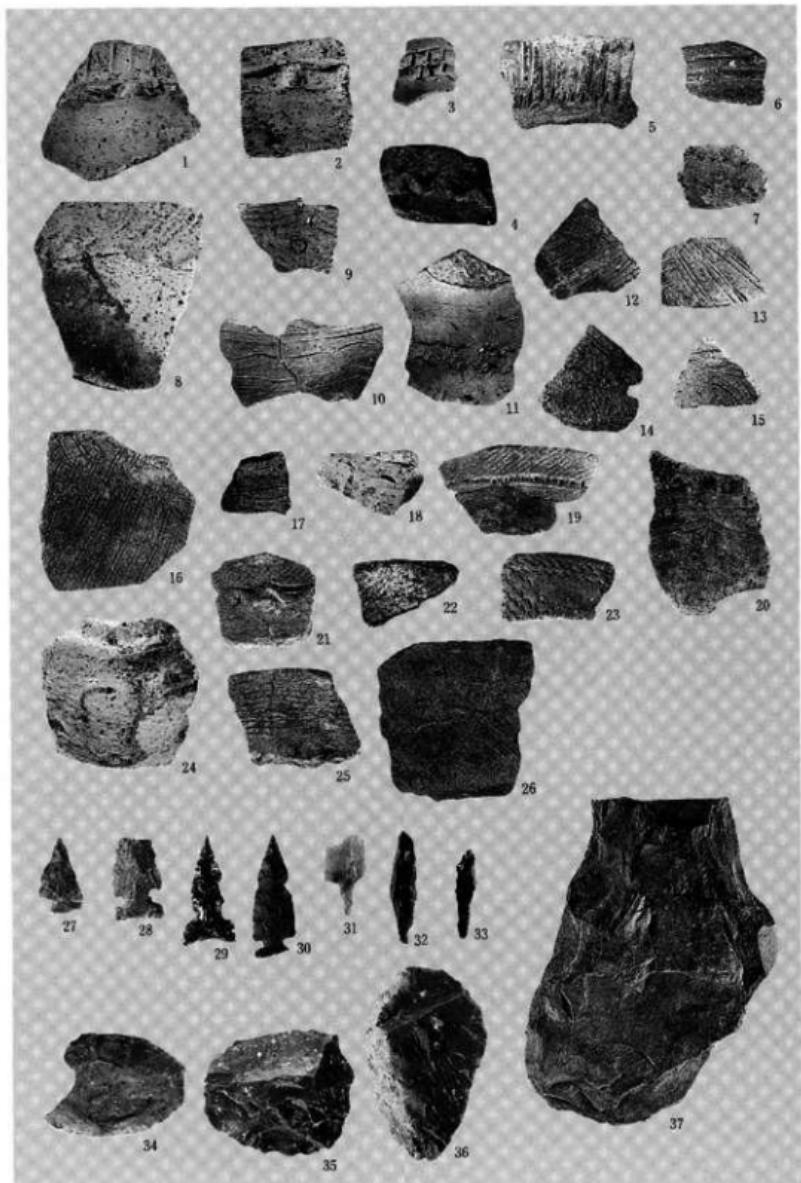


写真54 その他の遺構出土土器・SI15 出土石器

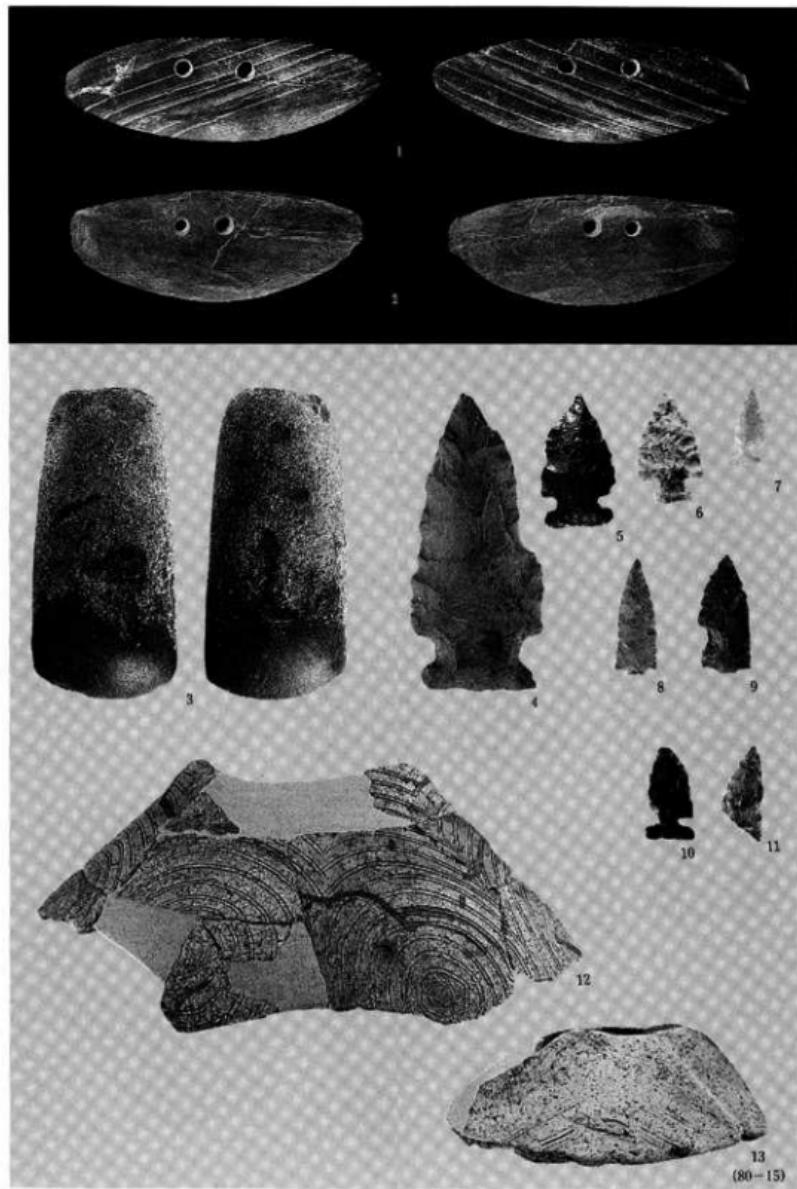


写真55 SK 2 出土石器・7層出土土器（1）

() は同番号

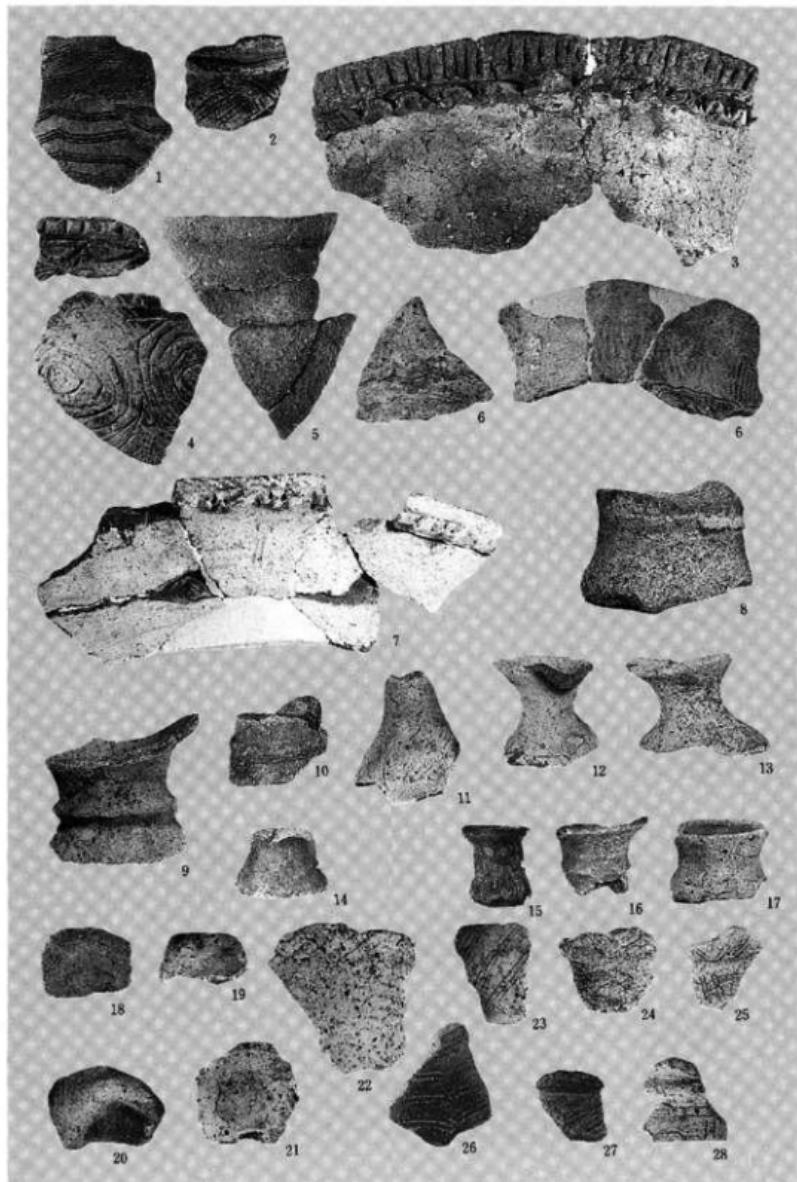


写真56 7層出土土器（2）

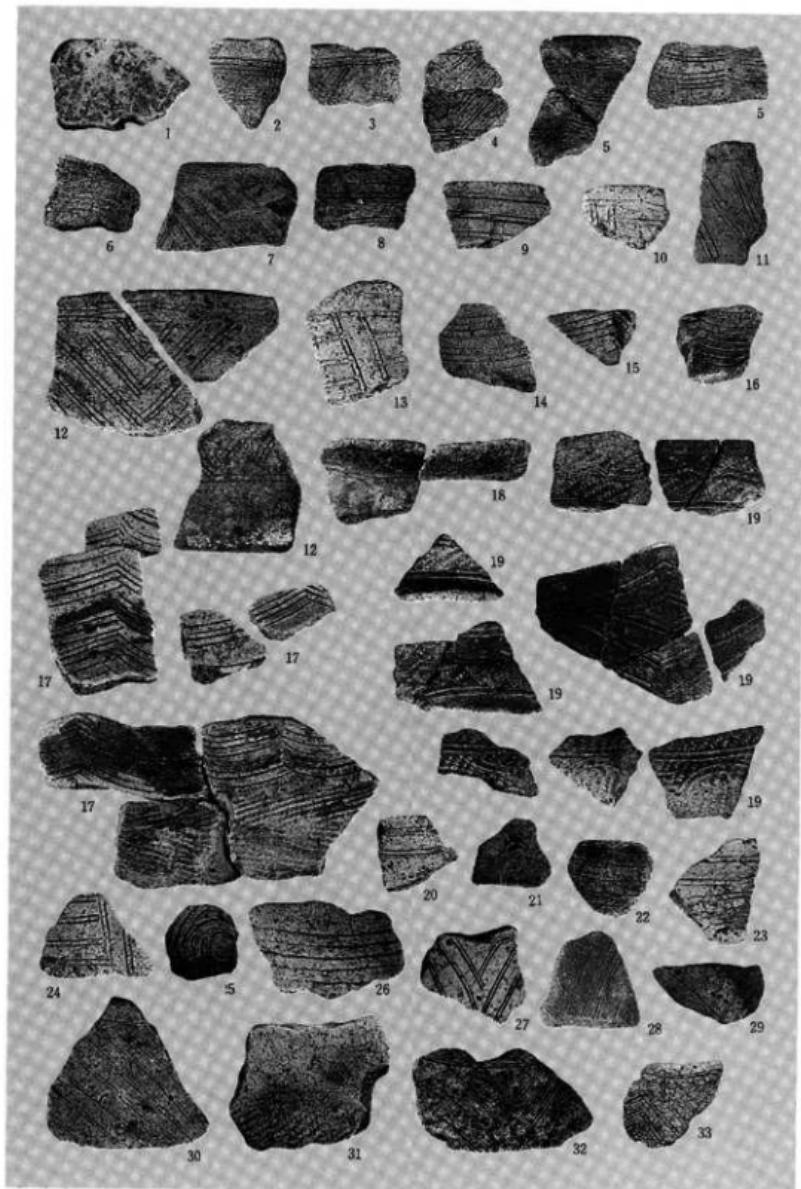


写真57 7層出土土器 (3)

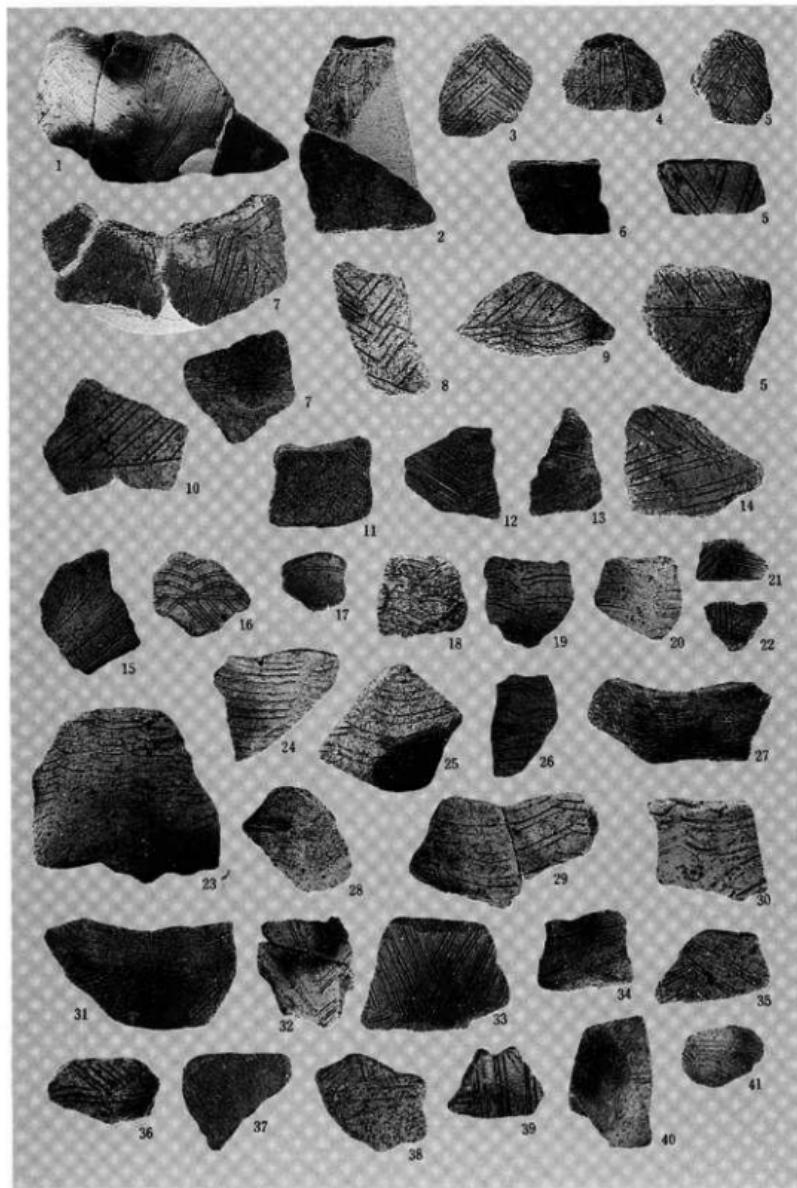


写真58 7層出土土器 (4)

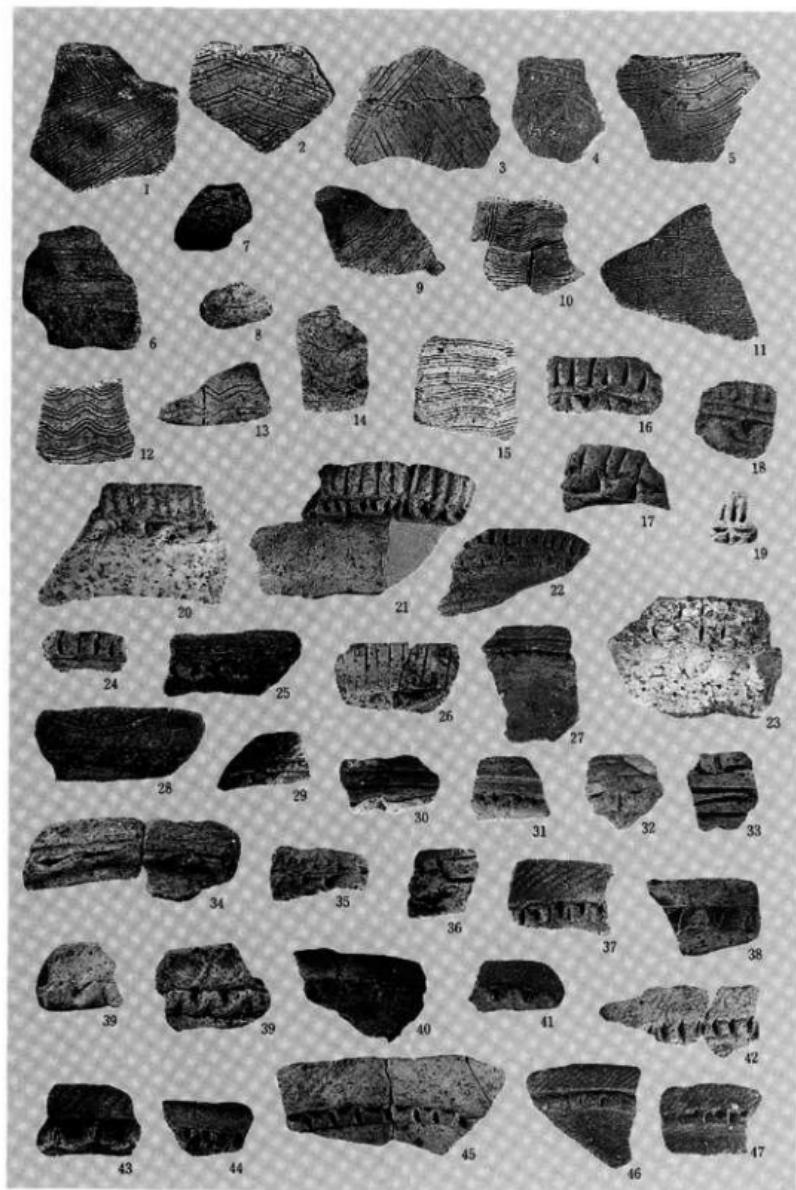


写真59 7層出土土器 (5)



写真60 7層出土土器（6）

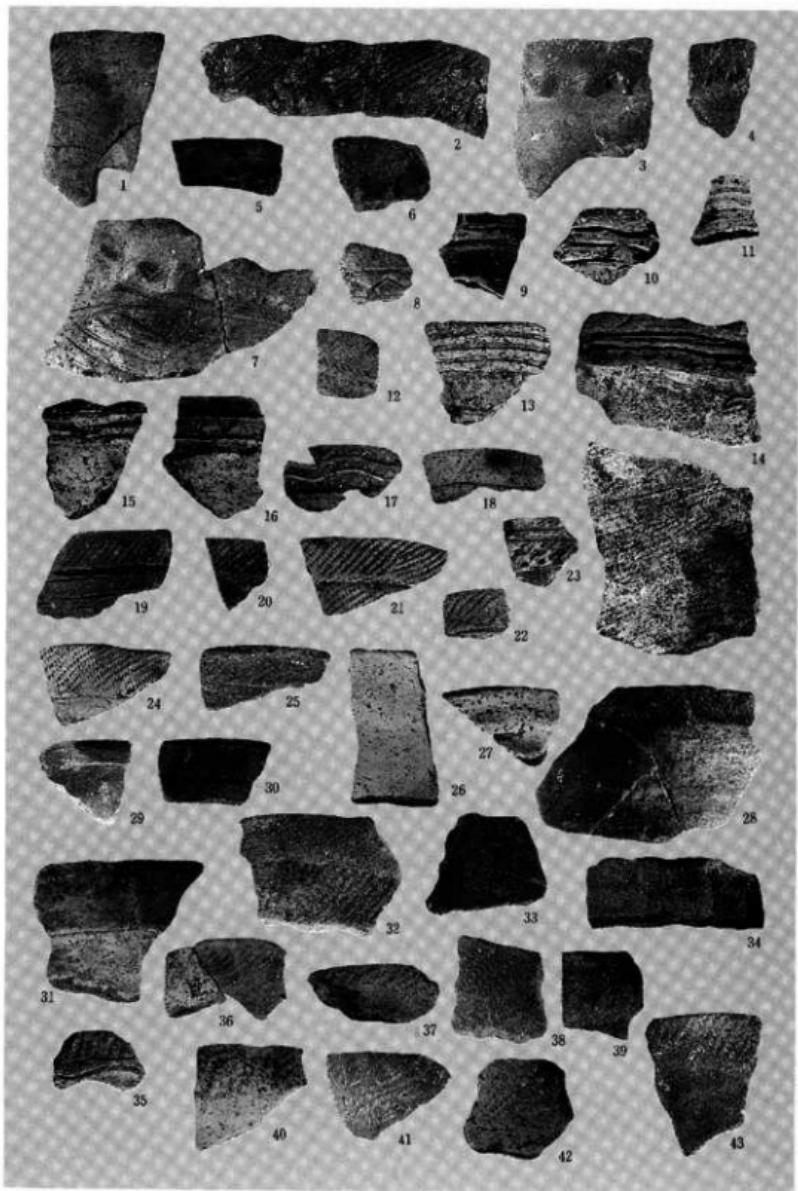


写真61 7層出土土器 (7)

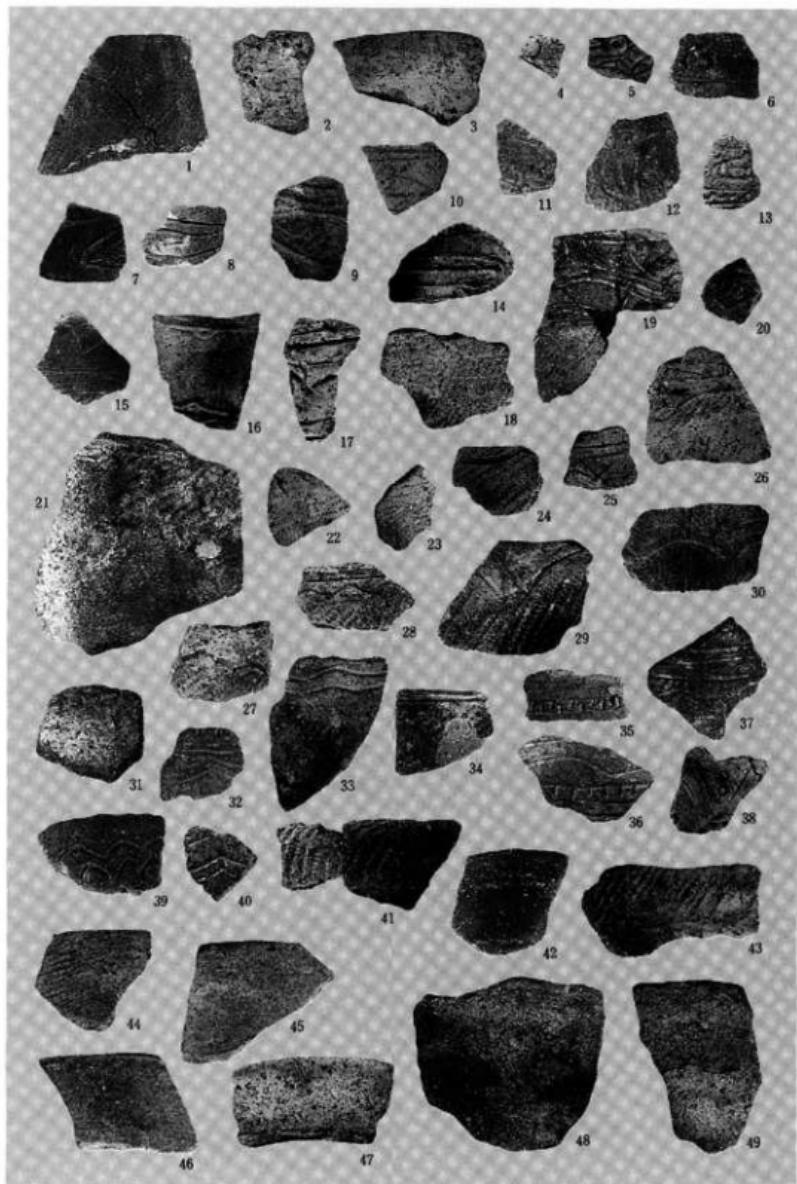


写真62 7層出土土器 (8)

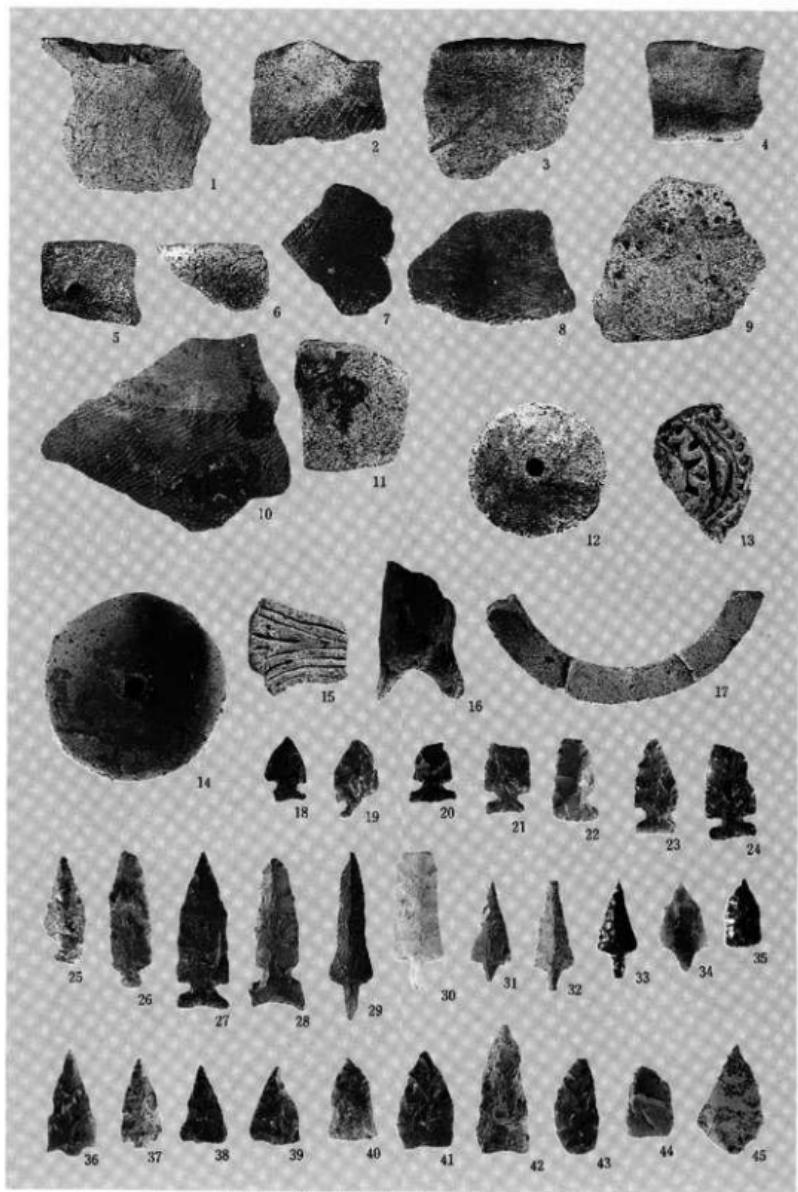


写真63 7層出土土器(9)・土製品・石器(1)

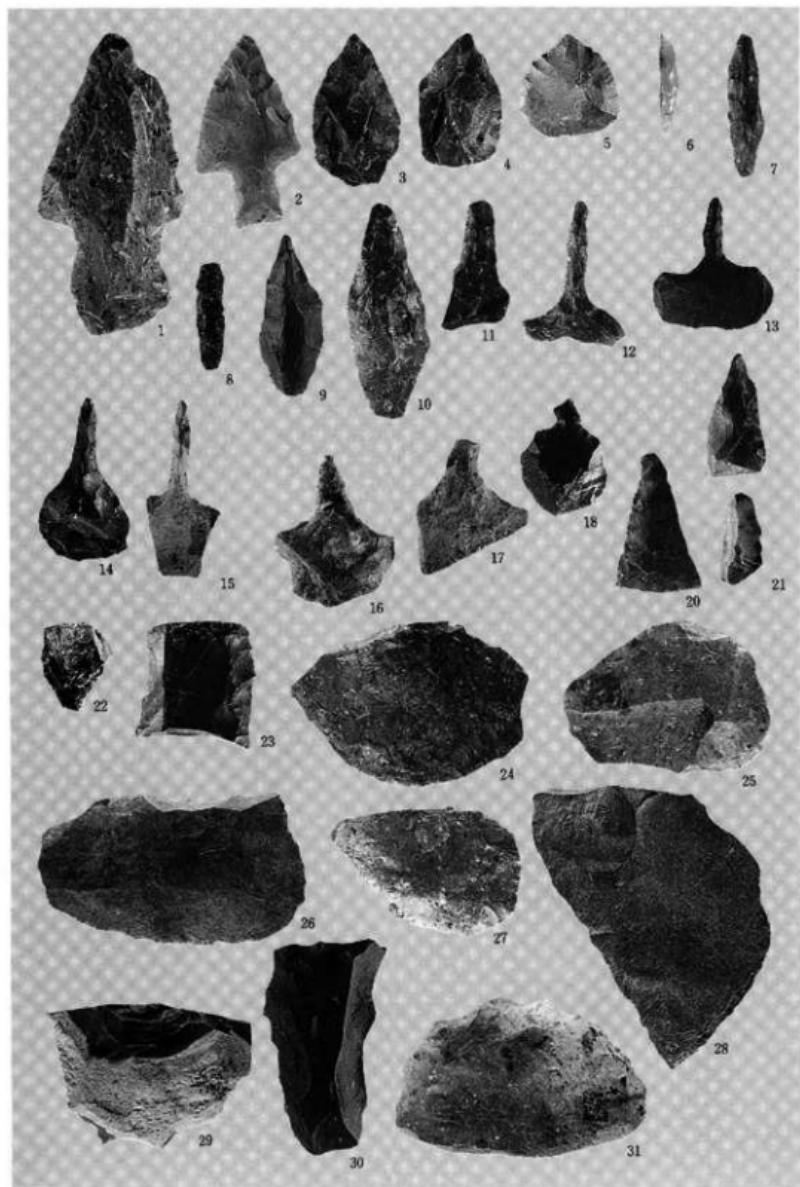


写真64 7層出土石器（2）



写真65 7層出土石器（3）

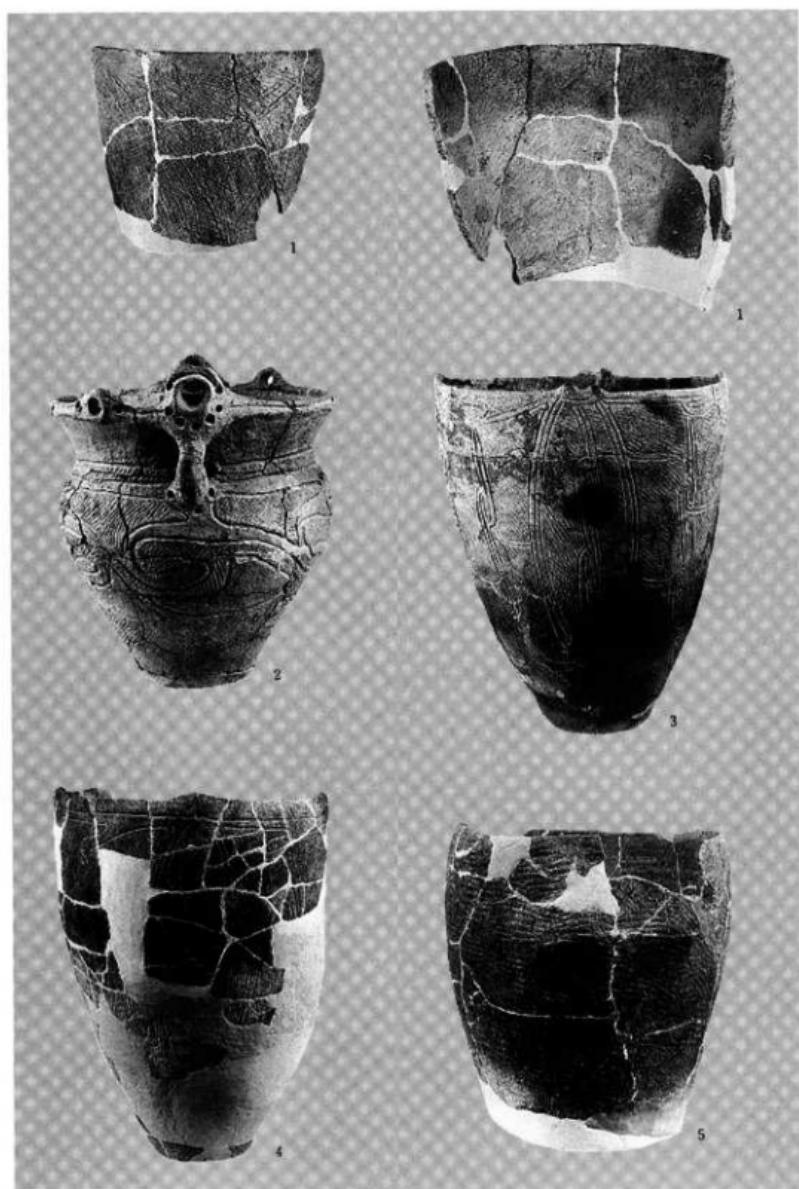


写真66 繩文遺構出土土器（1）

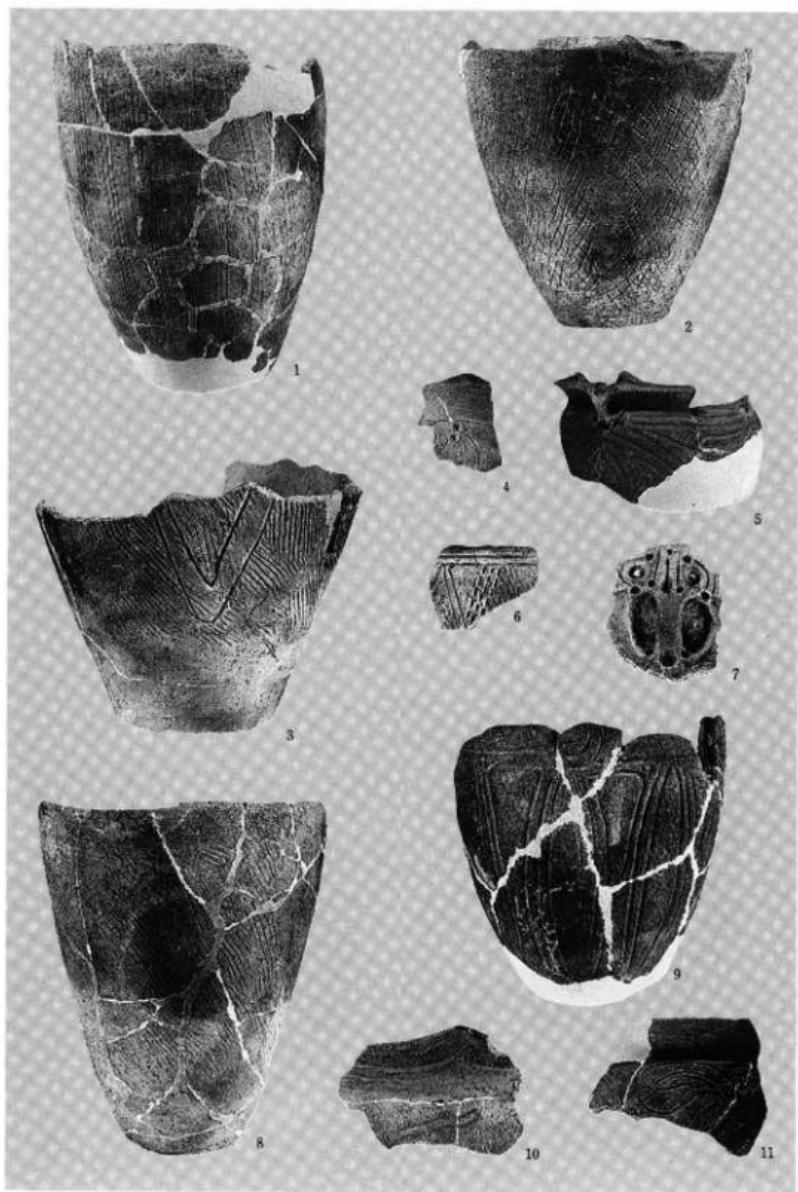


写真67 縄文遺構出土土器 (2)

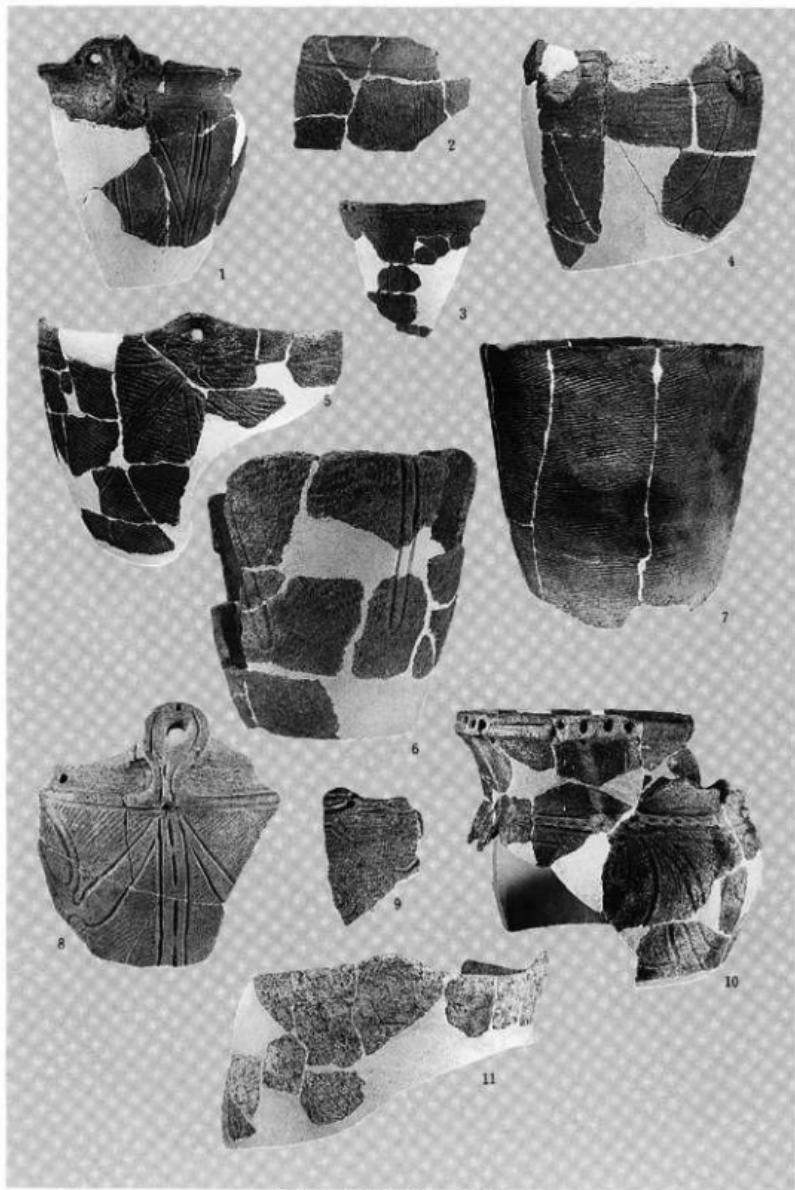


写真68 縄文遺構出土土器（3）

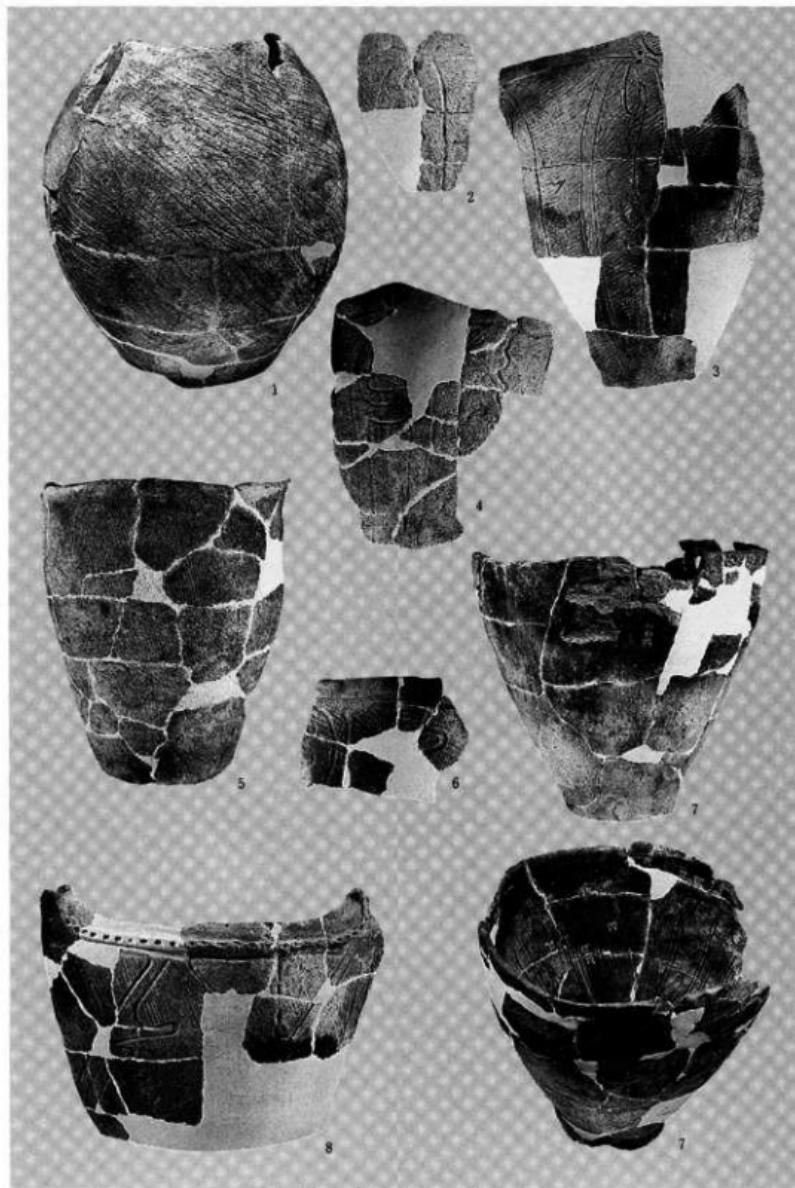


写真69 綺文遺構出土土器（4）

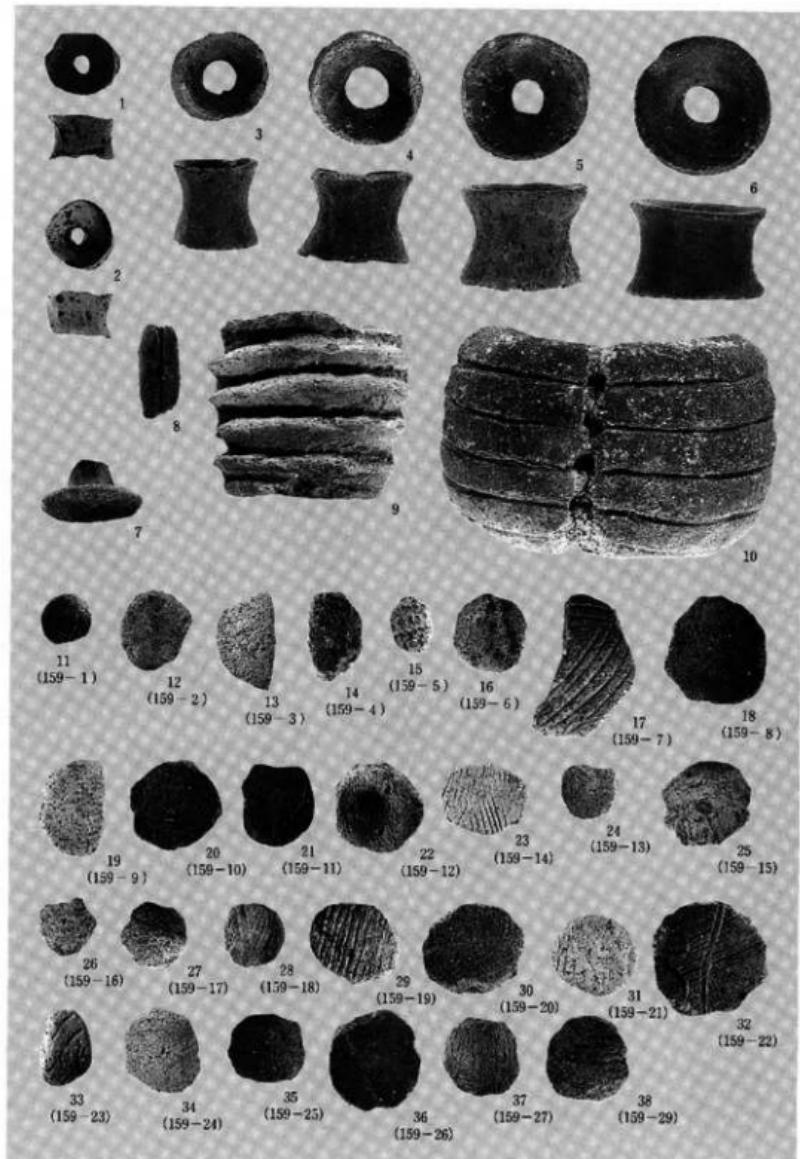


写真70 縄文遺構出土土製品

() は図番号

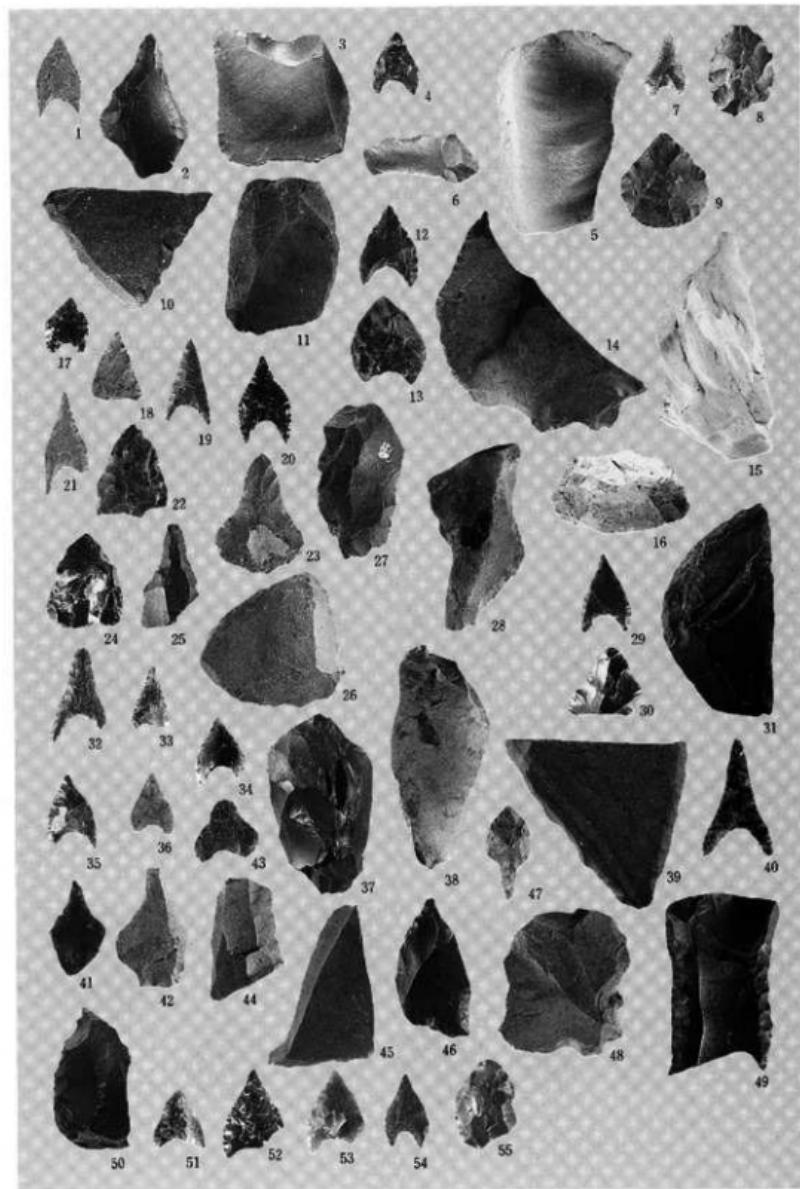


写真71 繩文遺構出土石器（1）

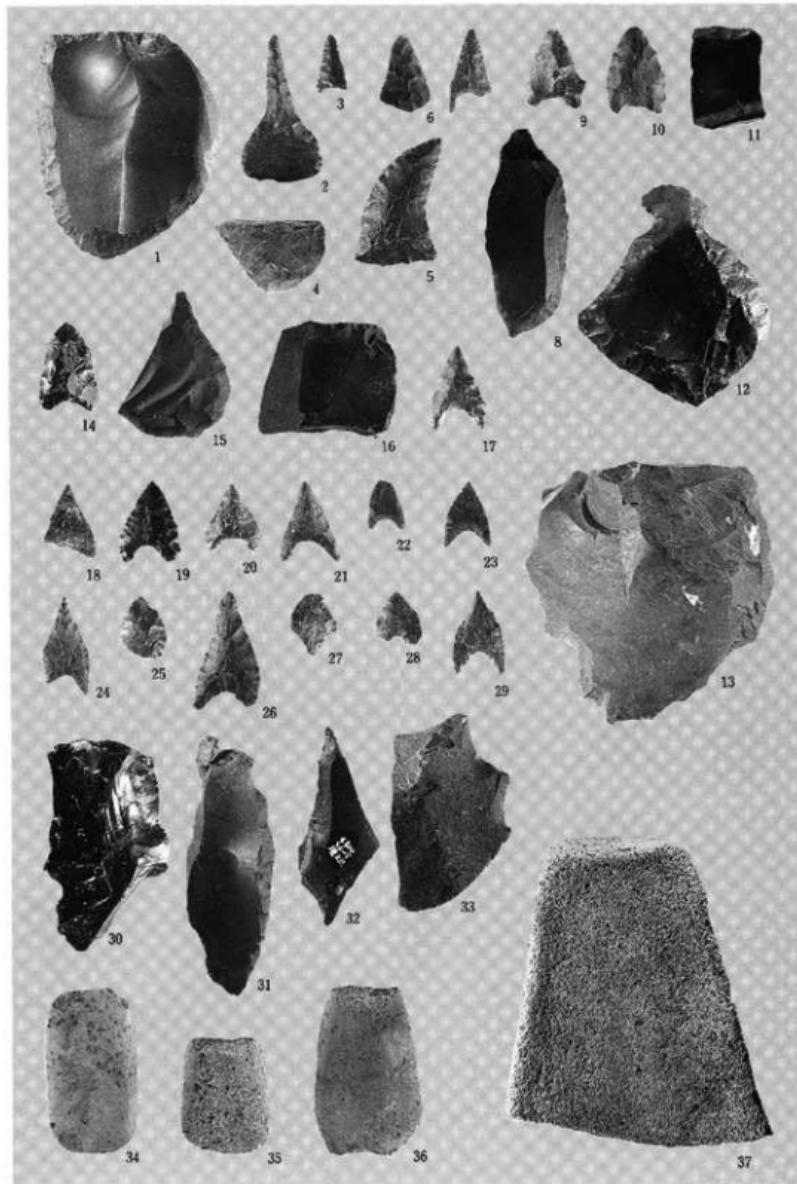


写真72 縄文遺構出土石器（2）

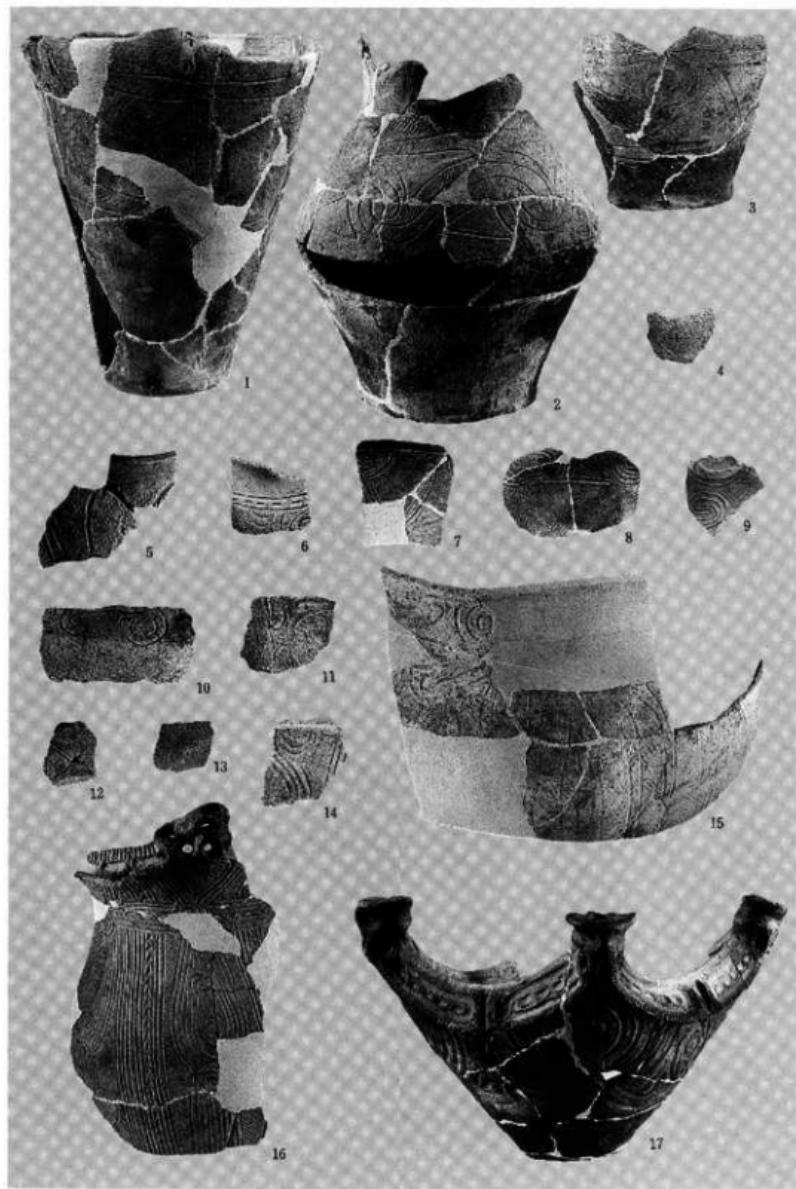


写真73 縄文遺物包含層出土土器（1）

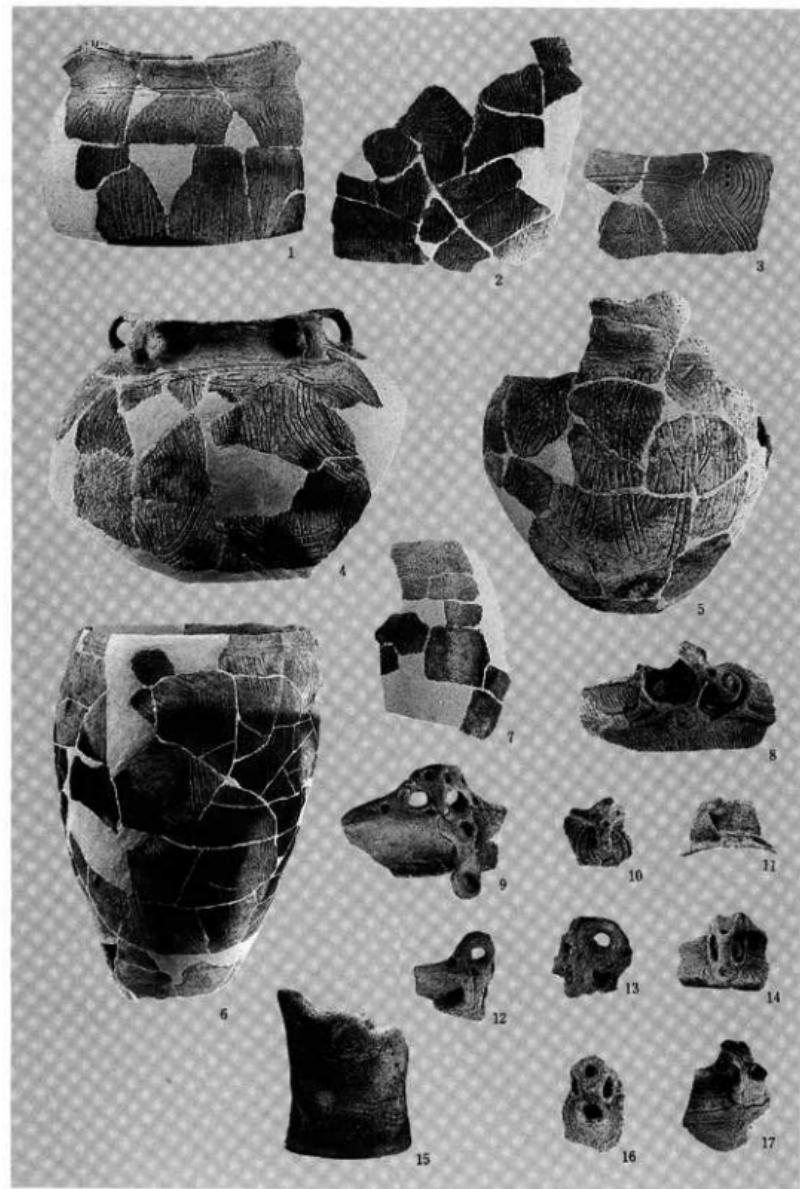


写真74 條文遺物包含層出土土器（2）

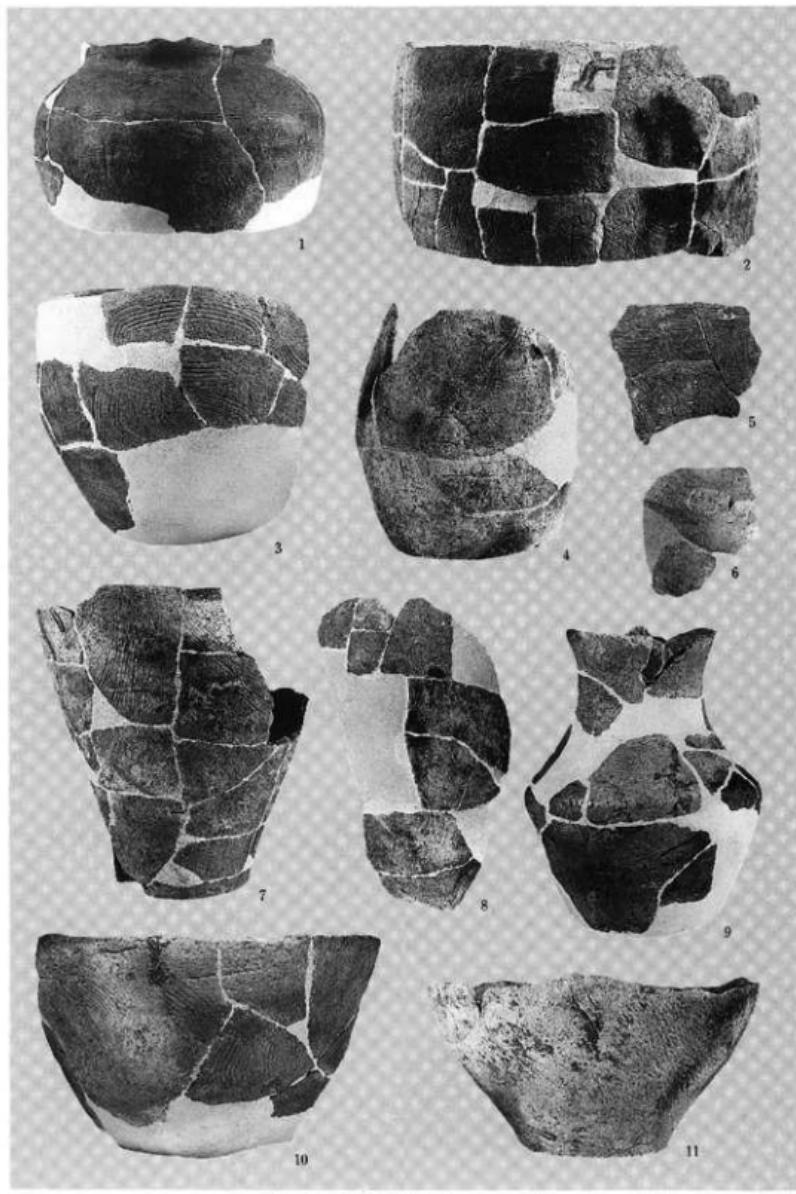


写真75 綱文遺物包含層出土土器（3）

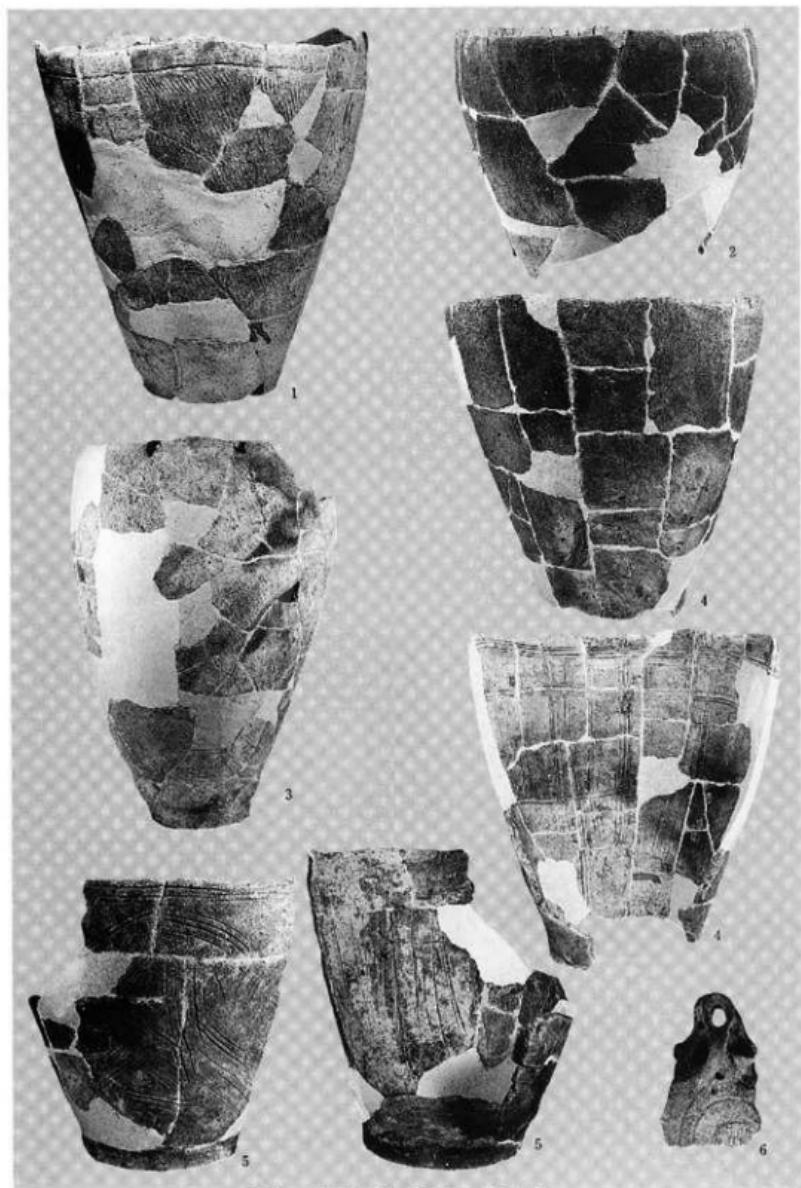


写真76 繩文遺物包含層出土土器（4）

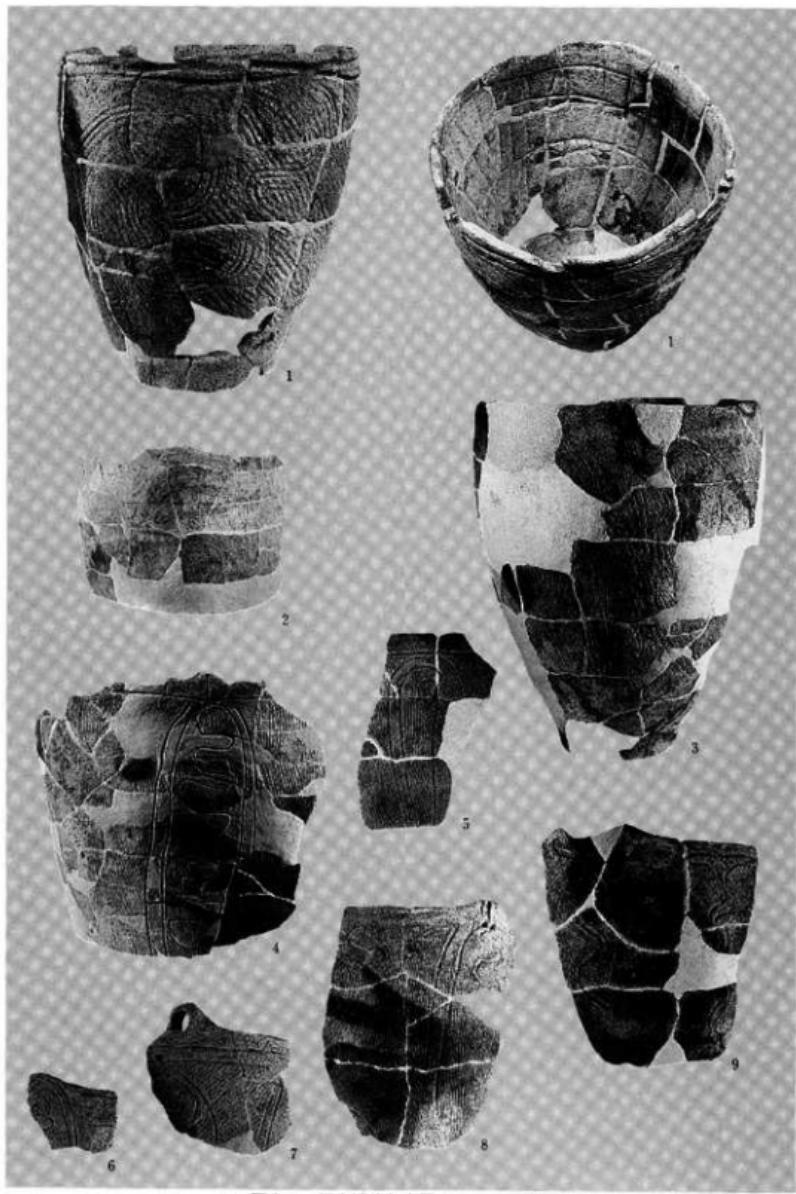


写真77 纪文遗物包含层出土土器 (5)

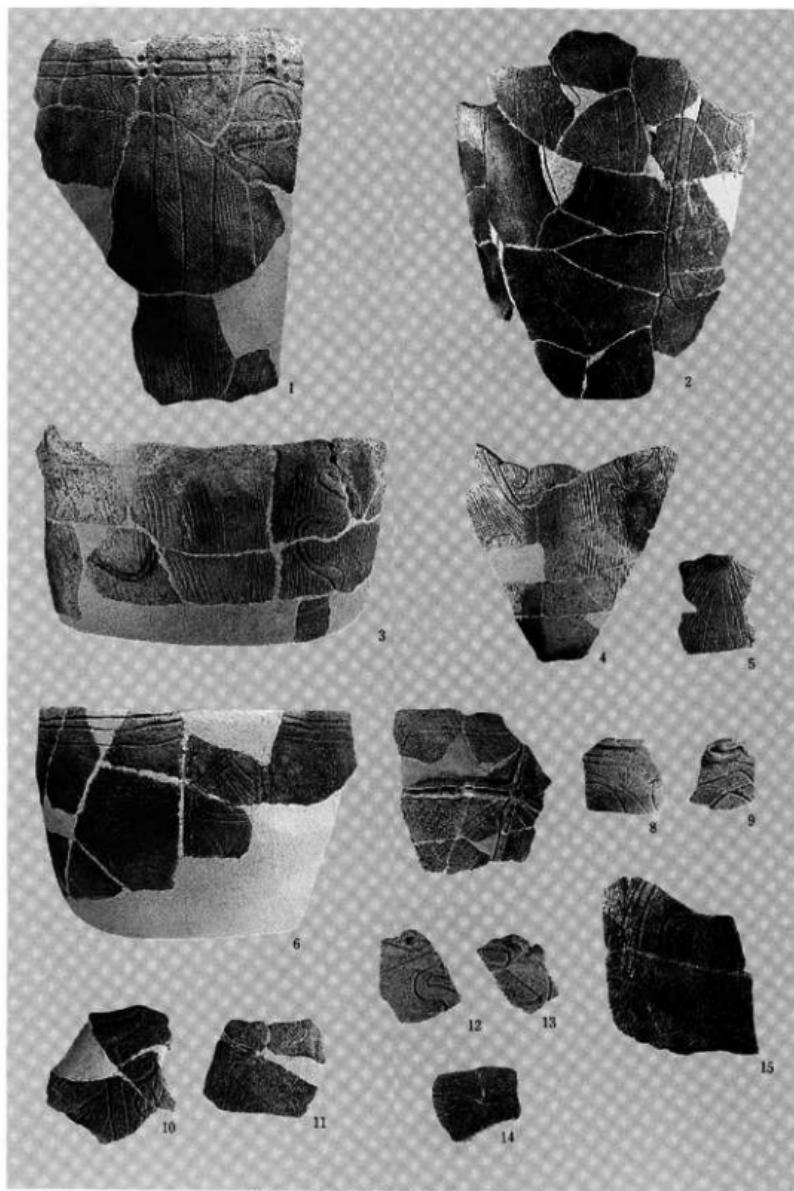


写真78 縄文遺物包含層出土土器（6）

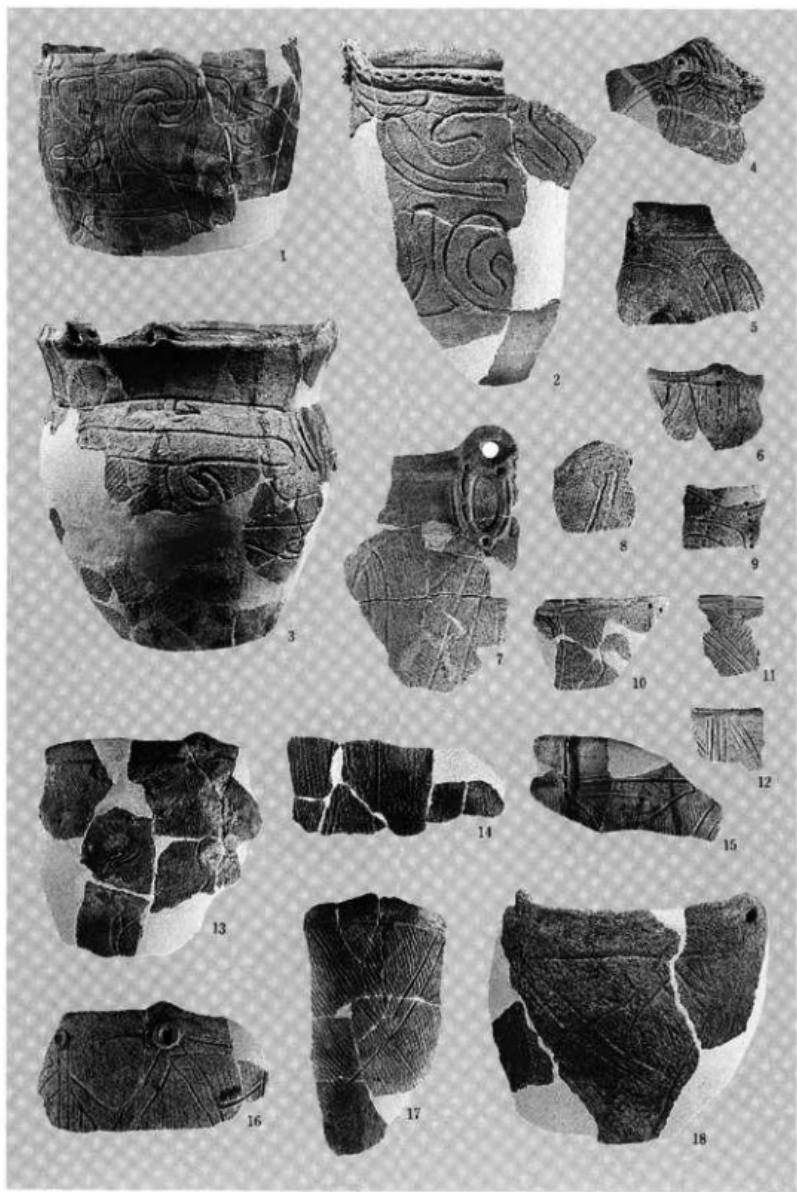


写真79 綱文遺物包含層出土土器（7）

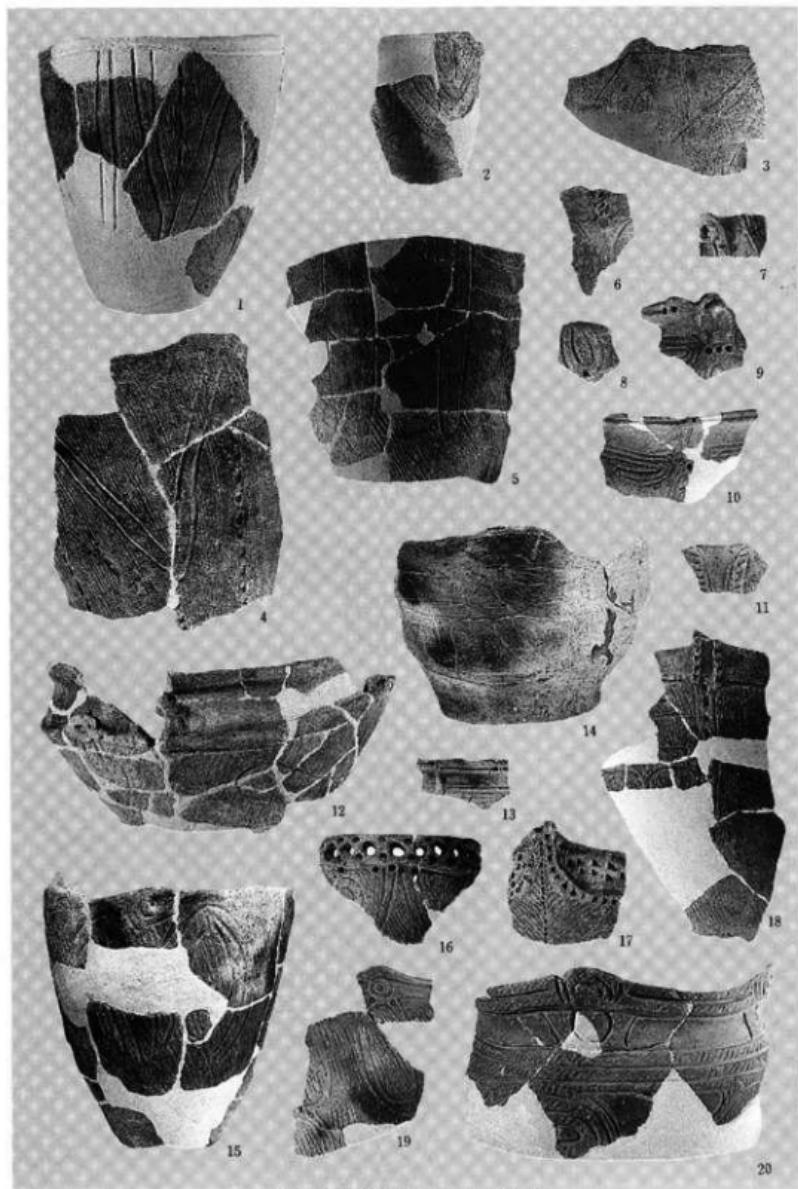


写真80 繪文遺物包含層出土土器（8）

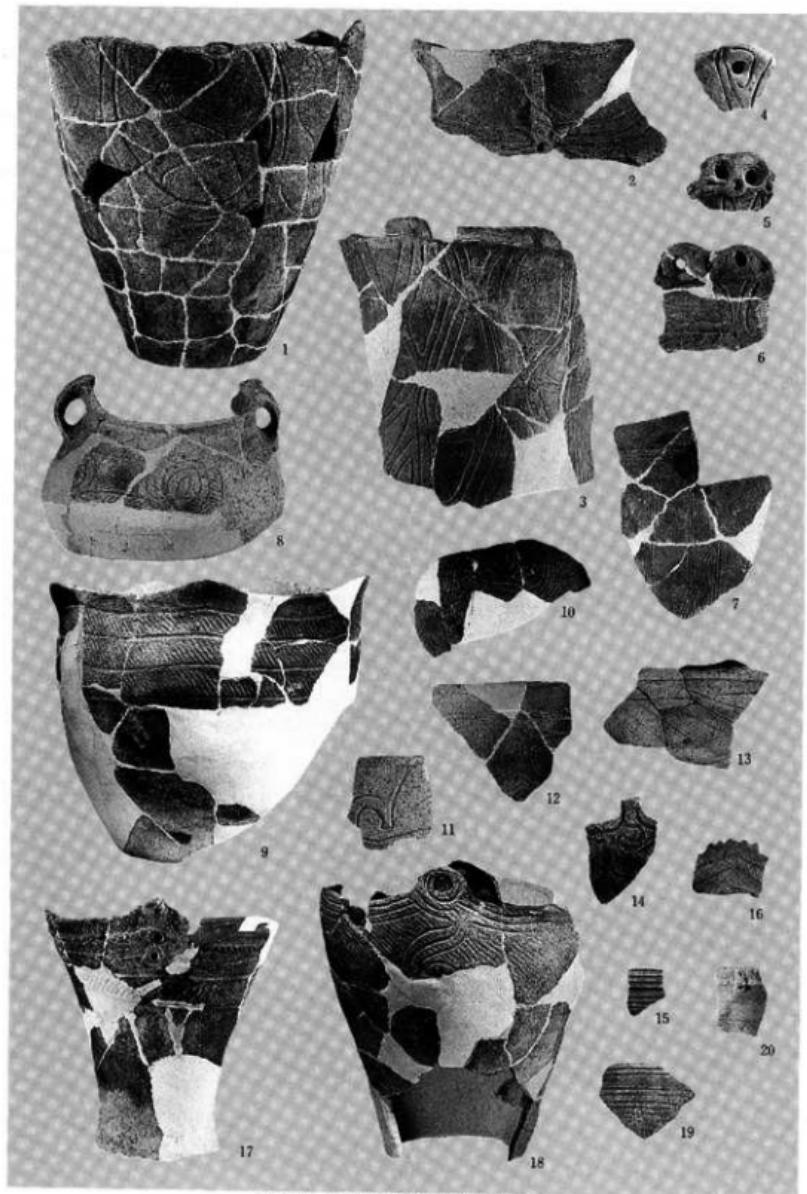


写真81 繩文遺物包含層出土土器 (9)

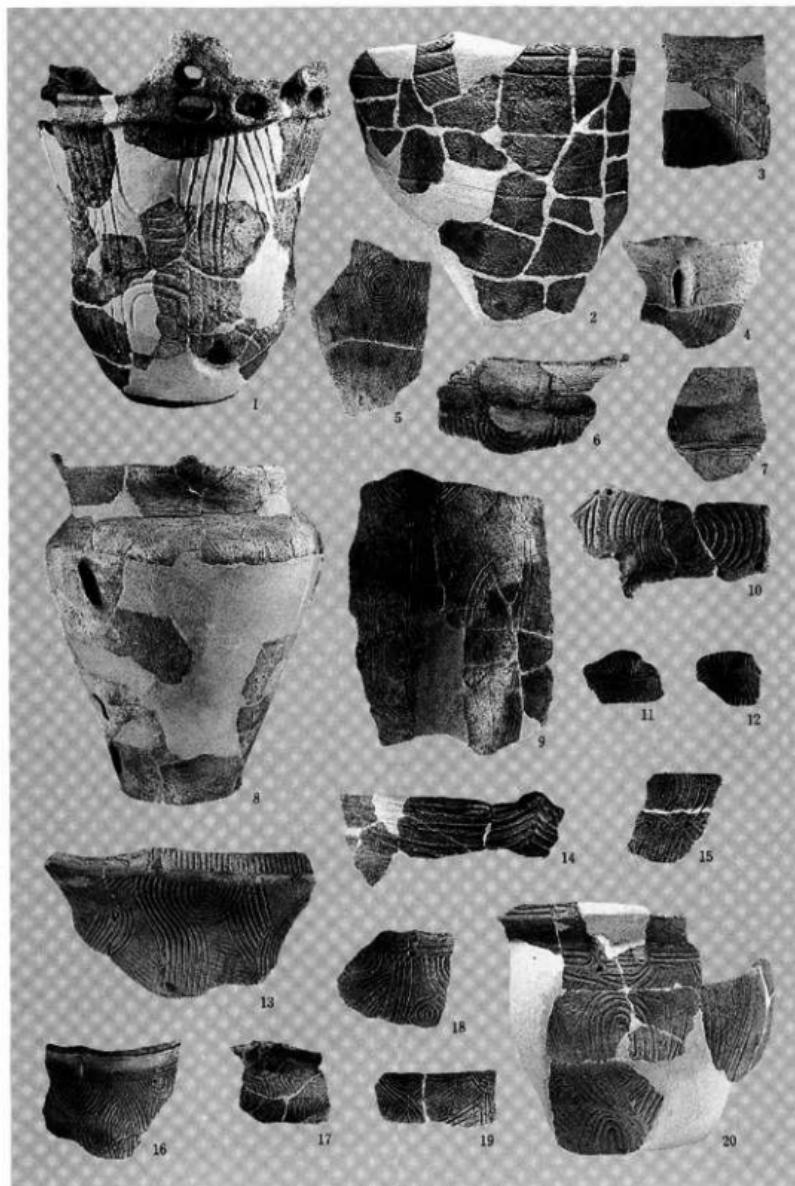


写真82 繩文遺物包含層出土土器 (10)

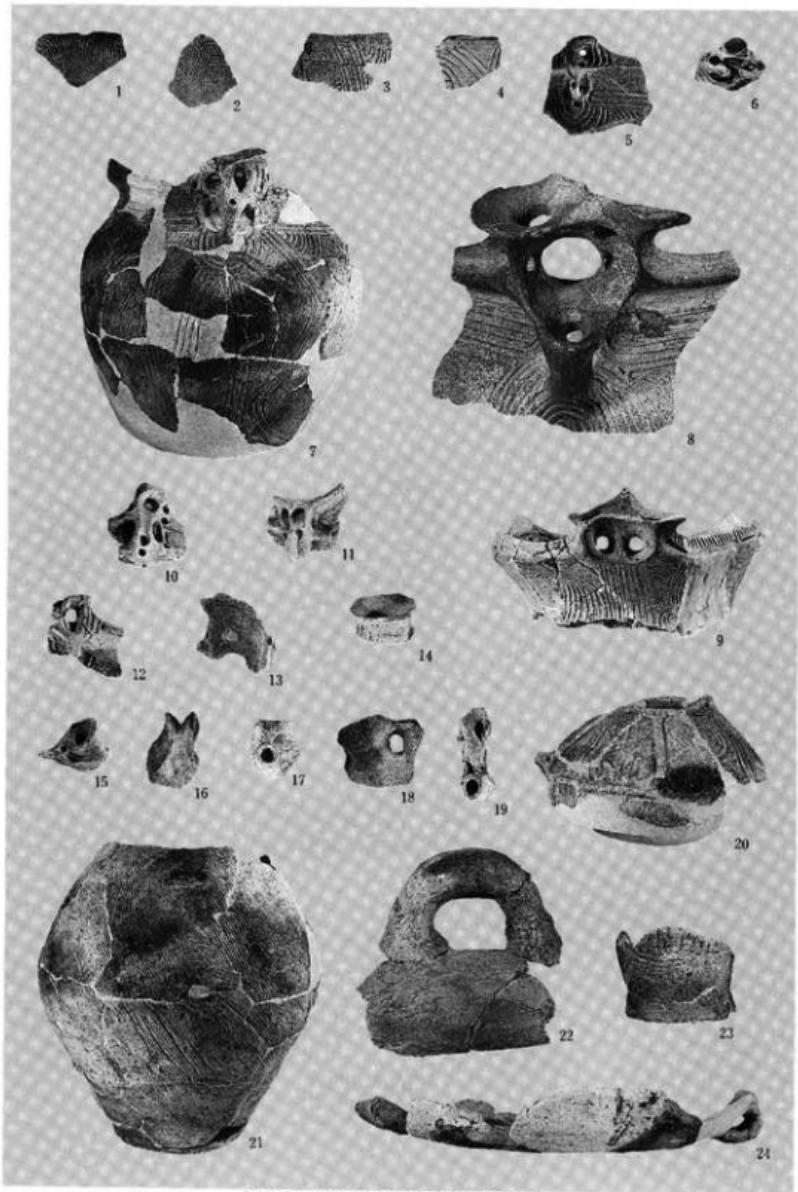


写真83 繩文遺物包含層出土土器 (11)

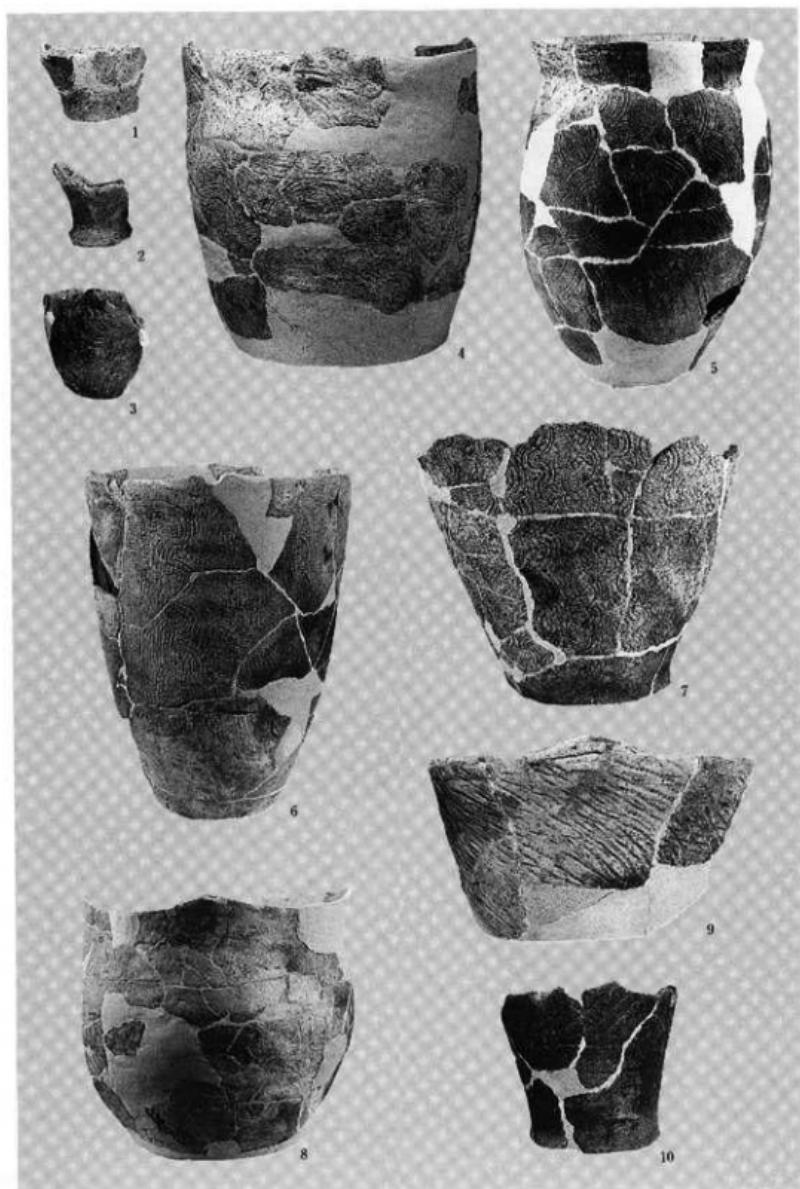


写真84 繩文遺物包含層出土土器 (12)

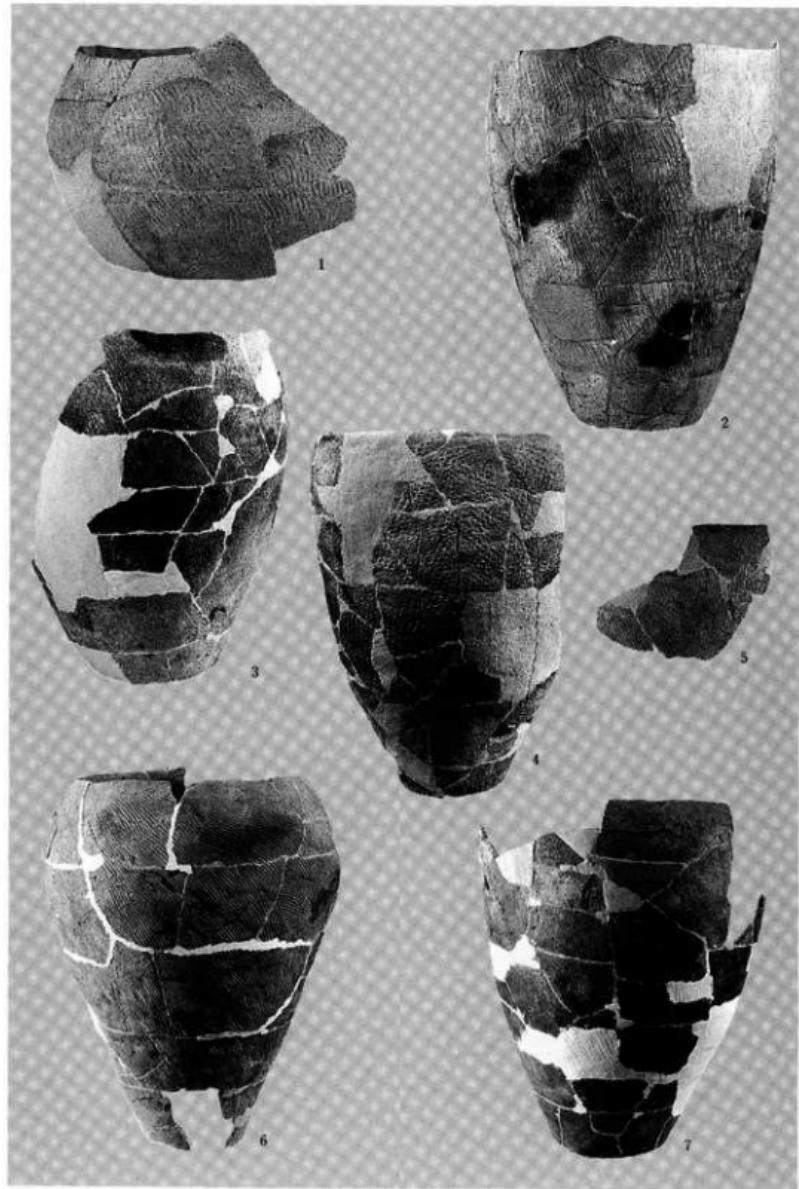


写真85 纹文遺物包含層出土土器 (13)

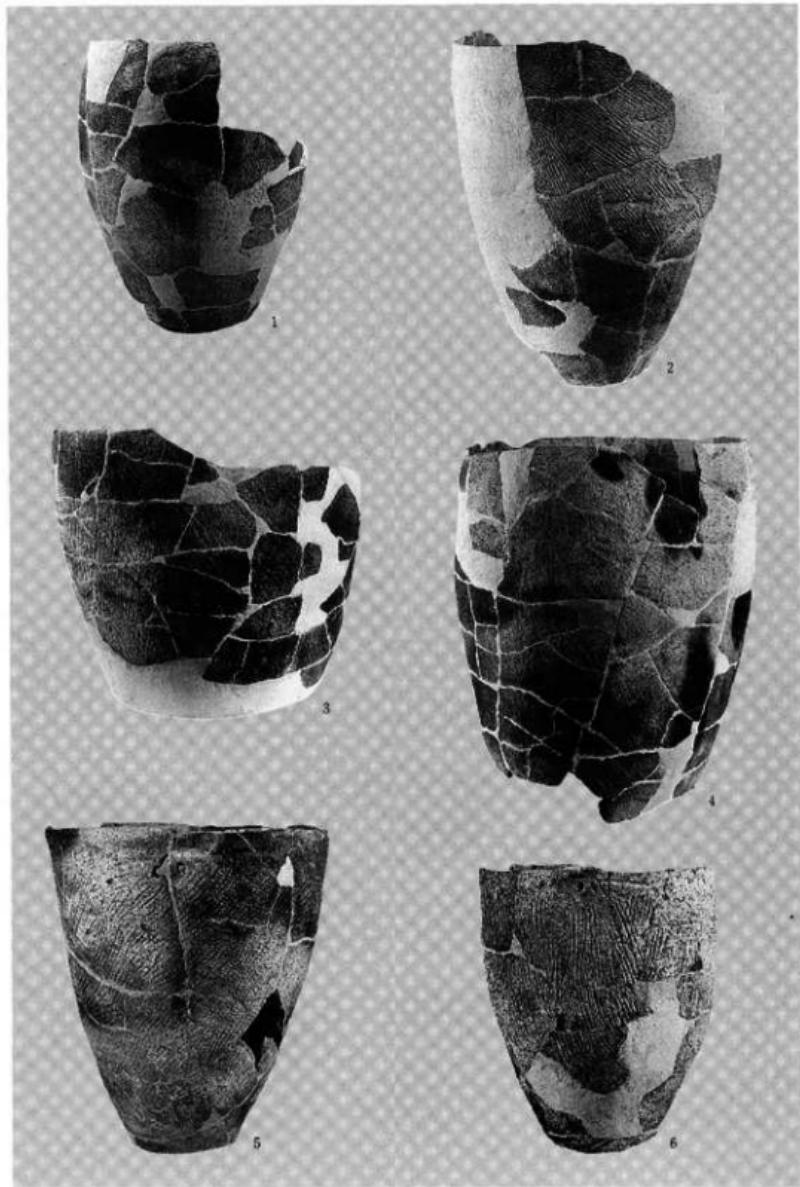


写真86 纹文遺物包含層出土土器 (14)

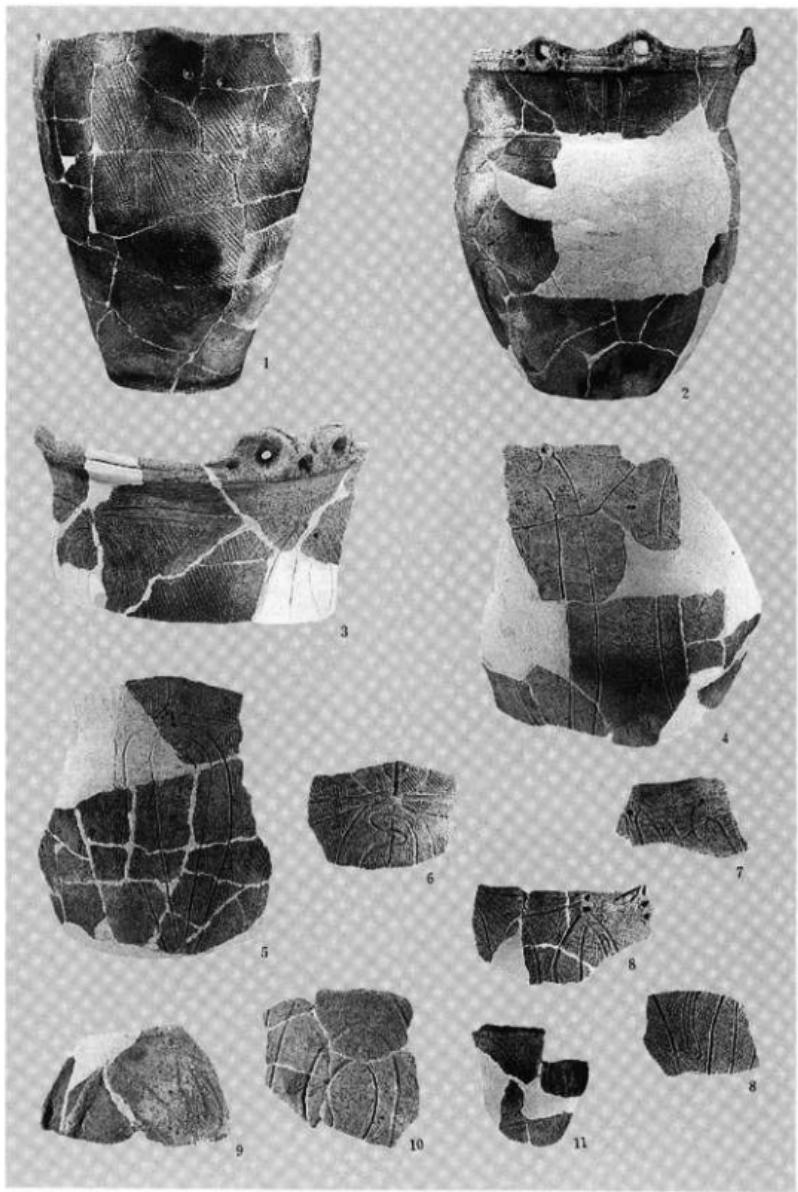


写真87 繪文遺物包含層出土土器 (15)

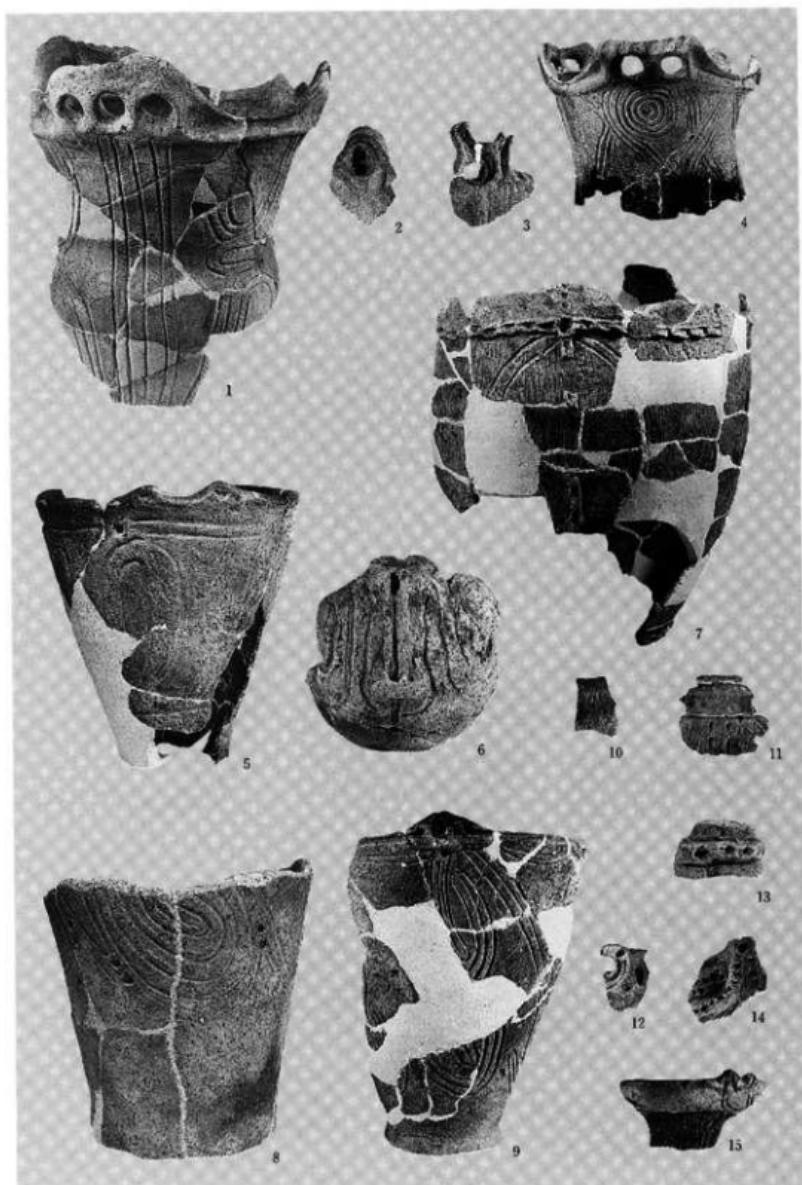


写真88 繩文遺物包含層出土土器 (16)

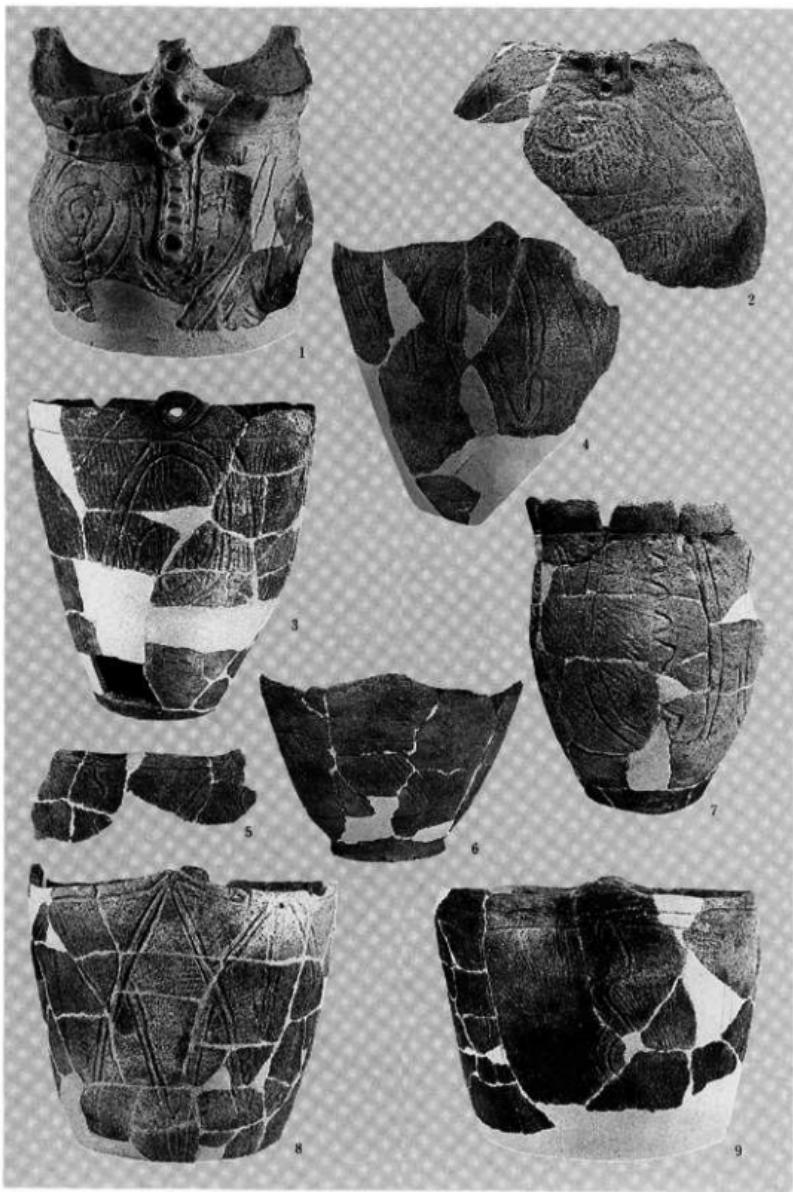


写真89 繩文遺物包含層出土土器 (17)

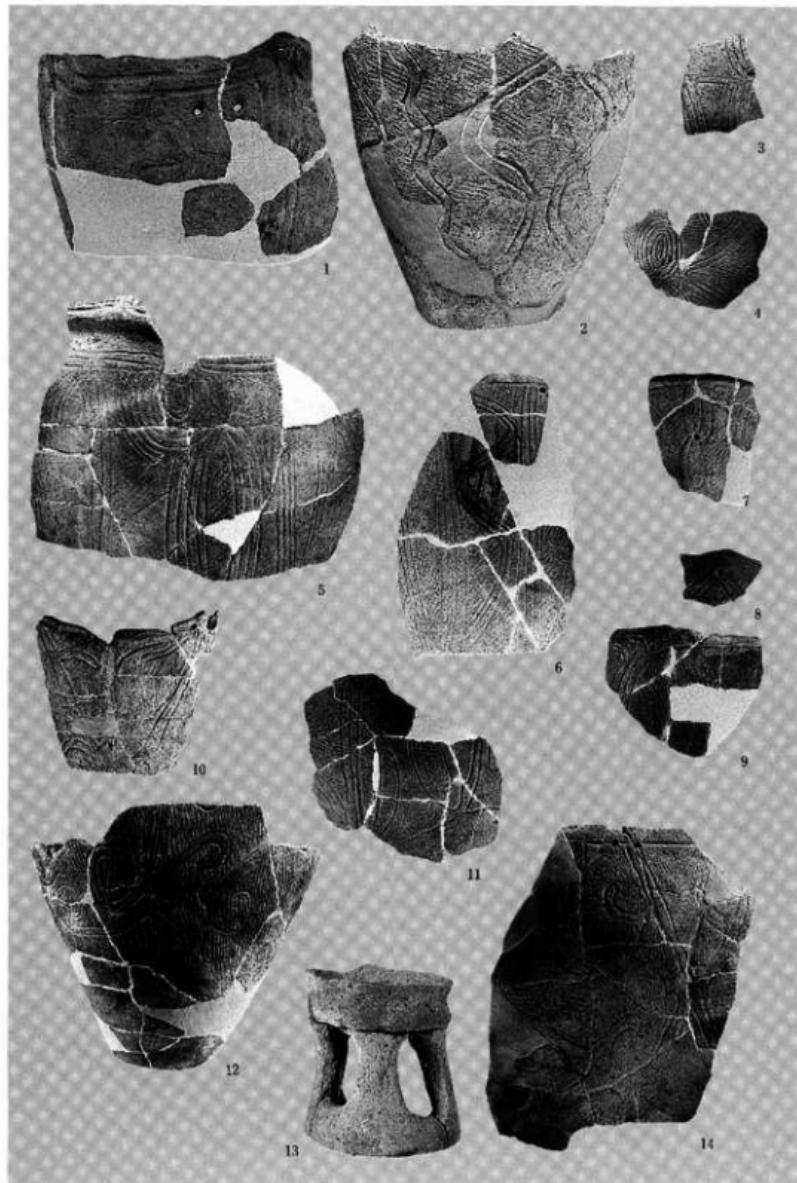


写真90 繩文遺物包含層出土土器 (18)

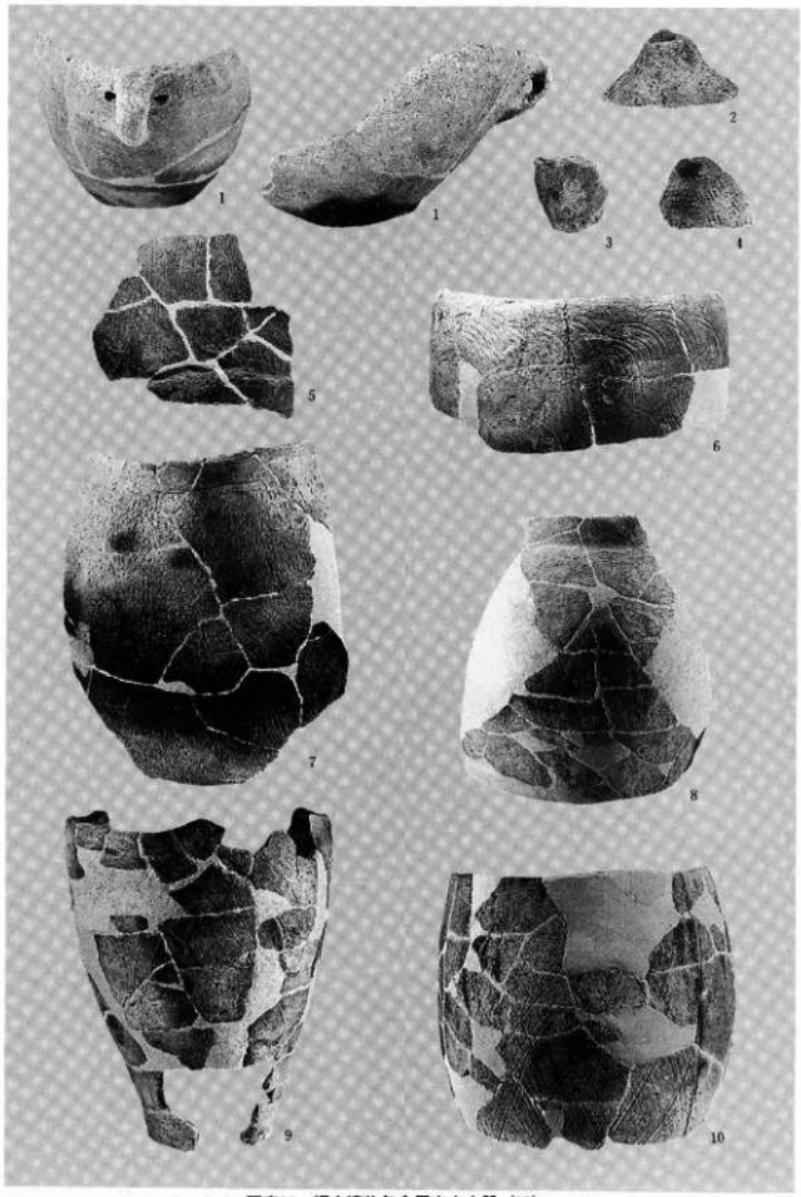


写真91 縄文遺物包含層出土土器 (19)

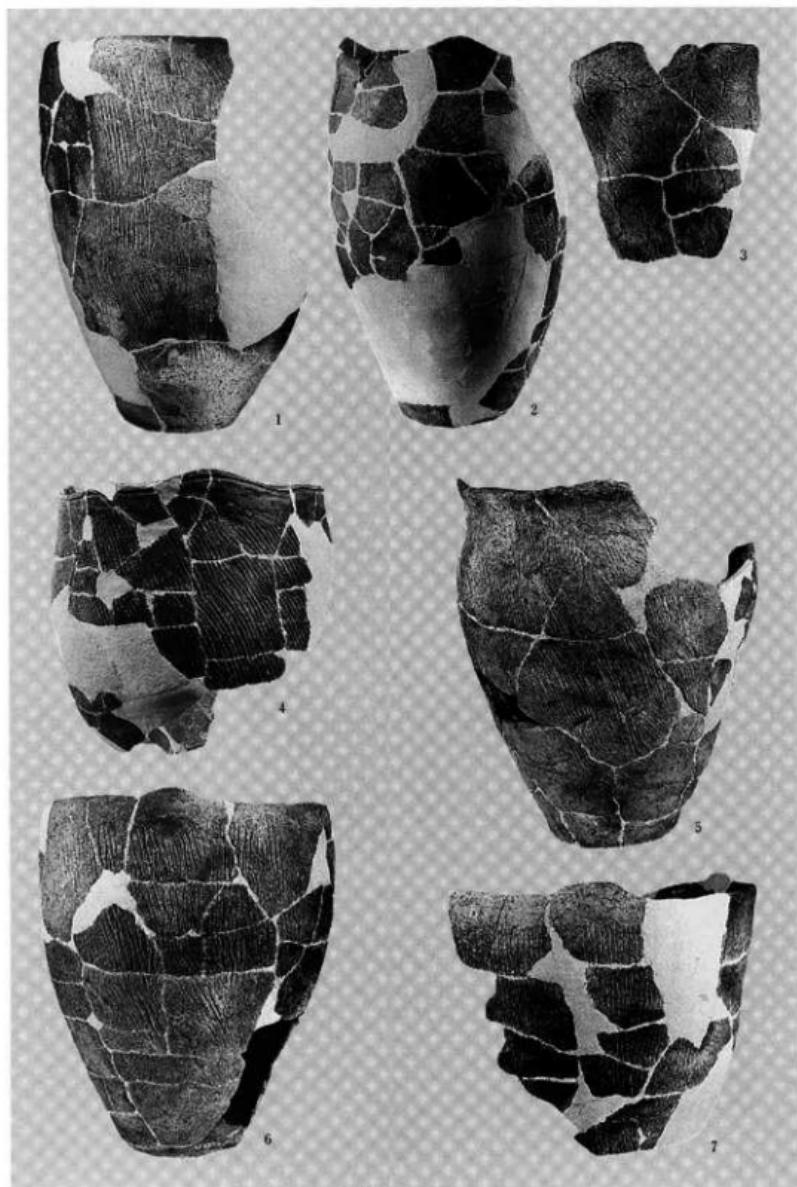


写真92 楽文遺物包含層出土土器 (20)

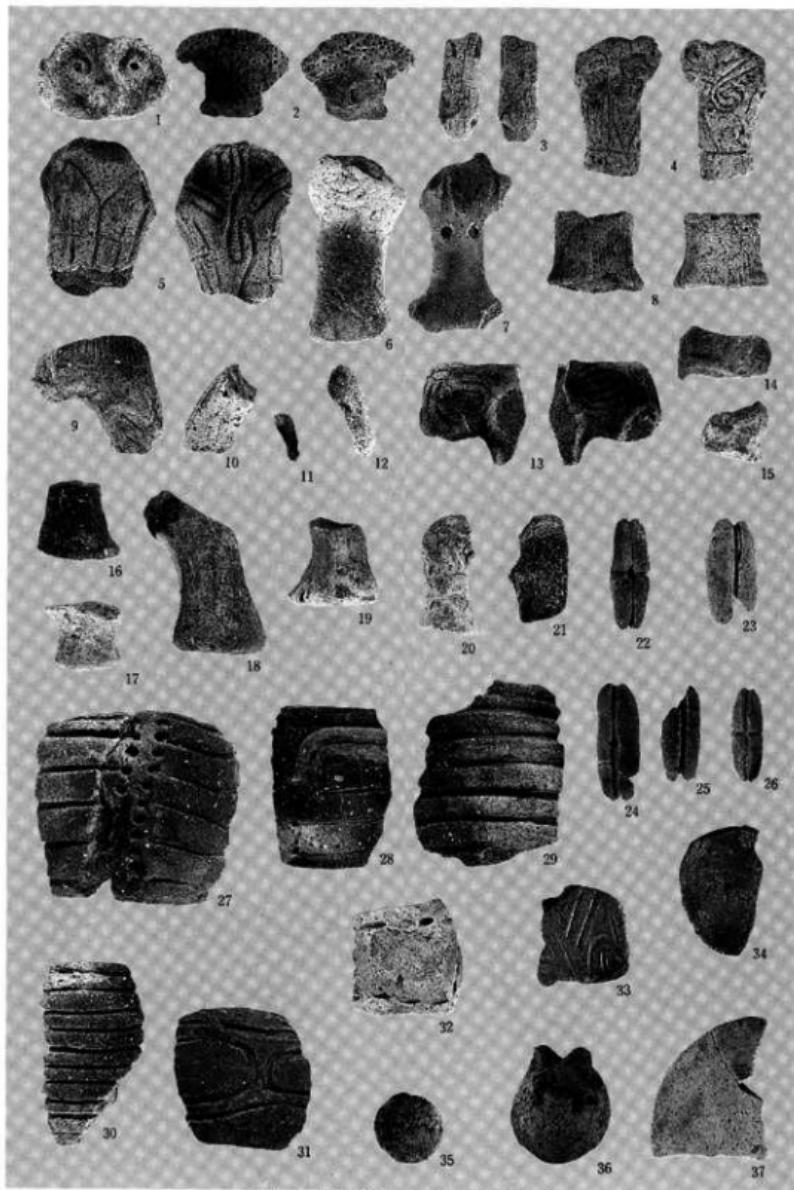


写真93 織文遺物包含層出土土製品（1）

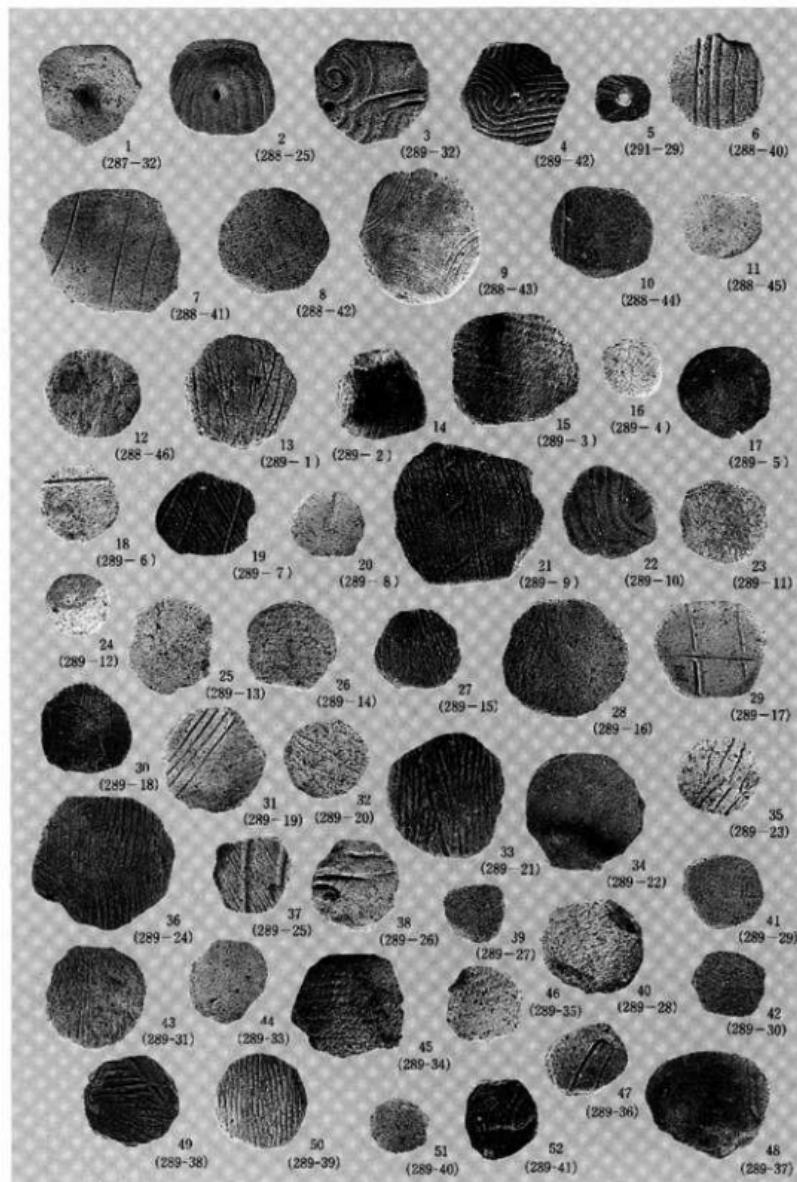


写真94 横文遺物包含層出土土器製品（2）

() は図番号

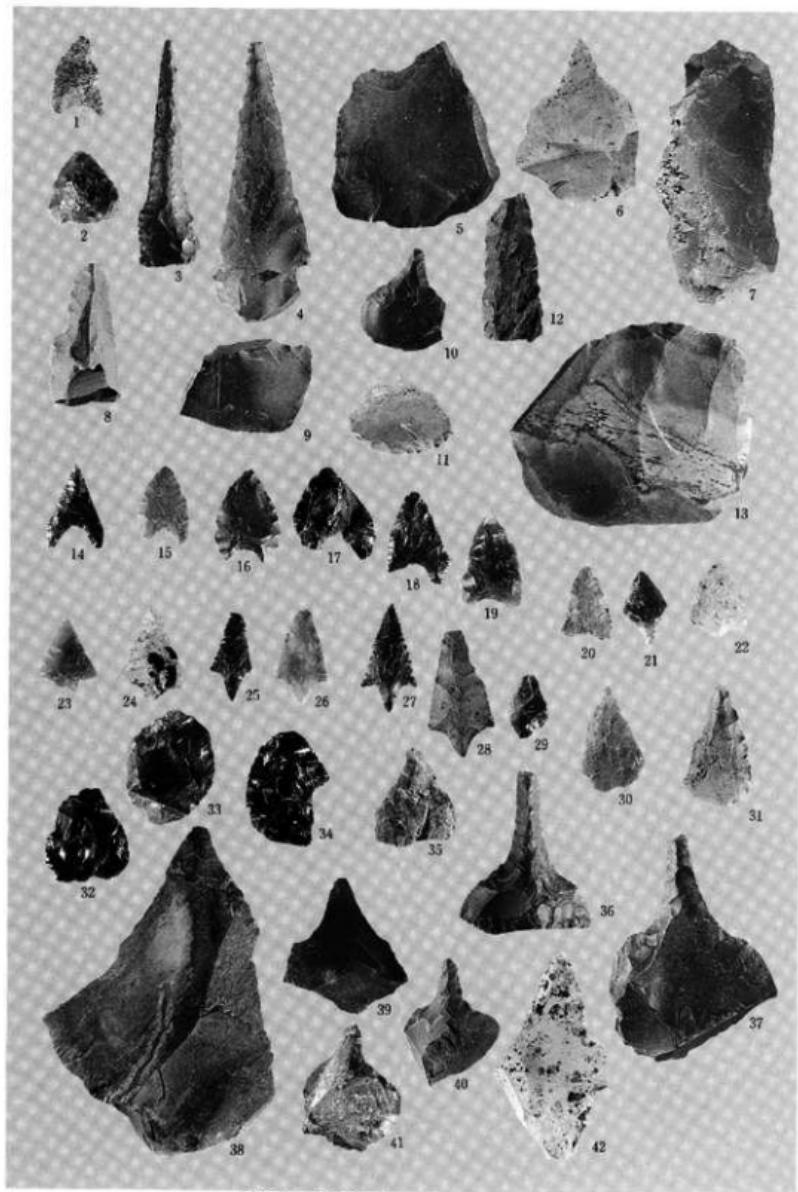


写真95 繩文遺物包含層出土石器（1）

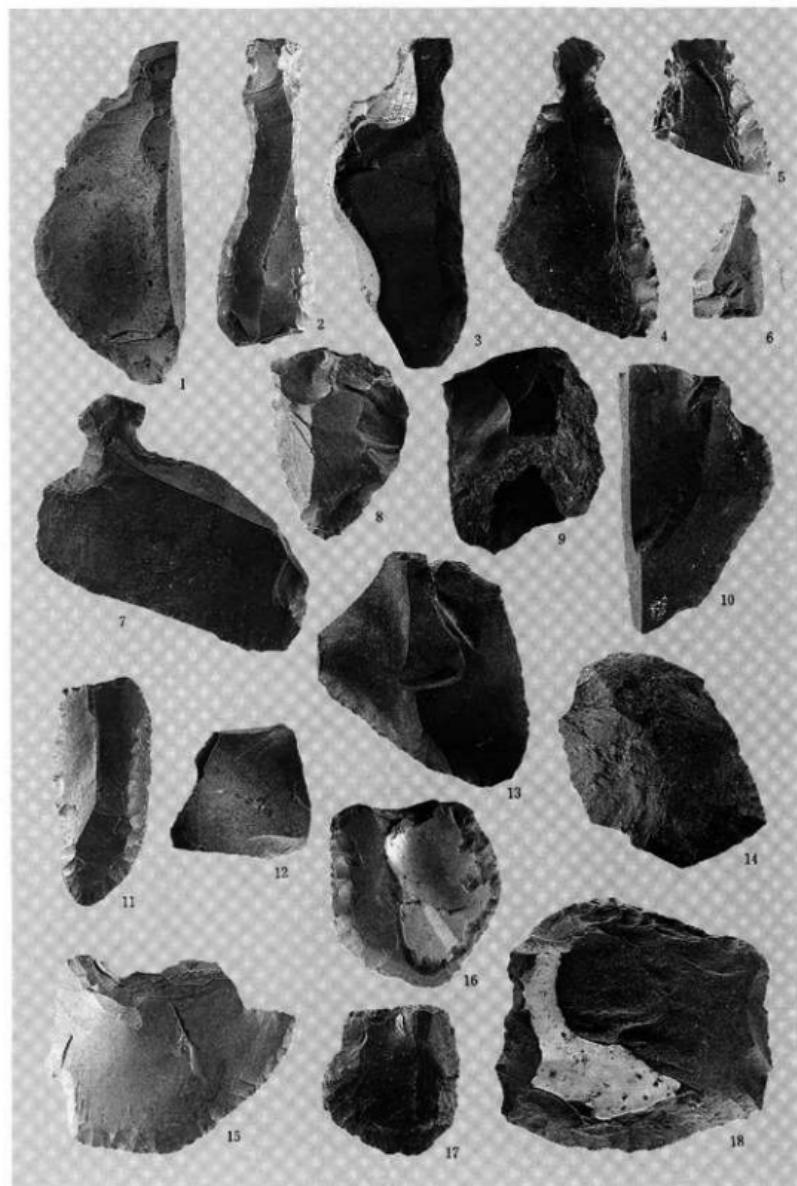


写真96 縄文遺物包含層出土石器（2）

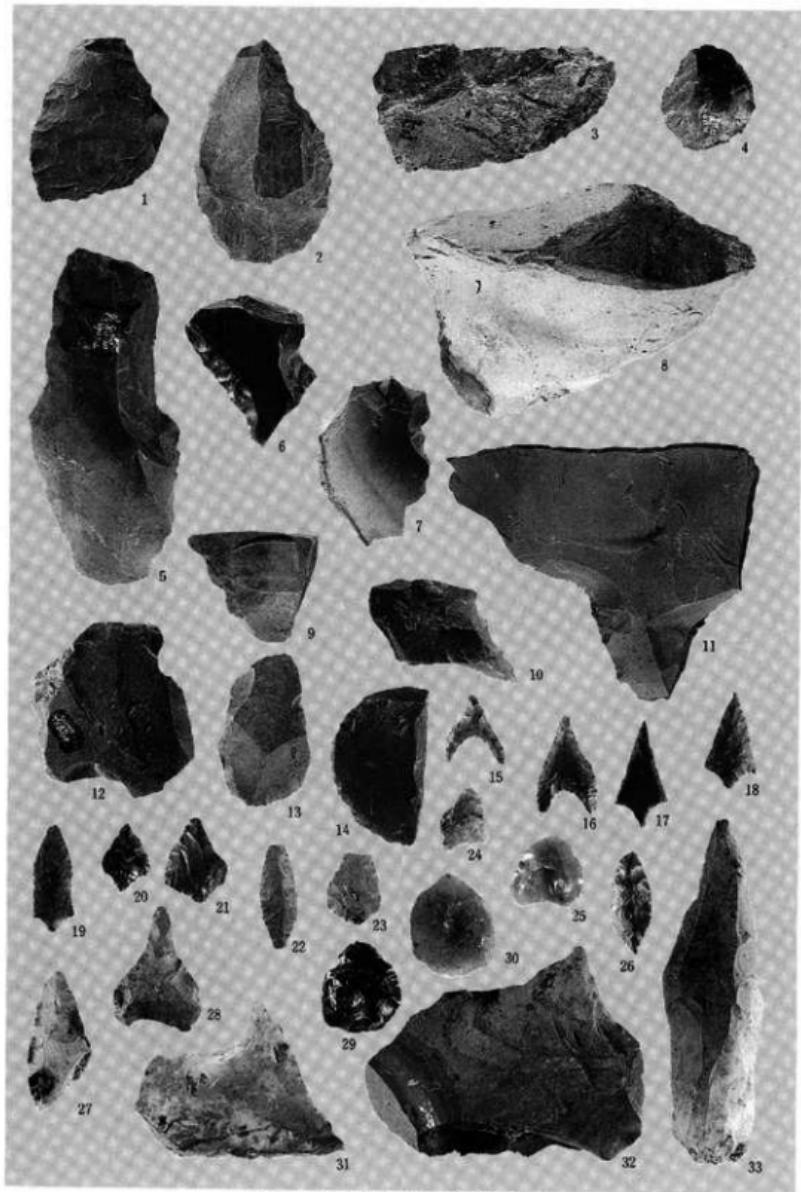


写真97 纯文遺物包含層出土石器（3）

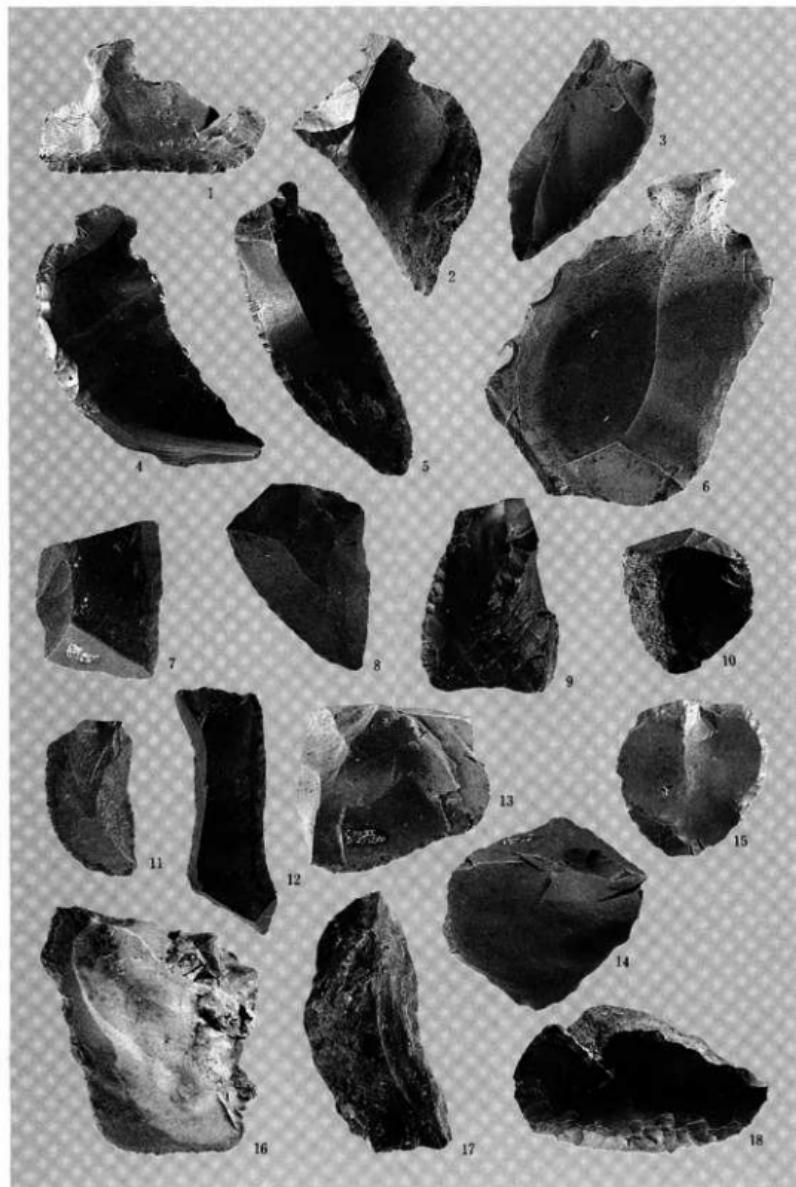


写真98 繩文遺物包含層出土石器（4）

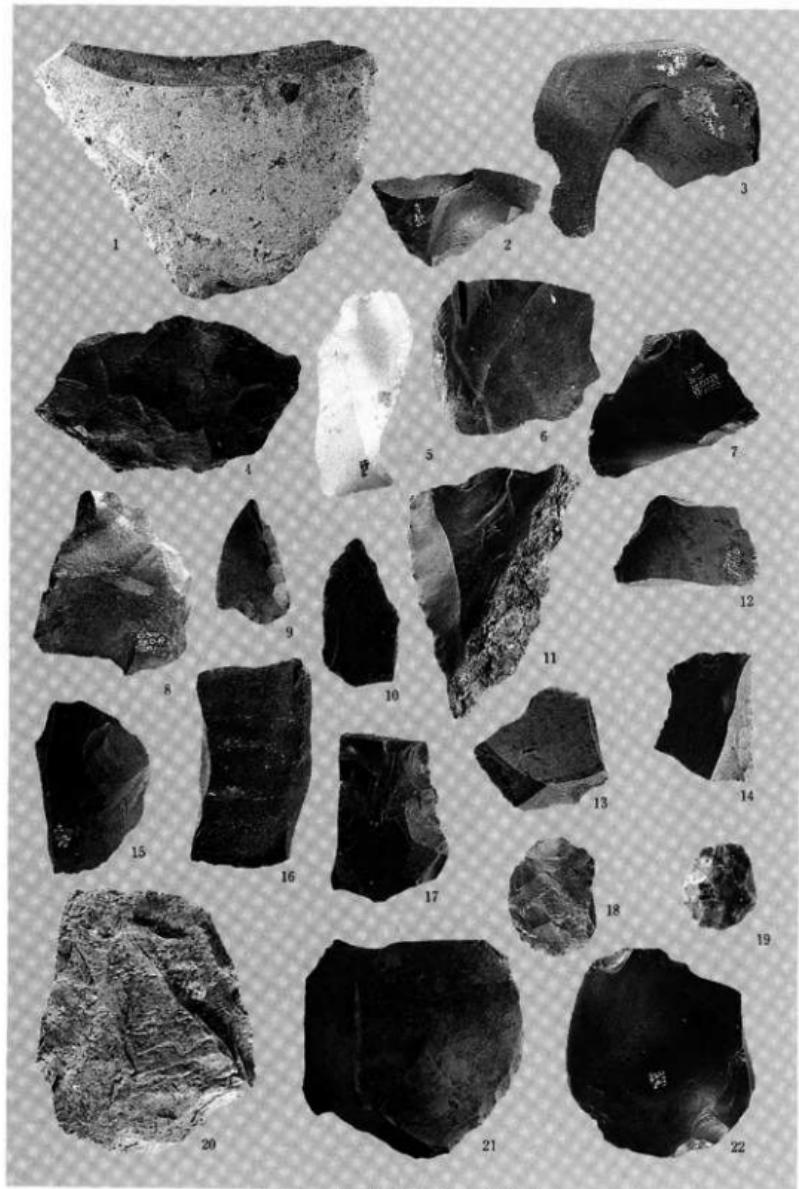


写真99 縄文遺物包含層出土石器（5）

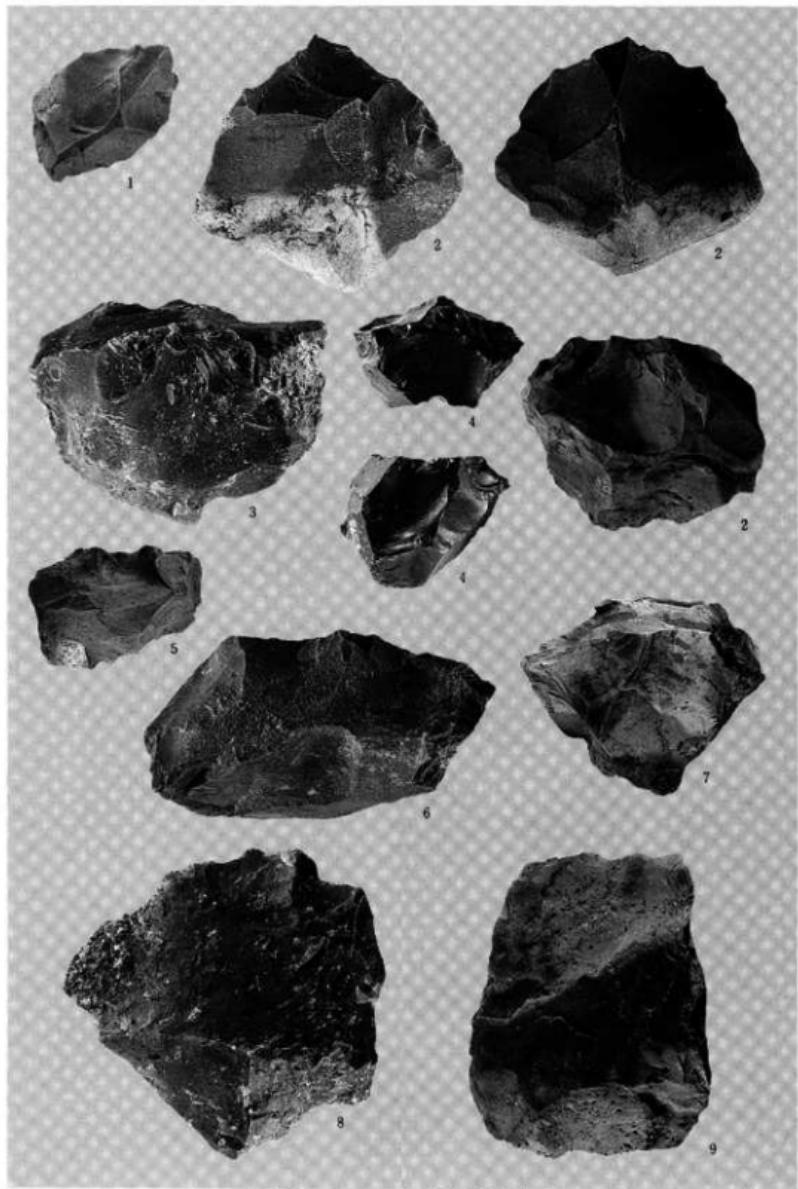


写真100 繩文遺物包含層出土石器（6）

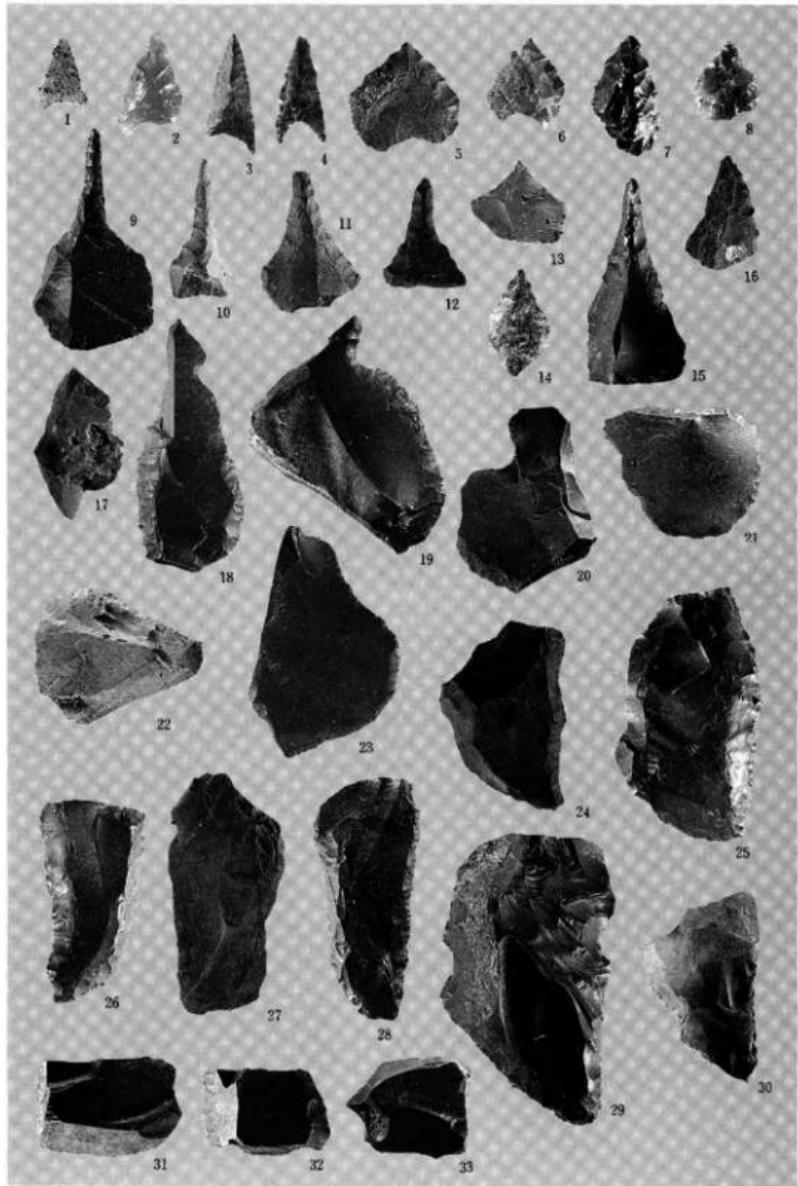


写真101 繩文遺物包含層出土石器（7）

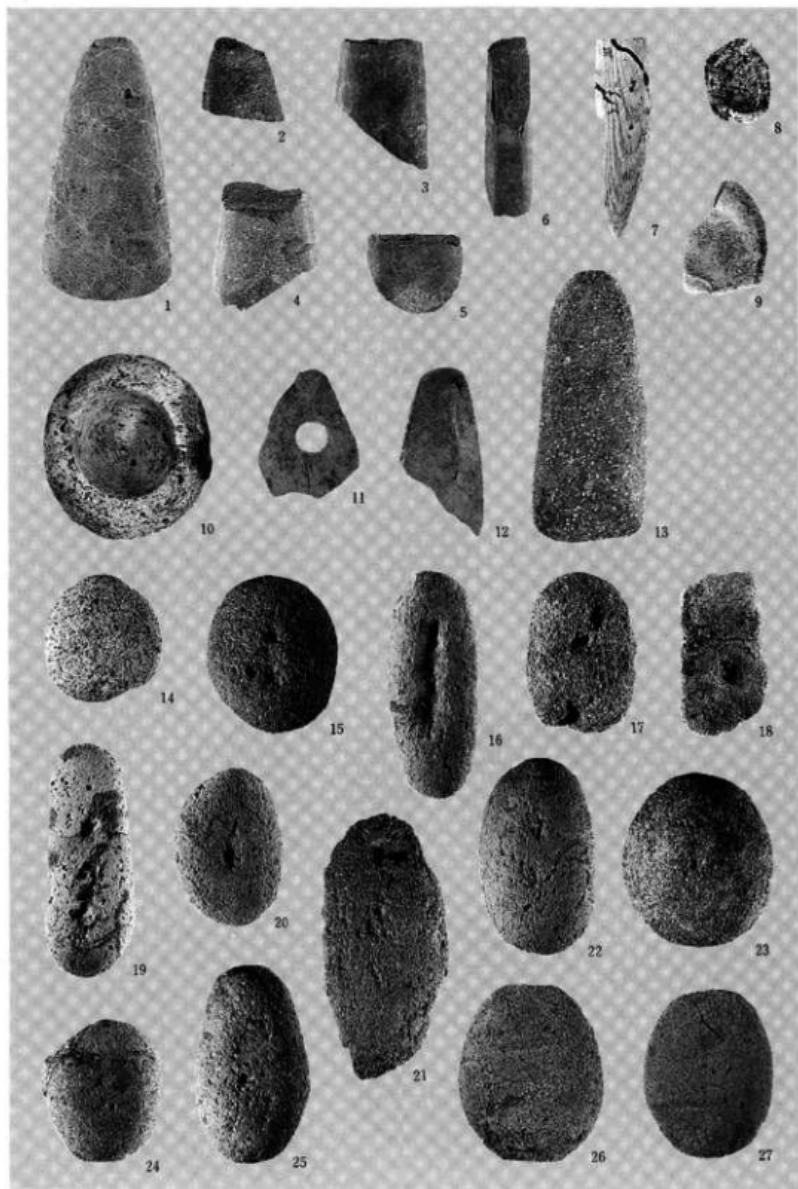


写真102 繩文遺物包含層出土石製品・礫石器（1）

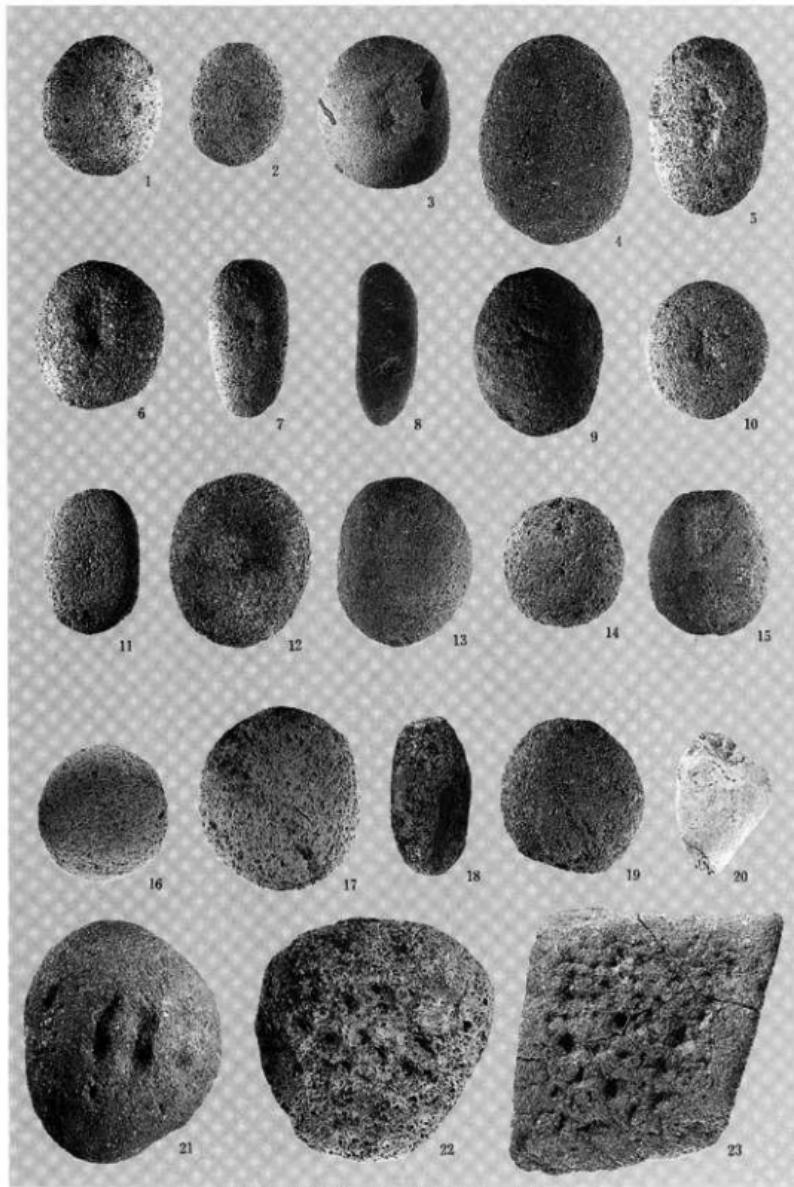


写真103 繩文遺物包含層出土石製品・礫石器（2）



写真104 繩文遺物包含層出土石製品・礫石器（3）

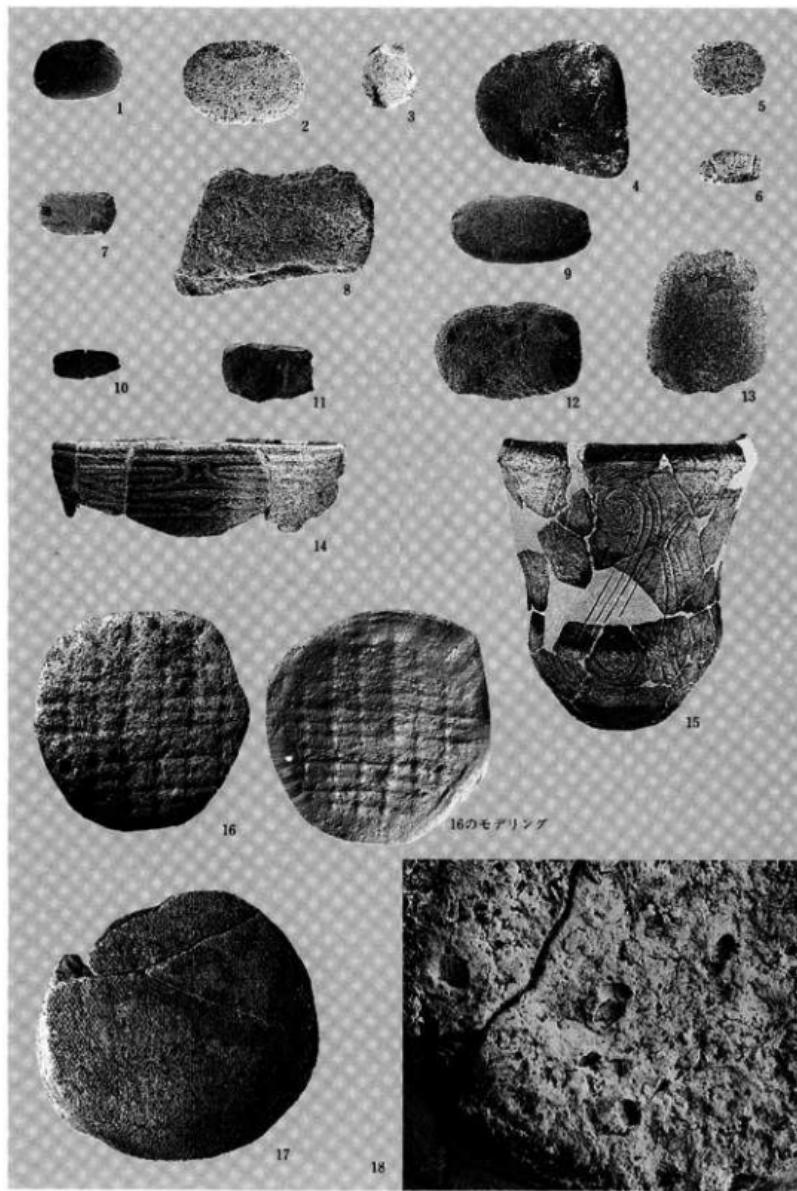


写真105 織文遺物包含層出土石製品・砾石器・その他・底部圧痕

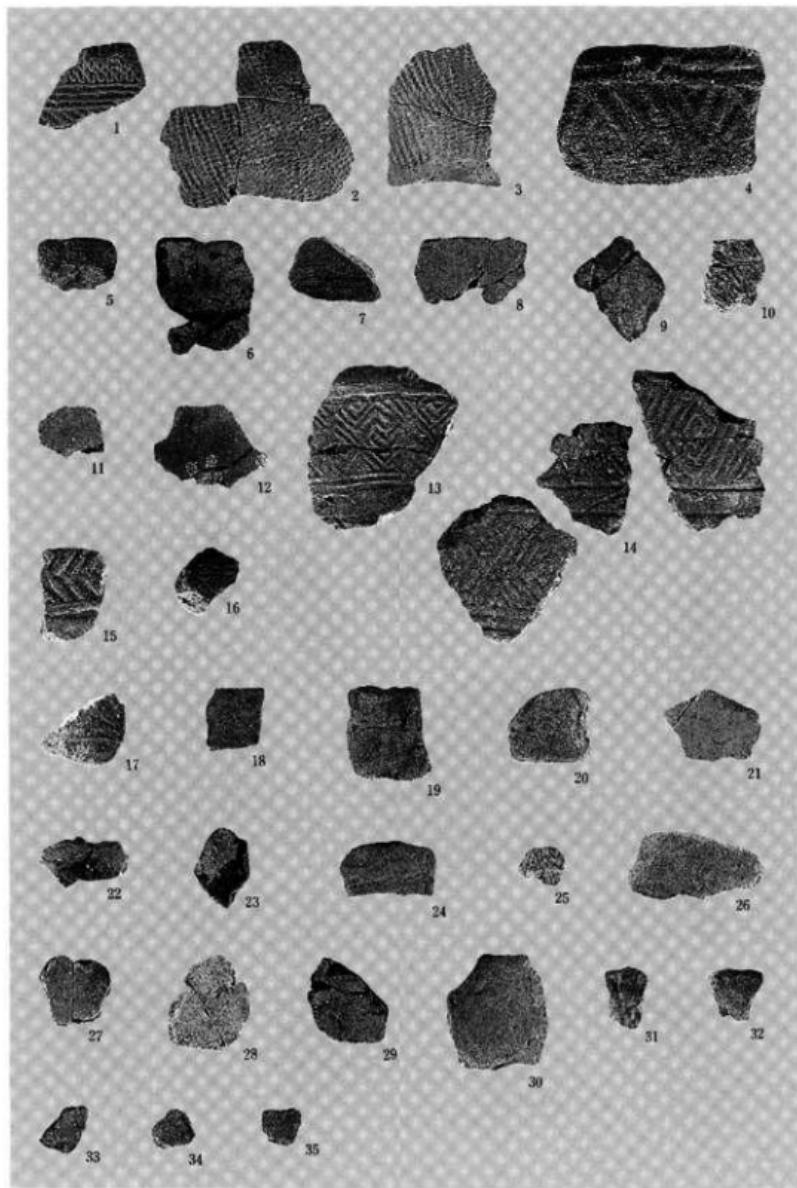


写真106 繩文早期・前期土器

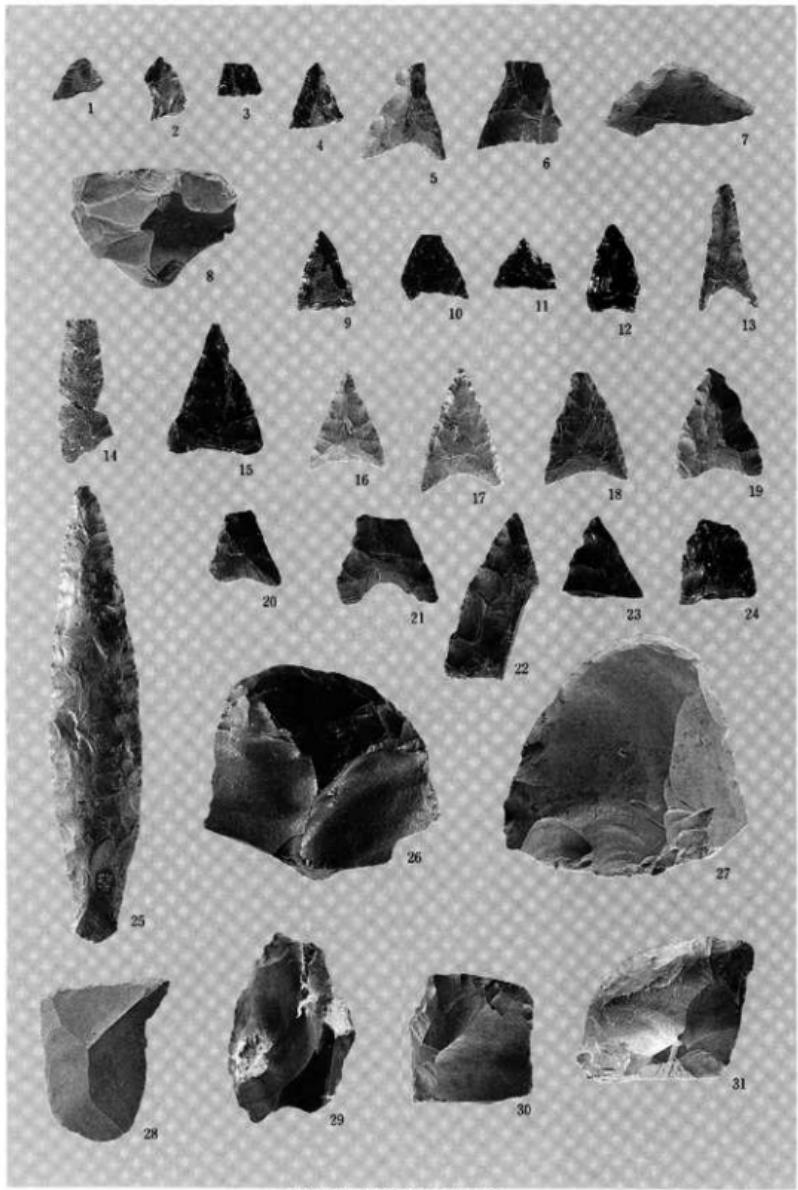


写真107 繩文早期石器（1）

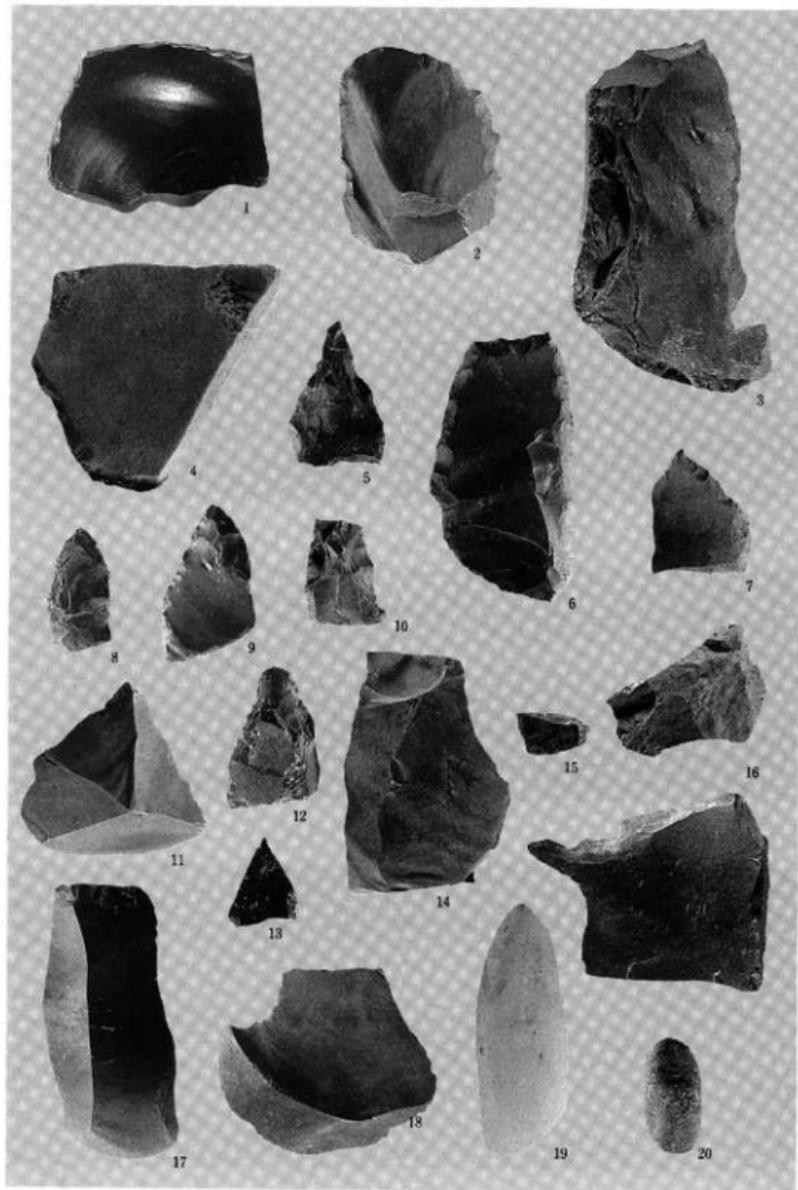


写真108 縄文早期石器（2）



第264図 1



第265図 1



第120図 1



第183図 2

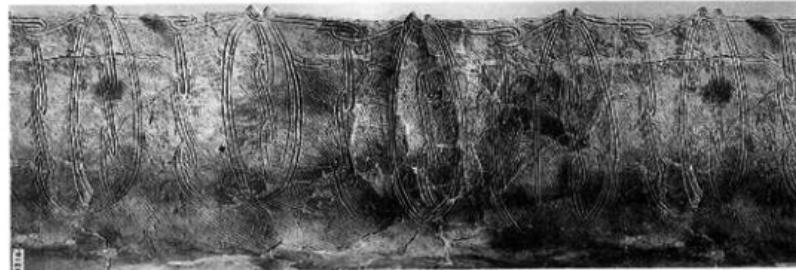
写真109 展開写真 (1)



第262図 1



第178図 1



第120図 2



第266図 3



第232図 4

写真110 展開写真（2）



第266図1



第175図1



第185図1



第183図1

写真111 展開写真（3）

山口遺跡

写真112 調査前状況
(南から)



写真113 調査区全景
(南から)



左 写真114 1号溝跡検出状況
(西から)



右 写真115 1号溝跡
(東から)



写真116 1号溝跡断面（西側）
(西から)



写真117 1号土坑断面
(南から)



写真118 1号土坑木材
出土状況
(東から)

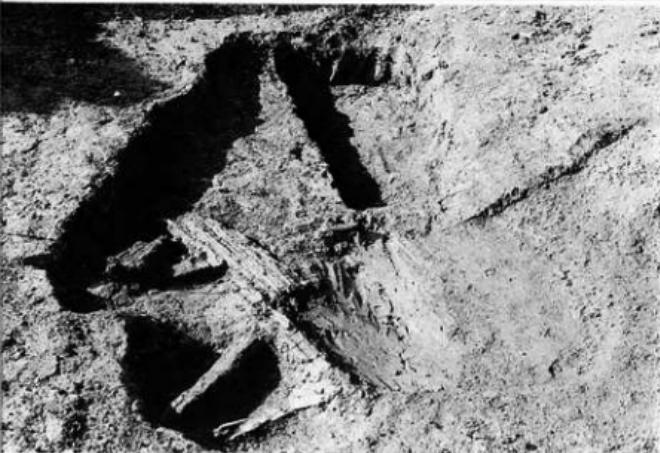


写真119 試掘12区
木材出土状況
(西から)



写真120 4b 層上面杭列
(南から)



写真121 4b 層上面杭列
(試掘24区付近)
(南から)



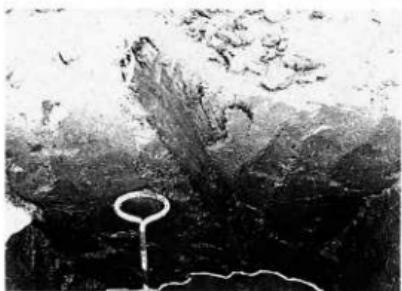


写真122 桧No.4断面(南から)



写真123 桧No.7断面(南から)



写真124 桧No.11断面(南から)



写真125 桧No.12断面(南から)



写真126 桧No.13断面(南から)



写真127 桧No.16断面(南から)



写真128 桧No.18断面(南から)



写真129 桧No.22断面(南から)

写真130 試掘36区
2号・3号溝跡
(南から)



写真131 試掘36区
2号・3号溝跡断面
(西から)

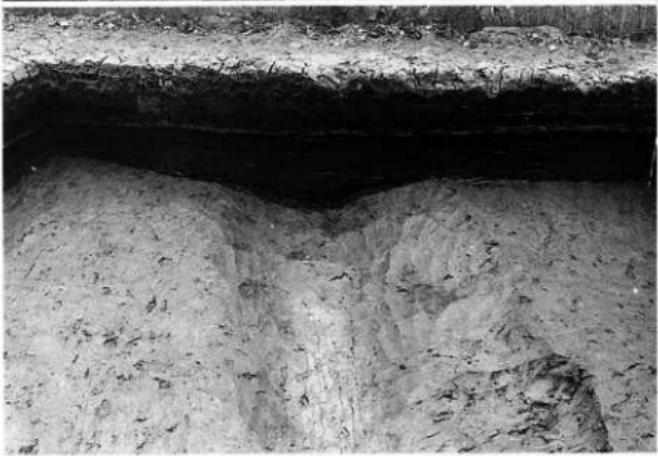


写真132 試掘12区
4号～8号溝跡
(北から)



写真133 試掘12区
4号～8号溝跡
(南西から)



写真134 試掘12区
4号・5号溝跡
(東から)

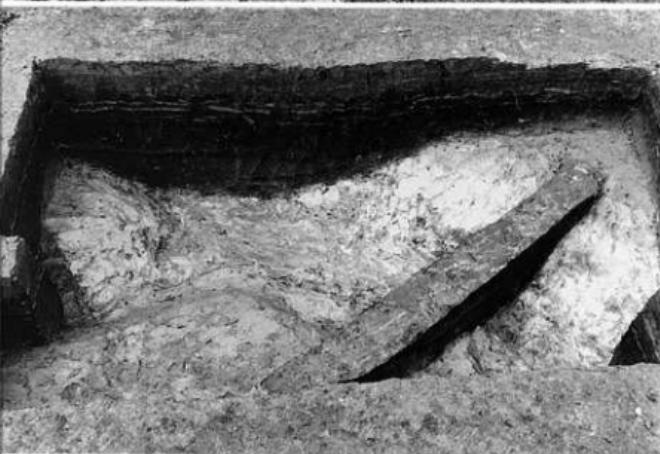


写真135 試掘12区
8号溝跡
(西から)



写真136 試掘24区断面
(東から)



写真137 試掘48区断面
(東から)

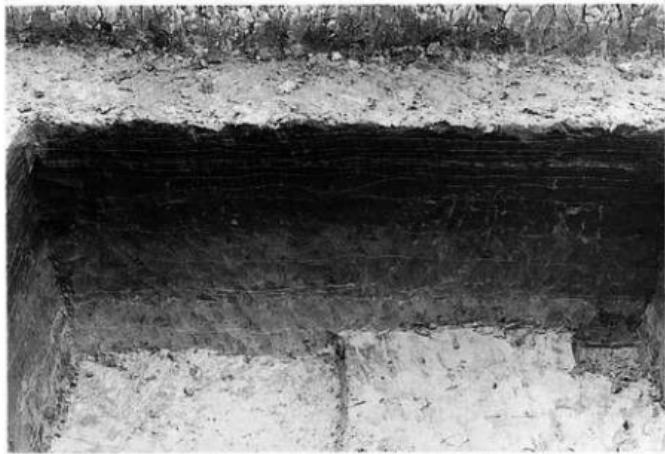


写真138 試掘60区断面
(北から)

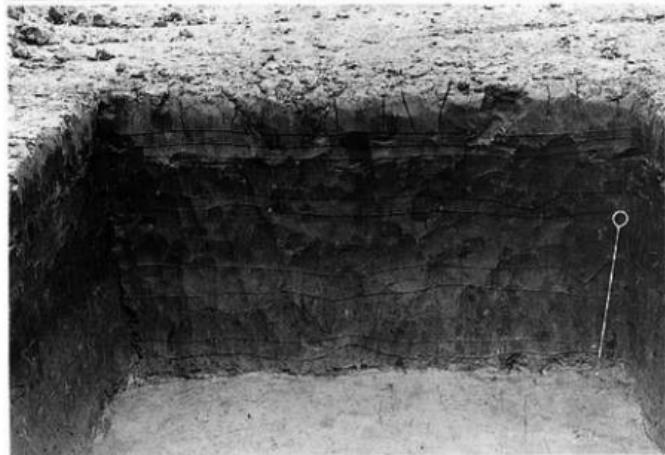


写真139 先行調査区断面
(E47~50 グリッド)



写真140 調査風景
(北から)



写真141 調査区全景
(最終状況)
(南から)



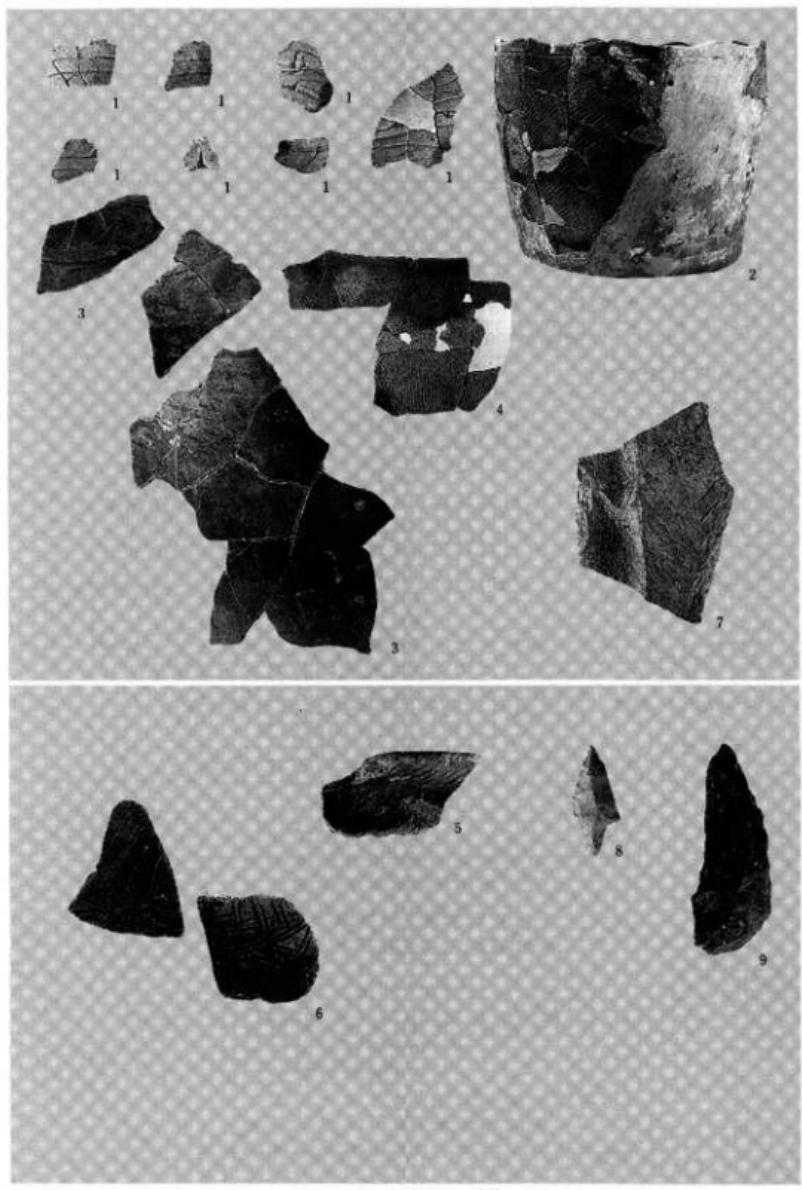


写真142 山口遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しものうちうら やまぐちいせき						
書名	下ノ内浦・山口遺跡						
著者名	仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書						
巻次	V						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第207集						
編著者名	吉岡恭兵・佐藤 淳・波部 紀・工藤信一郎・椎原信彦						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893~8894						
発行年月日	1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経	調査期間	調査面積m ²	
下ノ内浦遺跡	仙台市太白区 下ノ内浦 蓄跡一丁目他	04100	01368	38°140' 12' 52' 50' 29'	19830413 ~19841119	2000	地下鉄建設工事
山口遺跡	仙台市太白区 山口 蓄跡一丁目他	04100	01178	38°140' 12' 52' 54' 29'	19810825 ~19811228	1000	地下鉄建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
下ノ内浦遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	住居跡・窓・穴・瓦石墓・土壙塗・土器残片・溝跡・墓跡・水田跡		縄文土器・弥生土器・土器器・須恵器・土製品・石器		
山口遺跡	水田跡	縄文・弥生	溝跡(自然沈跡)・水田跡		縄文土器・弥生土器		

仙台市文化財調査報告書第207集

下ノ内浦・山口遺跡

—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書V—

1996年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷(株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 022-263-1166

